錢

第四　乘組ノ者怪我人有之節其療養入費

第五　同前ノ者溺死スルトキ其捜索入費

第六　同前ノ者溺死ノ節埋葬入費

若シ物品賣拂金高諸費ノ高ヨリ少キトキハ其金高限リ出サシメ不足ノ分及ヒ賣拂フヘキモノモ之レナキトキハ第十五條ニ照準シテ處置ス可シ

第十二條　左ニ掲載シタル諸入費ハ之ヲ三分シ其二分ハ船主荷主ヨリ出サシメ其一分ハ之ヲ其管内民費トス可シ

第一　難船取扱中浦役人ノ日給

第二　浦方ニ於テ難破ノ爲ニ費シタル薪炭燭燭及ヒ筆紙墨代

第三　浦方ヨリ管廳其外等ヘ發シタル電信郵便及ヒ飛脚賃

第四　救助人溺死シタル時其捜索入費

第五　同前ノ者死傷スル時治療埋葬入費

第十三條　難破ノ節浦方ヨリ乘組人ニ給セシ衣服食物其他ノ必要品代料又ハ歸郷旅費等ヲ貸遣シタル時ハ證書取置キ第十九條ノ通リ精算書中ニ記載シ遣テ本人ヨリ償却セシムル可シ

第十四條　大難船ノ節諸費用割賦ノ儀ハ船體皆破沈沒乘組人ノ死去及積荷ノ大損害ヲ生シ荷主船主立會決算ヲ要スル等ノモノ現場ノ救助方ヲ除クノ外各船ノ處置ハ其管廳ニ申立テ其筋出張官員ノ差圖ヲ受ク可シ尤モ小難船ノ處置ハ二名以上ノ浦役人及ヒ船長其他重立乘組ノ者二名以上合議ノ上之ヲ決スルヲ得可シ

第十五條　船體積荷ヲ併セテ悉皆沈沒ニ至ルノ大難船ハ浦方ニ於テ其救助ノ爲ニ許多ノ雜費相掛リ候トモ船主荷主ヨリ之ヲ取立ルヲ得ス故ニ其差出ヘキ費用ノ分ハ官費ヲ以テ支給スヘキニ付費用明細帳ヲ作リ浦役人船長連署押印シ官廳ヘ差出ス可シ

第十六條　危難ヲ冒シテ乘組人ノ必死ヲ救フ者又ハ救助ノ爲メ盡力シテ死傷ニ至ル者アルトキハ必ス官廳ヘ届出ヘシ其事實ノ輕重ニヨリ相當ノ賞譽或ハ手當金ヲ給ス可シ

第十七條　總テ浦役人及船長合議ノ上處置シタル時ハ其事柄ヲ詳細ニ記シタル證書二通ヲ作リ之レニ連署押印シ其一通ヲ船長ヘ渡シ他ノ一通ヲ浦役人ニテ保チ置クヘシ

第十八條　二名以上ノ浦役人合議ノ時ハ其内一名ハ必ス他村ヨリ出ス可シ

第十九條　難船救助ニ屬スル諸費用ハ二名ノ浦役人及船長其他重立乘組ノ者二名以上立會ノ上第十一條第十二條第十三條第十五條ニ照シテ夫々其費用ノ種類ヲ區別シ成ル可ク速カニ精算書ヲ作リ之ニ難破明細書ヲ添テ管廳ニ差出シ其檢査ヲ受ク可シ

但精算取調ノ節ハ成丈ケ船主又ハ荷主ノ立會ヲ要ス可シ

第二十條　前條ノ精算書ハ管廳ニ於テ速カニ調査ヲ遂ケ不審ノ廉無之トキハ早速下ケ渡ス可シ然ル上浦役人ハ第十五條ニ記スル場合ヲ除クノ外船主荷主或ハ船長ヨリ夫々出金致サスヘシ若シ其即時辨金相成難キ分ハ相當ノ日數ヲ猶豫ス可シ

但シ〔民費〕ノ分ハ其管廳ヨリ取立浦役人ヘ下渡ス可シ

第二十一條　洋中ニ於テ難破或ハ打荷等有之趣ヲ以テ浦證文ヲ願出ル時ハ二名以上ノ浦役人立會ノ上船長及ヒ乘組ノ者二名以上ヲ別々ニ取調ヘ其實跡アルカ又ハ航海日記アルモノハ之レニ照シ各々符合スル時ハ浦證文ヲ作リ連署調印シテ之ヲ船長ニ付與シ寫ヲ以テ管廳ニ届出ヘシ

但浦證文中左ノ箇條ヲ戒ス可シ

第一　難破ニ逢フル場所其時日及ヒ風波ノ模樣

第二　破損ノ箇所

第三　打荷ノ種類箇數並他ノ積荷ノ種類

第四　船號及ヒ兌狀ノ番號竝船主船長ノ本貫苗字名乘組人數

第五　荷打シタル荷物主ノ苗字名本貫

第六　仕出シ地及ヒ仕向ケ地ノ港名

第七　乘組ノ内死傷有之トキハ其本貫苗字名年齡

第二十二條　軍艦其他ノ官有船困難候節ハ早速助船ヲ出シ精々盡力シテ救助ス可シ且其難破ノ大小ニ拘ハラス其旨ヲ直チニ管廳ヘ報知ス可シ

第二十三條　前條ノ救助ニ屬スル諸費用ハ船將又ハ其筋ノ士官ヨリ直チニ受取ヘシト雖モ總テ管廳ノ指揮ヲ受クヘシ

但シ第十一條ニ記載スル保安物ニ就テハ別段相當ノ手當ヲ與フ可シ

第二十四條　貢米及ヒ其他ノ官物ヲ積入候船難破ニ及ヒ候節現場救助ヲ除クノ外總テノ處置ハ管廳ヘ申立ノ上其指揮ヲ受ク可シ

但郵便物ヲ積込候船ハ其最寄郵便役所又ハ取扱所ヘ郵便行囊ヲ至急引渡ス可シ

第二十五條　難船取扱ノ間浦役人ノ日給ハ一日五十錢ヨリ多カラス十錢ヨリ少ナカラサルモノトス

難破ノ節働人足賃及ヒ小舟賃ハ土地ノ異同ト勞役ノ難易ニ依リテ同シカラスト雖モ各管廳ニ於テ適宜見積リ豫カシメ其額ヲ定メ置ク可シ

第二十六條　船長及ヒ擔任ノ者怠慢ニヨリ難破沈沒其他ノ損害ヲ生スル時ハ右損失ヲ其者ヨリ償却セシムヘシ若シ其災厄人智ノ前知ス可カラス人力ノ豫防ス可カラサルニ出ルコトヲ瞭然證明スル時ハ此限ニアラス

第二十七條　浦役人船長其他救助ノ者ト申合セ其保安シタル難船物ヲ沈沒ト僞リ竊ニ賣買スル者ハ律ニ照シテ處分ス可シ

第二十八條　凡テ難船ノ節救助ニ託シテ積荷船具其他ノ物品ヲ竊盜或ハ掠奪スル者又ハ其竊盜掠奪ニ與スル者或ハ其本犯ヲ陰匿スル者又ハ竊盜物ト知テ之ヲ賣買スル者ハ律ニ照シテ處分ス可シ

第二十九條　以下漂著ノ部　凡原因ノ知レサル難船漂著物及ヒ乘組人ナキ漂著船ヲ見附ル者ハ之ヲ浦役人ニ報知ス可シ

浦役人ハ其調書ヲ作リ之ヲ其管廳ヘ届出可シ

第三十條　乘組人ナキ船ハ其漂著ノ月日船ノ大小破損ノ模樣等ヲ精細ニ書記シ漂著物ハ其品名箇數等精細ニ書記ルシ其漂著近傍人民幅輳ノ地ノ揭示場及ヒ船改所ヘ六十日間張出ス可シ尤モ漂著物ノ代價二十圓以上ト思量シ或ハ二十圓以下タリトモ必要ノ品柄ト思量スル時ハ其管廳ヨリ三府五港ノ管廳及ヒ税關ヘ報告シテ張出ヲナシ或ハ新聞紙ニ載セテ公告ス可シ

第三十一條　漂著物ノ持主知レタル時ハ左ノ區別ニ循ヒ處置ス可シ

第一　一箇年以内ハ其見積代價ノ三分一ヲ取扱主ニ與ヘ其現品ハ持主ニ返還スル事
但持主ノ情願ニヨリ現品賣拂ヒ其代金ニテ受取ルコトヲ得可シ

第二　一箇年ヲ過クレハ之レヲ公賣シ其代價ヲ平分シ一半ハ其取扱主ニ與ヘ一半ハ官ニ收ムル事
但三ケ年以内ニ其持主知レタル時ハ官ニ收メシ部分ハ下戻ス可シ

第三十二條　乘組人無之漂著船ノ持主知レタル時ハ左ノ區別ニ循ヒ處置ス可シ

第一　一ケ年以内ハ其見積代價ノ十分一ヲ見附主ニ與ヘ其船ハ持主ニ返還スル事
但書ハ前條第一項ニ同シ

第二　一ケ年ヲ過クレハ之ヲ公賣シ其代價ノ三分一ヲ見附主ニ與ヘ其餘ノ二分ハ官ニ收ムル事
但書ハ前條第二項ニ同シ

第三十三條　前二條ニ記スル場合ニ於テハ律例得遺失物ノ條ト牴觸スルコトナカル可シ

第三十四條　凡漂著物ヲ保存シ及ヒ之ヲ公告スル等ノ事ニ付費用アルモノハ第十一條ニ照シ浦役人ノ與印シタル證書ヲ以テ代價ノ全部中ヨリ之ヲ償却ス可シ

第三十五條　洋中ニ於テ難破イタシ梳檣其他ノ船具ニ取附キ海岸ニ漂著致シ候者有之節ハ浦役人ヨリ一通リ取調ヘ相當ノ保證ヲ加ヘ證直チニ管廳ニ届出其指揮ヲ受ク可シ尤モ本人歸鄉ノ旅費其他ノ手當等貸遣ハシ候節ハ第十三條ノ通リ追テ本人ヨリ償却セシム可シ

第三十六條　凡漂著物ヲ見附ケタル者之ヲ浦役人ニ報知スルコトナク其物品ヲ私カニ使用シ又ハ之ヲ賣買スル者ハ第二十八條ニ照シテ處分ス可シ

第三十七條　暴風雨等ニテ流失ノ材木ヲ取揚クル時ハ此規則第二十九條以下ニ照準シ其代價十分ノ一ニ過キサル取揚料ヲ遣スヘシ（十年三月第二十九號布告ヲ以テ全條改正）

第三十八條　前條ノ場合ニ於イテ取揚タル材木巨大ニシテ領置ニ不便ナルモノハ官之ヲ公賣シ其代價ヲ以テ現物ト看做シ材主ノ有無ニ從ヒ處分スヘシ（十一年十月第三十二號布告ヲ以テ本條追加）

○遺失物取扱規則　明治九年四月布告第五十六號

遺失物取扱規則左ノ通相定候條此旨布告候事

遺失物取扱規則

第一條　凡遺失物ト稱スルハ自ラ其遺失スルコトヲ覺ラス及ヒ其所在ノ明カナラサルモノヲ云フ故ニ若シ其物ヲ得ルニ臨テ物主其場ニ就テ其主タルコトヲ證明スルニ於テハ直チニ之ヲ返還シ遺失物ヲ以テ諭スルコトヲ得ス

第二條　凡遺失ノ物ヲ得レハ五日内ニ其主ニ還シ其主分明ナラサレハ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ榜示シ一年内其主ナキトキハ之ヲ得者ニ給ス

第三條　凡遺失者ハ其遺失スル物品ノ模樣員數竝ニ遺失ノ日時場所等ヲ可成丈ケ詳細ニ記臆シ速カニ官ニ届出ヘシ但得者ヨリ其返還ヲ得ル時モ亦更ニ其旨ヲ届出ヘシ

第四條　凡遺失ノ物ヲ得レハ之ヲ其主ニ還スト雖モ其費用ヲ償ハシムルコトヲ得且得者ニ報勞ノタメ其物價百分ノ五ヨリ少カラス二十ヨリ多カラサル金圓ヲ給スヘシ若シ物主得者ト其價額ヲ爭フトキハ官之ヲ評價人ニ托シテ其價ヲ定ム

第五條　其遺失物ヲ得ルニ物品盜賊ニ係ルモノハ直ニ官ニ送ルヘシ官之ヲ其主ニ還シ止タ其費用ノミヲ償ハシム

第六條　官私ノ地内ニ於テ埋藏ノ物品ヲ堀得ルモノハ之ヲ官ニ送ルヘシ其主分明ナラサルモノハ地主ノ所有ニ歸スヘシ若シ借地人其借地ヨリ堀得タルトキハ之ヲ地主ト中分セシム（十四年一月第二號布告ヲ以テ本條ヲ改正ス）

但盜賊ニ係ルモノハ此限ニアラス

第七條　凡遺失ノ物ヲ得ルニ若シ其物耐久シ難クシテ其主分明ナラサル時ハ迅速ニ之ヲ官ニ送ルヘシ官之ヲ公賣シ其代價ヲ領置シ榜示シテ處分スルコト第二條ノ如シ

第八條　凡家舍ノ類他所ニ逃走スルモノハ之ヲ遺失物ト稱スルヲ得スト雖モ其主ヨリ之ヲ官ニ報シ及ヒ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給與スルコト第三條第四條ニ同シ若シ他人ノ財產ヲ毀損スル時ハ律ニ照シテ處分ス

第九條　凡逃走スル畜類ヲ得タル者其主分明ナラサレハ之ヲ官ニ送ルヘシ若シ八日内ニ其主ナケレハ官之ヲ公賣シテ得者ニ其費用ヲ償ヒ仍ホ代金ノ剩餘アルモノハ之ヲ官ニ領置シ榜示シテ處分スルコト第二條ノ如シ

第十條　凡遺失物及ヒ逸走畜類ノ官ニ係ルモノハ官ヨリ得者ニ其費用ト報勞金ヲ給スルコト私物ニ異ナルコトナシ

第十一條　凡警察官吏タル者ハ所部ノ内外ヲ問ハス遺失物ヲ得レハ速ニ之ヲ官ニ送リ全ク其主ニ還附シ其主ナケレハ之ヲ官ニ沒ス

第十二條　凡一切應禁ノ物ヲ得レハ遺失及ヒ埋藏ヲ諭セス竝ニ官ニ沒ス

第十三條　凡公私僞證書〔地券〕諸鑑札等ノ類ハ遺失物ヲ以テ諭スルヲ得スト雖モ物主ハ得者ニ其費用ヲ償フヘシ

第十四條　凡遺失物及ヒ逸走畜類ヲ得者クハ埋藏物ヲ堀得テ官私ニ全ク送還セス或ハ物主ノ其主タルコト證明スルニ胥認シテ返還セサル者ハ竝ニ律ニ照シテ處分ス

○埋藏物中古代ノ物品處分　明治十年九月内務省甲第二十號布達

明治九年四月太政官第五十六號ヲ以テ遺失物取扱規則中第六條埋藏物堀得ル者處分ノ儀公布相成候處右物品ノ中古代ノ沿革ヲ徵スルモノモ有之候ニ付處分前一應當省ヘ届出檢査ヲ可受其品ニヨリ相當代價ヲ以テ聯求シ官私中分ニ係ルモノハ其價格ノ半高ヲ發堀人ヘ下附シ該品物ハ永ク博物館ヘ陳列可致候條此旨布達候事

但物品ハ先ツ堀出地名及形狀等ヲ詳記シ及模寫スルモノヲ郵送シ其見込アルモノニテ遞送方相達候後本文ノ通リ可取計候

事（十九年宮内省第十三號達ヲ以テ來件ハ宮内省ニ届出ルコトヽナス）

○遺失物中没官ノ物品取扱方
明治九年十二月　内務省達乙第百三十六號

本年八月當省乙第九十七號没官之物品取扱方達書左之通改正候條此旨相達候事

遺失物取扱規則中官ニ没スル物品之中裁判ニ係ルモノハ裁判所ニ送附シ裁判ニ係ラサルモノハ之ヲ公賣シ其應禁物ハ一旦廢毀スルノ後ハ之ヲ公賣スルモ害ナキモノハ同樣處分シ其金額毎六ケ月分七月ヨリ十二月迄一月ヨリ六月迄取纏メ明細書相添大藏省ヘ納附可致事

但本文ノ通納附候ハヽ、其段當省ヘ可届出事

○官没ノ遺失公賣物ヲシタル金額納付方等
明治十五年十二月　内務省達乙第七十號

明治九年十二月當省乙第百三十六號書中金額納付方ノ義自今本年大藏省第二十一號達雜收入金上納順序ニ準據シ納付可致此旨相達候事

○遺失物公賣金額届出方
明治十六年四月　内務省達乙第十三號

遺失物等公賣ニ係ル金額届方之義自今一週年度分取纏メ明細書相添ヘ毎年八月三十一日限リ届出ヘシ此旨相達候事

第五章　墓地　埋葬　行旅死亡

○墓地及埋葬取締規則左ノ通相定ム
明治十七年十月　太政官布達第二十五號

墓地及埋葬取締規則

第一條　墓地及火葬場ハ管轄廳ヨリ許可シタル區域ニ限ルモノトス

第二條　墓地及火葬場ハ總テ所轄警察署ノ取締ヲ受クヘキモノトス

第三條　死體ハ死後二十四時間ヲ經過スルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス

但別段ノ規則アルモノハ此限ニアラス

第四條　區長若クハ戸長ノ認許證ヲ得ルニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナスコトヲ得ス

但改葬ヲナサントスル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ

第五條　墓地及火葬場ノ管理者ハ區長若クハ戸長ノ認許證ヲ得タル者ニ非サレハ埋葬又ハ火葬ヲナサシムヘカラス又警察署ノ許可證ヲ得タル者ニ非サレハ改葬ヲナサシムヘカラス

第六條　葬儀ハ寺堂若クハ家屋構内又ハ墓地若クハ火葬場ニ於テ行フヘシ

第七條　凡ソ神祠ヲ建設セント欲スル者ハ所轄警察署ノ許可ヲ受クヘシ其許可ヲ得スシテ建設シタルモノハ之ヲ取除クシムヘシ

但墓地外ニ建設スルモノ亦之ニ準ス

第八條　此規則ヲ施行スル方法細則ハ警視總監府知事縣令ニ於テ便宜取設ク内務卿ニ届出ヘシ

○墓地及埋葬取締規則ニ違背スル者處分方
明治十七年十月　太政官達第八十二號

今般第二十五號ヲ以テ墓地及埋葬取締規則布達候ニ付此規則ニ違背スルモノハ違警罪ノ刑ヲ以テ處分スヘシ此旨相達候事

○猥ニ墓地ヲ設クルヲ禁ス
明治六年十月　太政官達第三百五十五號

從來猥ニ墓地ヲ設ク候儀ハ不相成候處今般私有地ノ賣券相渡候上ハ心得違ノ者モ難計ニ付耕地宅地ハ勿論林藪タリトモ許可ヲ得スシテ新ニ墓地ヲ設ク或ハ區域ヲ取廣ク候儀可令禁止就テハ忽墓地差支候鄉村モ可有之候條管下一般諸寺院境内ヲ始其他永久墓地ニ定ムヘキ場所取調圖面ヲ副ヘ大藏省ヘ可伺出此旨相達候事

但即今墓地差支候場所ハ相當ノ處分致シ置本文ノ通至急取調可申尤管下總體一時取調出來兼候ハヽ差向墓地差支候鄉村ヨリ取掛リ逐次同省ヘ可伺出事

○古墳ト見ユル地ハ猥ニ發掘ヲ禁ス
明治七年五月　太政官達第五十九號

上世以來御陵墓ノ所在未定ノ分即今取調中ニ付各管内荒蕪地開墾ノ節口碑流傳ノ場所ハ勿論其他古墳ト相見ヘ候地ハ猥ニ發掘爲致間敷候若差向墾闢ノ地ニ有之分ハ繪圖面相副敎部省ヘ可伺出此旨相達候事

行旅死亡人取扱規則
明治十五年九月　布告第四十九號

行旅死亡人取扱規則左ノ通制定ス

第一條　凡ソ引取人ナキ行旅死亡人アルトキ所在戸長ハ之ヲ最寄墓地ヘ假埋葬スヘシ其斃死變死等ニ係ル者ハ警察官ノ檢視ヲ受クヘシ

第二條　死亡人ノ本籍氏名詳ナルトキ戸長ハ死亡ノ狀況竝ニ埋葬其他死亡人ニ屬スル費用ノ計算書ヲ本籍戸長ヘ通報スヘシ本籍戸長ハ之ヲ其家ニ通示シ費用ノ辨償ヲ要スルトキハ三十日限差出サシメ埋葬地戸長ニ送付スヘシ若シ其家赤貧ニシテ辨償シ能ハサルトキハ其本籍地方稅ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第三條　死亡人ノ本籍氏名詳ナラサルトキ戸長ハ其相貌景狀附屬シタル物品場所年月日等ヲ詳記シ三十日間最寄揭示場ヘ揭示シ且兩度以上新聞紙ヲ以テ公告スヘシ公告ノ日ヨリ九十日ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルトキハ該費用ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ

第四條　死亡人所持ノ金錢ハ埋葬其他死亡人ニ屬スル費用ニ供スヘシ又所持ノ物品ハ前條ノ期限ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルトキハ之ヲ公賣シ同上ノ費用ニ充ツヘシ

但本籍氏名詳ナル者其家赤貧ニシテ費用ヲ辨償スルコト能ハサルトキハ直ニ其物品ヲ公賣スルモ妨ケナシ

第五條　死亡人ノ遺財前條ノ費用ニ充テ餘贏アルトキハ之ヲ

本籍ヘ送付スヘシ其本籍氏名詳ナラサルモノハ之ヲ五ケ年間戸長ニ役場ニ保管シ仍ホ本籍氏名詳ナラサルニ於テハ地方税雑収入ニ組入ルヘシ

第十五類　社寺　宗教

第一章　神社　神官　祭典

○神社改正規則更定

明治六年十二月布告第四百二十一號

去ル明治四年辛未五月中相達候神社改正規則今般左之通更定候條此旨相心得神官ヘ布告スヘキ事

規則

第一（二十年閣令第四號ニ依リ本條但書トモ消滅ス）

第二（二十年内務省訓令第十八號ニ依リ消滅ス）

第三　同上一社ノ私祭及土地或ハ人民ニ係ル事件ハ其地方官ノ指揮ヲ受クルコト勿論タルヘシ

第四（七年第十二號布告ヲ以テ本條ヲ改正シ又二十年内務省訓令第十八號ニ依リ消滅ス）

第五　府縣社以下ハ地方官ノ管轄ニ屬スト雖其社格等差ヲ定メ或ハ之ヲ増減スル等都テ同省ヘ上申シテ其處分ヲ乞フヘシ其他ノ事件ト雖モ臨時難決モノハ亦之ニ同シ

第六（同上ニ依リ消滅ス）

○官國幣社及府縣郷社共古來ノ制式保存方

明治八年九月太政官達第百五十九號

官國幣社及府縣郷社共古來ノ制式容易ニ變換候テハ後來其照鑑ヲ失ヒ候條本社並附屬建物周圍玉垣等些少ノ物件ニ至ル迄厚ク保存可致就テハ自今修復再造ノ節用材物品等モ可成舊式ニ不違樣可取計此旨相達候事

但官國幣社ノ内社殿矮陋祭儀難相整向モ有之候ハヽ修復再造等ノ節其旨委細具狀内務（教部）兩省宛ヲ以テ（教部省）ヘ可差出事（九年第六號達ヲ以テ但書ヲ改正ス）

○神宮大麻頒布ハ地方官ノ關係ニ不及人民各自ノ自由ニ任ス

明治七年一月教部省達書第一號

神宮大麻頒布之儀ニ付明治五年六月元教部省ヨリ相達置候趣モ候處右ハ自今地方官ノ關係ニ不及候條其受不受ハ專ラ人民ノ自由ニ爲任候儀ト可心得此旨相達候事

○官國幣社制札面ヲ削除ス

明治十一年十月内務省達乙第六十六號

官國幣社制札而自今當省名並各管轄廳ノ添書ヲ削除シ某府縣某郡ト署名致スヘク尤目今建設有之分ハ建替ノ節改メ候儀ト可心得此旨相達候事

○社務取扱所名稱ヲ定ム

明治七年二月教部省達書甲第一號

宮司社務取扱所稱呼各社異稱候趣今後一般某神社々務所ト相唱可申此旨爲心得相達候事

○神社授符配札ヲ差止ム

明治八年五月教部省達書甲第六號

各社授符配札之儀ニ付テハ七年月二當省甲第二號ヲ以相達候趣モ候處自今配札ノ儀ハ差止候尤該社々頭ハ勿論教院説教所ニ

於テシ又ハ出張所等ニテ信仰ノ者ヘ授與致候儀ハ不苦候條他管內ノ分ハ兼テ其管轄廳ヘ可屆此旨相達候事

但氏子等ヘ配授ノ儀ハ非此限尤新規出張所取設候節ハ其管轄ノ許可ヲ可受儀ト可心得候事（九年達甲第七號達甲第三十四號ヲ（第ニテト改メ但書（非此限）ノ下二十七字ヲ加ス）

○鄉村社祠官祠掌給料ハ人民ノ信仰ニ任セ適宜給與セシム

明治六年二月太政官達第六十七號

壬申第五十八號布告ノ通各地方鄉村社祠官祠掌給料ノ儀ハ是迄民費課出ノ規則ニ候處自今相廢シ候條人民ノ信仰ニ任セ適宜給與爲致可申此段相達候事

○府縣社以下祠官祠掌ノ等級ヲ廢シ身分取扱方

明治十二年十一月太政官達第四十五號

府縣社以下祠官祠掌ノ等級ヲ廢シ身分取扱ハ一寺住職同樣ヲルヘシ此旨相達候事

○府縣社以下祠官祠掌ノ進退取扱方

明治八年五月教部省達第十八號

府縣社以下祠官祠掌進退是迄成規無之候處自今氏子共締依之者相撰氏子總代並（同區內）ニテ立候神官二名以上連署爲願出候上猶人體可否篤ト取調進退可申付此旨相達候事

但氏子無之向ハ其地人民ヨリ本文同樣之手續ヲ以可爲願出事

○官國幣社神官ヲ廢シ更ニ神職ヲ置ク

明治二十年三月閣令第四號

官國幣社ノ神官ヲ廢シ更ニ左ノ神職ヲ置ク

宮司
祠官
主典

宮司ハ內務省ニ於テ之ヲ補シ祠官主典ハ北海道廳府縣ニ於テ之ヲ補ス靖國神社宮司以下ハ陸軍省海軍省ニ於テ之ヲ補ス宮司ハ奏任ノ待遇ヲ受ク祠官主典ハ判任ノ待遇ヲ受ク

○官國幣社神職奉務規則

明治二十四年八月內務省訓令第十七號

官國幣社神職奉務規則左ノ通相定ム

官國幣社神職奉務規則

第一條　官國幣社神職ハ國家ノ宗祀ニ從事シ國家ノ禮典ヲ代表スル職務タルヲ以平素國體ヲ辨シ國典ヲ修メ躬行ヲ正シクシテ以テ本務ヲ盡スヘシ

第二條　官國幣社祭典ハ國家彝倫ノ標準タルヲ以テ齊肅恭敬首トシテ報本反始ノ誠意ヲ表スヘシ

第三條　祈年新嘗例祭等總テ官祭ノ典則ハ非常ノ事故ニアラサレハ成規ノ時間ヲ猥リニ伸縮スヘカラス

第四條　祭祀典則ハ蕃來ノ儀式ヲ遵守シ其社ノ禮祭民俗因襲ノ神賑等適宜行フコトヲ得

但臨時祭ヲ行ハントスルトキハ地方廳及所轄警察署又ハ分署ニ屆出ヘシ

第五條　人民ノ請求ニテ應シ神符神像等ヲ授クルハ妨ナシト雖トモ苟モ貪汚ノ所爲アルヘカラス

第六條　社殿及其境內ヲ清潔ニシ修造取締等常ニ意ヲ注キ舊觀ヲ失墜セス悠久ノ保存ヲ要ス

第七條　神社所藏ノ寶物什器古文書類等常ニ散失ナキ樣監護シ神社所有ノ財產ヲ管理シ金穀ヲ出納スヘシ

第八條　神社ノ財產中人民ノ寄附ニ係リ永遠ノ目的ヲ以テ備ヘタル土地金穀ヲ變更セントスル場合ハ官國幣社ト雖トモ氏子又ハ講社アルトキハ其總代協議ノ上地方廳ノ許可ヲ得ヘシ

第九條　神社ニ委託山林アルトキハ其栽植伐採其他山林ノ保護ニ注意シ損害ヲ來スカ如キコトナカラシムルヲ要ス

○府縣鄉村社神官奉務規則

明治二十四年七月內務省訓令第十二號

府縣鄉村社神官奉務規則左ノ通改正ス

府縣鄉村社神官奉務規則

第一條　神官ハ神明ニ對シ尊崇恪慎ヲ主トシ典例ニ從ヒ各其本務ヲ盡スヘシ

第二條　神官ハ祭祀ノ典則蕃來ノ儀式ヲ遵守シ決テ紛亂スヘカラス其社ノ例祭民俗因襲ノ神賑等ハ適宜行フコトヲ得

但臨時祭ヲ行ハントスルトキハ所轄警察署又ハ分署ヘ屆出ヘシ

第三條　神官ハ人民ノ請求ニ應シ神符神像等ヲ授クルハ妨ナシト雖トモ苟モ貪汚ノ所爲アルヘカラス

第四條　神官ハ社殿及其境內ヲ清潔ニシ修造取締等常ニ意ヲ注キ舊觀ヲ失墜セス汚穢破損ニ至ラシムヘカラス

第五條　神官ハ神社所藏ノ寶物什器及古文書類ヲ監護シテ散逸セシムヘカラス如何ナル場合ト雖モ賣却讓與又ハ質入書入スヘカラス

第六條　神官ハ神社所有ノ財產ヲ管理シ金穀ヲ出納スヘシ

第七條　神官ハ其管理ニ係ル不動產積立金穀ヲ濫リニ賣却讓與又ハ質入書入スヘカラス若シ不得止必要アルトキハ氏子又ハ信徒ノ協議ヲ經地方廳ノ許可ヲ受クヘシ

第八條　神社ニ委託山林アルトキハ其栽植伐採其他山林ノ保護ニ注意シ損害ヲ來スカ如キコトナカラシムルヲ要ス

○官國幣社神職試驗規則

明治二十五年內務省訓令第四號

官國幣社神職試驗規則左ノ通相定ム

官國幣社神職試驗規則

第一條　神職試驗ハ高等尋常ノ二種ニ分ツ

第二條　宮司權宮司ハ高等試驗合格ノ者祠官主典ハ尋常試驗合格ノ者ヲ以テ之ニ充ツ

第三條　高等試驗ハ內務省ニ委員ヲ設ケ本省ニ於テ施行ス尋常試驗ハ各地方廳ニ委員ヲ置キ施行スヘシ

但高等試驗ト雖トモ時宜ニヨリ地方廳ニ於テ施行スルコトアルヘシ尤問題及試驗成績等ハ本省ニ於テ撰定スヘシ

第四條　尋常試驗ハ施行前其地方廳ニ於テ豫メ問題取調本省ノ認可ヲ受クヘシ

第五條　試驗合格者商等試驗者ハ內務省ヨリ尋常試驗者ハ其廳府縣ヨリ合格證書ヲ付與スヘシ

第六條　宮司權宮司撰擧ノ節ハ高等試驗合格證書寫ヲ添本大臣ヘ差出スヘシ

第七條　禰宜主典ハ其地方長官限リ申付其都度本大臣ヘ報告スヘシ

第八條　試驗科目ヲ分ツ左ノ如シ

高等試驗科目

六國史（即位前後書取）　令義解　同上
延喜式　同上　萬葉集　同上
法曹至要抄　同上　考證一題
作文二題（宣命體公文體）

尋常試驗科目

古事記（講義書取）　土佐日記　同上
職原抄　同上　祝詞式　同上
作文二題（祝詞公文體）

第九條　本試驗合格證書所持ノ者ハ官國幣社神職中該證書相當ノ位階ヘ轉補又ハ再補スルコトヲ得

第十條　左ニ揭クルモノハ試驗ヲ要セス直ニ宮司權宮司ニ補スルコトヲ得

一　其神社神統又ハ維新前十代以上該神社ヘ奉仕セシ重立タル者及ヒ其子孫

二　其神社祭神ノ一族臣下ノ內祭神在世ニ於テ功蹟顯著ナル乘ニ著名アル者ノ統末

三　行政官吏判任官四等八級俸以上滿三年以上奉職セシ者

四　皇典講究所學階一等司業以上ノ者

五　該神社所在地ノ舊藩主

六　維新前王事鞅掌ノ功ニ依リ官ノ褒賞ヲ受クタル者

但以上六項ニ該當スル者ト雖モ現時ノ性行其他不適當ト認ムルモノハ採用ノ限ニアラス

第十一條　左ニ揭クルモノハ試驗ヲ要セス直ニ禰宜主典ニ申付ルコトヲ得

一　維新前五代以上該神社ヘ奉仕セシ者及ヒ其子孫

二　行政官吏判任官以上滿二年以上奉職セシ者

三　皇典講究所學階五等司業以上ノ者

但性行其他不適當ト認ムルモノハ前同斷

第十二條　本規則施行前ヨリ在職ノ者ハ試驗ヲ要セス其現職ニ在ルコトヲ得

第十三條　官幣小社波上宮別格官幣社靖國神社神職ハ本規則ニ不拘從來ノ取扱ニ據ル

第十四條　採用スヘキ人員及職名試驗期日等ハ其時々官報又ハ新聞紙其他便宜ノ方法ヲ以テ之ヲ公告スヘシ

第十五條　本規則ハ明治二十五年四月一日ヨリ施行ス

○皇典講究所學階試驗ニ拘ハラス府縣社以下神官タルヲ得ヘキ資格

（明治二十五年三月內務省訓令第五號）

府縣社以下神官ノ儀ハ自今左ニ揭クルモノニシテ性行其他適當ト認ムル者ハ皇典講究所學階試驗ニ不拘神官タルノ認可ヲ與フヘシ

祠官

一　維新前五代以上其神社ヘ奉仕セシ者及ヒ其子孫

一　明治十五年八月以前ヨリ本職勤續ノ者
但現職祠掌ヨリ祠官ニ選擧スルハ此限ニアラス

一　有位者又ハ判任官以上滿二年本職セシ者

一　該神社所在ノ府縣ニ於テ一箇年直接國稅十圓以上ヲ納ムル者

祠掌

一　維新前五代以上其神社ヘ本職セシ者及ヒ其子孫

一　明治十五年八月以前ヨリ本職勤續ノ者

一　該神社所在地ノ町村長三年以上本職セシ

○府縣社以下祠官祠掌進退取扱方

（明治十二年十一月內務省達乙第四十八號）

本年十一第四十五號公達ノ趣ニ付自今府縣社以下祠官祠掌進退ノ節ハ八年五次部省第十八號達書ノ手續ニ準シ爲願出候上於其地方廳許可スヘシ此旨相達候事

但出願ノ節地方官ニ於テ許可難致事情有之モノハ委詳具狀當省ヘ處分方伺出ヘシ

○府縣社以下神官選擧ノ節皇典講究所ノ卒業證書又ハ試驗濟證書ヲ添出願認可ノ件

（明治十五年八月內務省達乙第四十六號）

今般皇典講究所設置ニ付府縣社以下神官撰擧ノ節該所ノ卒業證書無之者ハ皇典講究所本分所ノ試驗ヲ受サセ試驗濟ノ證書ヲ相渡候條ニ付今後選擧出願ノ向ハ該所卒業證書寫若クハ試驗濟ノ證書ヲ副ヘ願出候者ニ限リ認可ヲ與ヘ候儀ト可心得此旨相達候事

○伊勢神宮及官國幣社等祭典ノ節著服禮式ヲ定ム

（明治八年十二月式部寮布達）

伊勢神宮及官國幣社諸陵墓等祭典ノ節奉仕遊拜禮ノ殿殿上ノ式ハ祭服坐禮庭上ノ式ハ大禮服著用立禮ノ事

但神官ハ明治七年正院御布告第三十八號ニ依リ坐禮立禮共祭服ヲ用ユヘキ事

右之通被定候條來明治九年一月ヨリ執行可致且管內ニ官國幣社等有之向ハ其旨神官ヘ可被相達此段及布達候也

○神佛祭禮開扉等ノ節奇怪ノ打扮等ヲ爲スヲ禁ス

（明治六年七月教部省達第二十六號）

神佛祭禮開扉等之節兼テ信仰ノ者ハ夫々禮敬ヲ盡シ參拜可致等之處從來ノ弊風ニ泥ミ奇怪之打扮或ハ男女姿粧ヲ易ヘ候等

○神官教導職ノ兼補ヲ廢シ葬儀ニ關係セス

（明治十五年一月內務省達乙第七號）

自今神官ハ教導職ノ兼補ヲ廢シ葬儀ニ關係セサルモノトス此旨相達候事

但府縣社以下神官ハ當分從前之通

○官幣社官祭執行方

（明治六年二月布告第五十三號）

從前官幣諸社官祭ノ儀式部寮官員參向執行候處今後伊勢神宮ヲ除クノ外總テ地方官ニ於テ執行可致事但巨細ノ儀ハ追テ式部寮ヨリ可相達事

ノ儀有之亟醜態ヲ極メ候ノミナラス却テ神佛ヲ褻瀆シ以之外之儀ニ付以來右樣之儀無之尊崇之本意ヲ體シ候樣可致事

○諸神社祭禮神輿渡御ノ節粗暴ノ所業ヲ禁ス
明治六年九月 教部省達第二十九號

諸神社祭禮神輿渡御之節往々祭儀ニ托シ粗暴之所業有之或ハ途中之人家ニ觸レ或ハ往來之妨碍ヲ爲ス等許多之弊害不少候趣相聞不都合之至ニ候條向後取締方精々注意シ粗暴之所業無之樣可致此旨相達候事

番外　神道管長

別紙(前文)之通各府縣ハ及布達候ニ付テハ前顯之次第敎義上ニ於テ關係不少儀ニ付平素ヨリ神官之者各氏子ヘ丁寧說諭致置不都合之所業無之樣可及通達此旨相達候事

○官國幣社祈年祭新嘗祭例祭地方官參向方
明治十六年二月 內務省達乙第八號

官國幣社祈年祭新嘗祭例祭之義ハ神社祭式之通地方長官又ハ次官參向可致筈ニ付可成的事務繰合セ參向可致尤遠隔ノ地等不得已支障有之代理參向ノ節ハ府縣官郡(區)長ニ限リ候義ト可心得此旨相達候事(十七年乙第十一號開省達ヲ以テ但書ヲ削除ス)

○神宮及國幣社等祭典ニ付勅使參向ノ節著服
明治十七年一月 宮內省達乙第一號

神宮及官國幣社諸陵墓等祭典ニ付勅使トシテ寧典參向ノ節ハ自今祭服(通常ノ著用候條此旨相達候事

但地方官勅使相勤候節ハ便宜大禮服ヲ以テ祭服ニ換用可致

尤殿上ノ式ハ明治八年月 十二式部寮布達ノ通可心得事

○寺院佛像持出開帳ノ達ヲ廢シ他管持出開帳ノ節出願手續
明治十七年三月 內務省達乙第十六號

明治九年敎部省第四號布達廢止候條自今寺院佛像他管持出開帳之義ハ該寺住職檀家總代(無檀家ノ寺院ハ信徒總代)及本寺法類連署ノ上本山ノ添書ヲ以テ甲乙兩管廳ヘ出願セシムヘシ此旨相達候事

○人民私邸內等自祭ノ神祠佛堂衆庶參拜許否處分方
明治九年十二月 敎部省達甲第三十八號

從來人民私邸內等ニ自祭スル神祠佛堂ヘ衆庶參拜爲致候向モ有之自然一般社寺同樣之姿ニ相成不都合候條自今總テ參拜可差停候尤其建物等更ニ信仰人共有ノ筋ヲ以テ倘參拜之儀願出候ハヽ永續方法竝神官僧侶之受持等夫々取調爲申出候上管轄廳見込相立可伺出此旨相達候事

但從前願濟ノ分ト雖モ建物等一己私有ニ屬スル向ハ本文ニ準シ詳細取調處分方可伺出事

○敎院敎會所說敎所ニ於テ葬儀ヲ執行シ或ハ平素衆庶ニ參拜セシムル等ノ所爲ヲ禁ス
明治十四年十二月 內務省達乙第四十八號

別紙戊第三號之通神道總裁神佛各管長ヘ相達候條此旨爲心得相達候事

(別紙戊第三號十月)

敎院敎會所說敎所等ニ於テ葬祭ヲ執行シ或ハ平素衆庶ニ參拜

セシムル等神社寺院ノ所爲ニ似テモノ有之候テハ不都合候條心得違無之樣可爲致此旨相達候事

第二章　寺院　僧侶

○無檀無住ノ寺院廢止方
明治五年十一月 布告第三百三十四號

諸寺院中總本寺本山ヲ除クノ外無檀ニシテ無住ノ向ハ自今渾テ被廢止候條各地方官ニ於テ夫々廢寺處分ノ上宗名寺號共滌憑取調敎部省ヘ可屆出候事

但佛像什器等ハ本寺法類ノ內最寄寺院ヘ合附爲致堂宇迚物ノ儀ハ最初營造ノ次第ヲ追ヒ官營ハ公收シ私造ハ其人民所分ニ可相任官私ノ別不分明ノ向ハ適宜ニ取計ヒ跡地所置ノ儀ハ總テ大藏省ヘ可伺出候事

○寺院廢止處分方
明治八年十月 太政官達第百八十五號

寺院合併廢止等ノ儀ニ付明治五年四月第百十六號同月十一第三百三十四號達ノ旨モ候處自今無檀無住ノ向ハ各官廳ニ於テ取調其他ハ寺檀出願ノ上孰レモ敎部省ヘ伺出處分可致此旨更ニ相達候事

○無檀無住ノ寺院廢止處分手續
明治十二年一月 內務省達乙第一號

無檀無住ノ寺院廢止處分之儀ハ明治十一年當省乙第五十七號達第二條ノ手續ニ準シ其本寺法類等ヨリ廢合出願ノ上處分可致此旨更ニ相達候事

○佛道各宗派管長ナシテ宗規ノ戒飭方ニ一層注意シ竝ニ一宗ノ安寧ヲ保持セシム
明治二十四年九月 內務省訓令第二十二號

佛道各宗ハ慈悲忍辱ヲ旨トシ衆生濟度ヲ目的トス爲シ宗祖先德ノ勞闘ヲ追踐シ其本分ヲ恪守シ布敎傳道ニ從事スヘキハ現ニ其宗制ニ揭ケ本大臣ニ於テ是ヲ認可セシ處ナリ然ルニ近來各宗ノ內往々黨ヲ樹ヲ社ヲ結ヒ互ニ名利ヲ爭ヒ傾訐ノ風ヲ釀成スル弊有之僧侶ニシテ有聞敗所業ニ付各管長ニ於テ自ラ率先シ德義ノ上進ヲ冀圖シ風紀ノ頹廢ヲ匡正シ殊ニ宗務所ノ如キハ管長ノ指示ヲ受ケ宗內諸般ノ事務ヲ掌理スル場所ナルニ依リ公平無私ニシテ宗內德望アル者ヲ登庸スル等總テ宗規ノ戒飭方ニ一層注意スヘシ是レ特ニ管長ノ注意ヲ要スルノミナラス宗內各自ノ戒飭茲ニ出スシテ仍ホ其弊ヲ矯正スルコト能ハサルトキハ本大臣監督上臨機ノ處分ヲ爲スハ格別トシ其一宗ノ自カラ衰亡ニ歸スルハ必然ニ可有之假令其宗名ヲ存スルモ既ニ其實ヲ失ヒ宗祖先德ニ對シ實ニ面目ナキ次第ニ可立至就テハ自今猛省警悟シテ一宗ノ安寧ヲ保持スヘシ

○管長身分取扱
明治十七年八月 太政官達第六十八號

管長身分ノ儀ハ總テ勅任官取扱ノ例ニ依ル

○從前ノ敎導職タリシ者身分取扱方
明治十七年八月 太政官達第六十九號

今般敎導職廢セラレ候ニ付テハ從前敎導職タリシ者ノ身分ハ總テ其在職ノ時ノ等級ニ準シ取扱フ者トス

○神佛教導職ヲ廢シ寺院ノ住職ヲ任免シ及教師ノ等級進退ヲ管長ニ委任ス
明治十七年八月太政官布達第十九號

自今神佛教導職ヲ廢シ寺院ノ住職ヲ任免シ及教師ノ等級ヲ進退スルコトハ總テ各管長ニ委任シ左ノ條件ヲ定ム

第一條　各宗派毎リニ分合ヲ唱ヘ或ハ宗派ノ間ニ爭論ヲ爲ス可ラス

第二條　管長ハ神道各派ニ一人佛道各宗ニ一人ヲ定ム可シ但事宜ニ因リ神道ニ於テ數派聯合シテ管長一人ヲ定メ佛道ニ於テ各派管長一人ヲ置クモ妨ケナシ

第三條　管長ヲ定ムヘキ規則ハ神佛各其教規宗制ニ由テ之ヲ一定シ內務卿ノ認可ヲ得可シ

第四條　管長ハ各其立教開宗ノ主義ニ由テ左項ノ條規ヲ定メ內務卿ノ認可ヲ得可シ

一教規
一教師タルノ分限及其稱號ヲ定ムル事
一教師ノ等級進退ノ事
以上神道管長ノ定ムヘキ者トス
一宗制
一寺法
一僧侶ニ教師タルノ分限及其稱號ヲ定ムル事
一寺院ノ住職任免及教師ノ等級進退ノ事
一寺院ニ屬スル古文書寶物什器ノ類ヲ保存スル事
以上佛道管長ノ定ムヘキ者トス

第五條　佛道管長ハ各宗制ニ於テ古來宗派ニ長タル者ノ名稱ヲ取調ヘ內務卿ノ認可ヲ得テ之ヲ稱スルコトヲ得

○盲僧取締方
明治八年七月教部省達書第二十九號

元青蓮院配下盲僧ノ儀者總テ天台宗ニ於テ所轄取締可致樣其管長ヘ達慥候條此旨爲心得相達候事

但盲僧之一派永存之旨趣ニ無之候條爾後盲子養取或ハ他人ヘ傳業候等之儀ハ勿論不相成筋ニ候事（八年達書第三十五號右達ヲ以テ但書追加）

○盲人ニ非スシテ盲僧ノ業ヲ營ムヲ禁ス
明治十三年七月內務省達乙第三十二號

明治八年教部省第三十五號盲僧之儀ニ付達書自今相廢候條此旨相達候事

但盲人ニ非スシテ該業相營候儀ハ不相成筋ニ候事

○禁厭祈禱ヲ行ヒ醫藥ヲ妨クルヲ禁ス
明治七年六月教部省達書第二十二號

別紙乙第三十三號ノ通神道諸宗管長ヘ相達候條向後禁厭祈禱ヲ以醫藥等差止メ政治ノ妨害ト相成候樣ノ所業致候者有之候ハヽ於地方官取締可致此旨相達候事

達書乙第三十三號

禁厭祈禱等ノ儀ハ神道諸宗共人民ノ請求ニ應シ從來ノ傳法執行候ハヽ元ヨリ不苦筋候處間ニハ之レカ爲メ醫療ヲ妨ケ湯藥ヲ止メ候向モ有之哉ニ相聞以ノ外ノ事ニ候抑教導職タルモノ右等貴重ノ人命ニ關シ衆庶ノ方向ヲモ誤ラセ候樣ノ所業有之候テハ朝旨ニ乖戻シ政治ノ障碍ト相成甚以不都合ノ次第ニ候條向後心得違ノ者無之樣屹度取締可致此旨相達候事

○禁厭祈禱ヲ請フモノアルトキ醫師ノ施療中ノ者ニ限リ其望ニ應スルヲ許ス
明治十五年七月內務省達乙第三號

禁厭祈禱ノ儀ニ付七年六月教部省乙第三十三號達之趣有之候處病者治療ノ際之カ爲メ投藥ノ時機ヲ誤リ候儀モ有之哉ニ相聞不都合候條今後信者ヨリ請求候節ハ先服藥ノ有無ヲ證明セシメ果シテ醫師診斷施療中ノ者ニ限リ其望ミニ應シ不苦候條其旨屹度可相心得此段相達候事

乙第四十二號

別紙戊第三號ノ通神道副總裁神佛各管長ヘ相達候條今後違背之族有之候半ハ直ニ差止置委詳當省ヘ具狀可致此旨相達候事

○神佛各教宗派內ノ者出願處分ヲ要スルトキ願書差出方
明治二十二年五月內務省訓令第二十二號

神佛各教宗派內ノ者其教宗派ノ事務ニツキ當省ニ出願處分ヲ要スヘキモノハ管長ヲ經由出願セシムヘシ但シ管長其手續ヲ拒ミタルトキハ其次第ヲ具シ本人ヨリ願書ヲ直ニ當省ニ差出スコトヲ得

廢合及財產ニ關スル請願ハ管長添書ヲ爲サシム

第三章　社寺財產

○神社佛寺古來所傳ノ什物並寄附ノ諸器祠堂金等ノ類處分方
明治六年七月布告第二百四十九號

神社佛寺共古來所傳ノ什物乘應寄附ノ諸器遊ニ祠堂金等ノ類ハ神官僧侶ハ勿論氏子檀家ノモノタリトモ自儘ニ處分可致筋無之候條若不得已有之儀候ハヽ委詳具狀ヲ以テ教部省ヘ可申立候此旨布告候事

○社寺ニ於テ金穀借入方
明治十年五月布告第四十三號

神社並寺院ニ於テ其社寺ノ爲メ金穀ヲ借入ルヽトキ若シハ金穀ヲ借入ル、爲メ社寺附地所除税地ヲ寫物古文書類等ヲ抵當トナストキハ必ス氏子檀家ト協議シ總代二名以上ノ連署ヲ要スヘシ若シ此連署ナキトキハ總テ該社寺神官僧侶ノ私債ト看做シ縱令右ノ抵當アルモ其効ナキモノト爲スヘシ

○寺院什物帳調製方
明治六年三月布告第八十九號

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什檀家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必用ナル分並ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置可申候

一寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ質分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ

一什物帳ニハ法用ニ必要ノ分並ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ

一右二帳二部ツヽ相綴リ檀家法類共兩人以上並ニ其地ノ戶長檢査ノ上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戶長役場ニ藏シ一部ハ其寺院ニ藏シ置ク可シ

○社寺上地中內實賣買質地トナセシ者處分方
明治九年五月布告第六十六號

明治三年月ニ社寺領現境內ヲ除クノ外上地ノ儀布告候處朱黑

印除地上地ノ中内實ハ賣買又ハ質地ト相成候者モ有之哉ノ趣不都合ノ至ニ候得共此布告以前ニ係ルモノハ特別ノ詮議ヲ以其罪ヲ問ハス更ニ民有地トナシテ差支無之分ハ賣買地ハ買得者ヘ流質地ハ質取主ヘ其儘無代價ニテ下渡シ其民有地トナシ差支アルモノ並質地年限中ノ分ハ上地セシムヘク若シ此布告以後ニ係ルモノハ律ニ照シ處分スヘク候條此旨布告候事（九年第八十三號布告ヲ以テ（下渡シ）ノ下（請返シ）ノ三字ヲ削ル加ヘ（分ハ）ノ下（請返シ）ノ三字ヲ削ル）

○寺院附屬ノ地所建物什物抵當賣買其他財産ニ關スル諸願ハ管長ノ添書ヲ要ス

明治十七年十月 内務省達乙第三十七號

一神佛教務所（教院教會所法務所說教所社事務所ノ類）說教所（說教ノミハ國並宗派ニ分チ六月三十日十二月三十一日ノ理數半年毎ニ取調翌七月一月兩度ニ當省ヘ差出ス可シ（十八年七月內務省甲第二十三號ヲ以テ年兩度ニ差出ニ及ハス自今仲年十二月三十一日ノ現數ヲ取調翌一月三十一日限リ可差出旨ヲ達ス）

但東京ノ教務所ニハ全國教師僧侶ノ姓名及各地方教務所說教所ノ所在等ヲ詳記セル帳簿ヲ備置クヘシ

一教務所（教院教會所法務所說教所社事務所ノ類）說教所（說教ノミハ國並宗派ニ分チ六月三十日十二月三十一日ノ理數半年毎ニ取調翌七月一月兩度ニ當省ヘ差出ス可シ（十八年七月內務省甲第二十三號ヲ以テ年兩度ニ差出ニ及ハス自今仲年十二月三十一日ノ現數ヲ取調翌一月三十一日限リ可差出旨ヲ達ス）說教ノミハ國並宗派ニ分チ六月三十日十二月三十一日ノ理數半年毎ニ取調翌七月一月兩度ニ當省ヘ差出ス可シ（十八年七月內務省甲第二十三號ヲ以テ年兩度ニ差出ニ及ハス自今仲年十二月三十一日ノ現數ヲ取調翌一月三十一日限リ可差出旨ヲ達ス）ノ說教所ノ所在等ヲ詳記セル帳簿ヲ備置クヘシ

一教務所（教院教會所法務所說教所社事務所ノ類）說教所（說教ノミハ國並宗派ニ分チ六月三十日十二月三十一日ノ理數半年毎ニ取調翌七月一月兩度ニ當省ヘ差出ス可シ（十八年七月內務省甲第二十三號ヲ以テ年兩度ニ差出ニ及ハス自今仲年十二月三十一日ノ現數ヲ取調翌一月三十一日限リ可差出旨ヲ達ス）ノ說教ノミハ國並宗派ニ分チ六月三十日十二月三十一日ノ理數半年毎ニ取調翌七月一月兩度ニ當省ヘ差出ス可シ（十八年七月內務省甲第二十三號ヲ以テ年兩度ニ差出ニ及ハス自今仲年十二月三十一日ノ現數ヲ取調翌一月三十一日限リ可差出旨ヲ達ス）ノ說教所ノ所在等ヲ詳記セル帳簿ヲ備置クヘシ

一教務所（教院教會所法務所說教所社事務所ノ類）說教所（說教ノミハ國並宗派ニ分チ六月三十日十二月三十一日ノ理數半年毎ニ取調翌七月一月兩度ニ當省ヘ差出ス可シ（十八年七月內務省甲第二十三號ヲ以テ年兩度ニ差出ニ及ハス自今仲年十二月三十一日ノ現數ヲ取調翌一月三十一日限リ可差出旨ヲ達ス）說教ノミハ國並宗派ニ分チ六月三十日十二月三十一日ノ理數半年毎ニ取調翌七月一月兩度ニ當省ヘ差出ス可シ（十八年七月內務省甲第二十三號ヲ以テ年兩度ニ差出ニ及ハス自今仲年十二月三十一日ノ現數ヲ取調翌一月三十一日限リ可差出旨ヲ達ス）ノ說教所ノ所在等ヲ詳記セル帳簿ヲ備置クヘシ

一寺院住職進退ハ其都度地方廳ヘ届出ツヘシ

○府縣社以下神社什物取締方

明治十年七月 內務省布達甲第十三號

府縣社以下社寺什物之儀自今左之通相心得取締可致此旨布達候事

一什物ハ各部類ヲ分チ其品柄員數等詳細ノ簿ニ記載シ倘他ノ寄附ニ係ルモノハ其年月姓名等ヲモ記入スヘシ

第一類　寶物古文書

第二類　祭具什器並持添之田畝附屬之建物等

右ノ簿二部ヲ、編製神官並氏子（氏子無之向ハ該地ノ崇敬人）總代二名以上倘該地之區戶長連署調印一部ハ區戶長役所ヘ一部ハ其社ヘ藏メ置ヘシ

○社寺取扱概則

明治十一年九月 內務省達乙第五十七號

社寺取扱之儀左之通概則相定候條此旨相達候事

社寺取扱概則

第一條　社寺ノ創建ハ（民有地ニ建設スルモノ）神官住職氏子檀徒若クハ信徒ト爲ルヘキモノ（寺院ハ本寺法類トモ）連署戶長奧書ヲ以テ願出永續財産ノ目途且其地所建物社寺ノ體（社ハ本殿拜殿等ハ本堂庫裏）ヲ具フル者ニ限リ允許スルヲ得ヘシ再興復當等總テ之ニ準ス（十三年乙第二十八號達ヲ以テ（社寺ノ體）ノ下註文十二字ヲ加フ）

但別紙書式ニ倣ヒ其都度當省ヘ届出ヘシ

第二條　同上移轉廢合並社寺號改稱ハ前條ノ手續ニ準シ其事由ヲ詳記シ願出ルモノニ限リ開届毎月末取纏當省ヘ届出ヘシ尤廢合社寺址地並建物等處分方ノ儀ハ從前ノ通

但式內神社並文明十八年以前ノ創立ニ係ル社寺ノ向ハ前以テ當省社寺局ヘ照會ヲ經ヘシ

第三條　郡內社堂遊掛所道場引直及寺號公稱等ハ總テ第一條ノ手續ニ從ヒ願出永續目途幷建物ノ體（堂宇ハ方六尺以上）ヲ具フルモノニ限リ開届別紙書式ニ倣ヒ毎月末取纏當省ヘ可届出（同上（願出）ノ下註文ニ十字ヲ加フ）

第四條　前條々ノ外社寺例格ノ改定並社寺ニ關スル條件中例規ナキモノハ其都度當省ヘ伺出ヘシ

（別紙略之）

○社寺ノ什物並地所建物等ノ類抵當其他處分方

明治十二年七月 內務省達乙第三十九號

本年當省乙第二十二號ヲ以テ社寺寶物古文書保護之儀相達候ニ就テハ今般調製スヘキ目錄帳中ヘ記載ノ物品ハ明治十年第四十三號公布之通抵當ト爲スヘカラサル筋ニ有之依テ自今社寺ニ於テスル抵當ハ氏子檀家協議之書面ヲ以テ一應管廳ヘ申出サセ調査ノ上全ク寶物古文書ニアラサル分ニ限リ認可スヘシ此旨相達候事

但目錄帳ヘ記載セスト雖モ該社寺ニ別段ノ由緒アル地所建物等ハ寶物古文書ニ准スヘク且社寺ノ物件不得已儀有之處分候節ハ明治六年第二百四十九號公布同九年教部省第三號達書之通心得ヘシ

○社寺總代人ヲ置キ社寺ノ願届等ニ連署セシメ且收入財産等取調方

明治十四年七月 內務省達乙第三十三號

各管內社寺總代人之儀氏子檀家中（氏子檀家ナキモノハ信徒）相應ノ財產ヲ有シ衆望ノ歸スルモノ三名以上相撰ミ戶長役場ヘ届出サセ今後該社寺ノ願届等ハ總テ連署ヲ以可爲差出且社寺收入財產ハ（田畑山林ノ所得ハ勿論寶物祈禱ノ儀回向料等一切ノ受納物ヲモ云フ）其共有ニ屬スヘキモノト其神官住職付ニスルモノトノ豫約毎社寺適宜相定平素混亂セサル樣取調方可爲致此旨相達候事

但神宮官國幣社ハ非此限

○町村鎭座氏神氏子去就禁否處分方

明治十五年五月 內務省達乙第二十八號

各町村鎭座氏神ノ儀ハ其土地ニ就キ從來一定ノ區域有之儀ニ付各自ノ信否ニ任セ猥ニ去就スヘキモノニ無之候條町村分合等ニヨリ不得已場合有之甲社ノ氏子一部落率ヲ乙社ノ氏子ト相成節ハ甲乙社神官氏子協議ノ上雙方連署爲届出明細帳引直シノ儀當省ヘ可申出此旨相達候事

但雙方協議不整節ハ受理スヘカラサル儀ト心得ヘシ

○社寺境内ノ樹木妄ニ伐採ヲ禁ス

明治六年七月第二百三十五號布告

社寺境内ノ樹木ハ假令其社寺修繕等ニ相用ヒ候共猥ニ伐木不相成候若シ難止事情有之節ハ其地方廳ヘ願出許可ヲ可受事、

○社寺伐木取扱概則

明治十五年八月内務省達乙第廿一號

社寺境内樹木伐採之儀ハ明治六年第二百三十五號公布竝八年第百七號公達九年當省達教部省第十二號達十二年當省乙第三十三號達之趣有之官有地ニ係ルモノハ當省ニ伺出處分之筈ニ候處近來修繕之爲メ多分之伐木願出候向モ有之然ルニ社寺境内ハ修繕用材培植ノ地ニ無之數百年來之古木一朝地ヲ拂ヒ遂ニ風致ヲ毀損スル向モ不少候條自今請願之節ハ不得止分ニ限リ別紙條規ニ照シ取扱候條右厚々調査之上可伺出此旨爲心得示達候事

但縣限リ處分ニ係ル民有地第二種ハ勿論民有地第一種ニアル社寺境内樹木ト雖モ本文之振合ヲ以取扱フヘシ

社寺境内伐木取扱概則（別紙）

第一條　社寺境内木ヲ五類ニ分チ風致木（目通寸間ニヲ第一類ト稱ス）目通リ壹丈以上ヲ第二類トシ同五尺以上ヲ第三類トシ同壹尺以上ヲ第四類トシ同壹尺未滿ヲ第五類トス

第二條　第一類第二類之木ハ伐採ヲ許サス

第三條　第三類ハ總木數十分ノ一（拾本ニ付一本）第四類ハ同十分之二（拾本ニ付二本）以内伐採ヲ許スコトアルヘシ

第四條　第五類ハ別ニ分通ヲ定メス生立ノ爲メ拔伐ノ外伐採ヲ許サヽルモノトス

第五條　社ハ本殿拝殿寺ハ本堂庫裏之造修用材ニ限リ第三條ニ據ルモノトス

但必ス仕樣書具申セシム

第四章　年曆

○年號改元ノ詔勅

明治元年九月布告

今般御即位御大禮被爲濟先例之通被爲改年號候就而ハ是迄吉凶之象兆ニ隨ヒ屢改號有之候得共自今御一代一號ニ被定候依之改慶應四年可爲明治元年旨被仰出候事

詔書

詔體太乙而登位膺景命以改元洵聖代之典型而萬世之標準也朕雖否德幸賴祖宗之鴻祉承鴻緒恭親萬機之政乃改元欲與海内億兆更始一新其改慶應四年爲明治元年自今以後革易蒂制一世一元以爲永式主者施行

○改曆

明治五年十一月第三百三十七號布告

今般改曆ノ儀別紙　詔書ノ通被　仰出候條此旨相達候事

詔書寫（別紙）

朕惟フニ我邦通行ノ曆タル太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ太陽ノ躔度ニ合スル故ニ二三年間必ス閏月ヲ置カサルヲ得ス置閏ノ前後時ニ季候ノ早晩アリ終ニ推歩ノ差ヲ生スルニ至ル殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ率ヲ安諡無稽ニ屬シ人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセス茲ニ太陽曆ハ太陽ノ躔度ニ從テ月ヲ立ツ日子多少ノ異アリト雖モ季候早晩ノ變ナシ四歳毎ニ一日ノ閏ヲ置キ七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生スルニ過キス之ヲ太陰曆ニ比スレハ最モ精密ニシテ其便不便モ固リ論ヲ俟タサルナリ依テ自今萬曆ヲ廢シ太陽曆ヲ用ヒ天下永世之ヲ遵行セシメン百官有司其レ斯旨ヲ體セヨ

明治五年壬申十一月九日

一今般太陰曆ヲ廢シ太陽曆御頒行相成候ニ付來ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト被定候事

但新曆鏤板出來次第頒布候事

一一箇年三百六十五日十二箇月ニ分チ四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事

一時刻ノ儀是迄晝夜長短ニ隨ヒ十二時ニ相分チ候處今後改テ時辰儀時刻昼夜平分二十四時ニ定メ子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分チ午前幾時ト稱シ午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分チ午後幾時ト稱候事

一時鐘ノ儀來ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事

但是迄時辰儀時刻ヲ何字ト唱來候處以後何時ト可稱事

一諸祭典等萬曆月日ハ新曆月日ニ相當シ施行可致事

太陽曆　一年三百六十五日　閏年三百六十六日（四年毎ニ閏之）

一月大　三十一日　其一日　即萬曆壬申　十二月三日
二月小　二十八日（閏年二月ハ二十九日）　其一日　癸酉　正月四日
三月大　三十一日　同　其一日　同　二月三日
四月小　三十日　其一日　同　三月五日
五月大　三十一日　其一日　同　四月五日
六月小　三十日　其一日　同　五月七日
七月大　三十一日　其一日　同　六月七日
八月大　三十一日　其一日　同　閏六月九日
九月小　三十日　其一日　同　七月十日
十月大　三十一日　其一日　同　八月十日
十一月小　三十日　其一日　同　九月十二日
十二月大　三十一日　其一日　同　十月十二日

大小每年替ルコトナシ

時刻表

	午前		午後	
零時（四年毎ニ閏之）子刻	一時 子半刻	二時 丑刻	三時 丑半刻	
四時 寅刻	五時 寅半刻	六時 卯刻	七時 卯半刻	
八時 辰刻	九時 辰半刻	十時 巳刻	十一時 巳半刻	
十二時 午刻				
	一時 午半刻	二時 未刻	三時 未半刻	四時 申刻
	五時 申半刻	六時 酉刻	七時 酉半刻	八時 戌刻
九時 戌半刻	十時 亥刻	十一時 亥半刻	十二時 子刻	

○頒曆

明治三年四月布告

頒曆授時之儀ハ至重之典章ニ候處近來種々之頒曆世上ニ流布候趣無謂事ニ候自今弘曆者之外取扱候儀一切嚴禁被仰出候事

○弘曆者ヲ定メ一枚摺略曆一般出版ヲ許ス

明治十五年四月第八號布達

本曆並略本曆ハ明治十六年曆ヨリ伊勢神宮ニ於テ頒布セシム

ヘシ

一枚摺略暦ハ明治十六年暦ヨリ何人ニ限ラス出版條例ニ準據シ出版スルコトヲ得

但明治九年十月内務省甲第三十九號布達ハ取消ス

○一枚摺略暦ニ記載事項ノ規定

二十三年十月文部省令第二號

明治十五年四太政官第八號布達第二項ニ依リ出版スル所ノ一枚摺略暦ハ自今左ノ規定ニ依ルヘシ

一一枚摺暦ハ左ニ例記スル事項ニ限リ記載スルモノトス

一年號及紀元ノ年數干支

一毎月ノ一日

一日月食竝其時間

一大祭祝日竝神社例祭大

一日曜表甲子表庚申表巳巳表

一二十四節氣及雜節

一新月滿月

一前各項ニ相當スル陰暦日干支及陰暦ノ朔日干支竝之ニ相當スル陽暦日

以上ノ事項ハ帝國大學ニ於テ編纂スル所ノ暦ニ依ルヘシ但前各項規定ノ外本暦略本暦ニ掲載セサル事項ヲ記入スルハ此限ニ在ラス

○本初子午線經度計算方及標準時ヲ定ム

十九年七月勅令第五十一號

朕本初子午線經度計算方及標準時ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

一英國グリニッヂ天文臺子午儀ノ中心ヲ經過スル子午線ヲ以テ經度ノ本初子午線トス

一經度ハ本初子午線ヨリ起算シ東西各百八十度ニ至リ東經ヲ正トシ西經ヲ負トス

一明治二十一年一月一日ヨリ東經百三十五度ノ子午線ノ時ヲ以テ本邦一般ノ標準時ト定ム

○天象觀測及暦書調製ヲ文部大臣ニ管理セシム

二十一年十二月勅令第八十一號

朕天象觀測及暦書調製ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

天象觀測及暦書調製ハ自今文部大臣ヲシテ之ヲ管理セシム

第十六類 戸籍

第一章 戸籍諸規則

第一款 戸籍

○戸籍法則

明治四年四月布告

今般府藩縣一般戸籍ノ法別紙ノ通改正被仰出候條管内普ク布告シ可申事

戸籍檢査編制ハ來申年二月一日ヨリ以後ノ事ニ候ヘ共右ニ關係スル諸般ノ事ハ今ヨリ處置致ス可ク尤三都府及各開港場ハ人民輻湊ノ地ニテ取締向速ニ不相立候テハ難相成ニ付送籍入籍竝旅行寄留ノ者ヘ鑑札渡方寄留表取調方等當六月二十九日ヨリ後ル可ラサル事

但不審ノ廉ハ民部省ヘ可承合事

右之通被仰出候事

人生始終ヲ詳ニスルハ切要ノ事務ニ候故ニ自今人民天然ヲ以テ終リ候者又ハ非命ニ死シ候者等遲粁ノ處ニ於テ其時々其由ヲ記錄シ名前管轄官數典毎歳十一月中其管轄廳又ハ支配所ヘ差出サセ十二月中辨官ヘ可差出候事

右之通管内社寺ヘ可觸達候事

戸數人員ヲ詳ニシテ猥ナラサラシムルハ政務ノ最モ先シ重スル所也夫レ全國人民ノ保護ハ太政ノ本務ナルコト素ヨリ云フヲ待タス然ルニ其保護スヘキ人民ヲ詳ニセス何ヲ以テ其保護スヘキコトヲ施スヲ得ンヤ是レ政府戸籍ヲ詳ニセサルヘカラサル儀ナリ又人民ノ各安康ヲ得テ其生ヲ遂ル所以ノモノハ政府保護ノ庇蔭ニヨラサルハナシ去レハ其籍ヲ逃レ其數ニ漏ルルモノハ其保護ヲ受ケサル理ニテ自ラ國民ノ外タルニ近シ此レ人民戸籍ヲ納メサルヲ得サルノ儀ナリ中古以來各方民治趣ヲ異ニセシヨリ僅ニ東西ヲ隔ツレハ忽チ情態ヲ殊ニシ聊カ遠近アレハ即チ志行ヲ同フセス隨テ戸籍ノ法モ終ニ錯雜ノ弊ヲ免レス或ハ此籍ヲ逃レ或ハ彼籍ヲ欺キ去就心ニ任セ往來規ニヨラス沿襲ノ習人々自ラ度外ニ附スルニ至ル故ニ今般全國總體ノ戸籍法ヲ定メラルヽヲ以テ普ク上下ノ通義ヲ辨ヘ宜シク粗密ノコトナカルヘシ

第一則 戸籍舊習ノ錯雜アル所以ハ族屬ヲ分ツテ之ヲ編製シ他ニ就テ之ヲ收メサルヲ以テ遺漏ノ事アリト雖モ之ヲ檢查スルノ便ヲ得サルニ依レリ故ニ此度編製ノ法臣民一般華士族〔卒〕ヲ擧テ之ヲ其住居ノ地ニ就テ之ヲ收メ專ラ遺スナキヲ旨トス故ニ各地方土地ノ便宜ニ隨ヒ豫メ區書ヲ定メ毎區戸長竝ニ副ヲ置キ長竝ニ副ヲシテ其區内戸數人員生死出入等ヲ詳ニスル事ヲ掌ラシムヘシ（十一年第十七號布告ヲ以テ郡區町村編制法ヲ以テ區ヲ置キ二十二年法律第一號ヲ以テ郡區町村編制法ヲ以テ區ヲ置キ市制町村制ヲ以テ頒布シ從前ノ區書ノ制ヲ廢シ町村ニ戸長市制町村制ヲ以テ頒布シ市長町村長ヲ置ク）

第二則 戸長ハ必ス長ト副トニ限ルヘカラス時宜ニヨリ長副數名アルモ妨ケナシトス（第一則ニ同シ）

第三則

第四則 戸長其區内ノ戸籍ヲ式ノ如ク之ヲ集メ〔二通〕ヲ清書シ〔更ニ第一號ト第二號ノ式ノ如ク其區内總計ノ戸籍表ト戸分表トヲ作リ〕其集ル所ノ籍ハ戸長ニ備ヘ〔清書二通リト

共ニ其支配所ニ差出スヘシ支配所之ヲ其廳ニ差出シ其廳之ヲ第五號第六號ノ式ノ如ク其管内總計ノ戸籍表ト職分表トヲ作リ戸籍一通ニ其廳ニ備ヘ置キ一通ニ廳印ヲ押シ表ト共ニ六ケ年目ニ改メ太政官ヘ差出スヘシ(支配所トハ管轄内廣遠ノ處別ニ一小部ヲ置キ支配セシムル所ヲ云フ總ヲ出張所トイフノ類ナリ)(戸籍取扱ハ十九年内務省令第二十二號ニ依リ消滅ス)

〔但支配所ナキ所ハ直ニ其廳ニ出スヘシ以下准之〕

第五則 〔編製ハ爾後六ケ年目ヲ以テ改ムヘシト雖モ其間ノ〕出生死去出入等ハ必其時々〔戸長〕ニ届ケ〔戸長之ヲ其廳ニ届出ヲ届ケ支配所(支配所アルモノハ支配所ニ届ケ其廳ニ届ケヨリ其廳ニ届ケヨリ其廳ニ届ケヘシ)ニ届ケ其廳之ヲ受ケ其廳聽知ルノ證ヲ押シ〕當入ニ渡スヘシ

〔但管轄内廣遠ノ場所別ニ支配所アラハ其支配所ニテ之ヲ達セシメ往來困却ノ弊ナカラシムルヲ要ス〕

第六則 管轄廳ニ於テ戸籍專任ノ吏員ヲ置キ其事ニ擔當セシムヘシ若シ遺漏粗略ノ事アルニ於テハ其吏員並ニ〔戸長戸長ナキ大社大寺ハ執事〕ノ責タルヘシ

第七則 區内ノ順序ヲ明ニスルハ番號ヲ用ユヘシ故ニ毎區ニ官私ノ差別ナク臣民一般番號ヲ定メ其住所ヲ記スニ都テ何番屋何ト記シ編製ノ順序モ其號數ヲ以テ定ルヲ要ス

〔但區内ノ屋數已所トナリ又ハ一戸ヲ倒テ二戸トシ二戸ヲ合セテ一戸トナスコトアルトモ其由ヲ戸籍ニ記シ番號ハ其儘据置六ケ年目ニ至リ改ムヘシ〕

第八則 各地方貫屬或ハ平民ト事務アリテ全戸他ノ管轄所ニ引移ルモノハ其由ヲ〔本貫管轄廳ヘ願出其廳ヨリノ送リヲ取リ在留地ノ廳ヘ〕届ケ出其所ノ籍ニ編入スヘシ又故アリテ元ノ管轄所ヘ引移ル時ハ之ヲ戻スコト其始メ出ル時ノ如クシ其所ノ籍ニ編入スヘシ(十二年第八號達ヲ以テ士族其禄券ノ儀ハ不及直ニ戸長ヘ届出シム)(寄留者ノ届書ハ其寄留スル支配所ニテ支配所アルモノハ其廳ヘ)

〔但當時全戸既ニ引移リシ官員ノ如キハ其官省ヨリ名前書ヲ在留地ノ廳ニ達シ夫ヲ證トシ其住居ノ地區ニテ其籍ヲ收ムヘシ又本貫管轄廳ニハ其由ヲ其官省ヨリ達シ其廳之ヲ聽キ其所ノ籍ヲ除クヘシ尤此ヨリ後引移ルモノハ此限ニアラス送籍スルコト本條ノ如クスヘシ(第八則ヲ云)若シ全戸引移ルト雖モ情故アリテ本貫管轄廳ノ籍ニアルヲ願フモノハ其地寄留ノ部ニ入レ情願ニ任スルモ妨ナシ〕

第九則 他ノ管轄地ニ引移ル時元ノ廳ヨリ送籍スルニハ其當人ヨリ元住所ノ〔組合並ニ戸長〕ニ其由ヲ届ケ〔長副連印シ其廳ニ届ケ其廳之ヲ受ケ其廳聽知ルノ證ヲ押シ〕當入ニ渡スヘシ

第十則 他ノ管轄所ヨリ此管轄所ニ入籍スル時ハ元ノ管轄所ノ證ヲ持參シ其入ル所ノ〔戸長〕ニ其由ヲ通シ戸長其相違ナキヲ糺シ其所ノ籍ニ入ルヘシ〔而シテ戸長其元廳ノ證ト其入籍セシ事ノ由ヲ時々其廳ニ届クヘシ〕

第十一則 管轄内甲ノ區ヨリ乙ノ區ニ移ルカ如キモ第八則ヨリ第十則迄ノ例ヲ見合スヘシ但管轄内ナルヲ以テ送籍ハ戸長ヨリ之ヲ致シ入籍ノ上其入ル所ノ〔戸長〕ヨリ其廳ニ届ケ其廳之ヲ聽キ卽チ本書ニ加除スヘシ(加除ハ甲ノ籍ヲ除キ乙ノ籍ニ入ルノ類ヲ云)

但其區ニ於テ時々加除スルハ亡論ナルヘシ

第十二則(四年七月二十二日布告ヲ以テ寄留ノ證札ヲ廢ス依テ本條消滅ス)

第十三則(同上)(同上族行錄)

第十四則(同札ヲ廢ス)

第十五則(上同)

第十六則 宿帳ハ〔七日毎ニ驛遞ハ其驛出張驛遞掛ノ〕改ヲ受自餘ハ其〔戸長ヘ出シ〕改ヲ受クヘシ旅籠屋ニ限ラス都テ逗留三日以上ハ其戸長ニ届ケ其時々戸長ヨリ其廳ニ届ケヘシ九十日以上ハ寄留トシ〔第十二則ノ手續ヲナスヘシ〕旅人病氣又ハ異變ノ節速ニ届ケ出ルハ勿論ナリ(宿帳改メ等ハ爾後警察官ノ職務ニ屬ス)

〔但戸籍改ノ節滯留スルモノハ其所持ノ鑑札ニ突合セ檢査スヘシ〕

第十七則 〔各地ニ出張スル官員出入トモ其管轄廳ヘ届ケ其出張先ノ地方廳ヘモ届クヘシ

但地方ノ廳應隔リシ場所一時出張シ或ハ急遽ノ事務等アルハ其手續ナキコトアルヘシ〕

第十八則(六年第百八十七號布告ヲ以テ假ノ旅籠ヲ定ム依テ本條消滅ス)

第十九則(第十二則ニ同シ)

第二十則(六年第二百四十二號布告ヲ以テ第二十四則第二十二則第二十三則六ケ年目戸籍改ノ條ハ追テ逐次施行ニ及ハストス○同年第百八十號布告ヲ以テ札版ヲ中止ス○十九年内務省令第二十二號ヲ以テ戸籍編製及改製方等ヲ定ム依テ本條消滅ス)

第二十一則 〔凡ソ戸籍ヲ檢査スルハ遺漏アルヘカラス又重複スヘカラス二ツノ者ノ弊アレハ檢査ノ要失フ尤甚シトイフヘシ故ニ戸長ヲ設ケ地ニ就テ戸籍ヲ收ムルハ遺漏ノ弊ヲ防ク所トイヘトモ其戸籍ヲ出入スルニ當リテハ出入ハ他ノ管轄内ヨリ甲ノ區ヲ出乙ノ區ニ入ル順ナレハ又重複ノ弊ヲ免ル能ハス故ニ六ケ年目毎ニ戸籍ヲ改正スルニ當リ其戸籍ヲ檢査スルノ日ハ天下府縣一般一月一日ヨリ五月十五日ヲ以テ終ルヲ法トスヘシ(此間凡百日)〕

第二十二則(第二十則ニ同シ)

第二十三則(同上)

第二十四則 〔寄留者ノ届書ハ其寄留スル支配所ニテ其時々之ヲ記錄シ寄留表ヲ第七號式ノ如ク製シ出入人員增減ヲ隔月檢查シテ其廳ニ出シ其廳之ヲ受ケ毎年十二月太政官ヘ差出スヘシ〕

〔但支配所アルハ某支配所ト表ノ左傍ニ記スヘシ〕

第二十五則(第十六則ニ同シ依テ消滅)

第二十六則(十九年内務省令第二十二號書式ニ依リ消滅ス)

第二十七則(上同)

第二十八則 各地ノ戸籍一例ナルヲ要スレハ字ノ細大行ノ高低ハ其記事ヲ標別スル爲メナルヲ以テ能々注意シ成丈ケ細字ニ記スルヲ要ス

第二十九則 此迄厄介ト號セシモノ或ハ緣故アリテ養育スルモノ等ハ其族屬ト續柄ヲ肩書ニシ其理由ヲ其名前ノ上ニ記スルコト式ノ如クスヘシ(此書式ニ依リ自來厄介ヲ附籍ト改ム)

第三十則 華族等ノ從僕其邸内ニ住居シテ一戸ヲナセルモノハ式ノ如ク其主人ノ次ニ記シ社中寺内ニアルモノ此例ニ準スヘシ

第三十一則(第十八則ニ同シ)

第三十二則(四年八月二十八日布告ヲ以テ職多非人等ノ稱ヲ廢シ一般民籍ニ編入ス依テ消滅ス)

第三十三則 都テ書式ハ臣民トモ體裁一ナレハ彼此相通シ參用シテ妨ナシ

第一號 區内戸籍表式(十九年内務省令第二十二號同年同省令第二十號等ニ依リ消滅ス)

第二號 區内職分表式(同上)

第三號 寄留人届書式(十九年内務省令第十九號ニ依リ消滅ス)

第四號戸籍雛式
年號干支月改

区内戸籍紙數ノ増ニ従ヒ幾冊ニモ綴チ戸籍ノ二戸籍ノ三トスヘシ

某縣管轄第何區戸籍之一

何國何郡
何村何町
何町何村
合何ノ村町

戸籍同戸列次ノ順

戸主
高祖父母
曾祖父ノ母
祖父母
父母
妻
子
婿
孫
曾孫
従兄弟
従姉妹
大伯叔父母
伯叔父母
姪
甥
従弟
従孫
又従弟
従弟姉妹夫妻
兄弟姉妹夫妻
大伯叔父母夫妻
伯叔父母夫妻
従弟以下夫妻

以下雛式（十九年第二十二號内務省）

○戸籍法中心得方竝改正ノ廉

明治五年正月
布告第四號

戸籍法中心得方區々相成候ケ條竝改正ノ廉左之通ニ候條本書ニ照準シ取捨可致事

戸籍編制ノ事

戸籍編制ハ來申年正月晦日現在ノ人員ヲ根據トシ同二月一日ヨリ凡百日ノ間ハ右人員檢査ノ日限ナレハ右日限中ノ増減ハ翌年正月ノ取調ニ因テ改ムヘキ事（六年第二百四十號布告ヲ以テ戸籍改メ條施行方ヲ停止ス）

死者屆方期限ノ事（地理寮取締規則ニ依リ消滅ス）

戸長副給料ノ事（十年第十七號及第十八號布告ニ依リ消滅ス）

番號ノ事

番號ハ地所ニ就テ之ヲ數フ然レトモ戸數點檢ノ爲メ戸毎ニ番號ヲ貼スルハ地方ノ便宜ニ任スヘキ事

送籍證ノ事（五年太政官第二十九號六年同第三十五號七年第八號七年第九號十年第十七號布告十一年第十七號布告十年太政官第二十八號達十二年同第十號ニ依リ改ム）

凡送籍スル者ハ戸長ヘ申立戸長ノ證ヲ可與事

因獄及徒流人ノ事（十年太政官第二十二號ニ依リ中止）

因獄人及ヒ徒流人等其管轄内戸籍アル者ハ戸籍表ヘ戴セ他管轄内ノ者ハ寄留表中ニ書載スヘキ事

總計表竝屆期限ノ事（十年太政官第二十號達ニ依リ中止）

戸籍及ヒ職分寄留總計竝表共別紙雛形ノ通改正相成候事

但來申年ハ戸籍共七月中屆出尋後ハ一ヶ年分翌正月中取調二月ニ至可屆出事

寄留者ノ事（五年太政官第二十九號達六年同第三十五號七年第八號布告五年太政官第四百五十四號十年太政官第二十號達ニ依リ改ム十九年内務省令第十九號ヲ以テ屆出方ヲ定ム）

戸籍總計書式（十九年内務省令第二十二號同訓令第二十二號ニ依リ消滅ス）

○戸籍法第五則出生死去出入等屆出方及寄留者屆出方ヲ定ム

明治十九年九月
内務省令第十九號

明治四年四月四日布告戸籍法第五則出生死去出入等屆出方及明治五年正月第四號布告第八項寄留者屆出方左ノ通相定メ來ル十二月一日ヨリ施行ス

第一條　出産アリタルトキハ十日以内ニ屆出ヘシ

第二條　死者アリタルトキハ埋葬以前ニ屆出ヘシ

第三條　失踪者復歸シ又ハ其行方知レタルトキハ十日以内ニ屆出ヘシ

第四條　廢戸主廢嫡改名復姓身分變換其他願濟ノ上戸籍ニ登記スヘキ事項ハ其許可ノ指令ヲ受領シタル日ヨリ十日以内ニ屆出ヘシ

第五條　前數條ニ記載シタル事項ハ戸主ヨリ屆出ヘシ戸主未定又ハ不在ナルトキハ親族二人以上又ハ其事ニ關係アル者ヨリ本籍地戸長ニ屆出ヘシ但本籍地外ニアルトキハ現在地戸長ニ屆出且同時ニ本籍地戸長ヘ屆書ヲ發送スヘシ

第六條　他府縣又ハ他郡區ニ寄留シタルトキ自己ノ所有地ニ於テハ寄留者ヨリ他人ノ所有地若クハ自己又ハ他人ノ借地借家ニ於テハ寄留者及地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヨリ十日以内ニ其地戸長ニ屆出且同時ニ本籍地戸長ニ屆書ヲ發送スヘシ

第七條　寄留地ヲ去ルトキ自己ノ所有地ニ於テハ寄留者ヨリ其他ニ於テハ地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヨリ十日以内ニ其地戸長ニ屆出ヘシ

第八條　寄留者本籍地ニ歸リタルトキハ戸主又ハ本人ヨリ十日以内ニ屆出ヘシ

第九條　正當ノ理由ナクシテ前數條ニ違背シタル者ハ二十五錢以上一圓二十五錢以下ノ科料ニ處ス

○參賀參拜ノ儀非役有位帶勳者ヘ達方竝位官勳等前科ノ有無調查區役所戸長役場ニ於テ爲取扱方ヲ廢セシム

明治二十年一月
内務省訓令第三號

明治十九年十月内務省訓令第二十號ヲ以テ戸籍書式等相定メ位官勳等及處刑ハ戸籍ニ登記セサルヲ以テ從前新年朝拜祝節並御祭典ノ節參賀參拜ノ儀非役有位帶勳者ヘ通達方及位官勳等前科ノ有無調查方區役所戸長役場ニ於テ爲取扱候儀ハ自今相廢スヘシ尤明治十四年十二月司法省丁第三十三號達及明治十九年四月司法省令丙第六號ニ依リ輕罪裁判所檢事ノ通知書ヲ受タルトキハ便宜之ヲ編綴スヘシ

○寄留者諸願伺届等寄留地ノ管廳ヘ差出方（明治八年四月布告第五十號）

各地方寄留ノ者諸願伺届等自今其寄留地ノ管廳ヘ可差出此旨布告候事

但事柄ニ依リ本管廳ヘ差出候儀ハ其便宜ニ任スヘキ事

○寄留者諸願伺届等處分濟本管廳ヘ通達方（明治八年四月太政官達第五十五號）

各地方寄留ノ者諸願伺届等自今其寄留地ノ管廳ニ於テ取扱處分濟ノ上本管廳ヘ通達可致此旨相達候事

但本貫ノ地所ニ依リ或ハ家祿來還等ノ如キ實地取調ノ上ニ無之テハ難及處分事件ハ本管廳ヘ協議ノ上便宜ノ廳ニ於テ可取扱事

○寄留人願伺届等郡區長（戶長）ニ於テ取扱方（明治十五年三月内務省達乙第二十二號）

寄留人願伺届取扱方ノ義ニ付明治八年第五十五號公達ノ旨モ有之候處郡區編制地方職制更定相成候ニ付テハ該願伺届ノ内郡區長又ハ戶長ノ取扱ニ屬スルモノハ該公達ニ準シ郡區長又ハ戶長處分ノ上其旨本籍郡區長又ハ戶長ニ通報可及義ト心得ヘシ此旨相達候事

○管廳郡役所ニ納ムル戶籍簿副本及寄留届等ノ件（明治十九年十月内務省甲第四十一號省令第二十一號）

郡役所ニ納ムル所ノ戶籍簿副本及諸届ハ之ヲ保存スルニ止メ加除異動ヲ登記スルニ及ハス又寄留ニ關スル届書ハ管轄廳又ハ郡役所ニ送付スルニ及ハサル儀ト心得ヘシ

○本籍外ノ者ヨリ差出シタル届書取扱方（明治十九年十月内務省甲第四十二號）

内務省令第十九號第五條但書ニ依リ本籍外ノ者ヨリ差出タル届書ハ左ノ如ク取扱フヘシ

一寄留者ニ係ル届書ハ寄留簿ニ登記シタル上入寄留届書ト合綴スヘシ但田産ニ於テハ別ニ入寄留届ヲ爲サシムルニ及ハス

一寄留者ニ非サル者ノ届書ハ總テ便宜編綴スヘシ

同令第六條ノ入寄留届書第七條ノ寄留者退去届書及第八條ノ寄留者復歸届書ハ頻集編綴スヘシ

○本年省令第十九號施行以前出入寄留届出アル者寄留簿整頓方ヲ定ム（明治十九年十一月（同十三日布告）内務省甲第二十三號）

内務省令第十九號施行以前ニ於テ出入寄留ノ届出ヲ爲シ現ニ出入寄留ノ記載アル者ハ本籍地ニ於テハ出寄留者ノ留守引受人又ハ其戶主入寄留地ニ於テハ地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヲ取調タル上出入寄留簿ヲ整頓スヘシ

第二款　相續　婚姻　失踪

○華士族家督相續法（明治六年一月布告第二十八號）

今般華士族家督相續ノ儀ニ付左之通被相定候條此旨相達候事

家督相續ハ必ス總領ノ男子タルヘシ若シ亡沒或ハ癈篤疾等不得止ノ事故アレハ其事實ヲ詳ニシ次男三男又ハ女子ヘ養子相續願出ツヘシ次男三男女子無之者ハ血統ノ者ヲ以テ相續願出ツヘシ若シ故ナク順序ヲ越ヲ相續致ス者ハ相當ノ咎可申付事（六年第二百六十三號布告ヲ以テ全條改正）

幼少ニテ家督爲致候節ハ親戚又ハ他人ニテモ相當ノ者相撰後見可爲致事

當主隱居致シ實子又ハ養子家督相續致シ候上其相續人多病或ハ不埒ノ儀有之歟又ハ病死致シ最前ノ隱居壯健ニテ再相續願出候節ハ此限不苦事

但再相續人ト可稱事

當主壯年ナレトモ疾病其外無據事故有之養子致シ候處前當主疾病平愈又ハ事故相解候節更ニ家督致シ右養子ハ實家ヘ立戻リ候歟又ハ當主他ヘ緣付候共雙方熟談ノ上願出候ハヽ此限不苦事

本家分家親戚等ノ内當主病死致シ跡子弟幼年遊婦女子等ノ御死者ノ遺言又ハ其父母並重立候親戚及遺妻子熟談ノ上合家願出候ハヽ此限不苦事

父兄伯叔總テ目上ノ者子弟甥等ノ目下ノ家ヲ繼承スルトキハ相續人ト稱シ養子ト稱スヘカラス

當主死去跡嗣子無之婦女子ノミニテ已ヲ得サル事情アリ養子難致者ハ婦女子ノ相續差許從前ノ給祿可支給事

婦女子相續ノ後ニ於テ夫ヲ迎ヘ又ハ養子致シ候ハヽ直ニ其夫又ハ養子ヘ相續可相讓事（六年第二百六十三號布告ヲ以テ追加）

右之通候條〔華族ハ管轄廳ヨリ正院ヘ伺〕〔相伺〕士族ハ管轄廳ニ於テ聞屆可申事

○華族ノ輩隱居及養子出願方（明治三年閏十月布告）

一華族ノ輩年五十歳ヨリ隱居願之儀可爲勝手事

但癈疾及事故ニ依リ候輩ハ此限ニ非ス

一實子無之輩ハ年齡ニ不拘養子願之儀可爲勝手事

右之通更ニ被仰出候條此旨相達候事

○士族ノ輩隱居及養子出願方（明治三年閏十月布告）

一士族之輩年五十歳ヨリ隱居願之儀可爲勝手事

但癈疾及事故ニ依リ候輩ハ此限ニ非ス

一實子無之候ハヽ年齡ニ不拘養子願之儀可爲勝手事

右之通更ニ被仰出候條此段相達候事

○華士族平民互ニ養子取組方及届出方等（明治六年一月第二十七號布告）

自今華士族平民互ニ養子取組不苦候事

但華族ハ〔管轄廳ヨリ正院ヘ伺出士族ハ管轄廳ニテ聞屆〕平民ハ戶長ヘ可届出事

○華族ヨリ平民ニ至ルマテ互ニ婚姻ヲ許ス（明治四年八月布告）

華族ヨリ平民ニ至ル迄互ニ婚姻被差許候條雙方願ニ不及其時々戶長ニ可届出事

○合家ヲ禁シ從前合家セシ分取扱方
（明治九年五月 布告第七十五號）

明治六年一月第二十八號第五項及ヒ同年八月第三百一號ヲ以テ合家ノ儀布告候處詮議ノ次第有之自今被禁止候條此旨布告候事

但從前既ニ合家セシ分ハ今後左之通可取扱事

一分家セントスルモノハ其合家セシ本人ノ一代中ニ限リ復籍スルコトヲ許ス其子孫ニ至テハ七年第七十三號布告分家ノ例ニ據ルヘシ

一戸籍記載方及ヒ刑律上ノ關渉ニ於テハ戸主ノ血屬ハ等親ニ依リ其血屬ナキハ等親外ノ親屬タルヘシ

一士族平民合家セシモノハ總テ士族ニ編入スヘシ

○婦離縁ヲ請フモ夫肯セサル節出訴ヲ許ス
（明治六年五月 布告第百六十二號）

夫婦ノ際已ムヲ得サルノ事故アリテ其婦離縁ヲ請フト雖モ夫之ヲ肯ンセス之レカタメ數年ノ久ヲ經ヲ終ニ嫁期ヲ失ヒ人民自由ノ權理ヲ妨害スルモノ不少候自今右樣ノ事件於有之ハ婦ノ父兄弟或ハ親戚ノ内附添直ニ裁判所ヘ訴出不苦候事

○婚姻養子養女ノ取組若クハ離婚離縁等戸籍ニ登記セサル内ハ其効ナキ者ト看做ス
（明治八年十二月 太政官達第二百九號）

婚姻又ハ養子養女ノ取組若クハ其離婚離縁總テ相對熟談ノ上ヨリトモ雙方ノ戸籍ニ登記セサル内ハ其効ナキ者ト看做スヘク候條右等ノ屆方等閑ノ所業無之樣精々說諭可致置此旨相達候事

○子女アル者養子入夫等ヲ以テ相續人ト爲スヲ許ス
（明治九年六月 太政官達第五拾八號）

實子アル者養子ヲ以テ相續人トシ子女アルノ寡婦夫ヲ迎ヘテ前夫ノ跡相續人ト定ムル等ハ一般難差許定規ニ候得共華士族ヲ除クノ外現實極貧或ハ老病等ニテ實子孫アリト雖モ幼少ナルカ又ハ有子ノ寡婦タリトモ極貧或ハ其子女幼少且後見スヘキ者モ無之歟ノ場合ニテ親族協議ヲ以テ願出候節不得止事情ニ係ル者ハ地方官限リ聽許不苦此旨相達候事

○戸主其家ヲ廢シ他ヘ入夫或ハ養子女トナリ又ハ復籍等出願ノ者取扱方
（明治十年八月 太政官達第六十號）

男女ノ戸主（非嫡子養子家女他女若クハ相續人タルヲ問ハス）其家名ヲ廢シ他ヘ入夫緣付或ハ養子女トナリ又ハ實家ヘ復籍等願出候ハヽ地方廳限リ明屆不苦此旨相達候事

但華族ハ此限ニアラス

○士族家督相續養子貫籍贅屆出方
（明治十二年二月 太政官達第八號）

士族家督相續養子貫籍巻ノ儀是迄管轄廳ヘ出願シ來リ候處自今出願ニ不及直ニ〔戸長〕ヘ屆出シムヘシ此旨相達候事

但廢嫡ニ屬シテ特許ヲ經ヘキモノハ從前ノ通タルヘシ

○外國人民ト婚姻ヲ許ス
（明治六年三月 布告第百三號）

自今外國人民ト婚姻差許左之通條規相定候條此旨可相心得事

一日本人外國人ト婚姻セントスル者ハ日本政府ノ允許ヲ受ク

ヘシ

一外國人ニ嫁シタル日本ノ女ハ日本人タルノ分限ヲ失フヘシ若故有ツテ再ヒ日本人タルノ分限ニ復センコトヲ願フ者ハ免許ヲ得能フ可シ

一日本人ニ嫁シタル外國ノ女ハ日本ノ國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ

一外國人ニ嫁スル日本ノ女ハ其身ニ屬シタル者ト雖モ日本ノ不動産ヲ所有スルコトヲ許サス

但日本ノ國法竝ニ日本政府ニテ定タル規則ニ違背スルコトナクハ金銀動産ヲ持拂スル妨ケナシトス

一日本ノ女外國人ヲ婿養子ト爲ス者モ亦日本政府ノ免許ヲ受クヘシ

一外國人日本人ノ婿養子トナリタル者ハ日本國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ

一外國ニ於テ日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ其國或ハ其近國ニ在留ノ日本公使又ハ領事官ニ願出許可ヲ乞フヘシ公使及ヒ領事官ハ裁下ノ上本國政府ヘ屆出ヘシ

○單身戸主死亡又ハ除籍ノ後絶家トスルノ期限
（明治十七年六月 布告第二十號）

單身戸主死亡又ハ除籍ノ日ヨリ滿六箇月以内ニ跡相續者ヲ屆出サル者ハ總テ絶家トス

○從前死亡又ハ除籍シタル者跡相續屆出期限
（明治十七年六月 太政官布告第十四號）

令般第二十號布告ヲ以テ絶家期限制定候ニ付テハ從前死亡又ハ除籍シタル日本人ニ嫁シタル日本ノ女ハ日本人タルノ分限ヲ失フヘシ若故有ツテ再ヒ日本人タルノ分限ニ復センコトヲ願フ者ハ免許ヲ得能フ可シ

一日本人ニ嫁シタル外國ノ女ハ日本ノ國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ

一外國人ニ嫁スル日本ノ女ハ其身ニ屬シタル者ト雖モ日本ノ不動産ヲ所有スルコトヲ許サス

但日本ノ國法竝ニ日本政府ニテ定タル規則ニ違背スルコトナクハ金銀動産ヲ持拂スル妨ケナシトス

一日本ノ女外國人ヲ婿養子ト爲ス者モ亦日本政府ノ免許ヲ受クヘシ

一外國人日本人ノ婿養子トナリタル者ハ日本國法ニ從ヒ日本人タルノ分限ヲ得ヘシ

一外國ニ於テ日本人外國人ト婚嫁セントスル者ハ其國或ハ其近國ニ在留ノ日本公使又ハ領事官ニ願出許可ヲ乞フヘシ公使及ヒ領事官ハ裁下ノ上本國政府ヘ屆出ヘシ

○單身戸主死亡又ハ除籍ノ後絶家トスルノ期限
（明治十七年六月 布告第二十號）

單身戸主死亡又ハ除籍ノ日ヨリ滿六箇月以内ニ跡相續者ヲ屆出サル者ハ總テ絶家トス

○從前死亡又ハ除籍シタル者跡相續屆出期限
（明治十七年六月 太政官布告第十四號）

令般第二十號布告ヲ以テ絶家期限制定候ニ付テハ從前死亡又ハ除籍シタル者ハ該布告施行ノ日ヨリ滿六ケ月以内ニ跡相續者ヲ屆出ルコトヲ得

○私生ノ子
（明治六年一月 布告第二十一號）

妻妾ニ非サル婦女ニシテ分娩スル兒子ハ一切私生ヲ以テ論シ其婦女ノ引受タルヘキ事

但男子ヨリ己レノ子ト見留メ候上ハ婦女住所ノ戸長ニ賄ヲ免許ヲ得候者ハ其子其男子ヲ父トスルヲ可得事

○脫籍及行衛知レサル者除籍ノ年齡
（明治六年五月 太政官達第百七十七號）

脫籍及ヒ行衛知レサル者家出後三十六ケ月ヲ踰ヘ永尋中ノモノハ戸籍表總計人員ノ外ニ記載シ又當人年齡八十歳以上ニ相成候得ハ除籍シ何レモ毎年大藏省ヘ可屆出事

○無籍在監人就籍方
（明治十五年六月 内務省達第三十九號）

無籍在監人ハ在監中定籍ノ手續ヲ爲サシムルニ及ハス本人放還ノ時籍ヲ置ノ地ニ定メシメ典獄ヨリ就籍地區戸長ヘ通知書ヲ作リ本人ヲシテ携帶就籍ノ手續ヲ行ハシムヘシ此旨相達候事

〔但典獄ハ前年中監獄内無籍人ノ出入出生死亡ノ員數幷ニ其年一月一日ノ現員ヲ毎年一月限リ在監地區戸長ヘ通知スヘシ區戸長ハ之ヲ受ケ該地ノ人口ニ算入スヘシ〕

○無籍在監人就籍方達但書ヲ删除ス
（明治十九年五月 内務省令第八號）

明治十五年六當省乙第三十九號達但書ヲ削除シ同十六年五月同乙第二十七號達(衛生組設置)ヲ廢止ス

○戸長ニ於テ保管スル失踪逃亡及絶家ノ財産ハ目錄ヲ作リ郡區長ニ差出サシム　明治十七年一月内務省達番外

失踪逃亡死亡及絶家ノ財産ヲ戸長ニ於テ保管スルトキハ財産目錄ヲ作リ郡區長ニ差出候樣可致此旨相達候事

○失踪死亡跡遺留財産賣却交換質入書入等ノトキ始審裁判所ノ認許ヲ受シム　明治二十一年七月司法省甲令第十號

失踪又ハ死亡跡遺留財産ヲ其親族ニ於テ保管スル場合本人又ハ其家ノ利害ニ關シ協議ヲ以テ賣却交換若クハ質入書入等ヲ爲サントスルトキ不動産ニ付テハ自今郡區裁判所ノ認許ヲ受ク可キ儀ト心得可シ

○失踪死亡跡遺留財産賣却交換質入書入ニ關スル認許請求書差出方　明治二十一年十月司法省甲令第十五號

親族ノ保管ニ係ル失踪又ハ死亡跡遺留財産ノ賣却交換若クハ質入書入ニ關スル認許請求書ハ保管人又ハ其代人出頭ノ上差出ス可キ儀ト心得可シ

第三款　身分　世襲財産　氏名　雇人

○華士族ノ子弟民籍加入ヲ許ス　明治五年四月布告第百十五號

自今華士族子弟厄介ノ輩民籍ヘ加入爲致候儀可爲勝手事

○僧尼族籍編入方　明治七年七月布告第七十四號

今般華士族分家候者ハ總テ平民籍ニ編入相成候ニ付本年一月第八號僧尼族籍編入ノ布告自今左ノ通更定候條此旨僧侶ヘ布告スヘキ事

一僧尼ノ輩族籍被相定候條各自其原籍ニ復スヘキ事

一原籍不分明又ハ復籍ヲ望マサル者ハ現在地ヘ別ニ本籍相定若シ現在地ノ外ヘ本籍相定度望ノ者ハ一旦現在地ヘ定籍ノ上其地ヨリ望ノ地ヘ遷籍スヘシ

但別ニ本籍相定候者ハ元身分ニ不拘總テ平民籍タルヘキ事

一眞宗(維新以來華族ニ列セラレシ者ヲ除クノ外)竝ニ當修驗等世襲ノ者モ一般平民タルヘキ事

一本末寺共其住職タル者宗教事務管理ノ儀一般職分同樣タルヘキ事

但一寺住職ノ者ハ平民タリ共總テ身分取扱士族ニ準シ候儀ハ從前ノ通タルヘキ事

一戸籍法中右等ニ牴觸ノ廉ハ總テ廢止候事

○僧尼編籍處分方　明治八年十一月内務省乙第百五十一號

僧尼之輩定籍ノ儀ニ付昨七年第七十四號ヲ以テ公布相成候處各自原籍ニ復スル分ハ格別現在地ヘ本籍ヲ定ムルニ至ツテハ自然各地方區々ノ所分ニ相渉リ候テハ不都合ニ付左ノ通相心得速ニ可致編籍此旨僧尼ヘ布達スヘキ事

心得方

一原籍不分明又ハ復籍ヲ望マサル者ハ現今住所ノ區内ヘ別ニ本籍可相定尤本籍ヲ定ムルニ付更ニ土地及ヒ家屋ヲ設クルニ及ハス現在地ノ區戸長ヘ申立其區内(村町)ヘ定籍スヘシ若シ現在地ノ區内(村町)ノ外ヘ本籍ヲ定メ度望ノ者ハ一旦前條ノ如ク定籍ノ上其地ヨリ望ノ地ヘ遷籍スヘキ事

但別ニ本籍ヲ定ムル者身分ノ儀ハ昨七年第七十四號公布ノ通タルヘキ事

○僧尼住職中寺院ヘ居住ニ付心得方　明治九年六月教部省達書第二十一號

僧尼編籍ノ件昨八年十一月内務省乙第百五十一號達書ニ據リ各自本籍爲相定候上ハ住職中其寺院ヘ居住ノ儀總テ從前之通可相心得筈ニ付此旨寺院ヘ可布達事

○人民署名肩書　明治八年二月布告第四十四號

人民署名肩書ノ儀自今貫屬或ハ管下ノ文字ヲ除キ何府縣華族士族平民ト記載可致此旨布告候事

但從來ノ諸規則及雛形中ニ掲載セル肩書ノ儀モ總テ本文ノ通可相心得事

○士族家督相續管轄替等身上異動屆差出ニ及ハス　明治十年二月内務省達乙第十二號

士族家督相續又ハ管轄替等身上異動屆ノ儀自今不及差出候條此旨相達候事

○華族養子女緣組離緣復籍及貫屬替轉居等ノ送入籍ヲ了シタルトキ華族局ヘ通牒方　明治十八年十二月宮内省達乙第二號

華族ノ輩養子女緣組復籍及貫屬替轉居等ノ節送入籍ノ手續ヲ了シ候ハヽ其郡區長ヨリ直チニ當省華族局ヘ通牒セシムヘシ此旨相達候事

○有位者改姓名貫屬換轉居及死亡ノトキ爵位局ヘ屆出方　明治二十四年六月宮内省達乙第一號

自今改姓名貫屬換及轉居ハ其都度本人ヨリ死亡ハ相續人又ハ親屬ヨリ直ニ當省爵位局ヘ屆出ツヘシ

○有位者族籍現住地等爵位局ヘ屆出書式　明治二十四年六月宮内省達乙第三號

有位者(華族ヲ除ク)ハ左ノ書式ニ依リ來ル七月二十四日マテニ當省爵位局ヘ屆出ツヘシ

書式

北海道廳府縣士族又ハ平民
北海道廳府縣國郡市町村番地現住
氏名
生年月日

右御屆仕候也

年月日　位勳氏名印

爵位局御中

○華族貫屬替願出方　明治二十年十月宮内省達第五號

自今地方ニ就キ産業ニ從事シ或ハ家計ヲ維持スルノ目的ヲ以テ各府縣竝ニ北海道ヘ移住セントスルモノハ其事情ヲ具シ貫屬換願出ヘシ其目的至當ト認ムルモノハ聞屆クヘシ

○華族令

明治十七年七月宮內省達乙第五號外

華族令左ノ通被　仰出候ニ付此旨相達候事

華族令

第一條　凡ソ爵ヲ授クルハ　勅旨ヲ以テシ宮內卿之ヲ來行ス

第二條　爵ヲ分テ公侯伯子男ノ五等トス

第三條　爵ハ男子嫡長ノ順序ニ依リ之ヲ襲カシムル女子ハ爵ヲ襲クコトヲ得ス但現在女戶主ノ華族ハ將來相續ノ男子ヲ定ムルトキニ於テ親族中同族ノ者ノ連署ヲ以テ宮內卿ヲ經由シ授爵ヲ請願スヘシ

第四條　嗣令有爵者又ハ戶主死亡ノ後男子ノ相續スヘキ者ナキトキハ華族ノ榮典ヲ失フヘシ

第五條　有爵者ノ婦ハ其夫ニ均シキ禮遇及ヒ名稱ヲ享ク

第六條　華族戶主ノ戶籍ニ屬スル祖父母、父母及妻及嫡長子孫及其妻ハ俱ニ華族ノ禮遇ヲ享ク

第七條　本人生存中相續人ヲシテ爵ヲ襲カシムルコトヲ得ス但刑法又ハ懲戒ノ處分ニ由リ爵ヲ奪ヒ又ハ族籍ヲ削ラレ更ニ特旨ヲ以テ相續人ニ授クル者ハ此例ニ在ラス

第八條　華族ノ戶籍及身分ハ宮內卿之ヲ管掌ス

第九條　華族及華族ノ子弟婚姻シ又ハ養子セントスル者ハ先ツ宮內卿ノ許可ヲ受クヘシ

第十條　華族ハ其子弟ヲシテ相當ノ敎育ヲ受ケシムルノ義務ヲ負フヘシ

○華族令

明治十七年七月宮內省達乙第五號

華族席順ハ爵ヲ以テ定ム爵同キ者ハ位階ヲ以テ定ム

○華族世襲財產法

明治十九年四月勅令第三十四號

除華族世襲財產法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

華族世襲財產法

第一條　華族戶主滿二十年以上ノ者ハ此法ニ依リ世襲財產ヲ創設スルコトヲ得但滿二十年以下ノ者ト雖モ前代戶主ノ遺言アルトキハ世襲財產ヲ創設スルコトヲ得

第二條　世襲財產ハ總テ家督相續者ヲシテ之ヲ相續セシムルモノトス

第三條　世襲財產ハ左ニ揭クル所ノ二類ニ限ル但第十五國立銀行株券ハ第二類ニ準シ世襲財產ト爲スコトヲ得

第一類　田畑山林宅地鹽田牧場池沼等

第二類　政府發行ノ公債證書又ハ政府ノ保證若クハ特別ノ監督ニ屬スル銀行若クハ會社ノ株券

第四條　世襲財產ハ前條二類中ノ一種又ハ數種ニシテ其總額每年金五百圓ニ下ラサル純收益ヲ生スル財產タルヘシ但其財產中收益ナキ地所ヲ加フルモ妨ケナシ

第五條　世襲財產ノ所有者ハ特ニ世襲スヘキ動物庭園圖書寶器等ヲ以テ世襲財產附屬物ト爲スコトヲ得

第六條　負債償却ノ義務アル財產ハ世襲財產及ヒ附屬物ト爲スコトヲ得ス

第七條　世襲財產ノ所有者ハ宮內大臣ノ認可ヲ得テ其財產ヲ增加スルコトヲ得

第八條　世襲財產ノ所有者ハ宮內大臣ノ認可ヲ得テ第二類ノ財產ヲ更換シテ第一類ノ財產ト爲スコトヲ得但第一類ヲ第二類ト爲スコトヲ得ス

第九條　第一類ノ財產若シ災害又ハ其他ノ事故ニ依リ第四條ノ制限額ヨリ減シタルトキハ五箇年以內ニ其缺額ヲ補充スヘシ

第十條　第二類ノ財產其元金ノ仕拂ヲ受ケタルトキハ一箇年以內ニ第一類又ハ第二類ノ財產ヲ以テ其缺額ヲ補充スヘシ

第十一條　世襲財產ノ所有者ハ其財產ノ純收益ヲ抵當トシテ負債ヲ爲スコトヲ得但每年其純收益ノ三分一以上ノ償却ヲ爲スヘキ義務ヲ負擔スルコトヲ得ス

第十二條　世襲財產ノ純收益ハ如何ナル場合ト雖モ債主ヨリ每年其三分一以上ヲ差押フルコトヲ得ス

第十三條　世襲財產及ヒ附屬物ハ之ヲ賣却讓與シ又ハ質入書入ト爲スコトヲ得ス

第十四條　世襲財產及ヒ附屬物ハ負債ノ抵當トシテ差押フルコトヲ得ス

第十五條　世襲財產ハ左ノ場合ニ於テハ其効力ヲ失フモノトス

一戶主死亡ノ後家督相續スヘキ男子ナキトキ

一爵ヲ奪ハレ又ハ族ヲ除カレ家督相續者ナキトキ

一第九條第十條ニ揭クタル缺額ヲ其期限內ニ補充セサルトキ

第十六條　世襲財產及ヒ附屬物ハ其所有者ニ於テ之ヲ廢止スルコトヲ得ス

第十七條　世襲財產ハ宮內大臣之ヲ管理シ華族局ヲシテ其事務ヲ取扱ハシム

第十八條　華族局ハ世襲財產臺帳ヲ備ヘ置キ世襲財產及ヒ之ニ關スル事項ヲ記入スヘシ

第十九條　世襲財產ヲ創設增加更換又ハ補充セントスル者ハ其願書ニ財產目錄ヲ添ヘ宮內大臣ニ差出シ其認可ヲ受クヘシ出世襲財產附屬物ヲ設ケントスル者亦同シ

第二十條　宮內大臣ハ前條ノ願書目錄ヲ審査シ第一類ノ財產及ヒ第二類ノ公債證書ハ所轄ノ地方廳ニ命シ株券ハ銀行若クハ會社ニ命シ世襲財產ト爲スヘキ旨ヲ官報及ヒ其地方一定ノ新聞紙ニ揭ケ一週日間之ヲ公告セシムヘシ

世襲財產附屬物ハ華族局ニ於テ之ヲ公告スヘシ

第二十一條　前條公告ヲ了リタル後三十日ヲ經テ該財產ニ關シ故障ヲ申出ル者ナキトキハ宮內大臣ハ世襲財產臺帳ニ記入セシメ第一類ノ財產ハ所轄ノ地方廳ニ命シ〔地券ニ〕臺帳ニ記入セシメ地方廳ハ戶長ニ命シ公證濟ニ記入セシムヘシ第二類ノ公債證書ハ所轄ノ地方廳ニ株券ハ銀行若クハ會社ニ命シ帳簿ニ記入セシムヘシ

華族局ニ於テハ該地券又ハ公債證書若クハ株券ノ券面ニ世襲財產ト爲リタル旨ヲ記入スヘシ

第二十二條　世襲財產其効力ヲ失ヒタルトキハ宮內大臣ヨリ地方廳又ハ銀行若クハ會社ニ命シ之ヲ公告セシムヘシ

世襲財產附屬物ハ華族局ニ於テ之ヲ公告スヘシ

第二十三條　第二十條及ヒ第二十二條ニ關スル公告費用ハ其財產所有者ヨリ之ヲ華族局ニ納ムヘシ

第二十四條　世襲財産ニ關スル事件ヲ協議スルカ爲メ戶主及ヒ滿二十年以上ノ相續者若クハ後見人ト親屬三名以上トヲ以テ親屬會議ヲ組織シ豫メ宮內大臣ニ屆出ヘシ但親屬ナキトキハ宮內大臣ノ認可ヲ得テ一族又ハ他ノ華族ヲ以テ親屬會議員ニ充ルコトヲ得

第二十五條　世襲財産ニ關スル願書屆書ハ親屬會議各員ノ連署ヲ要ス

第二十六條　此法施行ノ手續ハ宮內大臣之ヲ定ム

第二十七條　此法ハ明治十九年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

○通稱名乘兩樣ヲ用フルヲ禁ス

明治五年五月布告第四十九號

從來通稱名乘兩樣相用來候處自今一名ヲ以テ可相定事

○國名舊官名ヲ以テ通稱ニ用ルヲ禁ス

明治三年十一月布告

自今舊官人元諸大夫侍並元中大夫等位階總テ被廢候事

一國名並ニ舊官名ヲ以テ通稱ニ相用候儀被停候事

○僧侶苗字ヲ設ク

明治五年九月布告第百六十五號

自今僧侶苗字相設候ニ於テハ其寺住職某氏名ト可相稱事

但苗字相設候ハヽ、管轄廳ヘ可屆出事

○御歷代御諱並御名ノ文字人民一般名乘ルヲ許ス

明治六年三月布告第百十八號

御歷代御諱並御名ノ文字自今人民一般相名乘候儀不及憚事

但熟字ノ儘相用候儀ハ不相成候事

○平民苗字取設方

明治八年二月布告第二十二號

平民苗字被差許候旨明治三年九月布告候處自今必苗字相唱可申尤祖先以來苗字不分明ノ向ハ新タニ苗字ヲ設ケ候樣可致此旨布告候事

○苗字名屋號共改稱ヲ禁ス

明治五年八月布告第二百三十五號

華族ヨリ平民ニ至ル迄自今苗字名並屋號共改稱不相成候事

但同苗同名等ニテ無餘義差支有之者ハ管轄廳ヘ改名可願出事（九年第五號布告ヲ以テ但書中（同名）ノ下（等）ヲ加ヘ（管轄廳ヘ）ノ下二字ヲ加フ）

○年齡計算方

明治六年二月布告第三十六號

自今年齡ヲ計算候儀幾年幾月ト可相數事

但當曆中ノ儀ハ一千支ヲ以テ一年トシ其生年ノ月數ハ本年ノ月數ト通算シ十二ケ月ヲ以テ一年ト可致事

○丁年ヲ定ム

明治九年四月布告第四十一號

自今滿二十年ヲ以テ丁年ト相定候條此旨布告候事

○雇人名稱

明治十年二月司法省布達甲第一號

去明治六年十二月十日本省第百九十號布達ヲ以テ雇人名稱ノ儀相達置候處今後戶籍屆濟ノ有無ニ拘ハラス雇主雇人相許諾シテ一月以上ノ期限ヲ定メ雇使スル者ハ雇人ヲ以テ論ス可ク候條此旨布達候事

○外國人雇入手續

明治十年三月六日布告第二十七號

外國人雇入候節ハ左ノ通可相心得此旨布告候事

一各官廳ニ於テ外國人雇入候節ハ其國所姓名業務給料住所期限及繼雇解雇共其時々外務省ヘ通知スヘシ

一人民ニ於テ外國人ヲ雇入ント欲スル者ハ其管轄廳ヲ經由シテ前項ノ件々外務省ニ屆出ヘシ

一私雇外國人ヲ其業務等ノ都合ニ依リ居留地外ヘ居住爲致度者ハ地方官添書ヲ以テ外務省ヘ伺出其許可ヲ受クヘシ

○外國人ヲ同居セシムルヲ禁ス

明治九年三月內務省達乙第四十二號

外國人居留地外ニ住居ノ儀ハ是迄雇人ニ限リ特別許可有之其同姓ノ親戚及外國人婢僕ハ屆出ノ上同居爲致差支無之儀ニ候處其他ノ外國人ヲ一時ノ止宿ニアラスシテ同居爲致候儀ハ不相成候條人民ノ內外國人ヲ雇入候者ヘモ夫々達方可取計此旨相達候事

第二章　海外旅行

○海外旅券規則

明治十一年二月外務省布達第一號

從來當省ヨリ發行候海外行免狀之儀海外旅券ト改稱別紙規則相定候條此旨布達候事

海外旅券規則（別紙）

旅券ハ日本國民タルヲ證明スルノ具ニシテ海外各國ニアリテ要用少ナカラサルヲ以テ外務省ヨリ之ヲ發行ス規則左ノ如シ

第一條　旅行ヲ請フ者ハ別紙雛形ノ書面ヲ以テ外務省又ハ開港場管廳ヘ願出之ヲ受取ルヘシ右郵便ヲ以テスルモ苦シカラス旅券ヲ受取ラハ直ニ其示シアル所ヘ當人姓名ヲ自記スヘシ

第二條　旅券ヲ受クルモノハ手數料トシテ金五拾錢ヲ納ムヘシ但旅券ハ一人一枚ニ限ルヘシ若シ五歲以下ノ小兒其父母同道ナルトキハ其父母ノ旅券ニ附記スルヲ以テ足レリトス

第三條　內地ニ於テ右旅券受取ル間合之ナキカ又ハ海外ニ於テ遺失シタルカノトキハ其國在留ノ日本公使館又ハ領事館ヘ其趣ヲ記載セル書面ヲ出タシ自身出頭シテ願ヒ受クヘシ但其手數料トシテ金弐圓ヲ納ムヘシ

第四條　公用ヲ以テ旅行シ官費ヲ以テ留學スル者ハ內地ニアリテハ其官廳ヨリ直ニ外務省ニ掛合海外ニ在リテハ前條ノ趣ニ從ヒ旅券ヲ受取ルヘシ但手數料ハ納ムルニ及ハス

第五條　旅券ハ其赴クヘキ國ノ公使又ハ領事ノ證明ヲ得ル儀其國ニヨリ要用少ナカラス其節ハ其館ニ就テ直ニ之ヲ請フヘシ但其定規ニ隨ヒ手數料ヲ拂フヘキモノトス

第六條　海外ニアリテ所持ノ旅券我領事館ノ證明ヲ要用トスルコトアリ其節ハ之ヲ請ヒ得ヘシ但領事官ナキ地ニ於テハ公使館ニ到リテ之ヲ請フヘシ

第七條　旅券ハ歸朝ノ後三十日以內ニ其最初受取リタル官廳ヘ之ヲ返納スヘシ郵船等ノ海員常ニ旅券ヲ要スル者ハ此限ニ在ラス但海外ニアリテ我公使又ハ領事館ヨリ受取リタル者ハ外務省ニ返納スルヲ以テ足レリトス

旅券願書式

私儀何々ノ爲某國へ罷越或ハ往來致度ニツキ旅券御渡方本願候也

明治　年　月　日　何府縣下
第何大區何小區
何國何郡何村町何番地又ハ寄留
士族屬職業
何　姓　名　印
年何年何ヶ月

外務省又ハ何府縣御中

右之通相違無之候也

戸長　姓名　印

前書之通證明候也

府縣知事縣令　姓名　印

上封

旅券願
外務省或ハ某府縣
御中

何府縣下
何國何郡何驛村
何町
何　誰

旅券文言

官印

右

ニ赴クニ付通路故障ナク旅行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレンコトヲ其筋ノ諸官ニ希望ス

年　月　日

日本皇帝陛下官位姓名自記

右ハ官員及官費留學生ニ與フル式タリ

所持人姓名自記

籍
當人姓名
齡

右ノ者故障ナク通行セシメ且必要ノ保護扶助ヲ與ヘラレン事ヲ其筋ノ諸官ニ希望ス

年　月　日

日本帝國官位姓名自記
所持人手記

右ハ華士族平民ニ與フル者ナリ其ニ英佛獨清文ヲ附ス

○外國船乘込規則

明治九年三月布告第三十號

外國船ニ乘込旅行セントスル者取締ノタメ左之通規則相定候條此旨布告候事

外國船乘込規則

第一條　外國船ニ乘込旅行セントスル者ハ出船當日或ハ一日前其屬籍住所姓名及ヒ何國人所持船何號ニ乘込何港迄赴ク旨ヲ具シタル届書ヲ其出船スル地ノ廳ニ差出シ乘船證書ヲ受クヘシ

第二條　乘船證書ハ壹人壹枚タルヘシ

第三條　乘船證書ヲ受取ルニハ壹枚ニ付手數料トシテ金拾錢ヲ納ムヘシ（九年第六十一號布告ヲ以テ貳拾五錢ヲ拾錢ト改ム）

第四條　乘船證書ハ每人親ヲ出廳シテ受取ルヘシ代人ヲ以テスルヲ許サス

第五條　乘船證書ハ著港上陸ノ上其地警察官吏ニ返付スヘシ其途中一時上陸例（横濱港ヨリ長崎港ニ到ル者其船舶碇泊スル時用便ノタメ數時上陸スルノ類）スル者ハ其地臨檢警察官吏ニ其證書ノ檢閱ヲ受クヘシ

第六條　乘船證書ハ一度ノ出船ニ用フルモノトス故ニ途中ヨリ上陸スル歟又ハ事故アリテ乘込テ止メ更ニ他ノ船ニ乘込歟又ハ同船クリトモ他日航海ノ便ニ乘込ム時ハ最初受取タル證書ハ其出船スル地ノ廳ニ納メテ更ニ證書ヲ受取ルヘシ

第七條　乘船證書ヲ所持セスシテ乘船シタル者ハ上陸ノ節違式ニ照シテ處分スヘシ

第八條　開港場ナル地方廳ニ於テハ外國船ニ乘込ソトスルノ届書ヲ差出ス者アル時ハ第一條第四條ノ手續ニ相違ナキヤヲ檢閱シ別紙雛形ノ證書ヲ直ニ本人ニ相渡シ手數料ヲ領收スヘシ

第九條　右地方廳ハ乘ラ船場ノ要所ニ於テ警察官吏ノ出張所ヲ設ケ置キ外國船出入港毎ニ若干員ヲ臨檢セシメ內國人ノ乘船又ハ上陸スル者ノ證書ヲ一々檢閱シ若シ證書ヲ所持セサル歟又ハ其證書最前ノ出船ニ繳取リタルヲ其儘再用シタル歟ヲ視認メタル時ハ詳カニ其所由ヲ取糺シ證書所持セサル者ハ乘船證書ヲ受取ル手續ヲナサシメ或ハ其乘込ミヲ止ムヘシ證書ヲ再用スル者ハ違式ニ照シテ處分スヘシ

第十條　警察官吏乘船證書ヲ臨檢シ著港上陸者ノ分ハ之ヲ領收シ一時途中上陸者ノ分ハ之ヲ本人ニ還付スヘシ

證書雛形（料紙四ノ內紙八ツ切）

表

何府（縣）何大小區何町村住（寄留）
何府（縣）華士族平民

裏

面

印劃

姓　名
年　齡

右何國何號船ニ乘込何港ニ到ルヲ認可ス

年　月　日

廳　名

印

面

一此證書ヲ授與スルカ爲メ規則ノ通手數料ヲ領收セリ

一此證書ハ何港到著ノ節其地臨檢警察官吏ヘ返付スヘシ

○朝鮮國旅行ノ者旅券出願方

（明治十一年三月外務省布達第二號）

本年二月二十日第一號達海外旅券規則第一條外務省又ハ開港場管廳ト掲載有之候處朝鮮國ヘ旅行候者ニ限リ左ノ縣廳ヘ願出旅券受取候ヲ不苦候條此旨布達候事

廣島　山口　島根　福岡　鹿兒島
（長崎縣廢厎支廳）

○海外旅券手數料收入取扱方

明治二十三年二月
外務省訓令第一號

海外旅券手數料收入ハ凡テ當省ノ管理ニ屬スト雖モ當省ノ委任ニ依リ其(廳府縣)ヨリ海外旅券ヲ出願人ニ下付スル場合ニ於テハ本年四月一日以降其手數料收入取扱順序ハ明治二十二年十一月大藏省訓令第六十六號諸收入收納取扱順序ニ從フヘシ但シ毎月收入報告書ヲ調製シ當省ニ送付スルヲ要ス

第十七類　地方行政

第一章　府縣　郡制

○府縣制　明治二十三年五月法律第三十五號

廢府縣制ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

府縣制

目次

第一章　總則　第一條
第二章　府縣會　自第二條至第三十七條
第三章　府縣參事會吏員及委員　自第三十八條至第五十三條
第四章　府縣ノ會計　自第五十四條至第八十一條
第五章　監督　自第八十二條至第九十二條
第六章　附則

府縣制

第一章　總則

第一條　府縣ノ廢置分合及府縣境界ノ變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

府縣境界ニ當ル郡市町村ノ境界ヲ變更スルトキハ府縣境界モ亦自ラ變更スルモノトス

本條ノ處分ニ付其財產處分ヲ要スルトキハ內務大臣之ヲ定ム但特ニ法律ノ規定アルモノハ此限ニ在ラス

第二章　府縣會

第二條　府縣會ハ府縣內郡市ニ於テ選擧シタル議員ヲ以テ之ヲ組織ス

郡市ニ於テ選擧スヘキ府縣會議員ノ定數ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム但シ各郡市ヲシテ少クトモ一人ノ議員ヲ選擧セシムヘシ

第三條　府縣會議員ノ選擧ハ市ニ在テハ市會及市參事會會同シ市長ヲ會長トシ郡ニ在テハ郡會及郡參事會會同シ郡長ヲ會長トシ左ノ規定ニ依リ之ヲ行フヘシ但會長ハ投票ニ加ハラサルモノトス

一　投票ハ選擧人自ラ會長ノ面前ニ於テ之ヲ投票函ニ投入ス投票ハ匿名トス

二　左ノ投票ハ之ヲ無效トス

一　記載セル人名ノ讀ミ難キモノ

二　被選人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ

三　被選權ナキ人名ヲ記載スルモノ

四　被選人氏名ノ外他ノ文字ヲ記入スルモノ但爵位職業身分住所又ハ敬稱ハ此限ニ在ラス

本項一ヨリ三ニ至ルノ場合ニ於テ票中他ニ列記ノ被選人ニ付テハ仍其效アリトス

三　有效投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キモノハ年長者ヲ取リ年齡相同キトキハ會長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定ム

第四條　府縣內市町村ノ公民中選擧權ヲ有シ其府縣ニ於テ一年以來直接國稅十圓以上ヲ納ムル者ハ府縣會ノ被選權ヲ有ス

住居ヲ移シタル爲市町村ノ公民權ヲ失ヒタル者其住居同府

縣內ニ在リ且他ノ要件ヲ失ハサルトキハ仍府縣會ノ被選權ヲ有ス

其府東京府ハ警視ノ官吏及有給吏員神官諸宗ノ僧侶又ハ教師ハ府縣會議員タルコトヲ得ス

前項ノ外ノ官吏ニシテ常選シ之ニ應セントスルトキハ本屬長官ノ許可ヲ受クヘシ

府縣會議員ハ衆議院議員ト相兼ヌルコトヲ得ス

第五條　府縣會議員ハ名譽職トス其任期ハ四年トシ毎二年其半數ヲ改選ス若其員數二分シ難キトキハ初會ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシムル初會ニ於テ解任スヘキ者ハ府縣會議長府縣會ニ於テ自ラ抽籤シテ之ヲ定ム

解任ノ議員ハ再選セラルヽコトヲ得

第六條　議員中闕員アルトキハ遲クトモ六箇月以內ニ補闕選擧ヲ行フヘシ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス

第七條　府縣會議員ノ選擧ハ府縣知事ノ告示ニ依リ之ヲ行フヘシ其告示ハ遲クトモ選擧ノ日ヨリ十四日前ニ之ヲ發スヘシ

第八條　選擧ヲ終リ人當選ノ定マリタルトキハ郡長市長ハ直ニ當選人ニ通知シ及府縣知事ニ報告スヘシ

當選人其當選ノ通知ヲ受ケタルトキハ五日以內ニ其當選ヲ承諾スルヤ否ヲ府縣知事ニ屆出ヘシ

一人ニシテ數箇所ノ選擧ニ當リタルトキハ同期限內ニ何レノ選擧ニ應スヘキコトヲ府縣知事ニ屆出ヘシ

前二項ノ屆出ヲ其期限內ニ爲サヽルトキハ總テ選擧ヲ辭スル者ト視做スヘシ

第九條　當選人其當選ヲ辭シ又ハ承諾ノ屆出ヲ爲サヽルトキハ府縣知事ハ其郡市ヲシテ十日以內ニ更ニ選擧ヲ行ハシムヘシ

第十條　當選人確定シタルトキハ府縣知事ハ直ニ當選證書ヲ付與シ及管內ニ告示スヘシ

第十一條　選擧人選擧ノ効力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選擧ノ日ヨリ十四日以內ニ之ヲ府縣知事ニ申立ルコトヲ得

第十二條　當選人其當選ノ際資格ノ要件ヲ有セサリシコト發覺スルトキハ其當選ヲ無効トス

當選人當選後資格ノ要件ヲ失フトキハ議員ノ職ヲ失フモノトス

第十三條　府縣會ニ於テ其議員中議員ノ資格ヲ有セサル者アルトキハ其議決ヲ以テ之ヲ府縣知事ニ通知スヘシ

第十四條　府縣會議員被選權ノ有無及選擧ノ効力ハ府縣參事會之ヲ裁決ス

府縣參事會ノ裁決ニ不服ナル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十五條　府縣會ノ議決スヘキ事件左ノ如シ

一　府縣ノ歲入出豫算ヲ定ムル事

二　決算報告ヲ認定スル事

三　府縣稅ノ賦課徵收方法ヲ定ムル事

四　府縣有不動產ノ賣買交換讓渡讓受竝ニ質入書入ノ事

五　歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除ク外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ棄却ヲ爲ス事

六　府縣有財產ノ管理及營造物ノ維持方法ヲ定ムル事

其他法律命令ニ依リ府縣會ノ權限ニ屬スル事項ヲ議決ス

第十六條　府縣會ハ其權限ニ屬スル事件ヲ府縣參事會ニ委任スルコトヲ得

第十七條　府縣會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述スヘシ

府縣會ハ其府縣ノ全部又ハ一部ノ公益ニ關スル事件ニ付府縣知事又ハ內務大臣ニ建議スルコトヲ得

第十八條　府縣會議員ハ選擧人ノ指示若ハ委囑ヲ受クヘカラサルモノトス

第十九條　府縣會ハ改選後ノ初會ニ於テ議長及副議長各一名ヲ互選スヘシ其任期ハ議員ノ任期ニ從フ

議長副議長共ニ故障アルトキハ臨時議長ヲ互選スヘシ

第二十條　府縣知事若ハ特ニ知事ノ委任ヲ受ケタル府縣ノ官吏若ハ吏員ハ府縣會ノ議事ニ參與スルコトヲ得但議決ニ加ハルコトヲ得ス

前項ノ列席者ニ於テ發言ヲ求ムルトキハ議長ハ何時ニテモ之ヲ許スヘシ

第二十一條　府縣會ハ每年一回秋季ニ於テ通常會ヲ開ク通常會ノ會期ハ三十日以內トス其他必要アルトキハ其事件ニ限リ七日以內ヲ會期トシテ臨時會ヲ開クコトヲ得

府縣會ハ府縣知事之ヲ招集ス其招集ハ開會ノ日ヨリ十四日前迄ニ告示スヘシ但急施ヲ要スル場合ハ此限ニ在ラス

府縣會ハ府縣知事之ヲ開閉ス

第二十二條　府縣會ハ議員三分ノ一以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス

第二十三條　府縣會ノ議決ハ過半數ニ依ル可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第二十四條　議員ハ自己及其父母兄弟若ハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ會議ノ承諾ヲ經ルニ非サレハ府縣會ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得

第二十五條　府縣會ニ於テ選擧ヲ行フトキハ第三條ノ規定ニ依ルヘシ

第二十六條　府縣會ノ會議ハ公開ス但左ノ場合ハ此限ニ在ラス

一　府縣知事ヨリ傍聽禁止ノ要求ヲ受ケタルトキ

二　議長又ハ議員五名以上ノ發議ニ由リ傍聽禁止ヲ可決シタルトキ

議長又ハ議員ノ發議ハ討論ヲ用ヰスシテ其可否ヲ決スヘシ

第二十七條　東京府京都府大阪府府會ノ職權ニ屬スル事件ニシテ專ラ東京市京都市大阪市ニ關スルモノト專ラ其他ノ部分ニ關スルモノト分別スルコトヲ要スルモノアルトキハ府會ノ議決ニ依リ之ヲ分別スルコトヲ得

前項ノ分別ニ依リ專ラ東京市京都市大阪市ニ關スルモノハ其郡部議員ニ於テ其事件ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス其他ノ部分ニ關スルモノハ市部議員ニ於テ其事件ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス此場合ニ於テハ郡部議員市部議員ニ於テ各臨時議長ヲ互選スヘシ

此法律中東京府京都府大阪府府會ノ市部議員トアルハ東京市京都市大阪市ノ會ニ於テ選擧シタル議員ヲ云ヒ郡部議員トアルハ東京市京都市大阪市ヲ除キ其他ノ部分ニ於テ選擧シタル議員ヲ云フ

市部會郡部會ヲ設キタル縣ニ於テ縣會ノ職權ニ屬スル事件ニシテ專ラ市ニ關スルモノト專ラ其他ノ部分ニ關スルモノト分別スルコトヲ要スルモノアルトキハ縣會ノ議決ニ依リ之ヲ分別スルコトヲ得但分別シタル縣ニ於テハ此法律中特

ニ東京府京都府大阪府ニ關シ定メタル各條項ハ之ヲ適用ス（明治二十五年六月法律第六號ヲ以テ追加）

第二十八條　議長ハ議事ノ順序ヲ定メ會議及選舉ノ事ヲ總理シ其日ノ會議ヲ開閉シ並ニ延會シ議場ノ秩序ヲ保持ス

第二十九條　議員ハ會議中無禮ノ語ヲ用ヒ及他人ノ身上ニ渉リ言論スルコトヲ得ス

第三十條　會議中此法律若ハ議事規則ニ違ヒ其他議場ノ秩序ヲ紊ル議員アルトキハ議長ハ之ヲ警飛シ又ハ制止シ又ハ發言ヲ取消サシム命ニ從ハサルトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ終ルマテ發言ヲ禁止シ又ハ議場ノ外ニ退去セシムヘシ若強抗ニ渉ル者アルトキハ警察官ニ命シテ之ヲ退去セシムルコトヲ得

議場騷擾ニシテ整理シ難キトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ中止シ又ハ之ヲ閉ツルコトヲ得

第三十一條　議員中議場ノ秩序ヲ紊ルコト二回以上ニ及フ者アルトキハ議長又ハ議員ノ發議ニ依リ議會ノ議決ヲ以テ七日以內其出席ヲ停止スルコトヲ得

第三十二條　會議ノ傍聽人公然可否ヲ表シ又ハ喧騷ニ渉リ其他議事ノ妨害ヲ爲ス者アルトキハ議長ハ之ヲ制止シ若シ命ニ從ハサルトキハ警察官ニ命シテ之ヲ退場セシムルコトヲ得

傍聽席騷擾ナルトキハ議長ハ總テノ傍聽人ヲ退場セシムルコトヲ得

第三十三條　府縣知事若ハ特ニ其委任ヲ受ケタル官吏若ハ吏員及議員ハ議場ノ秩序ヲ紊リ又ハ議場ノ妨害ヲ爲ス者アルトキハ議長ノ注意ヲ換起スルコトヲ得

第三十四條　第三十條第三十二條ニ依リ議長ノ命ニ應セシムル爲府縣知事（東京府ハ警視總監）ハ每會期警察官ニ議場掛ノ事務ヲ命スヘシ

第三十五條　府縣會ニ書記ヲ置キ議長ニ隸屬シテ庶務ヲ掌理セシム

書記ハ議長之ヲ選任ス

第三十六條　府縣會ハ書記ヲシテ議事錄ヲ製シ議決及選舉ノ顚末並ニ出席議員ノ氏名ヲ記錄セシムヘシ議事錄ハ議長及議員二名以上之ニ署名スヘシ其議員ハ會議ノ前議會ニ於テ豫メ之ヲ定メ議事錄中ニ其氏名ヲ記載シ置クヘシ

第三十七條　府縣會ハ議事規則及傍聽人取締規則ヲ設ケ內務大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ施行スヘシ

第三章　府縣參事會吏員及委員

第三十八條　府縣ニ府縣參事會ヲ置キ府縣知事高等官二名及名譽職參事會員ヲ以テ之ヲ組織ス

府ノ名譽職參事會員ハ八名トス郡部議員ニ於テ其議員中ヨリ四名ヲ互選シ市部議員ニ於テ其議員中ヨリ四名ヲ互選スヘシ

縣ノ名譽職參事會員ハ四名トス縣會ニ於テ其議員中ヨリ之ヲ互選スヘシ

第三十九條　府縣參事會員タル高等官ハ府縣廳ニ本職ノ高等官中ヨリ內務大臣之ヲ命ス

第四十條　府縣參事會ハ府縣知事ヲ以テ議長トス議長故障アルトキハ高等官會員之ヲ代理ス

第四十一條　府縣會ハ每通常會ニ於テ名譽職參事會員ノ補充會員半數以上ノ請求アルトキハ府縣知事ハ府縣參事會ヲ招集スヘシ

第四十五條　府縣參事會ノ會議ハ傍聽ヲ許サス

第四十六條　府縣參事會ハ議長又ハ其代理者及名譽職會員半數以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス但第四十三條第二ノ議決ヲ爲ストキハ高等官會員ハ其議決ニ加ハラサルモノトス

府縣參事會ノ議決ハ過半數ニ依ル可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

議決ノ事件ハ之ヲ議事錄ニ登記シ議長及名譽職參事會員二名以上之ニ署名スヘシ

第四十七條　府縣參事會員ハ自己及其父母兄弟若ハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付府縣參事會ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス

前項規定ノ爲出席ノ參事會員減少シテ前條第一項ノ數ヲ得サルトキハ府縣知事ハ補充員ヲ以テ臨時之ニ充テ仍其數ヲ得サルトキハ府縣會議員ニシテ該事件ニ關係ナキ者ノ內ヨリ臨時ニ指名シ名譽職參事會員ノ不足ヲ補充シテ第三十八條ノ定數ニ滿タシムヘシ

第四十八條　市制町村制ノ規定ニ依リ府縣參事會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ二府縣以上ノ郡市町村ニ交涉スルモノアルトキハ其府縣知事ノ具狀ニ依リ內務大臣ニ於テ其事件ヲ管轄スヘキ府縣參事會ヲ指定スヘシ

第四十九條　東京府京都府大阪府參事會ノ職權ニ屬スル事件ニシテ東ヲ東京市京都市大阪市ニ關スルモノハ其郡部名譽職參事會員ニ於テ其事件ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコキハ府縣知事ニ於テ補充員中投票多數ノ順次ニ依リ之ヲ補充スヘシ但其既ニ補充シタル者ハ前任者ノ任期中在職スルモノトス

第四十二條　名譽職參事會員ノ任期ハ議員ノ任期ニ從フ但任期滿限ノ後ト雖後任者就職ノ日マテ在職スルモノトス

名譽職參事會員ハ補充員ヲ以テ其ノ闕員ヲ補充シ仍闕員ヲ生シタル場合ニ於テハ二箇月以內ニ臨時其ノ選舉ヲ行フヘシ

第四十三條　府縣參事會ノ職務權限左ノ如シ

一　府縣會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ其委任ヲ受ケタルモノヲ議決スル事

二　府縣會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ臨時急施ヲ要シ府縣知事ニ於テ府縣會ヲ招集スルノ暇ナシト認ムルトキ府縣會ニ代テ議決ヲ爲ス事

三　府縣會ノ定メタル方法ノ範圍內ニ於テ府縣有財產ノ管理又ハ營造物ノ維持ニ關シ必要ナル要件ニ付議決ヲ爲ス事

四　府縣ノ費用ヲ以テ支辨スル工事ノ次第順序其他必要ナル事件ニ付議決ヲ爲ス事

五　府縣知事及其他官廳ノ諮問ニ對シ意見ヲ述フル事

六　府縣知事ヨリ發スル府縣會議案ニ付府縣知事ニ意見ヲ述ヘ及會議ニ報告スル事

七　臨時必要アルトキ府縣ノ出納ヲ檢查スル事

其他法律命令ニ依リ府縣參事會ノ權限ニ屬スル事務ヲ處理ス

第四十四條　府縣參事會ハ府縣知事之ヲ招集ス

トヲ得ス其東京市京都市大阪市外ノ市町村若ハ郡ニ關スルモノハ市部名譽職參事會員ニ於テ其事件ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス

此法律中東京府京都府大阪府府會ノ市部名譽職參事會員トアルハ市部議員ニ於テ選擧シタル名譽職參事會員ヲ云ヒ郡部名譽職參事會員トアルハ郡部議員ニ於テ選擧シタル名譽職參事會員ヲ云フ

第五十條　府縣知事ハ府縣會及府縣參事會ノ議決ヲ施行シ府及縣有財產及營造物ヲ管理シ竝ニ府縣ノ費用ヲ以テ支辨スル工事ヲ執行ス

府縣ニ於テ他人ニ對シ義務ヲ負擔スヘキ證書及委任狀ニハ知事ノ外名譽職參事會員二名以上之ニ署名捺印スヘシ

前項ノ文書中府縣會又ハ參事會ノ職權ニ屬スル事件ニシテ其議決ヲ經タルモノハ總テ其旨ヲ記入スヘシ

第五十一條　府縣會ニ於テ名譽職參事會員ヲ選擧セス又ハ參事會成立セス又ハ招集ニ應セサルトキハ參事會成立シ又ハ招集ニ應スル迄府縣知事ハ府縣參事會ノ權限ニ屬スル事件ヲ專決處分スルコトヲ得

非常事變ニ際シ府縣參事會ヲ招集スルノ暇ナク又ハ名譽職參事會員ノ出席半數以上ニ至ラサルトキハ府縣知事ハ府縣參事會ノ權限ニ屬スル事件ヲ專決處分スルコトヲ得

本條ノ處分ハ次回ノ府縣會會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第五十二條　府縣知事ハ府縣會ノ議決ニ依リ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケ其府縣ノ全部若ハ市制施行ノ地ニ家屋稅ヲ賦課スルコトヲ得但家屋稅賦課ノ地ニ於テハ戶數割ヲ賦課スルコトヲ得ス

第五十三條　府縣知事ハ府縣會ノ議決ヲ經テ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置キ府縣事務ノ一部ヲ調查セシメ又ハ府縣有財產及營造物ノ一部ヲ管理セシムルコトヲ得其選擧又ハ選任ノ方法及任期ハ府縣會ノ議決スル所ニ依ル

委員ハ名譽職トス

第四章　府縣ノ會計

第五十四條　府縣有財產及營造物管理ノ費用府縣會府縣參事會及委員ノ費用府縣吏員ノ給料退隱料其他諸給與及從來法律命令若ハ慣例ニ依リ竝ニ將來法律勅令ニ依リ府縣ノ負擔ト定ムル事件ノ費用ハ府縣ニ於テ之ヲ支辨スヘシ

第五十五條　名譽職參事會員及委員ニハ旅費滯在手當及出務日當ヲ給スルコトヲ得府縣會議員ニハ旅費及滯在手當ニ限リ之ヲ給スルコトヲ得但滯在手當出務日當ヲ併セ一日壹圓五拾錢ヲ超ユルコトヲ得ス

第五十六條　府縣ノ支出ハ府縣稅其他府縣ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

第五十七條　府縣稅目及其賦課徵收方法ニ關スル規定ハ此法律ニ依リ變更シタルモノヲ除クノ外從前地方稅ニ關スル規定ニ依ル

第五十八條　府縣知事ハ府縣會ノ議決ニ依リ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケ其府縣ノ全部若ハ市制施行ノ地ニ家屋稅ヲ賦課スルコトヲ得但家屋稅賦課ノ地ニ於テハ戶數割ヲ賦課スルコトヲ得ス

第五十九條　府縣內ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ店舖ヲ定メテ營業ヲ爲ス者ハ其土地家屋營業ニ對シテ賦課スル府縣稅ヲ納ムルモノトス其法人タルトキモ亦同シ但郵便電信及官設鐵道ノ業ハ此限ニ在ラス

府縣內ニ一戶ヲ構ヘ三箇月以上ニ及フ者ハ其戶數ニ對シテ府縣稅ヲ納ムルモノトス但其課稅ハ一戶ヲ構ヘタル初ニ遡リ徵收スヘシ

第六十條　府縣稅ノ賦課ニ付テハ納稅者カ其府縣外ニ於テ店舖ヲ定メタル營業ノ收入ヲ其標準ニ算入スルコトヲ得ス

第六十一條　府縣會ハ各市町村內ニ於テ徵收スル府縣稅賦課ノ細目ニ係ル事項ヲ關係市町村會ノ議決ニ付スルコトヲ得」

前項市町村會ノ議決ハ法律命令又ハ府縣會ノ議決ニ牴觸スルコトヲ得ス

市町村會ニ於テ府縣會ノ指定シタル期限內ニ其議決ヲ爲サヽルトキハ府縣參事會之ヲ議決スヘシ

第六十二條　營業ノ狀況又ハ收入ヲ標準トシテ賦課スル府縣稅ニ付テハ府縣知事ハ府縣會ノ議決ヲ經テ賦課額調查ノ爲其府縣內郡市ニ調查委員ヲ置クコトヲ得

第六十三條　府縣稅ノ免除ハ市町村稅免除ノ規定ニ依ル

第六十四條　府縣會ハ府縣內郡市町村ノ土木工事又ハ府縣內ノ敎育衞生勸業及慈善ノ事業若ハ營造物ニ對シ補助金ヲ與フルコトヲ議決スルコトヲ得

第六十五條　府縣會ハ家屋稅又ハ戶數割ノ全部又ハ一部ノ代納トシテ府縣ノ費用ヲ以テ支辨スル事業ニ對シ夫役又ハ現品ヲ出スヲ許スコトヲ議決スルコトヲ得

第六十六條　府縣稅ハ納稅義務ノ起リタル翌月ノ初ヨリ免稅理由ノ生シタル月ノ終迄月割ヲ以テ之ヲ徵收スヘシ但日割

ヲ以テ徵收スルモノハ此限ニ在ラス

納稅義務消滅シ又ハ變更スルトキハ納稅者ヨリ之ヲ當該官廳ニ屆出ヘシ其屆出ヲ爲シタル月ノ終迄ハ從前ノ稅ヲ徵收スヘシ

物件ヲ目的トシ納期ヲ定メテ一定ノ額ヲ賦課スル府縣稅ハ其納期ニ於テ納稅義務ヲ負フ者其額ヲ納ムヘシ

府縣稅ノ前納ニ係ルモノハ其義務ノ消滅シ又ハ他人ニ移轉シタル場合ト雖之ヲ還付セス但其義務ノ移轉ヲ受ケタル者ハ其前納期限ノ終迄納稅セサルモノトス

第六十七條　府縣稅ハ法律命令ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルモノヲ除クノ外各市町村長ニ於テ市町村稅徵收ノ手續ニ依リ之ヲ徵收スヘシ

第六十八條　府縣稅ノ賦課ニ對シ錯誤スルコトヲ發見シタル者ハ徵稅令書ノ交付後三箇月以內ニ之ヲ其令書ヲ發シタル廳ニ申立ルコトヲ得但申立ノ爲其納稅ヲ拒ムコトヲ得ス

第六十九條　前條ノ申立ヲ爲シタル後二十一日以內ニ其更正ヲ得サルトキ又ハ其更正ヲ得ルモ之ニ不服ナルトキハ十四日以內ニ郡參事會ニ訴願シ郡參事會ノ裁決ニ不服ナルトキハ其裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ十四日以內ニ府縣參事會ニ訴願シ府縣參事會ノ裁決ニ不服ナルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但市ニ在テハ府縣參事會ニ訴願シ府縣參事會ノ裁決ニ不服ナルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十條　府縣稅ノ免稅若ハ納稅延期ハ特別ノ事情アルモノニ限リ府縣知事ニ於テ府縣參事會ノ議決ヲ經テ之ヲ許ス

コトヲ得

府縣稅ノ滯納處分ハ國稅滯納處分法ニ依ル

第七十一條　東京府京都府大阪府ニ在テハ府ノ支出ニ充ツヘキ府稅ヲ市部及郡部ニ分賦ス其分賦ノ割合ハ府會ニ於テ之ヲ議決シ內務大臣ノ認可ヲ受ケテ施行スヘシ

前項市部ノ分賦額ハ市ニ於テ之ヲ市ノ豫算ニ編入シ市稅トシテ徵收シ其總額ヲ府金庫ニ納ムヘシ郡部ノ分賦額ハ此法律ノ規定ニ依リ之ヲ徵收ス但市部議員ハ其徵收ニ關スル議事ニ參與シ及議決ニ加ハラサルモノトス此場合ニ於テ若議長副議長市部議員ナルトキハ郡部議員ニ於テ臨時議長ヲ互選スヘシ

第七十二條　市制施行ノ府縣ニ在テハ郡廳舍建築修繕費郡吏員給料旅費及廳費ハ市ヲ除キ其他ノ部分ノミヲシテ其負擔ニ任セシムヘシ

前項ノ府縣ニ在テハ其府縣ノ支出費目中市ト其他ノ部分ト利害ノ厚薄ヲ異ニシ均一ノ負擔ニ任セシムルコトヲ得サルモノアルトキハ其費目ニ限リ其一方ノ負擔ヲ增加スルコトヲ得但負擔ノ割合ハ府縣會ニ於テ之ヲ議決シ內務大臣ノ許可ヲ受クヘシ若之ヲ許可スヘカラスト認ムルトキハ內務大臣之ヲ確定ス

第一項ノ負擔ニ任セシメ及第二項ニ依リ一方ノ負擔ヲ增加スルハ賦課ノ稅率ヲ增加スルニ止メ其會計ヲ異ニスルコトヲ得ス但東京府京都府大阪府ニ在テハ前條ニ依ル

前項ニ依リ稅率ヲ增加スヘキ稅目ハ府縣會ノ議決スル所ニ依ル

第七十三條　府縣內ノ或ル部分ニ對シ特ニ利益アル土木事業ヲ起ストキハ府縣會ノ議決ニ依リ該部分ニ對シ通常府縣稅賦課ノ外其利益ノ厚薄ニ應シ特ニ夫役現品ヲ增課スルコトヲ得

第七十四條　府縣ハ其營債元額ヲ償還スル爲又ハ天災事變ノ爲已ムヲ得サル支出又ハ府縣ノ永久ノ利益ト爲ルヘキ支出ヲ要スルニ方リ通常ノ歲入ヲ增加スルトキハ府縣ノ負擔ニ堪ヘサルノ場合ニ限リ勅令ノ定ムル所ニ依リ府縣會ノ議決ヲ以テ府縣債ヲ起スコトヲ得

府縣債ヲ起スノ議決ヲ爲ストキハ併セテ起債ノ方法利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定ムヘシ

府縣債償還ノ初期ハ三年以內ト爲シ年々ノ償還步合ヲ定メ起債ノ時ヨリ三十年以內ニ還了スヘシ

歲入出豫算內ノ支出ヲ爲スカ爲必要ナル一時ノ借入金ニシテ其年度內ノ收入ヲ以テ償還スヘキモノハ本條ノ例ニ依ルノ限ニ在ラス但府縣參事會ノ議決ヲ經ルコトヲ要ス

第七十五條　府縣知事ハ每年其翌年度ニ係ル歲入出豫算ヲ調製スヘシ但府縣ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

豫算ハ府縣會ノ議決ニ付スルノ前府縣參事會ノ審査ニ付スヘシ若府縣知事ト府縣參事會ト意見ヲ異ニスルトキハ知事ハ參事會ノ意見ヲ豫算ニ添ヘ府縣會ニ提出スヘシ追加又ハ臨時ノ豫算ニ付テモ亦同シ

內務大臣ハ省令ヲ以テ豫算調製ノ式ヲ定メ並ニ費目流用ニ關スル規定ヲ設クルコトヲ得

第七十六條　豫算ハ每年府縣會ノ議決ヲ取リ之ヲ內務大臣ニ報告シ並ニ府縣ノ公告式ニ依リ其要領ヲ告示スヘシ追加又ハ臨時ノ豫算ヲ議決シタル場合ニ於テモ亦同シ

府縣ノ費用ヲ以テ支辨スル事業ニシテ數年ヲ期シ施行スヘキモノ又ハ數年ヲ期シテ其費用ヲ支出スヘキモノハ府縣會ノ議決ヲ以テ其年期間各年度ノ支出額ヲ定メ繼續費ト爲スコトヲ得

豫算ヲ府縣會ニ提出スルトキハ府縣知事ハ併セテ其府縣有財產表ヲ提出スヘシ

第七十七條　歲入出豫算中ニ豫備費ヲ設クヘシ豫備費ハ府縣知事ニ於テ府縣參事會ノ議決ヲ經テ已ムヲ得サル豫算外ノ支出又ハ豫算超過ノ支出ニ充ツルコトヲ得但府縣會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第七十八條　府縣ノ收支命令ハ府縣知事之ヲ發スヘシ

第七十九條　會計事務ヲ管理スル官吏ハ前條ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス及其命令アルモ支出ノ豫算ナキカ又ハ豫備費支出及費目流用ノ規定ニ依ラサルトキハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

第八十條　決算ハ會計事務ヲ管理スル官吏ニ於テ會計年度後三箇月以內ニ之ヲ府縣知事ニ提出シ府縣知事ハ府縣參事會ヲシテ之ヲ檢查セシメ次回ノ通常府縣會ノ認定ニ付スヘシ

決算報告書並ニ之ニ關スル府縣會ノ議決ハ府縣知事ヨリ之ヲ內務大臣ニ報告シ並ニ決算ハ府縣ノ公告式ニ依リ其要領ヲ告示スヘシ

第五章　監督

第八十一條　府縣ノ行政ハ內務大臣之ヲ監督ス

第八十二條　府縣ノ行政ニ關スル訴願ハ其事件ノ處分若ハ裁決ヲ受ケタル日ヨリ二十一日以內ニ其理由ヲ具シテ內務大臣ニ提出スヘシ

此法律ニ指定スル場合ニ於テ府縣知事ノ處分又ハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アリテ行政裁判所ニ出訴セントスル者ハ裁決ヲ受ケタル日ヨリ二十一日以內ニ出訴スヘシ

行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得ヘキ場合ニ於テハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得ス

第八十三條　內務大臣ハ府縣行政ノ法律命令ニ背戾セサルヤ其事務錯亂澁滯セサルヤ否ヲ監視スヘシ內務大臣ハ之カ爲行政事務ニ關シ報告ヲ爲サシメ豫算及決算等ノ書類帳簿ヲ徵シ並ニ實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納ヲ檢閱スルノ權ヲ有ス

第八十四條　府縣會又ハ府縣參事會ノ議決公益ヲ害スト認ムルトキハ府縣知事ハ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ改メサルトキハ直ニ內務大臣ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

府縣會又ハ府縣參事會ノ議決其權限ヲ超エ又ハ法律命令ニ背クト認ムルトキハ府縣知事ハ其議決ヲ取消スヘシ此場合ニ於テ府縣知事ノ處分ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第八十五條　府縣會又ハ府縣參事會ニ於テ法律命令又ハ慣行ニ依テ府縣ノ負擔ニ屬スル行政上又ハ公益上必要ノ費用ヲ否決シ又ハ議決スト雖必要ノ給需ヲ缺クトキハ府縣知事ハ內務大臣ニ具狀シ其指揮ヲ請ヒ原案ヲ執行スルコトヲ得但內務大臣ハ原案金額ヲ不相當ト認ムルトキハ原案金額以內ニ於テ適當ノ金額ヲ定メ指揮スルコトヲ得

第八十六條　府縣會招集ニ應セス又ハ成立セサルトキハ府縣

知事ハ内務大臣ノ指揮ヲ請ヒ處分スルコトヲ得
前項ノ處分ハ次回ノ會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第八十七條　府縣會又ハ府縣參事會ニ於テ其議決スヘキ議案ヲ議決セス又ハ府縣會ニ於テ招集前正當ノ手續ヲ以テ告知セラレタル議案ヲ第二十一條第一項ニ定メタル期限内ニ議了セサル場合ニ於テ其事緊急ヲ要スルトキハ府縣知事ハ内務大臣ニ具狀シ其指揮ヲ請ヒ原案ヲ執行スルコトヲ得但其議決セス又ハ議了セサル議案歳入出豫算ニ係リ内務大臣ニ於テ原案金額ヲ不相當ト認ムルトキハ原案金額以内ニ於テ適當ノ金額ヲ定メ指揮スルコトヲ得

第八十八條　内務大臣ハ府縣ノ歳入出豫算中不適當ノ支出ト認ムル費目アルトキハ之ヲ削除シ及其府縣ノ資力ニ比シ不急ノ支出ト認ムル費目アルトキハ之ヲ削除若ハ減殺スルコトヲ得此場合ニ於テハ收入科目中ニ就キ之ニ相當スル收入額ヲ減殺スヘシ

第八十九條　府縣會ノ解散ハ勅令ヲ以テス此場合ニ於テハ三箇月以内ニ議員ヲ改選スヘシ
前項解散ノ場合ニ於テハ名譽職參事會員モ亦解職スルモノトス

府縣會解散ノ後改選結了ニ至ル迄ノ間急施ヲ要スル事件アルトキハ府縣知事ハ專決處分スルコトヲ得
前項ノ處分ハ次回ノ會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第九十條　左ノ事件ニ關スル府縣會ノ議決ハ内務大臣及大藏大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス
一　新ニ府縣債ヲ起シ又ハ其額ヲ增加シ若ハ償還ノ方法ヲ變更スル事
二　地租四分ノ一ヲ超過スル府縣稅ヲ土地ニ賦課スル事
三　法律勅令ノ規定ニ依リ官廳ヨリ下渡ス歩合金ニ對シ支出金額ヲ定ムル事

第九十一條　左ノ事件ニ關スル府縣會ノ議決ハ内務大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス
一　府縣有不動産ノ賣却讓渡竝ニ質入書入ノ事
二　第七十二條第二項ニ依リ市若ハ其他ノ部分ノ負擔ヲ增加スル事
三　第七十三條ニ依リ府縣内ノ或ル部分ニ對シ特ニ夫役現品ヲ增課スル事
四　第七十六條第二項ニ依リ繼續費ヲ定メ及其年期内ニ議決ヲ變更スル事

第六章　附則

第九十二條　行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間此法律ニ依リ行政裁判所ニ屬スル職務ハ現行ノ行政裁判手續ニ從ヒ控訴院ニ於テ之ヲ行フヘシ

第九十三條　市制町村制施行ノ爲メ必要ナル直接稅ノ種類ハ此法律ノ施行ニ付テモ亦之ヲ適用ス
市制町村制郡制及此法律施行ノ爲將來ノ諸稅ニ付直接稅ト爲スヘキモノハ内務大臣及大藏大臣之ヲ告示スヘシ

第九十四條　此法律ハ郡制市制ヲ施行シタル各府縣ニ施行スルモノトス其施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ内務大臣之ヲ定ム

第九十五條　此法律施行ノ後ハ市制第百二十二條第三ニ定ムル附加稅徵收ノ許可ハ東京市京都市大阪市ニ在テハ地租七分ノ三、二五(二十八分ノ十三)其他ノ市ニ在テハ其七分ノ一、

五(十四分ノ三)ヲ超過スルトキ之ヲ要スルモノトス

第九十六條　府縣内ニ在ル島嶼ノ其本地ニ對スル關係ニ付テハ勅令ヲ以テ特例ヲ設ク

郡制ヲ施行セサル島嶼ヨリ選出スヘキ府縣會議員ノ選擧ニ關シテハ別ニ勅令ヲ以テ其制ヲ定ム

第九十七條　明治十三年四月第十五號布告府縣會規則明治十四年二月第八號布告區郡部會規則明治二十二年二月法律第六號府縣會議員選擧規則其他此法律ニ牴觸スル成規ハ此法律施行ノ府縣ニ於テ其施行ノ時期ヨリ總テ之ヲ廢止ス

第九十八條　内務大臣ハ此法律施行ノ責ニ任シ之カ爲必要ナル命令ヲ發布スヘシ

○府縣會議員定數規則

明治二十四年六月勅令第五十九號

廢府縣會議員定數規則ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣會議員定數規則

第一條　府縣制第二條ニ依リ府縣會議員ノ數ヲ定ムルコト左ノ如シ

管内ノ人口七十萬迄ハ議員三十人ヲ以テ定員トシ七十萬以上百萬迄ハ五萬ヲ加フル毎ニ一人ヲ增シ百萬以上ハ七萬ヲ加フル毎ニ一人ヲ增ス

第二條　前條定ムル所ノ議員ハ人口ニ應シテ每郡市ニ割當選擧スルモノトス

第三條　人口增減ノ爲メ議員ノ定數又ハ郡市ノ割當ニ異動ヲ生スルトキハ其改選期ヲ待テ之ヲ增減スヘシ

第四條　府縣制第二十七條ニ依リ府縣會ノ職權ニ屬スル事件ヲ市郡ニ分別シタル府縣ニ於テ本規則ニ依リ市若クハ郡ヨリ選出スヘキ議員ノ數十名ニ滿タサルトキハ其定數ヲ十名ト爲スヘシ(二十五年九月勅令第七十六號ヲ以テ本條追加)

○府縣會議員定數規則ノ人口計算方

明治二十四年六月内務省訓令第十號

本年六月勅令第五十九號ニ揭クル人口ハ每年十二月末日ノ現住人口ヲ云フ但在營在艦ノ現役軍人ハ其營所又ハ定繫港所在地ノ人口ニ算入セス其本籍地ノ人口ニ加フヘキ儀ト心得ラルヘシ

○府縣參事會ノ職務

明治二十四年九月勅令第百九十六號

廢府縣參事會ノ職務ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　土地收用法第二十九條土地收用審查委員ノ事務ハ府縣制ヲ施行シタル府縣ニ於テハ府縣參事會之ヲ行フヘシ

第二條　所得稅法第二十條及第二十一條府縣常置委員會ノ事務ハ府縣制ヲ施行シタル府縣ニ於テハ府縣參事會之ヲ行フヘシ

○府縣會規則

明治十三年四月布告第十五號

明治十一年七月第十八號布告府縣會規則左ノ通改正候條此旨布告候事(府縣制施行ノ日ヨリ消滅)

第一章　總則

第一條　府縣會ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘキ經費ノ豫算及ヒ其徵收方法ヲ議定ス

第二條　府縣會ハ通常會ト臨時會トノ二類ニ別ツ其定期ニ於テ開ク者ヲ通常會トナシ臨時ニ開ク者ヲ臨時會トナス

第三條　通常會臨時會ヲ論セス會議ノ議案ハ議ヲ府知事〔縣令〕ヨリ之ヲ發ス

第四條　臨時會ハ其特ニ會議ヲ要スル事件ニ限リ其他ノ事件ヲ議スルヲ得ス

第五條　府縣會ノ議決ハ府知事縣令認可ノ上之ヲ施行スヘキ者トス若シ府知事〔縣令〕其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルトキハ其事由ヲ內務卿ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

前項ノ場合ニ於テ府知事〔縣令〕ハ時宜ニ依リ之ヲ再議ニ付スルヲ得再議ノ後猶其議決ヲ認可スヘカラスト思慮スルトキハ內務卿ノ指揮ヲ請フコト前項ニ同シ（十四年二月第四號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第六條　府縣會ハ每年通常會議ノ初メニ於テ地方稅ニ係ル前年度ノ出納決算ノ報告書ヲ受ケ府知事〔縣令〕ニ說明ヲ求ムルコトヲ得若シ異見アルトキハ議長ノ名ヲ以テ直チニ內務大臣ニ上申スルコトヲ得

出納決算ノ報告書ニ付府縣會ヨリ說明ヲ求ムルトキハ府知事〔縣令〕若ハ其代理人之ヲ說明スヘシ（十五年十二月第六十八號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第七條　通常會期中議員ノ內二人以上ノ發議ヲ以テ其府縣內ノ利害ニ關スル事件ニ付建議ヲナサントスル者アラハ先ツ議會ノ許可ヲ得ヘシ之ヲ會議ニ付シ可決スルトキハ其會ノ所見トシ議長ノ名ヲ以テ直チニ內務卿ニ建議シ又ハ府知事〔縣令〕ニ建議スルヲ得

但臨時會ニ於テハ其會議ヲ要シタル事件ニ限リ建議スルヲ得（十五年二月第十號布告ヲ以テ全條但書共改正ス）

第八條　府縣會ハ府知事〔縣令〕ヨリ其府縣內ニ施行スヘキ事件ニ付會議ノ意見ヲ問フコトアルトキハ之ヲ議ス

第九條　府縣會ハ議事ノ細則ヲ議定シ府知事〔縣令〕ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得

府縣會ハ議員ノ內招集ニ應セス又ハ事故ヲ告ケスシテ參會セサル者ヲ審査シ其退職者タルヲ決スルヲ得

府知事縣令ト府縣會トノ間ニ於テ法律ノ見解ヲ異ニシ又ハ權限ヲ爭フコトアルトキハ雙方ヨリ其事由ヲ具狀シ政府ノ裁定ヲ請フヘシ此場合ニ於テ府知事〔縣令〕ハ其議事若クハ會議ヲ中止スルコトヲ得（十四年二月第四號布告ヲ以テ本項ヲ追加ス）

第二章　選舉

第十條　府縣會ノ議員ハ郡區ノ大小ニ依リ每郡區ニ五人以下ヲ選フ

每郡區議員定數ノ外補缺員トシテ十人以下ヲ增選スルヲ得（十五年二月第十號布告ヲ以テ本項追加）

第十一條　議長副議長ハ議員中ヨリ公選シ之ヲ府知事縣令ニ報告シ府知事縣令ハ之ヲ內務卿ニ報告スヘシ

議長副議長及ヒ議員ハ俸給ナシ但會期中滯在日當及ヒ往復旅費ヲ給スヘキ額ハ會議ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第十二條　書記ハ議長之ヲ選ヒ庶務ヲ整理セシムヘシ其俸給ハ會費ノ中ヨリ之ヲ支給ス

第十三條　府縣ノ議員タルコトヲ得ヘキ者ハ滿二十五歲以上ノ男子ニシテ其府縣內ニ本籍ヲ定メ滿三年以上住居シ其府縣內ニ於テ地租拾圓以上ヲ納ムル者ニ限ル但左ノ各款ニ觸ルヽ者ハ議員タルコトヲ得ス

第一款　風癲白痴ノ者

第二款　舊法ニ依リ一年以上懲役及國事犯禁獄ノ刑ニ處セラレ滿期後五年ヲ經サル者新法ニ依リ公權ヲ剝奪及停止セラレタル者又ハ一年以上輕重禁錮ノ刑ニ處セラレ主刑滿期後五年ヲ經サル者（十五年二月第十號布告ヲ以テ本款改正）

第三款　身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四款　官吏（敎導職）及陸海軍諸卒現役ノ者（同上、又十七年第十九號布告ヲ以テ敎導職ヲ削ル）

第五款　府縣會ニ於テ退職者トセラレタル後四年ヲ經サル者

第十四條　議員ヲ撰擧スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歲以上ノ男子ニシテ其郡區內ニ本籍ヲ定メ其府縣內ニ於テ地租五圓以上ヲ納ムル者ニ限ルヘシ

但前條ノ第一款第二款第三款第五款ニ觸ルヽ者及陸海軍軍人現役ノ者ハ撰擧人タルコトヲ得ス（同上但書改正）

第十五條　（二十二年二月法律第六號ヲ以テ廢止ス）

第十六條　撰擧ノ投票ハ豫定ノ日ニ郡區廳ニ於テ之ヲ爲シ郡〔區〕長之ヲ調査シ撰擧會中ノ取締ヲ爲スヘシ但便宜ニ因リ郡區廳外ニ於テ撰擧會ヲ開クコトヲ得

第十七條　（同上）

第十八條　（同上）

第十九條　（同上）

第二十條　一人ニシテ數郡區ノ撰ニ當ルトキハ其何レノ郡區ニ屬スヘキハ當人ノ好ニ任スヘシ

第二十一條　議員ノ任期ハ四年トシ二年每ニ全數ノ半ヲ改撰ス第一回二年期ノ改撰ヲ爲スハ抽籤法ヲ以テ其退任ノ人ヲ定ム

第二十二條　議長副議長ノ任期ハ二年トシ議員ノ改撰每ニ之ヲ公撰スヘシ

第二十三條　前二條ノ場合ニ於テハ前任ノ者ヲ再撰スルコトヲ得

第二十四條　議員中第十三條ニ揭クル諸款ノ場合ニ遭遇スルカ其府縣外ニ轉籍スルカ其他總テ欠員アルトキハ更ニ之ニ代ル者ヲ撰擧ス（十五年二月第十號布告ヲ以テ（補缺）ヲ（補任）ト改ム）

但補缺員アルトキハ順次投票ノ多數ヲ以テ之ヲ取リ倘缺員アルトキハ本條末文ノ手續ニ據ル（同上但書追加）

第三章　議則

第二十五條　議員半數以上出席セサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第二十六條　會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第二十七條　府知事〔縣令〕若クハ其代理人ハ會議ニ於テ議案ノ旨趣ヲ辨明スルヲ得但決議ノ數ニ入ルコトヲ得ス

第二十八條　會議ハ傍聽ヲ許ス但府知事〔縣令〕ノ要メニ依リ又ハ議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルヲ得

第二十九條　議員ハ會議ニ方リ充分討論ノ權ヲ有ス然レトモ人身上ニ付テ褒貶毀譽ニ涉ルコトヲ得ス

第三十條　議場ヲ整理スルハ議長ノ職掌トス若シ規則ニ背キ議長之ヲ制止シテ其命ニ順ハサル者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退去セシムルヲ得其强暴ニ涉ル者ハ警察官吏ノ處分ヲ求ムルヲ得

第四章　開閉

第三十一條　府縣會ハ每年一度十一月ニ於テ之ヲ開ク其開閉ハ府知事〔縣令〕ヨリ之ヲ命ス會期ハ三十日以內トス但〔區

部)郡部會ヲ開ク地方ニ於テハ七日以内延期スルコトヲ得(十五年十二月第六十八號布告ヲ以テ全條ヲ改正シ十七年十二月第二十八號布告ヲ以テ更ニ(初年一度)ノ下(三月)ヲ(十一月)ト改メ十八年一月ヨリ施行セシム)

第三十二條　通常會期ノ外會議ニ付スヘキ事件アルトキハ府知事縣令ハ臨時會ヲ開クコトヲ得其會期ハ七日以内トス但該會ヲ要スル事由ヲ直ニ内務卿ニ報告スヘシ(同上)

第三十三條　會議ノ論說國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムルトキハ府知事(縣令)ハ會議ヲ中止セシメ内務卿ニ具狀シテ其指揮ヲ請フヘシ

府縣會ニ於テ若シ法律上議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會期内ニ於テ議案ヲ議決シ終フサルトキハ府知事(縣令)ハ更ニ其議定ヲ要セス内務卿ニ具狀シ其認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得(十四年二月第四號布告ヲ以テ末項ヲ追加シ十五年十二月第六十八號布告ヲ以テ全項改正)

議員招集ニ應セサル者半數ヲ過キ議會ヲ開クヲ得サルコトアルトキハ府知事縣令ハ其事由ヲ内務卿ニ具狀シ指揮ヲ請フヘシ(十四年二月第四號布告ヲ以テ末項ヲ追加ス)

第一項ノ場合ニ於テ内務卿ハ府縣會ヲ停止スルコトヲ得而シテ更ニ開會ヲ命スル迄ノ間ハ府知事縣令ニ於テ地方税ノ經費豫算及徴收方法ヲ定メ内務卿ノ認可ヲ得テ之ヲ施行スルコトヲ得(十五年十二月第六十八號布告ヲ以テ末項ヲ追加ス)

第三十四條　會議中國ノ安寧ヲ害シ或ハ法律又ハ規則ヲ犯スコトアリト認ムルトキハ内務卿ハ何レノトキヲ問ハス議員ノ解散ヲ命スルコトヲ得(十四年二月第四號布告ヲ以テ(但ハス)ノ下七字ヲ削ル)

前項ノ場合ニ於テ前議員ノ來タ議定セサル議案アルトキハ後任議員ヲシテ之ヲ議定セシムヘシ(同上末項追加)

第三十五條　内務卿ヨリ解散ヲ命シタルトキハ其解散ヲ命シタル日ヨリ九十日以内ニ更ニ議員ヲ改撰スヘシ

第五章　常置委員(以下十三年四月第四十九號布告ヲ以テ追加)

第三十六條　府縣會ハ其議員中五人以上七人以下ノ常置委員ヲ選任スヘシ

常置委員定數ノ外數名ヲ增選シ缺員アルトキハ順次投票ノ多數ヲ以テ之ヲ補充スルヲ得(十五年二月第十號布告ヲ以テ本項及次項ヲ追加ス)

區部會郡部會ヲ開設シタル府縣ニ在テハ郡區各部ニ之ヲ選任スヘシ

第三十七條　常置委員ハ府縣會ノ議定ニ依リ事業ヲ執行スルノ方法順序及豫備費ノ支出ニ付府知事縣令ヨリ諮問アルトキハ其意見ヲ述フ

常置委員ハ地方税ヲ以テ支辨スヘキ事業ニシテ臨時急施ヲ要スル場合ニ於テハ其經費ノ豫算及徴收方法ヲ議決シ追テ府縣會ニ報告スルヲ得(十五年二月第十號布告ヲ以テ全條改正)

第三十八條　常置委員ハ通常府縣會議ノ初メ委員會議ニ於テ議決シタル事件ノ要領ヲ報告シ且通常會ヲ臨時會トヲ論セス府知事(縣令)ヨリ發スヘキ議案ヲ前以テ諮取リ會議ニ向テ其意見ヲ報告スヘシ

第三十九條　常置委員會議所ハ府縣廳内ニ置キ定日ニ會議スヘシ

第四十條　常置委員諮問ノ會議ハ別ニ議案書ヲ用ユルヲ要セス(十五年二月第十號布告ヲ以テ常置委員ノ下二字ヲ加フ)

第四十一條　諮問會ハ府知事(縣令)ヲ以テ議長トナシ其他ノ會議ハ委員中ヨリ之ヲ選擧スヘシ(同上全條改正)

第四十二條　常置委員ハ半數以上出席セサレハ當日ノ會議ヲ開クヲ得ス會議ハ過半數ニ依テ決ス可否同數ナルトキハ議

長ノ可否スル所ニ依ル

第四十三條　常置委員會議ノ議事ハ書記ヲシテ筆記セシムヘシ

第四十四條　府知事(縣令)ハ主務ノ僚屬ヲ委員會議ニ出シ其會議ニ係ル事件ニ付辯明ヲ爲サシムルヲ得

第四十五條　常置委員會議ハ傍聽ヲ許サス

第四十六條　常置委員ノ任期ハ二ケ年トシ議員改選毎ニ之ヲ改選ス但期限ニ至リ再選スルヲ得(同上(トシ)ノ下)

第四十七條　常置委員會議所ノ書記ハ府縣ノ屬官中ヨリ府知事縣令之ヲ選任ス(同上(職長)ヲ(府知事縣令)ニ改ム)

第四十八條　常置委員ハ三拾圓以上八拾圓以下ノ月手當及ヒ往復旅費ヲ給ス其額ハ府縣會ノ議決ヲ以テ定ム

第四十九條　常置委員ノ月手當旅費其他委員會議所ノ費用ハ地方税ヨリ支給ス

○府縣會其議定スヘキ事件ノ細目ニ係ル事項ヲ區町村會等ノ議ニ付スルヲ得(明治十四年二月布告第六號)

府縣會ハ其議定スヘキ事件中細目ニ係ル事項ヲ以テ區町村會若クハ水利土功會ノ議決ニ付スルヲ得ヘシ此旨布告候事

○府縣會議員聯合集會等ヲ禁ス(明治十五年十二月第七十號布告)

府縣會議員會議ニ關スル事項ヲ以テ他ノ府縣會議員ト聯合集會シ又ハ往復通信スルコトヲ許サス

其集會スル者何等ノ名義ヲ以テスルモ府知事(縣令)ニ於テ此禁令ヲ犯ス者ト認ムルトキハ直ニ解散ヲ命スヘシ

前項ノ場合ニ於テ解散ノ命ニ從ハサルモノハ「集會條例第十三條」ニ依テ處分ス

○開會中議員建議書携帶上京等ヲ許サス(明治十五年二月第十一號達)

府縣會規則第七條ニ依リ「内務卿」ニ建議スルノ場合ニ於テ開會中議員自ヲ其建議書ヲ携帶上京等ノ儀ハ不相成筋ニ候條此旨相達候事

但本文ノ趣府縣會ヘ相達ク

○府縣會審理事務手續(明治十四年十月太政官達第九十一號)

今般參事院ヲ被置候ニ付本年月第六號達審理局ヲ被廢事務手續左ノ通被定候條此旨相達候事但本文ノ儀ハ府縣會ニ達シ置クヘシ

第一條　本年第四號布告府縣會規則第九條追加ニ依リ府知事縣令及ヒ府縣會ヨリ裁定ヲ請フノ具狀書ハ府知事縣令ニ於テ之ヲ取纒メ法制局長官ニ當テ差出スヘシ(十八年十二月太政官達第七十八號ヲ以テ參事院議長ヲ法制局長官ト改ム)

第二條　裁定ヲ要スル事件具狀書ヲ以テ悉サヽルコトアルトキハ府知事縣令若クハ其代理人及ヒ府縣會總代自ラ法制局ニ出頭シテ之ヲ辯明シ又ハ法制局ヨリ之ヲ召喚シテ尋問スルコトアルヘシ(同上達ヲ以テ參事院議長ヲ法制局長官ト改ム)

但府縣會總代ハ其議員タル者ニ限ル

第三條　裁定書ハ其議決ノ理由ヲ詳記シ審理委員連署シテ之ヲ

ヲ發付スヘシ

○府縣會規則第七條ニ依リ內務卿ニ建議スル場合ニ於テ議員上京方

明治十五年十二月太政官達第十二號

府縣會規則第七條ニ依リ內務卿ニ建議スルノ場合ニ於テ開會中議員自ラ其建議書ヲ携帶上京等ノ儀ハ不相成筋ニ候條此旨相達候事

但本文ノ趣府縣會ヘ相達シ置クヘシ

○府縣會規則第廿一條ニ據リ議員改選ノ上就職交替手續

明治十四年七月內務省布達甲第四號

府縣會規則第二十一條ニ據リ議員改選之上其就職交替ノ手續ハ豫メ府縣會ニ於テ議定セシメ府知事縣令認可ノ上施行可致此旨布達候事

但常置委員ノ儀モ本文同樣可取計事

○府縣會規則心得條件

明治十三年十二月內務省達乙第四十八號

本年第四十九號ヲ以テ府縣會規則追加公布相成候ニ付左ノ條件爲心得相達候事

一常置委員ハ來十四年通常會開會前ニ於テ選任スヘシ（同年乙第五十三號者達ヲ以テ第一項ヲ取消シ本項以下二項ヲ加フ）

一十三年度中常置委員ノ月手當及往復旅費ハ委員ヲ撰擧セシムル臨時會ニ於テ議定セシムヘシ

一郡區經濟ヲ異ニスル府縣ニ在テハ定員內ニ於テ其郡區選出ノ人員ヲ定ムルコトヲ得

一常置委員補欠ノ爲相當ノ豫備員ヲ撰ヒ置クモ妨ケナシ

一第四十一條ニ據リ議長ハ府知事縣令之ヲ勤ムト雖モ本務ノ都合ニ依リ書記官之レカ代理ヲ爲スヲ得

一第四十六條ノ通委員ノ任期ハ二ケ年タルヘシト雖モ若シ議員本分ノ任期ヲ終ヘタルモノハ其本分ノ任期ト共ニ委員ノ任期モ終リタルモノトス

一常置委員會議ノ細則ハ該會ニ於テ議決シ府知事縣令認可ノ上施行スヘキモノトス

○府縣會市町村及衆議院ノ議員資格

ヲ有セサル官吏幷非職休職者議員又ハ市町村ノ吏員タルトキノ手續

明治二十二年六月閣令第十八號

府縣會規則第十三條市制町村制第十五條衆議院議員選擧法第九條第十條ニ記載シタル官吏ハ在職者ノミニ限ルモノトス非職者休職者ニシテ議員又ハ市町村ノ吏員タラントスルトキハ本屬長官ノ許可ヲ受クヘシ

○市制施行ニ付府縣會議員ノ選擧及市公民資格

明治二十二年二月法律第七號

除市制施行ニ付府縣會議員ノ選擧及市公民ノ資格ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　市制ヲ施行スルモ府縣會議員ハ之ヲ改選セス

第二條　郡部ト經濟ヲ異ニスル區ニ市制ヲ施行スルモ府縣會議員選擧ノ區域及區部會郡部會ニ係ル規定竝區部議員ノ數

ハ總テ從前ノ通タルヘシ但區郡ハ改テ市部ト稱スヘシ

區ノ區域ヲ變更シテ市ト爲スニ因リ議員ノ數ヲ增減スヘキトキハ府縣會ノ議決ヲ以テ之ヲ增減スルコトヲ得此場合ニ於テ其退職スヘキ議員ハ抽籤ヲ以テ定メ其增加スヘキ議員ハ新ニ選擧スヘシ

第三條　郡內ノ市街ニ市制ヲ施行スル場合ニ於テモ府縣會議員選擧ノ區域ハ之ヲ變更セス其選擧事務ハ郡長ニ於テ之ヲ管理シ選擧ニ關スル費用ハ郡役所經費ヲ以テ支辨スヘシ

第四條　郡部ト經濟ヲ異ニスル區ニ於テ從來地方稅ヲ以テ支辨シタル事業ニ屬スヘキモノハ府縣會ノ議決ヲ以テ市ニ引繼クヘシ

第五條　郡部ト經濟ヲ異ニセサル區ニ市制ヲ施行シ又ハ町村ニ市制ヲ施行シ若クハ町村ヲ區ニ合併シテ市制ヲ施行スル場合ニ於テハ其區費又ハ町村費ヲ二年以來納メタル者ヲ市制第七條ノ市ノ負擔分任者ト看做スヘシ

郡部ト經濟ヲ異ニスル區ニ市制ヲ施行スル場合ニ於テハ府縣會ノ議決ヲ以テ區部地方稅中專ラ區ノ費用ニ支出シタルモノヲ區分シ其區分シタル稅金ヲ二年以來納メタル者ヲ市制第七條ノ市ノ負擔分任者ト看做スヘシ其區分シタル稅金ノ外區費ヲ納メタル者アルトキハ其金額ヲ併算スヘシ

○府縣會議員選擧罰則適用方

明治二十三年五月法律第四十一號

除府縣會議員選擧ニ衆議院議員選擧法罰則ヲ適用スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治二十二年二月法律第六號府縣會議員選擧規則ニ依ル選擧ニハ府縣制ヲ施行スル迄ノ間衆議院議員選擧法罰則補則ヲ適用ス但其ノ第二條第一項ニ衆議院議員選擧法第九十二條ヲ適用スル場合ニ於テハ府縣會議員選擧規則第六十二條其ノ第二條第二項ニ衆議院議員選擧法第九十三條ヲ適用スル場合ニ於テハ府縣會議員選擧規則第六十三條ヲ適用スルモノトス

府縣會議員選擧規則中此ノ法律ニ矛盾スルモノハ効力ヲ有セス

○府縣制郡制施行ニ際シ衆議院議員竝ニ府縣會議員ノ選擧區域地方稅收支豫算地方稅財產備荒儲蓄金處分方郡費支辨方法及府縣ノ急施事業ニ關スル諸件

明治二十三年九月法律第八十五號

除府縣制郡制施行ニ際シ衆議院議員竝府縣會議員ノ選擧區域地方稅收支豫算地方稅財產備荒儲蓄金處分方郡費支辨方法及府縣ノ急施事業ニ關スル諸件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　郡制施行ニ付郡ノ廢置分合若ハ郡市ノ境界ヲ變更スルコトアルモ衆議院議員ノ選擧ハ仍ホ從前ノ區域ニ依ル

第二條　郡制施行ニ際シ郡ノ廢置分合若ハ郡市ノ境界ヲ變更スルコトアルモ府縣會議員ハ次回ノ定期改選ニ至ルマテ之ヲ改選セス又其ノ定數ヲ增減セス其ノ補缺選擧ヲ行フヘキトキハ仍ホ從前ノ區域ニ依ル

第三條　府縣制施行前府縣會ニ於テ議定シタル歲入出豫算中

府縣制施行ニ至リ法律命令ノ結果ニ依リ異動ヲ生シ更正ヲ要スルモノアルトキハ新ニ組織スル府縣會ニ於テ之ヲ更正スヘシ其ノ他ハ總テ從前府縣會議決ノ効ヲ存ス

第四條　東京府京都府大阪府ヲ除キ其ノ他ノ縣ニ在テ從來郡市ノ地方稅ノ經濟ヲ異ニシ其ノ地方稅經濟ニ屬スル財產ヲ郡市ニ分屬セルモノハ府縣制施行ノ日ヨリ之ヲ共同ノ縣有財產トス

第五條　東京府京都府大阪府ヲ除キ其ノ他ノ縣ニ在テ從來備荒儲蓄金ヲ郡市ニ分別セルモノハ府縣制施行ノ日ヨリ之ヲ共同ノ備荒儲蓄金トス

第六條　郡制施行ノ後郡費ヲ收入スルニ至ルノ間必要ナル郡ノ支出ハ郡長ニ於テ概算ヲ設ケ府縣知事ノ認可ヲ得テ假ニ地方稅ヲ以テ支辨シ追テ郡費ヲ以テ償還スヘシ

第七條　府縣制郡制施行ノ後府縣參事會郡參事會就職ニ至ルマテノ間其ノ職務ニ屬スル事項ニシテ急施ヲ要スルモノアルトキハ府縣參事會ノ職務ハ府縣知事郡參事會ノ職務ハ郡長代テ之ヲ執行スヘシ

○郡區町村編制法

明治十一年七月布告第十七號

郡區町村編制法左ノ通被定候條此旨布告候事（二十三年五月十七日法律第三十六號ヲ以テ郡制ヲ設ケ郡制施行ノ地ハ此條例ヲ廢ス）

第一條　地方ヲ劃シテ府縣ノ下郡區町村トス

第二條　郡區村ノ區域名稱ハ總テ舊ニ依ル

第三條　郡ノ區域廢置ハ過キ施政ニ不便ナル者ハ一郡ヲ劃シテ數郡トナス（第四條以下ニ於テ郡ヲ劃シ又ハ數郡ヲ合スト云フ如シ）

第四條　三府五港其他人民輻湊ノ地ハ別ニ一區トナシ其廣濶ナル者ハ區分シテ數區トナス（市制町村制ニ依リ市町村制施行ノ地方ハ第四條第六條及第九條但書ヲ廢ス）

第五條　每郡ニ郡長各一員ヲ置キ每區ニ區長各一員ヲ置ク郡ノ狹小ナルモノハ數郡ニ一員ヲ置クコトヲ得

第六條　每町村ニ戶長各一員ヲ置ク又數町村ニ一員ヲ置クコトヲ得

但區內ノ町村ハ區長ヲ以テ戶長ノ事務ヲ兼ヌルコトヲ得

第七條　此編制法ヲ施行シ難キ島嶼ハ其制ヲ異ニスルヲ得（三十五年五月第十四號布告ヲ以テ七條ヨリ九條迄ヲ追加）

第八條　地方ノ便益若クハ人民ノ請願ニ由リ止ムヲ得サル理由アルモノハ郡區町村ノ區域名稱ヲ變更スルコトヲ得

第九條　第三條第四條第七條第八條ノ施行ヲ要スルトキハ府知事縣令ヨリ內務卿ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ受クヘシ

但町村區域名稱ノ變更ハ內務卿ノ認可ヲ受クヘシ

○郡制

明治二十三年法律第三十六號

朕郡制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

郡制

目次

第一章　總則　自第一條至第三條
第二章　郡會　自第四條至第十五條
第三章　郡參事會吏員及委員　自第四十五條至第五十九條
第四章　郡ノ會計　自第六十條至第七十一條
第五章　監督　自第七十二條至第八十二條
第六章　附則　自第八十三條至第九十一條

郡制

第一章　總則

第一條　郡ノ廢置分合及郡界ノ變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

郡界ニ當ル市町村ノ境界ヲ變更スルトキハ郡界モ亦自ラ變更スルモノトス

第二條　郡內ヲ町村ヲ變シテ市ト爲シ若ハ市ヲ變シテ郡內ノ町村ト爲スハ其市會町村會ノ申請ニ依リ內務大臣之ヲ定ム

第三條　第一條第二條ノ處分ニ付其財產處分ヲ要スルトキハ府縣參事會之ヲ議決スヘシ但特ニ法律ノ規定アルモノハ此限ニ在ラス

第二章　郡會

第四條　郡會ハ郡內町村ニ於テ選擧シタル議員及大地主ニ於テ選擧シタル議員ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條　町村ニ於テ選擧スヘキ郡會議員ノ數ハ每町村各一名トス

郡會議員ノ數二十名以上ニ及フトキハ二十名ヲ以テ制限トス此場合ニ於テ議員配當法ハ首トシテ人口ヲ標準トシ郡會ニ於テ議決シ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

郡會議員ノ數十名ニ滿タサルトキハ郡會ノ議決ニ依リ府縣知事ノ認可ヲ經其數ヲ增シテ十名ニ至ルコトヲ得其配當法ハ首トシテ人口ヲ標準トシ郡會ニ於テ議決シ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

本條議員配當法ハ郡內ノ町村數ニ增減アリタル場合ノ外初同ハ三年間爾後ハ十二年以上ニ至リ町村ノ人口ニ著シキ增減アルニ非サレハ改正セサルモノトス

第六條　一町村ニ於テ一名以上ノ議員ヲ選擧スルハ其町村會之ヲ行ヒ數町村ニ於テ一名若ハ一名以上ノ議員ヲ選擧スルハ其各町村會會同シテ之ヲ行フヘシ

第七條　町村組合ニシテ組合會ヲ設ケ其町村一切ノ事務ヲ共同處分スルモノハ第四條乃至第六條ノ規定ニ關シテハ之ヲ一町村ト同視シ其組合會ニ於テ議員選擧ヲ行フヘシ

第八條　大地主ハ町村ニ於テ選擧スヘキ議員定數ノ外其定數ノ三分ノ一ヲ互選スルモノトス若端數ヲ生スルトキハ之ヲ棄却スヘシ

選擧ヲ行フコトヲ得ヘキ大地主ニシテ其員數町村ニ於テ選擧スヘキ議員定數ノ三分ノ一以下ナルトキハ其大地主ハ選擧ニ依ラスシテ郡會議員タルモノトス但定期改選ノ期限內ニ於テハ大地主ノ員數減シテ三分ノ一以下ニ至ルト雖解散ノ爲改選スル場合ヲ除クノ外ハ本項ヲ適用スルノ限ニ在ラス

第九條　大地主トハ郡內ニ於テ町村稅ノ賦課ヲ受クル所有地ニシテ地價總計一萬圓以上ヲ有スル地主ヲ云フ

第十條　郡內町村公民ニシテ町村會ノ選擧ニ參與スルコトヲ得ヘキ者及大地主中自ラ選擧ニ加ハルコトヲ得ヘキ者ハ總テ郡會ノ被選權ヲ有ス

住居ヲ移シタル爲町村ノ公民權ヲ失ヒタル者其住居同郡內ニ在リ且他ノ要件ヲ失ハサルトキハ仍郡會ノ被選權ヲ有ス

左ニ揭クル者ハ選擧ニ係ルト否トヲ問ハス郡會議員タルコトヲ得ス

一　所屬府（東京府ハ警視廳ト稱ス）縣並ニ其郡ノ官吏

二　其郡ノ有給吏員
三　神官諸宗ノ僧侶又ハ教師
四　小學校教員

前項ノ外ノ官吏ニシテ常選ニ應シ又ハ第八條第二項ノ權利ヲ行ハントスルトキハ本屬長官ノ許可ヲ受クヘシ

第十一條　大地主ニシテ選擧權ヲ有スルハ帝國臣民ニシテ公權ヲ有スル男子ニ限ル

年齡二十歳未滿ノ者及治產ノ禁ヲ受ケタル者ハ選擧權ヲ有セサルモノトス

大地主ノ選擧權ハ身代限處分中又ハ租稅滯納處分中又ハ公權ノ剝奪若ハ停止ヲ附加スヘキ重輕罪ノ爲裁判上ノ訊問若ハ勾留中ハ之ヲ停止ス

本條ノ規定ハ選擧ニ依ラスシテ郡會議員タル者ニモ適用ス

第十二條　選擧權ヲ有スル大地主ハ代人ヲ以テ選擧ヲ行フコトヲ得

陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ代人ヲ以テスルニ非サレハ選擧ヲ行フコトヲ得ス

代人ハ帝國臣民ニシテ公權ヲ有シ町村制ニ定メタル獨立ノ男子ニ限ル但一人ニシテ數人ノ代理ヲ爲スコトヲ得ス且代人ハ委任狀ヲ以テ代理ノ證トスヘシ

本條ノ規定ハ第八條第二項ノ權利ヲ行フ場合ニモ適用スルモノトス但其代人ハ郡會ニ被選權ヲ有スル者ニシテ郡會議員タラサル者ニ限ル

第十三條　郡會議員ハ名譽職トス

町村ニ於テ選擧シタル議員ノ任期ハ六年トシ毎三年其半數ヲ改選ス若其員數二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシム初回ニ於テ解任スヘキ者ハ郡會議長郡會ニ於テ自ラ抽籤シテ之ヲ定ム

大地主ニ於テ選擧シタル議員ノ任期ハ三年トシ毎三年其全數ヲ改選ス

解任ノ議員ハ再選セラルヽコトヲ得

第十四條　議員中闕員アルトキハ遲クトモ六箇月以内ニ補闕選擧ヲ行フヘシ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス

第十五條　郡長ハ郡會議員改選前選擧權アル大地主ノ名簿ヲ製シ之ニ其資格ヲ記載シ其氏名ヲ告示スヘシ

關係者ニ於テ大地主名簿ノ正否ニ關シ異議アルトキハ告示後二十一日以内ニ郡長ニ申立テ其郡長ノ裁決ニ不服ナル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服ナル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

大地主名簿ニ登錄セラレサル者ハ選擧ニ參與シ及第八條第二項ニ依リ郡會議員タルコトヲ得ス

大地主名簿ハ次ノ定期改選前ニ行フヘキ補闕選擧ニモ亦適用スルモノトス但大地主ノ資格ヲ失ヒ又ハ選擧權ノ要件ヲ失ヒタル者ハ之ヲ削除シ其氏名ヲ告示スヘシ其處分ニ對シ異議アルトキハ本條第二項ノ例ニ依ル

定期改選ノ期限内新ニ選擧權ヲ得又ハ選擧ニ依ラスシテ郡會議員タルノ權利ヲ得タル者ハ解散ノ爲改選スル場合ヲ除ク外期限内ニ於テ其名簿ニ登錄セサルモノトス

第十六條　郡會議員ノ選擧ハ郡長ノ告示ニ依リ之ヲ行フヘシ

其告示ハ遲クトモ選擧ノ日ヨリ七日前ニ之ヲ發スヘシ

第十七條　選擧ノ順序ハ先ツ町村之ヲ行ヒ次ニ大地主之ヲ行

フヘシ

町村ニ於テ行フ選擧ハ町村制第四十六條ノ規定ニ從フヘシ

但數町村會會同シテ行フ選擧ハ郡長又ハ郡長ノ指定スル町村長ヲ選擧會長トシテ之ヲ行フヘシ

大地主ニ於テ行フ選擧ハ郡長ヲ選擧會長トシテ之ヲ行フヘシ

第十八條　大地主ニ於テ選擧ヲ行フトキハ左ノ規定ニ依ルヘシ

一　郡長ハ遲クトモ選擧ノ日ヨリ七日前選擧人ニ招集狀ヲ發シ選擧ノ場所日時ヲ告知スヘシ

二　選擧掛ハ選擧會長ニ於テ臨時ニ選擧人中ヨリ選任シタル立會人二名若ハ四名及選擧會長ヲ以テ之ヲ組織ス

三　選擧會長ハ選擧會ヲ開閉シ其會場ノ取締ニ任ス

四　投票ハ選擧人自ラ選擧會長ノ面前ニ於テ之ヲ投票函ニ投入ス

投票ハ匿名トス

五　左ノ投票ハ之ヲ無效トス

一　記載セル人名ノ讀ミ難キモノ

二　被選人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ

三　被選權ナキ人名ヲ記載スルモノ

四　被選人氏名ノ外他ノ文字ヲ記入スルモノ但官位職業身分住所又ハ敬稱ハ此限ニ在ラス

本項一ヨリ三ニ至ルノ場合ニ於テ票中他ニ列記ノ被選人ニ付テハ仍其効アリトス

投票ノ受理竝ニ効力ニ關スル事項ハ選擧掛假ニ之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ選擧會長之ヲ決ス

六　有効投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キモノハ年長者ヲ取リ年齡相同キトキハ選擧會長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定ム

七　選擧掛ハ選擧錄ヲ製シテ選擧ノ顚末ヲ記錄シ選擧ヲ終リタル後之ヲ朗讀シテ署名スヘシ

八　投票ハ選擧ノ効力確定スル迄之ヲ保存スヘシ

第十九條　選擧ヲ終リ當選人定マリタルトキハ町村會ニ於テ行フ選擧ニ在テハ町村長數町村會會同シテ行フ選擧及大地主ニ於テ行フ選擧ニ在テハ選擧會長直ニ當選人ニ通知シ町村長ハ之ヲ郡長ニ報告スヘシ

當選人當選ノ通知ヲ受ケタルトキハ五日以内ニ其當選ヲ承諾スルヤ否ヲ郡長ニ届出ヘシ

一人ニシテ數箇所ノ選擧ニ當リタルトキハ同期限内ニ何レノ選擧ニ應スヘキコト及選擧ニ依ラスシテ郡會議員タルヘキ大地主ニシテ町村ノ選擧ニ當選シタルトキハ其選擧ニ應スルコト又ハ應セサルコトヲ同期限内ニ郡長ニ届出ヘシ

前二項ノ届出ヲ其期限内ニ爲サヽルトキハ選擧ヲ辭スル者ト視做スヘシ

町村ノ選擧ニ應スル大地主ハ第八條第二項ノ權利ヲ有スル者ト雖二重ニ其權ヲ行フコトヲ得サルモノトス

第二十條　議員ノ當選ヲ辭シ又ハ承諾ノ届出ヲ爲サヽル者アルトキハ郡長ハ七日以内ニ更ニ選擧ヲ行ヒ又ハ町村長ニ命シテ更ニ選擧ヲ行ハシムヘシ

第二十一條　當選人確定シタルトキハ郡長ハ直ニ當選證書ヲ

付與シ及管内ニ告示スヘシ

第二十二條　選擧人選擧ノ効力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選擧ノ日ヨリ十四日以内ニ之ヲ郡長ニ申立ツルコトヲ得

第二十三條　當選人其當選ノ際資格ノ要件ヲ有セサリシコト發覺スルトキハ其當選ハ無効トス

當選人當選後資格ノ要件ヲ失フトキハ議員ノ職ヲ失フモノトス

第二十四條　郡會ニ於テ其議員中議員ノ資格ヲ有セサル者アルコトヲ發見スルトキハ其議決ヲ以テ之ヲ郡長ニ通知スヘシ

第二十五條　郡會議員被選權ノ有無及選擧ノ効力ハ郡參事會之ヲ裁決ス

郡參事會ノ裁決ニ不服ナル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服ナル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十六條　郡會ノ議決スヘキ事件左ノ如シ

一　郡ノ歳入出豫算ヲ定ムル事

二　決算報告ヲ認定スル事

三　郡有不動産ノ賣買交換讓渡讓受並ニ質入書入ノ事

四　歳入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除ク外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ棄却ヲ爲ス事

五　郡有財産ノ管理及營造物ノ維持方法ヲ定ムル事

其他法律命令ニ依リ郡會ノ權限ニ屬スル事項ヲ議決ス

第二十七條　郡會ハ其權限ニ屬スル事件ヲ郡參事會ニ委任スルコトヲ得

第二十八條　郡會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述スヘシ」

第三十條　郡會ハ其郡ノ全部又ハ一部ノ公益ニ關スル事件ニ付郡長又ハ府縣知事ニ建議スルコトヲ得

第三十一條　郡會ハ改選後ノ初會ニ於テ議長代理者一名ヲ互選スヘシ

郡會ハ郡長ヲ以テ議長トス

議長及議長代理者共ニ故障アルトキハ臨時議長代理ヲ互選スヘシ

第三十二條　郡會ハ每年一回通常會ヲ開クヘシ其他必要アルトキハ其事件ニ限リ臨時會ヲ開クコトヲ得

郡會ハ郡長之ヲ招集ス若議員三分ノ一以上ニ於テ臨時ノ招集ヲ請求スルトキハ之ヲ招集スヘシ招集ハ開會ノ日ヨリ十四日前迄ニ告示スヘシ但急施ヲ要スル場合ハ此限ニ在ラス」

郡會ハ郡長之ヲ開閉ス

第三十三條　郡會ハ議員半數以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス但同一ノ議事ニ付開會再同ニ至ルモ議員猶其半數ニ滿タサルトキハ此限ニ在ラス

第三十四條　郡會ノ議決ハ過半數ニ依ル可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第三十五條　議員ハ自己及其父母兄弟若ハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ會議ノ承諾ヲ經ルニ非サレハ郡會ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス

第三十六條　郡會ニ於テ選擧ヲ行フトキハ第十八條四ヨリ六ニ至ル規定ニ依ルヘシ

第三十七條　郡會ノ會議ハ公開ス但左ノ場合ハ此限ニ在ラス

一　郡長ヨリ傍聽禁止ノ要求ヲ受ケタルトキ

二　議長又ハ議員三名以上ノ發議ニ由リ傍聽禁止ヲ可決シタルトキ

議長又ハ議員ノ發議ハ討論ヲ用ヰスシテ其可否ヲ決スヘシ

第三十八條　議長ハ議事ノ順序ヲ定メ會議及選擧ノ事ヲ總理シ其日ノ會議ヲ開閉シ並ニ延會シ議場ノ秩序ヲ保持ス

第三十九條　議員ハ會議中無禮ノ語ヲ用ヰ及他人ノ身上ニ渉リ言論スルコトヲ得ス

第四十條　會議中此法律若ハ議事規則ニ違ヒ其他議場ノ秩序ヲ紊ル議員アルトキハ議長ハ之ヲ警戒シ又ハ制止シ又ハ發言ヲ取消サシムル命ニ從ハサルトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ終ルマテ發言ヲ禁止シ又ハ議場ノ外ニ退去セシムヘシ若强抗ニ渉ル者アルトキハ警察官ノ處分ヲ求ムルコトヲ得

議場騷擾ニシテ整理シ難キトキハ議長ハ當日ノ會議ヲ中止シ又ハ之ヲ閉ツルコトヲ得

第四十一條　會議ノ傍聽人公然可否ヲ表シ又ハ喧噪ニ渉リ其他議事ノ妨害ヲ爲ス者アルトキハ議長ハ之ヲ制止シ若命ニ從ハサルトキハ之ヲ退場セシメ必要ナル場合ニ於テハ警察官ノ處分ヲ求ムルコトヲ得

傍聽席騷擾ナルトキハ議長ハ總テノ傍聽人ヲ退場セシムルコトヲ得

第四十二條　郡長若ハ特ニ其委任ヲ受ケタル吏員及議員ハ議場ノ秩序ヲ紊リ又ハ議場ノ妨害ヲ爲ス者アルトキハ議長ノ注意ヲ喚起スルコトヲ得

第四十三條　郡會ニ書記ヲ置キ議長ニ隷屬シテ庶務ヲ掌理セシム

書記ハ議長之ヲ選任ス但郡吏員ヲシテ之ヲ兼シムルコトヲ得

第四十四條　郡會ハ書記ヲシテ議事錄ヲ製シ議決及選擧ノ顚末並ニ出席議員ノ氏名ヲ記錄セシムヘシ議事錄ハ議長及議員二名以上之ニ署名スヘシ其議員ハ會議ノ前郡會ニ於テ豫メ之ヲ定メ議事錄中ニ其氏名ヲ記載シ置クヘシ

第四十五條　郡會ハ議事規則及傍聽人取締規則ヲ設ケ府縣知事ノ認可ヲ受ケテ之ヲ施行スヘシ

第三章　郡參事會、吏員及委員

第四十六條　郡ニ郡參事會ヲ置キ郡長及名譽職參事會員四名ヲ以テ之ヲ組織ス

名譽職參事會員中三名ハ郡會ニ於テ其議員中ヨリ互選シ一名ハ府縣知事ニ於テ郡會議員若ハ郡內町村ノ公民中ヨリ選任スヘシ

第四十七條　郡參事會ハ郡長ヲ以テ議長トス議長故障アルトキハ會員ニ於テ臨時議長代理ヲ互選スヘシ

第四十八條　郡會ハ每通常會ニ於テ郡會ノ互選シタル名譽職參事會員ノ補充員三名ヲ互選シ其名譽職參事會員ノ闕員アルトキハ郡長ニ於テ補充員中投票多數ノ順次ニ依リ之ヲ補充スヘシ但其既ニ補充シタル者ハ前任者ノ任期中在職スルモノトス

第四十九條　名譽職參事會員ノ任期ハ議員ノ任期ニ從フ但任期滿限ノ後ト雖後任者就職ノ日迄在職スルモノトス

郡會ノ互選シタル名譽職參事會員ハ補充員ヲ以テ其關員ヲ補充シ仍關員ヲ生シタル場合ニ於テハ二箇月以內ニ臨時其選擧ヲ行フヘシ

第五十條　郡參事會ノ職務權限左ノ如シ

一　郡會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ其委任ヲ受ケタルモノヲ議決スル事

二　郡會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ臨時急施ヲ要シ郡長ニ於テ郡會ヲ招集スルノ暇ナシト認ルトキ郡會ニ代テ議決ヲ爲ス事

三　郡會ノ定メタル方法ノ範圍內ニ於テ郡有財產ノ管理又ハ營造物ノ維持ニ關シ必要ナル事件ニ付議決ヲ爲ス事

四　郡ノ費用ヲ以テ支辨スル工事ノ次第順序其他必要ナル事件ニ付議決ヲ爲ス事

五　郡長其他官廳ノ諮問ニ對シ意見ヲ述フル事

六　郡長ヨリ發スル郡會議案ニ付郡長ニ意見ヲ述ヘ及會議ニ報告スル事

七　臨時必要アルトキ郡ノ出納ヲ檢查スル事

其他法律命令ニ依リ郡參事會ノ權限ニ屬スル事務ヲ處理ス

第五十一條　郡參事會ハ郡長之ヲ招集ス

會員半數以上ノ請求アルトキハ郡長ハ郡參事會ヲ招集スヘシ

第五十二條　郡參事會ノ會議ハ傍聽ヲ許サス

第五十三條　郡參事會ハ議長又ハ其代理者及會員半數以上出席スルニ非サレハ會議ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス

郡參事會ノ議決ハ過半數ニ依ル可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

議決ノ事件ハ之ヲ議事錄ニ登記シ議長及名譽職參事會員二名以上之ニ署名スヘシ

第五十四條　郡參事會員ハ自己及其父母兄弟若ハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付郡參事會ノ議事ニ參與シ及議決ニ加ハルコトヲ得ス

前項ノ規定ノ爲出席ノ參事會員減少シテ前條第一項ノ數ヲ得サルトキハ郡長ハ補充員ヲ以テ臨時之ニ充テ仍其數ヲ得サルトキハ郡會議員ニシテ該事件ニ關係ナキ者ノ內ヨリ臨時ニ指名シ名譽職參事會員ノ足不ヲ補充シテ第四十六條ノ定數ニ滿タシムヘシ

第五十五條　町村制ノ規定ニ依リ郡參事會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ二郡以上ノ町村ニ交涉スルモノアルトキハ其郡長ノ具狀ニ依リ府縣知事ニ於テ其事件ヲ管理スヘキ郡參事會ヲ指定スヘシ二府縣以上ノ町村ニ交涉スルモノアルトキハ其府縣知事ノ具狀ニ依リ內務大臣ニ於テ之ヲ指定スヘシ

第五十六條　郡長ハ郡會及郡參事會ノ議決ヲ施行シ及郡有ノ財產及營造物ヲ管理シ並ニ郡ノ費用ヲ以テ支辨スル工事ヲ執行ス

郡ニ於テ他人ニ對シ義務ヲ負擔スヘキ證書及委任狀ニハ郡長ノ外名譽職參事會員二名以上之ニ署名捺印スヘシ

前項ノ文書中郡會又ハ參事會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ其議決ヲ經タルモノハ其旨ヲ記入スヘシ

第五十七條　郡會ニ於テ名譽職參事會員ヲ選擧セス又ハ參事會成立セス又ハ招集ニ應セサルトキハ參事會成立シ又ハ招集ニ應スル迄郡長ハ郡參事會ノ權限ニ屬スル事件ヲ專決處分スルコトヲ得

非常事變ニ際シ郡參事會ヲ招集スルノ暇ナク又ハ名譽職參事會員ノ出席半數以上ニ至ラサルトキハ郡長ハ郡參事會ノ權限ニ屬スル事件ヲ專決處分スルコトヲ得

本條ノ處分ハ次回ノ郡會會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第五十八條　郡ハ府縣稅ヲ以テ支辨スル郡吏員ノ外郡會ノ議決ニ依リ郡ノ費用ヲ以テ郡有財產又ハ營造物ノ管理若ハ土木工事ニ必要ナル有給郡吏員ヲ置クコトヲ得但其郡吏員ハ他ノ郡吏員ニ準シ府縣知事ニ於テ之ヲ任免監督ス

前項郡吏員ノ給料手當退隱料等ハ郡會ノ議決スル所ニ依ル

其身元保證金ヲ要スルトキ其金額ヲ定ムルモ亦同シ

第五十九條　郡長ハ郡會ノ議決ヲ經テ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置キ郡事務ノ一部ヲ調查セシメ又ハ郡有財產及營造物ノ一部ヲ管理セシムルコトヲ得

委員ハ郡會ニ於テ之ヲ選擧ス其選擧ノ方法及任期ハ郡會ノ議決スル所ニ依ル

委員ハ名譽職トス

第四章　郡ノ會計

第六十條　郡有財產及營造物管理ノ費用郡會郡參事會及委員ノ費用第五十八條ノ郡吏員ノ給料退隱料其他諸給與及法律勅令ニ依リ郡ノ負擔ト定ムル事件ノ費用ハ其郡ニ於テ之ヲ支辨スヘシ

第六十一條　郡會議員名譽職參事會員及委員ニハ旅費及日當ヲ給スルコトヲ得但日當ハ一日五十錢ヲ超ユルコトヲ得ス

第六十二條　郡ノ支出ニ充ツル費用ハ郡有財產ヨリ生スル收入其他雜收入ヲ以テ充ツルモノヽ外ハ郡內各町村ニ分賦ス各町村分賦ノ割合ハ各町村前年度ノ直接國稅府縣稅ノ徵收額ニ據ル

各町村分賦ノ額ハ各町村ニ於テ之ヲ町村ノ豫算ニ編入シ町村稅トシテ徵收シ其總額ヲ郡金庫ニ納ムヘシ

第六十三條　郡內ノ或ル部分ニ對シ特ニ利益アル土木事業ヲ起ストキハ郡會ノ議決ニ依リ該部分ノ町村ニ對シ通常分賦額ノ外其利益ノ厚薄ニ應シ特ニ夫役現品ヲ增課スルコトヲ得

第六十四條　郡ハ天災事變ノ爲已ムヲ得サル支出又ハ其郡ノ永久ノ利益ト爲ルヘキ支出ヲ要スルニ方リ通常ノ歲入ヲ增加スルトキハ郡內町村ノ負擔ニ堪ヘサルノ場合ニ限リ勅令ノ定ムル所ニ依リ郡會ノ議決ヲ以テ郡債ヲ起スコトヲ得

郡債ヲ起スノ議決ヲ爲ストキハ併セテ起債ノ方法利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定ムヘシ

郡債償還ノ初期ハ三年以內ト爲シ年々ノ償還步合ヲ定メ起債ノ時ヨリ三十年以內ニ還了スヘシ

歲入出豫算內ノ支出ヲ爲スカ爲必要ナル一時ノ借入金ニシテ其年度內ノ收入ヲ以テ償還スヘキモノハ本條ノ例ニ依ルノ限ニ在ラス但郡參事會ノ議決ヲ經ルコトヲ要ス

第六十五條　郡長ハ每年其翌年度ニ係ル歲入出豫算ヲ調製スヘシ但郡ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

豫算ハ郡會ノ議決ニ付スルノ前郡參事會ノ審查ニ付スヘシ若郡長ト郡參事會ト意見ヲ異ニスルトキハ郡長ハ參事會ノ意見ヲ豫算ニ添ヘ郡會ニ提出スヘシ追加又ハ臨時ノ豫算ニ付テモ亦同シ

內務大臣ハ省令ヲ以テ豫算調製ノ式ヲ定メ並ニ費目流用ニ關スル規定ヲ設クルコトヲ得

第六十六條　豫算ハ毎年郡會ノ議決ヲ取リ之ヲ府縣知事ニ報告シ竝ニ郡慣行ノ公告式ニ依リ其要領ヲ告示スヘシ追加又ハ臨時ノ豫算ヲ議決シタル場合ニ於テモ亦同シ

郡ノ費用ヲ以テ支辨スル事業ニシテ數年ヲ期シテ施行スヘキモノ又ハ數年ヲ期シテ其費用ヲ支出スヘキモノハ郡會ノ議決ヲ以テ其年期間各年度ノ支出額ヲ定メ繼續費ト爲スコトヲ得

豫算ヲ郡會ニ提出スルトキハ郡長ハ併セテ其郡有財産表ヲ提出スヘシ

第六十七條　歳入出豫算中ニ豫備費ヲ設クヘシ豫備費ハ郡長ニ於テ郡參事會ノ議決ヲ經テ已ムヲ得サル豫算外ノ支出又ハ豫算超過ノ支出ニ充ツルコトヲ得但郡會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第六十八條　郡ノ收支命令ハ郡長之ヲ發スヘシ

第六十九條　會計事務ヲ管理スル郡役所會計吏ハ前條ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス及其命令アルモ支出ノ豫算ナキカ又ハ豫備費支出及費目流用ノ規定ニ依ラサルトキハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

第七十條　郡ノ出納ハ毎月例日ヲ定メテ檢査シ及毎年少クトモ一回臨時檢査ヲ爲スヘシ檢査ハ郡長又ハ其代理者之ヲ爲シ臨時檢査ニハ郡參事會員一名以上ノ立會ヲ要ス

第七十一條　決算ハ會計事務ヲ管理スル郡役所會計吏ニ於テ會計年度後三箇月以内ニ之ヲ郡長ニ提出シ郡長ハ郡參事會ヲシテ之ヲ檢査セシメ次同ノ適當郡會ノ認定ニ付スヘシ

決算報告書竝ニ之ニ關スル郡會ノ議決ハ郡長ヨリ之ヲ府縣知事ニ報告シ竝ニ決算ハ郡慣行ノ公告式ニ依リ其要領ヲ告示スヘシ

第五章　監督

第七十二條　郡ノ行政ハ第一次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ二次ニ於テ內務大臣之ヲ監督ス

第七十三條　此法律中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外郡ノ行政ニ關スル府縣知事又ハ府縣參事會ノ處分若ハ裁決ニ不服ナル者ハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得

郡ノ行政ニ關スル訴願ハ其事件ノ處分若ハ裁決ヲ受クタル日ヨリ十四日以內ニ其理由ヲ具シタル之ヲ提出スヘシ

此法律ニ指定スル場合ニ於テ府縣知事ノ處分又ハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アリテ行政裁判所ニ出訴セントスル者ハ裁決ヲ受クタル日ヨリ二十一日以內ニ出訴スヘシ

行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得ヘキ場合ニ於テハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得ス

第七十四條　監督官廳ハ郡行政ノ法律命令ニ背戻セサルヤ其事務錯亂澁滯セサルヤ否ヲ監視スヘシ監督官廳ハ之カ爲行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ豫算及決算等ノ書類帳簿ヲ徵シ竝ニ實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納ヲ檢閱スルノ權ヲ有ス

第七十五條　郡會又ハ郡參事會ノ議決其權限ヲ超エ法律命令ニ背キ又ハ公益ヲ害スト認ムルトキハ郡長ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ更メサルトキハ直ニ府縣知事ノ裁決ヲ請フヘシ其權限ヲ越エ又ハ法律命令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣知事ノ裁決ニ不服ナル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十六條　郡會又ハ郡參事會ニ於テ法律命令又ハ慣行ニ依ラ郡ノ負擔ニ屬スル行政上又ハ公益上必要ノ費用ヲ否決シ又ハ議決スト雖必要ノ給需ヲ缺クトキハ郡長ハ府縣知事ニ具狀シ其指揮ヲ請ヒ原案ヲ執行スルコトヲ得但府縣知事ハ原案金額ヲ不相當ト認ムルトキハ原案金額以內ニ於テ適當ノ金額ヲ定メ指揮スルコトヲ得

第七十七條　郡會招集ニ應セス又ハ成立セサルトキハ郡長ハ府縣知事ノ指揮ヲ請ヒ處分スルコトヲ得

前項ノ處分ハ次同ノ會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第七十八條　郡會又ハ郡參事會ニ於テ其議決スヘキ議案ヲ議決セサル場合ニ於テ其事緊急ヲ要スルトキハ郡長ハ府縣知事ニ具狀シ其指揮ヲ請ヒ原案ヲ執行スルコトヲ得但其議決セサル議案歳入出豫算ニ係リ府縣知事ニ於テ原案金額ヲ不相當ト認ムルトキハ原案金額以內ニ於テ適當ノ金額ヲ定メ指揮スルコトヲ得

第七十九條　府縣知事ハ郡ノ歳入出豫算中不適當ノ支出ト認ムル費目アルトキハ之ヲ削除シ及其郡ノ資力ニ比シ不急ノ支出ト認ムル費目アルトキハ之ヲ削除若ハ減殺スルコトヲ得此場合ニ於テハ收入科目中ニ就キ之ニ相當スル收入額ヲ減殺スヘシ

第八十條　郡會ハ內務大臣之ヲ解散セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ三箇月以內ニ議員ヲ改選スヘシ

前項解散ノ場合ニ於テハ名譽職參事會員モ亦解職スルモノトス

郡委員ハ郡會ノ解散ニ依リ解職スルノ限ニ在ラス但改選郡會ノ議決ヲ以テ之ヲ改選スルコトヲ得

郡會解散ノ後改選結了ニ至ル迄ノ間急施ヲ要スル事件アルトキハ郡長之ヲ專決處分スルコトヲ得

前項ノ處分ハ次同ノ會議ニ於テ之ヲ報告スヘシ

第八十一條　左ノ事件ニ關スル郡會ノ議決ハ內務大臣及大藏大臣ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

一　新ニ郡債ヲ起シ又ハ其額ヲ增加シ若ハ償還ノ方法ヲ變更スル事

第八十二條　左ノ事件ニ關スル郡會ノ議決ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

一　郡有不動產ノ賣却讓渡竝ニ賈入書入ノ事

二　第六十三條ニ依リ郡內ノ或ル部分ニ對シ特ニ夫役現品ヲ增課スル事

三　第六十六條第二項ニ依リ繼續費ヲ定メ及其年期內ニ議決ヲ變更スル事

第六章　附則

第八十三條　郡內總町村ノ共有ニ屬スル財產及營造物ハ郡內總町村ノ聯合又ハ組合ヲ以テ設立セル小學校ヲ除クノ外此法律施行ノ日ヨリ郡ノ所有ニ歸シ其權利義務トモ同時ニ郡ニ移ルモノトス

第八十四條　府縣參事會及行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間此法律ニ依リ府縣參事會ニ屬スル職務ハ府縣知事、行政裁判所ニ屬スル職務ハ現行ノ行政裁判手續ニ從ヒ控訴院ニ於テ之ヲ行フヘシ

第八十五條　島司ヲ置ケル島嶼ニ於テハ別ニ勅令ヲ以テ其制ヲ定ム

第八十六條　此法律ニ依リ始メテ議員ヲ選擧スルニ付郡會及

郡參事會ノ職務ハ郡長ニ於テ之ヲ行フヘシ

第八十七條　町村制施行ノ爲ニ定ムル直接稅ノ種類ハ此法律ノ施行ニ付テモ亦適用ス

第八十八條　此法律施行ノ後ハ町村制第百二十六條第三ニ定ムル附加稅徵收ノ許可ハ地租七分ノ一、五(十四分ノ三)ヲ超過スルトキ之ヲ要スルモノトス

第八十九條　此法律ハ町村制ヲ施行シタル各府縣ニ施行スルモノトス其施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ內務大臣之ヲ定ム

第九十條　明治十一年七月第十七號布告郡區町村編制法其他此法律ニ牴觸スル成規ハ此法律施行ノ地ニ於テ其施行ノ時期ヨリ總テ之ヲ廢止ス

第九十一條　內務大臣ハ此法律施行ノ責ニ任シ之カ爲必要ナル命令ヲ發布スヘシ

○區郡部會規則

明治十四年二月第八號布告

東京府京都府大阪府神奈川縣區郡部會規則左ノ通相定メ明治十三年五月第二十六號及第二十七號布告廢止候條此旨布告候事

但三府神奈川縣ノ外區制ヲ設クタル諸縣ニ於テハ政府ノ裁可ヲ經テ此規則ヲ施行スルコトヲ得(十四年第二十號布告ヲ以テ但書追加)

第一條　三府及ヒ神奈川縣ニ於テハ府縣會ヲ分テ區部會郡部會トナシ區郡部郡部ニ分別シタル事件ヲ議定セシム

第二條　區部會郡部會ニ於テ議定スヘキ事件ト府縣會ニ於テ議定スヘキ事件トハ府縣會ニ於テ之ヲ議定ス

第三條　府縣會規則第十條ノ定限外ニ於テ區部議員ノ增加ヲ要スルトキハ府知事「縣令」ヨリ「內務卿」ニ具狀シ其認可ヲ得テ其定限ヲ殊ニスルコトヲ得

第四條　府縣會ハ區部郡部議員各半數以上出席スルニアラサレハ其日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第五條　府縣會ノ議定ニ屬スル事件ニ付テハ區部郡部常置委員會同シテ諮問ヲ受ケ又ハ議決スヘシ

但區部郡部常置委員各半數以上出席スルニアラサレハ其日ノ會議ヲ開クヲ得ス

第六條　(十五年第十二號布告ヲ以テ削除)(十五年第十二號布告ヲ以テ削除)

第七條　明治十三年度以前ニ係ル地方稅ノ中區郡連帶支辨セルモノハ其決算ヲ府縣會ニ報告シ區郡ニ分別セルモノハ其決算ヲ各別ニ區部會郡部會ニ報告スヘシ

第九條　區部ニ係ル戶數割ハ區部會ノ決議ヲ經テ府知事「縣令」ヨリ「內務大藏兩卿」ニ具狀シ政府ノ裁可ヲ得テ家屋稅ト爲スコトヲ得(十五年第十二號布告ヲ以テ追加)

第二章　市制町村制

○市制町村制

明治二十一年四月法律第一號

朕地方共同ノ利益ヲ發達セシメ衆庶臣民ノ幸福ヲ增進スルコトヲ欲シ隣保團結ノ舊慣ヲ存重シテ益之ヲ擴張シ更ニ法律ヲ以テ都市及町村ノ權義ヲ保護スルノ必要ヲ認メ茲ニ市制及町村制ヲ裁可シテ之ヲ公布セシム

市制

第一章　總則

第一款　市及其區域

第二款　市住民及其權利義務

第三款　市條例

第二章　市會

第一款　組織及選擧

第二款　職務權限及處務規程

第三章　市行政

第一款　市參事會及市吏員ノ組織選任

第二款　市參事會及市吏員ノ職務權限及處務規程

第三款　給料及給與

第四章　市有財產ノ管理

第一款　市有財產及市稅

第二款　市ノ歲入出豫算及決算

第五章　特別ノ財產ヲ有スル市區ノ行政

第六章　市行政ノ監督

第七章　附則

市制

第一章　總則

第一款　市及其區域

第一條　此法律ハ市街地ニシテ郡ノ區域ニ屬セス別ニ市ト爲スノ地ニ施行スルモノトス

第二條　市ハ法律上一個人ト均ク權利ヲ有シ義務ヲ負擔シ凡市ノ公共事務ハ官ノ監督ヲ受ケテ自ラ之ヲ處理スルモノトス

第三條　凡市ハ從來ノ區域ヲ存シテ之ヲ變更セス但將來其變更ヲ要スルコトアルトキハ此法律ニ準據スヘシ

第四條　市ノ境界ヲ變更シ又ハ町村ヲ市ニ合併シ及市ノ區域ヲ分割スルコトアルトキハ町村制第四條ヲ適用ス

第五條　市ノ境界ニ關スル爭論ハ府縣參事會之ヲ裁決ス其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二款　市住民及其權利義務

第六條　凡市內ニ住居ヲ占ムル者ハ總テ其市住民トス

凡市住民タル者ハ此法律ニ從ヒ公共ノ營造物並市有財產ヲ共有スルノ權利ヲ有シ及市ノ負擔ヲ分任スルノ義務ヲ有スルモノトス但特ニ民法上ノ權利及義務ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第七條　凡帝國臣民ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子二年以來(一)市ノ住民トナリ(二)其市ノ負擔ヲ分任シ及(三)其市內ニ於テ地租ヲ納メ若クハ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムル者ハ其市公民トス其公民ヲ以テ救助ヲ受クタル後二年ヲ經サル者ハ此限ニ在ラス但場合ニ依リ市會ノ議決ヲ以テ本條ニ定ムル二箇年ノ制限ヲ特免スルコトヲ得

此法律ニ於テ獨立ト稱スルハ滿二十五歲以上ニシテ一戶ヲ構ヘ且治產ノ禁ヲ受クサル者ヲ云フ

第八條　凡市公民ハ市ノ選擧ニ參與シ市ノ名譽職ニ選擧セラルヽノ權利アリ又其名譽職ヲ擔任スルハ市公民ノ義務ナリトス

左ノ理由アルニ非サレハ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職スルコトヲ得ス

一　疾病ニ罹リ公務ニ堪ヘサル者
二　營業ノ爲メニ常ニ其市内ニ居ルコトヲ得サル者
三　年齡滿六十歳以上ノ者
四　官職ノ爲メニ市ノ公務ヲ執ルコトヲ得サル者
五　四年間無給ニシテ市吏員ノ職ニ任シ爾後四年ヲ經過セサル者及六年間市會議員ノ職ニ居リ爾後六年ヲ經過セサル者
六　其他市會ノ議決ニ於テ正當ノ理由アリト認ムル者

前項ノ理由ナクシテ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職シ若シクハ無任期ノ職務ヲ少クモ三年間擔當セス又ハ其職務ヲ實際ニ執行セサル者ハ市會ノ議決ヲ以テ三年以上六年以下其市公民タルノ權ヲ停止シ且同年期間其負擔スヘキ市費ノ八分一乃至四分一ヲ增課スルコトヲ得

前項市會ノ議決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ由訴スルコトヲ得

第九條　市公民タル者第七條ニ揭ケタル要件ノ一ヲ失フトキハ其公民タルノ權ヲ失フモノトス

市公民タル者身代限處分中又ハ公權ノ剝奪若クハ停止ヲ附加スヘキ重輕罪ノ爲メ裁判上ノ訊問若クハ勾留中又ハ租稅滯納處分中ハ其公民タルノ權ヲ停止ス

陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ市ノ公務ニ參與セサルモノトス」

市公民タル者ニ限リテ任スヘキ職務ニ在ル者本條ノ場合ニ當ルトキハ其職務ヲ解クヘキモノトス

第三款　市條例

第十條　市ノ事務及市住民ノ權利義務ニ關シ此法律中ニ明文ナク又ハ特例ヲ設クルコトヲ許セル事項ハ各市ニ於テ特ニ條例ヲ設ケテ之ヲ規定スルコトヲ得

市ニ於テハ其市ノ設置ニ係ル營造物ニ關シ規則ヲ設クルコトヲ得

市條例及規則ハ法律命令ニ牴觸スルコトヲ得ス且之ヲ發行スルトキハ地方慣行ノ公告式ニ依ルヘシ

第二章　市會

第一款　組織及選擧

第十一條　市會議員ハ其市ノ選擧人其被選擧權アル者ヨリ之ヲ選擧ス其定員ハ人口五萬未滿ノ市ニ於テハ三十人トシ人口五萬以上ノ市ニ於テハ三十六人トス

人口十萬以上ノ市ニ於テハ人口五萬ヲ加フル每ニ人口二十萬以上ノ市ニ於テハ人口十萬ヲ加フル每ニ議員三人ヲ增シ六十人ヲ定員トス

議員ノ定員ハ市條例ヲ以テ特ニ之ヲ增減スルコトヲ得但定限ヲ超ユルコトヲ得ス

第十二條　市公民（第七條）ハ總テ選擧權ヲ有ス但其公民權ヲ停止セラルヽ者（第八條第三項第九條第二項）及陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ此限ニ在ラス

凡內國人ニシテ公權ヲ有シ直接市稅ヲ納ムル者其額市公民ノ最多ク納稅スル者三名中ノ一人ヨリモ多キトキハ第七條ノ要件ニ當ラスト雖モ選擧權ヲ有ス但公民權ヲ停止セラルヽ者及陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ此限ニ在ラス

法律ニ從テ設立シタル會社其他法人ニシテ前項ノ場合ニ當ルトキモ亦同シ

第十三條　選擧人ハ分テ三級ト爲ス

選擧人中直接市稅ノ納額最多キ者ヲ合セテ選擧人總員ノ納ムル總額ノ三分一ニ當ル可キ者ヲ一級トス

一級選擧人ノ外直接市稅ノ納額多キ者ヲ合セテ選擧人總員ノ納ムル總額ノ三分一ニ當ル可キ者ヲ二級トシ爾餘ノ選擧人ヲ三級トス

各級ノ間納稅額兩級ニ跨ル者アルトキハ上級ニ入ル可シ又兩級ノ間ニ同額ノ納稅者二名以上アルトキハ其市ニ住居スル年數ノ多キ者ヲ以テ上級ニ入ル若シ住居ノ年數ニ依リ難キトキハ年齡ヲ以テシ年齡ニモ依リ難キトキハ市長抽籤ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

選擧人每級各別ニ議員ノ三分一ヲ選擧ス其被選擧人ハ同級內ノ者ニ限ラス三級ニ通シテ選擧セラルヽコトヲ得

第十四條　區域廣濶又ハ人口稠密ナル市ニ於テハ市條例ヲ以テ選擧區ヲ設クルコトヲ得但特ニ二級若クハ三級選擧ノ爲メ之ヲ設クルモ妨ケナシ

選擧區ノ數及其區域並各選擧區ヨリ選出スル議員ノ員數ハ市條例ヲ以テ選擧人ノ員數ニ準シ之ヲ定ムヘシ

選擧人ハ其住居ノ地ニ依テ其所屬ノ區ヲ定ムヘシ其市內ニ住居ナキ者ハ課稅ヲ受クタル物件ノ所在ニ依テ之ヲ定ムヘシ

選擧區ニ亘リ納稅スル者ハ課稅ノ最多キ物件ノ所在ニ依テ之ヲ定ムヘシ

選擧區ヲ設クルトキハ其選擧區ニ於テ選擧人ノ等級ヲ分ツヘシ

被選擧人ハ其選擧區內ノ者ニ限ラサルモノトス

第十五條　選擧權ヲ有スル市公民（第十二條第一項）ハ總テ被選擧權ヲ有ス

左ニ揭クル者ハ市會議員タルコトヲ得ス

一　所屬府縣ノ官吏
二　有給ノ市吏員
三　檢察官及警察官吏
四　神官僧侶及其他諸宗教師
五　小學校教員

其他官吏ニシテ常選シ之ニ應セントスルトキハ所屬長官ノ許可ヲ受ク可シ

代言人ニ非スシテ他人ノ爲メニ裁判所又ハ其他ノ官廳ニ對シテ事ヲ辨スルヲ以テ業ト爲ス者ハ議員ニ選擧セラルヽコトヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ市會議員タルコトヲ得ス其同時ニ選擧セラレタルトキハ投票ノ數ニ依テ其多キ者一人ヲ當選トシ若シ同數ナレハ年長者ヲ當選トス其時ヲ異ニシテ選擧セラレタル者ハ後者議員タルコトヲ得ス

市參事會員トノ間父子兄弟タルノ緣故アル者ハ之ト同時ニ市會議員タルコトヲ得ス若シ議員トノ間ニ其緣故アル者市參事會員ノ任ヲ受クルトキハ其緣故アル議員ハ其職ヲ退ク可シ

第十六條　議員ハ名譽職トス其任期ハ六年トシ每三年各級ニ於テ其半數ヲ改選ス若シ各級ノ議員二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシムル初回ニ於テ解任スヘキ者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

退任ノ議員ハ再選セラルヽコトヲ得

第十七條　議員中闕員アルトキハ每三年定期改選ノ時ニ至リ同時ニ補闕選擧ヲ行フ可シ若シ定員三分ノ一以上闕員アル

トキ又ハ市會市參事會若クハ府縣知事ニ於テ臨時補闕ヲ必要ト認スルトキハ定期前ト雖モ其補闕選擧ヲ行フ可シ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス

定期改選及補闕選擧トモ前任者ノ選擧セラレタル選擧等級及選擧區ニ從テ之ヲ選擧ヲ行フ可シ

第十八條　市長ハ選擧ヲ行フ毎ニ其選擧前六十日ヲ限リ選擧原簿ヲ製シ各選擧人ノ資格ヲ記載シ此原簿ニ據リテ選擧人名簿ヲ製ス可シ但選擧區ヲ設クルトキハ毎區各別ニ原簿及名簿ヲ製ス可シ

選擧人名簿ハ七日間市役所又ハ其他ノ場所ニ於テ之ヲ關係者ノ縱覽ニ供ス可シ若シ關係者ニ於テ訴願セントスルコトアルトキハ同期限內ニ之ヲ市長ニ申立ツ可シ市長ハ市會ノ裁決(第三十五條第一項)ニ依リ名簿ヲ修正ス可キトキハ選擧前十日ヲ限リテ之ニ修正ヲ加ヘテ確定名簿ト爲シ之ニ登錄セラレサル者ハ何人タリトモ選擧ニ關スルコトヲ得ス

本條ニ依リ確定シタル名簿ハ當選ヲ辭シ若クハ選擧ノ無効トナリタル場合ニ於テ更ニ選擧ヲ爲ストキモ亦之ヲ適用ス

第十九條　選擧ヲ執行スルトキハ市長ハ選擧ノ場所日時ヲ定メ及選擧ス可キ議員ノ數ヲ各級各區ニ分チ選擧前七日ヲ限リテ之ヲ公告ス可シ

各級ニ於テ選擧ヲ行フノ順序ハ先ツ三級ノ選擧ヲ行ヒ次ニ二級ノ選擧ヲ行フ可シ

第二十條　選擧掛ハ名譽職トシ市長ニ於テ臨時ニ選擧人中ヨリ二名若クハ四名ヲ選任シ市長若クハ其代理者ハ其掛長トナリ選擧會ヲ開閉シ其會場ノ取締ニ任ス但選擧區ヲ設クルトキハ每區各別ニ選擧掛ヲ設ク可シ

第二十一條　選擧開會中ハ選擧人ノ外何人タリトモ選擧會場ニ入ルコトヲ得ス選擧人ハ選擧會場ニ於テ協議又ハ勸誘ヲ爲スコトヲ得ス

第二十二條　選擧ハ投票ヲ以テ之ヲ行フ投票ニハ被選擧人ノ氏名ヲ記シ封緘ノ上選擧人自ラ掛長ニ差出ス可シ但選擧人ノ氏名ハ投票ニ記入スルコトヲ得ス

選擧人投票ヲ差出ストキハ自己ノ氏名及住所ヲ掛長ニ申立テ掛長ハ選擧人名簿ニ照シテ之ヲ受ケ封緘ノ儘投票函ニ投入ス可シ但投票函ハ投票ヲ終ル迄之ヲ開クコトヲ得ス

第二十三條　投票ニ記載ノ人員其選擧ス可キ定數ニ過キ又ハ不足アルモ其投票ヲ無効トセス其定數ニ過クルモノハ末尾ニ記載シタル人名ヲ順次ニ棄却ス可シ

左ノ投票ハ之ヲ無効トス

一　人名ヲ記載セス又ハ記載セル人名ノ讀ミ難キモノ

二　被選擧人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ

三　被選擧權ナキ人名ヲ記載スルモノ

四　被選擧人氏名ノ外他事ヲ記入スルモノ

投票ノ受理並効力ニ關スル事項ハ選擧掛假ニ之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ掛長之ヲ決ス

第二十四條　選擧ハ選擧人自ラ之ヲ行フ可シ他人ニ託シテ投票ヲ差出スコトヲ許サス

第十二條第二項ニ依リ選擧權ヲ有スル者ハ代人ヲ出シテ選擧ヲ行フコトヲ得若シ其獨立ノ男子ニ非サル者又ハ會社其他法人ニ係ルトキハ必ス代人ヲ以テス可シ其代人ハ內國人ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子ニ限ル但一人ニシテ數人ノ代理ヲ爲スコトヲ得ス且代人ハ委任狀ヲ選擧掛ニ示シテ代

理ノ證トス可シ

第二十五條　議員ノ選擧ハ有効投票ノ多數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス投票ノ數相同キモノハ年長者ヲ取リ同年ナルトキハ掛長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定ム

同時ニ補闕員數名ヲ選擧スルトキハ(第十七條)投票數ノ最多キ者ヲ以テ殘任期ノ最長キ前任者ノ補闕ト爲シ其數相同キトキハ抽籤ヲ以テ其順序ヲ定ム

第二十六條　選擧掛ハ選擧錄ヲ製シテ選擧ノ顚末ヲ記錄シ選擧ヲ終リタル後之ヲ朗讀シ選擧人名簿其他關係書類ヲ合綴シテ之ニ署名ス可シ

投票ハ之ヲ選擧錄ニ附屬シ選擧ヲ結了スルニ至ル迄之ヲ保存ス可シ

第二十七條　選擧ヲ終リタル後選擧掛長ハ直ニ當選者ニ其當選ノ旨ヲ告知ス可シ其當選ヲ辭セントスル者ハ五日以內ニ之ヲ市長ニ申立ツ可シ

一人ニシテ數級又ハ數區ノ選擧ニ當リタルトキハ同期限內何レノ選擧ニ應ス可キコトヲ申立ツ可シ其期限內ニ之ヲ申立テサル者ハ總テ其選擧ヲ辭スル者トナシ第八條ノ處分ヲ爲ス可シ

第二十八條　選擧人選擧ノ効力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選擧ノ日ヨリ七日以內ニ之ヲ市長ニ申立ツルコトヲ得(第三十五條第一項)

市長ハ選擧ヲ終リタル後之ヲ府縣知事ニ報告シ府縣知事ニ於テ選擧ノ効力ニ關シ異議アルトキハ訴願ノ有無ニ拘ラス府縣參事會ニ付シテ處分ヲ行フコトヲ得

選擧ノ定期ニ違背スルコトアルトキハ其選擧ヲ取消シ又被選擧人中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルトキハ其人ノ當選ヲ取消シ更ニ選擧ヲ行ハシム可シ

第二十九條　當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ効力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ市會之ヲ議決ス

第二款　職務權限及處務規程

第三十條　市會ハ其市ヲ代表シ此法律ニ準據シテ市ニ關スル一切ノ事件並從前特ニ委任セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ委任セラルヽ事件ヲ議決スルモノトス

第三十一條　市會ノ議決ス可キ事件ノ概目左ノ如シ

一　市條例及規則ヲ設ケ並ニ改正スル事

二　市費ヲ以テ支辨ス可キ事業但第七十四條ニ揭ケタル事務ハ此限ニ在ラス

三　歲入出豫算ヲ定メ豫算外ノ支出及豫算超過ノ支出ヲ認定スル事

四　決算報告ヲ認定スル事

五　法律勅令ニ定ムルモノヲ除クノ外使用料、手數料、市稅及夫役現品ノ賦課徵收ノ法ヲ定ムル事

六　市有不動產ノ賣買交換讓受讓渡並質入書入ヲ爲ス事

七　基本財產ノ處分ニ關スル事

八　歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ又權利ノ棄却ヲ爲ス事

九　市有ノ財產及營造物ノ管理方法ヲ定ムル事

十　市吏員ノ身元保證金ヲ徵シ並其金額ヲ定ムル事

十一　市ニ係ル訴訟及和解ニ關スル事

第三十二條　市會ハ法律勅令ニ依リ其職權ニ屬スル市吏員ノ

選擧ヲ行フ可シ

第三十三條　市會ハ市ノ事務ニ關スル書類及計算書ヲ檢閱シ市長ノ報告ヲ請求シ又事務ノ管理議決ノ施行並收入支出ノ正否ヲ監査スルノ職權ヲ有ス

市會ハ市ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ監督官廳ニ差出スコトヲ得

第三十四條　市會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述ス可シ

第三十五條　市住民及公民タル權利ノ有無、選擧權及被選擧權ノ有無、選擧人名簿ノ正否並其等級ノ當否代理ヲ以テ執行スル選擧權（第十二條第二項）及市會議員選擧ノ効力（第二十八條）ニ關スル訴願ハ市會之ヲ裁決ス

市會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ事件ニ付テハ市長ヨリモ亦訴願及訴訟ヲ爲スコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其執行ヲ停止スルコトヲ得ス但判決確定スルニ非サレハ更ニ選擧ヲ爲スコトヲ得ス

第三十六條　凡議員タル者ハ選擧人ノ指示若クハ委囑ヲ受ク可カラサルモノトス

第三十七條　市會ハ每歷年ノ初メ一週年ヲ限リ議長及其代理者各一名ヲ互選ス

第三十八條　會議ノ事件議長及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事アルトキハ議長ニ故障アルモノトシテ其代理者之ニ代ル可シ

議長代理者共ニ故障アルトキハ市會ハ年長ノ議員ヲ以テ議長ト爲ス可シ

第三十九條　市參事會員ハ會議ニ列席シテ議事ヲ辯明スルコトヲ得

第四十條　市會ハ會議ノ必要アル每ニ議長之ヲ招集ス若シ議員四分ノ一以上ノ請求アルトキ又ハ市長若クハ市參事會ノ請求アルトキハ必ス之ヲ招集ス可シ其招集並會議ノ事件ヲ告知スルハ急施ヲ要スル場合ヲ除クノ外少クモ會議ノ三日前タル可シ但市會ノ議決ヲ以テ豫メ會議日ヲ定ムルモ妨ケナシ

市參事會員ヲ市會ノ會議ニ招集スルトキモ亦前項ノ例ニ依ル

第四十一條　市會ハ議員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ議決スルコトヲ得ス但同一ノ議事ニ付招集再同ニ至ルモ議員猶三分ノ二ニ滿タサルトキハ此限ニ在ラス

第四十二條　市會ノ議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ再議議決ス可シ若シ猶同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十三條　議員ハ自己及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ市會ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス

議員ノ數此除名ノ爲メニ減少シテ會議ヲ開クノ定數ニ滿タサルトキハ府縣參事會市會ニ代テ議決ス

第四十四條　市會ニ於テ市吏員ノ選擧ヲ行フトキハ其一名每ニ匿名投票ヲ以テ之ヲ爲シ有効投票ノ過半數ヲ得ル者ヲ以テ當選ト若シ過半數ヲ得ル者ナキトキハ最多數ヲ得ル者三名以上同數ナルトキハ議長自ラ抽籤シテ其二名ヲ取リ更ニ投票セシム此再投票ニ於テモ猶過半數ヲ得ル者ナキトキハ

抽籤ヲ以テ當選ヲ定ム其他ハ第二十二條、第二十三條、第二十四條第一項ヲ適用ス

前項ノ選擧ニハ市會ノ議決ヲ以テ指名推選ノ法ヲ用フルコトヲ得

第四十五條　市會ノ會議ハ公開ス但議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルコトヲ得

第四十六條　議長ハ各議員ニ事務ヲ分課シ會議及選擧ノ事ヲ總理シ開會閉會並延會ヲ命シ議場ノ秩序ヲ保持ス若シ傍聽者ノ公然贊成又ハ擯斥ヲ表シ又ハ喧擾ヲ起ス者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退出セシムルコトヲ得

第四十七條　市會ハ書記ヲシテ議事錄ヲ製シテ其議決及選擧ノ順末並出席議員ノ氏名ヲ記錄セシム可シ議事錄ハ會議ノ末之ヲ朗讀シ議長及議員二名以上之ニ署名ス可シ

市會ハ議事錄ノ謄寫又ハ原書ヲ以テ其議決ヲ市長ニ報告ス可シ

市會ノ書記ハ市會之ヲ選任ス

第四十八條　市會ハ其會議細則ヲ設ク可シ其細則ニ違背シタル議員ニ科ス可キ過怠金二圓以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

第三章　市行政

第一款　市參事會及市吏員ノ組織選任

第四十九條　市ニ市參事會ヲ置キ左ノ吏員ヲ以テ之ヲ組織ス

一　市長　一名

二　助役　東京ハ三名京都大阪ハ各二名其他ハ一名

三　名譽職參事會員　東京ハ十二名京都大阪ハ各九名其他ハ六名

助役及名譽職參事會員ハ市條例ヲ以テ其定員ヲ增減スルコトヲ得

第五十條　市長ハ有給吏員トス其任期ハ六年トシ內務大臣ノ認可ヲ受ケテ之ヲ候補者三名ヲ推薦セシメ上奏裁可ヲ請フ可シ若シ其裁可ヲ得サルトキハ再推薦ヲ爲サシム可シ再推薦ニシテ猶裁可ヲ得サルトキハ退ケ推薦セシメ裁可ヲ得ルニ至ルノ間內務大臣ハ臨時代理者ヲ選任シ又ハ市費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ市長ノ職務ヲ管掌セシム可シ

第五十一條　助役及名譽職參事會員ハ市會之ヲ選擧ス其選擧ハ第四十四條ニ依テ行フ可シ但投票同數ナルトキハ抽籤ノ法ニ依ラス府縣參事會之ヲ決ス可シ

第五十二條　助役ハ有給吏員トシ其任期ハ六年トス

助役ノ選擧ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス若シ其認可ヲ得サルトキハ再選擧ヲ爲ス可シ再選擧ニシテ猶其認可ヲ得サルトキハ退ケ選擧ヲ行ヒ認可ヲ得ルニ至ルノ間府縣知事ハ臨時代理者ヲ選任シ又ハ市費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ助役ノ職務ヲ管掌セシム可シ

第五十三條　市長及助役ハ其市公民タル者ニ限ラス但其任ヲ受クルトキハ其公民タルノ權ヲ得

第五十四條　名譽職參事會員ハ其市公民中年齡滿三十歲以上ニシテ選擧權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選擧ス其任期ハ四年トス任期滿限ノ後ト雖モ後任者就職ノ日迄在職スルモノトス

名譽職參事會員ハ每二年其半數ヲ改選ス若シ二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ退任セシム初回ノ退任者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム但退任者ハ再選セラルヽコトヲ得

若シ闕員アルトキハ其殘任期ヲ補充スル爲メ直ニ補闕選擧ヲ爲ス可シ

第五十五條　市長及助役其他參事會員ハ第十五條第二項ニ揭ケタル職ヲ兼ヌルコトヲ得ス同條第四項ニ揭ケタル職ヲ兼ヌル者ハ名譽職參事會員ニ選擧セラルヽコトヲ得ス

父子兄弟タルノ縁故アル者ハ同時ニ市參事會員タルコトヲ得ス若シ其縁故アル者市長ノ任ヲ受ケルトキハ其縁故アル市參事會員ハ其職ヲ退ク可シ其他ハ第十五條第五項ヲ適用ス

市長及助役ハ三箇月前ニ申立ツルトキハ隨時退職ヲ求ムルコトヲ得此場合ニ於テハ退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

第五十六條　市長及助役ハ他ノ有給ノ職務ヲ兼任シ又ハ株式會社ノ社長及重役トナルコトヲ得ス其他ノ營業ハ府縣知事ノ認許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五十七條　名譽職參事會員ノ選擧ニ付テハ市參事會自ラ其効力ノ有無ヲ議決ス

當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ効力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ市參事會之ヲ議決ス其議決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ議決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得其他ハ第三十五條末項ヲ適用ス

第五十八條　市ニ收入役一名ヲ置ク收入役ハ市參事會ノ推薦ニ依リ市會之ヲ選任ス

收入役ハ市參事會員ヲ兼ヌルコトヲ得ス

收入役ノ選任ハ府縣知事ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス其他ハ第五十一條、第五十二條、第五十三條、第五十五條及第七十六條ヲ適用ス

第五十九條　市ニ書記其他必要ノ附屬員竝使丁ヲ置キ相當ノ給料ヲ給ス其人員ハ市會ノ議決ヲ以テ之ヲ定メ市參事會之ヲ任用ス

第六十條　凡市ハ處務便宜ノ爲メ市參事會ノ意見ヲ以テ之ヲ數區ニ分チ每區區長及其代理者各一名ヲ置クコトヲ得區長及其代理者ハ名譽職トス但東京京都大阪ニ於テハ區長ヲ有給吏員ト爲スコトヲ得

區長及其代理者ハ市會ニ於テ其區若クハ隣區ノ公民中選擧權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選擧ス區會(第百十三條)ヲ設クル區ニ於テハ其區會ニ於テ之ヲ選擧ス但東京京都大阪ニ於テハ市參事會之ヲ選任ス

東京京都大阪ニ於テハ前條ニ依リ區ニ附屬員竝使丁ヲ置クコトヲ得

第六十一條　市ハ市會ノ議決ニ依リ臨時又ハ常設ノ委員ヲ置クコトヲ得其委員ハ名譽職トス

委員ハ市參事會員又ハ市會議員ヲ以テ之ニ充テ又ハ市參事會員及市會議員ヲ以テ之ヲ組織シ又ハ會員議員ト市公民中選擧權ヲ有スル者トヲ以テ之ヲ組織シ市參事會員一名ヲ以テ委員長トス

委員中市會議員ヨリ出ツル者ハ市會之ヲ選擧シ選擧權ヲ有スル公民ヨリ出ツル者ハ市參事會之ヲ選擧シ其他ノ委員ハ市長之ヲ選任ス

常設委員ノ組織ニ關シテハ市條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第六十二條　區長及委員ニハ職務取扱ノ爲メ要スル實費辨償ノ外市會ノ議決ニ依リ勤務ニ相當スル報酬ヲ給スルコトヲ得

第六十三條　市吏員ハ任期滿限ノ後再選セラルルコトヲ得

市吏員及使丁ハ別段ノ規定又ハ規約アルモノヲ除クノ外隨時解職スルコトヲ得

第二款　市參事會及市吏員ノ職務權限及處務規程

第六十四條　市參事會ハ其市ヲ統轄シ其行政事務ヲ擔任ス

市參事會ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ

一　市會ノ議事ヲ準備シ及其議決ヲ執行スル事若シ市會ノ議決其權限ヲ越ユ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ市參事會ハ自己ノ意見ニ由リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ由リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ更メサルトキハ府縣參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律勅令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二　市ノ設置ニ依ル營造物ヲ管理スル事若シ特ニ之カ管理者アルトキハ其事務ヲ監督スル事

三　市ノ歲入ヲ管理シ歲入出豫算表其他市會ノ議決ニ依ア定マリタル收入支出ヲ命令シ會計及出納ヲ監視スル事

四　市ノ權利ヲ保護シ市有財產ヲ管理スル事

五　市吏員及使丁ヲ監督シ市長ヲ除クノ外其他ニ對シ懲戒處分ヲ行フ事其懲戒處分ハ譴責及十圓以下ノ過怠金トス

六　市ノ諸證書及公文書類ヲ保管スル事

七　外部ニ對シテ市ヲ代表シ市ノ名義ヲ以テ其訴訟竝和解ニ關シ又ハ他應若クハ人民ト商賣スル事

八　法律勅令ニ依リ又ハ市會ノ議決ニ從テ使用料、手數料、市稅及夫役現品ヲ賦課徵收スル事

九　其他法律命令又ハ上司ノ指令ニ依テ市參事會ニ委任シタル事務ヲ處理スル事

第六十五條　市參事會ハ議長又ハ其代理者及名譽職會員定員三分ノ一以上出席スルトキハ議決ヲ爲スコトヲ得

其議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

議決ノ事件ハ之ヲ議事錄ニ登記ス可シ

市參事會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ市長ハ自己ノ意見ニ由リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ由リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ府縣參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律勅令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第六十六條　第四十三條ノ規定ハ市參事會ニモ亦之ヲ適用ス但同條ノ規定ニ從ヒ市參事會正當ノ會議ヲ開クコトヲ得サルトキハ市會之ニ代テ議決スルモノトス

第六十七條　市長ハ市政一切ノ事務ヲ指揮監督シ處務ノ澁滯ナキコトヲ務ム可シ

市長ハ市參事會ヲ召集シ之カ議長トナル市長故障アルトキハ其代理者ヲ以テ之ニ充ツ

市長ハ市參事會ノ議事ヲ準備シ其議決ヲ執行シ市參事會ノ名ヲ以テ文書ノ往復ヲ爲シ及之ニ署名ス

第六十八條　急施ヲ要スル場合ニ於テ市參事會ヲ召集スルノ暇ナキトキハ市長ハ市參事會ノ事務ヲ專決處分シ次回ノ會議ニ於テ其處分ヲ報告スル可シ

第六十九條　市參事會員ハ市長ノ職務ヲ補助シ市長故障アルトキ之ヲ代理ス

市長ハ市會ノ同意ヲ得テ市參事會員ヲシテ市行政事務ノ一部ヲ分掌セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ名譽職會員ハ職務取扱ノ爲メニ要スル實費辨償ノ外勤務ニ相當スル報酬ヲ受クルコトヲ得

市條例ヲ以テ助役及名譽職會員ノ特別ナル職務竝市長代理ノ順序ヲ規定スル可シ若シ條例ノ規定ナキトキハ府縣知事ノ定ムル所ニ從ヒ上席者之ヲ代理スル可シ

第七十條　市收入役ハ市ノ收入ヲ受領シ其費用ノ支拂ヲ爲シ其他會計事務ヲ掌ル

第七十一條　書記ハ市長ニ屬シ庶務ヲ分掌ス

第七十二條　區長及代理者(第六十條)ハ市參事會ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受ケテ區內ニ關スル市行政事務ヲ補助執行スルモノトス

第七十三條　委員ハ(第六十一條)市參事會ノ監督ニ屬シ市行政事務ノ一部ヲ分掌シ又ハ營造物ヲ管理シ若クハ監督シ又ハ一時ノ委託ヲ以テ事務ヲ處辨スルモノトス

市長ハ隨時委員會ニ列席シテ議決ニ加ハリ其議長タルノ權ヲ有ス常設委員ノ職務權限ニ關シテハ市條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第七十四條　市長ハ法律命令ニ從ヒ左ノ事務ヲ管掌ス

一　司法警察補助官タルノ職務及法律命令ニ依テ其管理ニ屬スル地方警察ノ事務但別ニ官署ヲ設ケテ地方警察事務ヲ管掌セシムルトキハ此限ニ在ラス

二　浦役場ノ事務

三　國ノ行政竝府縣ノ行政ニシテ市ニ屬スル事務但別ニ吏員ノ設ケアルトキハ此限ニ在ラス

右三項中ノ事務ハ監督官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ市參事會員ノ一名ニ分掌セシムルコトヲ得本條ニ揭載スル事務ヲ執行スルカ爲メニ要スル費用ハ市ノ負擔トス

第三款　給料及給與

第七十五條　名譽職員ハ此法律中別ニ規定アルモノヲ除クノ外職務取扱ノ爲メニ要スル實費ノ辨償ヲ受クルコトヲ得

實費辨償額及報酬額ハ市會之ヲ議決ス

第七十六條　市長助役其他有給吏員及使丁ノ給料額ハ市會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

市會ノ議決ヲ以テ市長ノ給料額ヲ定ムルトキハ內務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス若シ之ヲ許可ス可カラスト認ムルトキハ內務大臣之ヲ確定ス

市會ノ議決ヲ以テ助役ノ給料額ヲ定ムルトキハ府縣知事ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス府縣知事ニ於テ之ヲ許可ス可カラスト認ムルトキハ府縣參事會ノ議決ニ付シテ之ヲ確定ス

市長助役其他有給吏員ノ給料額ハ市條例ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ得

第七十七條　市條例ノ規定ヲ以テ市長其他有給吏員ノ退隱料ヲ設クルコトヲ得

第七十八條　有給吏員ノ給料、退隱料其他第七十五條ニ定ムル給與ニ關シテノ異議アルトキハ關係者ノ中立ニ依リ府縣參事會之ヲ裁決ス其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十九條　退隱料ヲ受クル者官職又ハ府縣郡市町村及公共組合ノ職務ニ就キ給料ヲ受クルトキハ其間之ヲ停止シ又ハ更ニ退隱料ヲ受クルノ權ヲ得ルトキ其額當退隱料ト同額以上ナルトキハ當退隱料ハ之ヲ廢止ス

第八十條　給料、退隱料、報酬及辨償ハ總テ市ノ負擔トス

第四章　市有財產ノ管理

第一款　市有財產及市稅

第八十一條　市ハ其不動產、積立金穀等ヲ以テ基本財產ト爲シ之ヲ維持スルノ義務アリ

臨時ニ收入シタル金穀ハ基本財產ニ加入ス可シ但寄附金等寄附者其使用ノ目的ヲ定ムルモノハ此限ニアラス

第八十二條　凡市有財產ハ全市ノ爲メニ之ヲ管理シ及共用スルモノトス但特ニ民法上ノ權利ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第八十三條　當來ノ慣行ニ依リ市住民中特ニ其市有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ有スル者アルトキハ市會ノ議決ヲ經ルニ非サレハ其當慣ヲ改ムルコトヲ得ス

第八十四條　市住民中特ニ市有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ得ソトスル者アルトキハ市條例ノ規定ニ依リ使用料若クハ一時ノ加入金ヲ徵收シ又ハ使用料加入金ヲ共ニ徵收シテ之ヲ許可スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有シル者ハ此限ニ在ラス

第八十五條　使用權ヲ有スル者(第八十三條、第八十四條)ハ使用ノ多寡ニ準シテ其土地物件ニ係ル必要ナル費用ヲ分擔ス可キモノトス

第八十六條　市會ハ市ノ爲メニ必要ナル場合ニ於テハ使用權(第八十三條、第八十四條)ヲ取上ケ又ハ制限スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十七條　市有財產ノ賣却貸與又ハ建築工事及物品調達ノ請負ハ公ケノ入札ニ付ス可シ但臨時急施ヲ要スルトキ及入札ノ價額其費用ニ比シテ得失相償ハサルトキ又ハ市會ノ認許ヲ得ルトキハ此限ニ在ラス

第八十八條　市ハ其必要ナル支出及從前法律命令ニ依テ賦課セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ賦課セラルヽ支出ヲ負擔スルノ義務アリ

市ハ其財產ヨリ生スル收入及使用料、手數料(第八十九條)竝科料、過怠金其他法律勅令ニ依リ市ニ屬スル收入ヲ以テ前項ノ支出ニ充テ猶不足アルトキハ市稅(第九十條)及夫役現品(第百一條)ヲ賦課徵收スルコトヲ得

第八十九條　市ハ其所有物及營造物ノ使用ニ付又ハ特ニ數個人ノ爲メニスル事業ニ付使用料又ハ手數料ヲ徵收スルコトヲ得

第九十條　市稅トシテ賦課スルコトヲ得可キ目左ノ如シ

一　國稅府縣稅ノ附加稅

二　直接又ハ間接ノ特別稅

附加稅ハ直接ノ國稅又ハ府縣稅ニ附加シ均一ノ稅率ヲ以テ市ノ全部ヨリ徵收スルヲ常例トス特別稅ハ附加稅ノ外別ニ市限リ稅目ヲ起シテ課稅スルコトヲ要スルトキ賦課徵收スルモノトス

第九十一條　此法律ニ規定セル條項ヲ除クノ外使用料、手數料

（第八十九條）特別稅（第九十條第一項第二）及從前ノ區町村費ニ關スル細則ハ市條例ヲ以テ之ヲ規定スヘシ其條例ニハ科料一圓九十五錢以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

科料ニ處シ及之ヲ徵收スルハ市參事會之ヲ掌ル其處分ニ不服アル者ハ令狀交付後十四日以內ニ司法裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九十二條　三箇月以上市內ニ滯在スル者ハ其市稅ヲ納ムルモノトス但其課稅ハ滯在ノ初ニ遡リ徵收スヘシ

第九十三條　市內ニ住居ヲ構ヘス又ハ三箇月以上滯在スルコトナシト雖モ市內ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ營業ヲ爲ス者（店舖ヲ定メサル行商ヲ除ク）ハ其土地家屋營業若クハ其所得ニ對シテ賦課スル市稅ヲ納ムルモノトス其法人タルトキモ亦同シ但郵便電信及官設鐵道ノ業ハ此限ニ在ラス

第九十四條　所得稅ニ附加稅ヲ賦課シ及市ニ於テ特別ニ所得稅ヲ賦課セントスルトキハ納稅者ノ市外ニ於クル所有ノ土地家屋又ハ營業（店舖ヲ定メサル行商ヲ除ク）ヨリ收入スル所得ハ之ヲ控除スヘキモノトス

第九十五條　數市町村ニ住居ヲ構ヘ又ハ滯在スル者ニ前條ノ市稅ヲ賦課スルトキハ其所得ヲ各市町村ニ平分シ其一部分ニノミ課稅スヘシ但土地家屋又ハ營業ヨリ收入スル所得ハ此限ニ在ラス

第九十六條　所得稅法第三條ニ揭クル所得ハ市稅ヲ免除ス

第九十七條　左ニ揭クル物件ハ市稅ヲ免除ス

一　政府、府縣郡市町村及公共組合ニ屬シ直接ノ公用ニ供スル土地、營造物及家屋

二　社寺及官立公立ノ學校病院其他學藝、美術及慈善ノ用ニ供スル土地、營造物及家屋

三　官有ノ山林又ハ荒蕪地但官有山林又ハ荒蕪地ノ利益ニ係ル事業ヲ起シ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ得テ其費用ヲ徵收スルハ此限ニ在ラス

新開地及開墾地ハ市條例ニ依リ年月ヲ限リ免除スルコトヲ得

第九十八條　前二條ノ外市稅ヲ免除スヘキモノハ別段ノ法律勅令ニ定ムル所ニ從フ皇族ニ係ル市稅ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムル迄現今ノ例ニ依ル

第九十九條　數箇人ニ於テ專ラ使用スル所ノ營造物アルトキハ其修築及保存ノ費用ハ之ヲ共關係者ニ賦課スヘシ

市內ノ一區ニ於テ專ラ使用スル營造物アルトキハ其區內ニ住居シ若クハ滯在シ又ハ土地家屋ヲ所有シ營業（店舖ヲ定メサル行商ヲ除ク）ヲ爲ス者ニ於テ其修築及保存ノ費用ヲ負擔スヘシ但其一區ノ所有財產アルトキハ其收入ヲ以テ先ツ其費用ニ充ツヘシ

第百條　市稅ハ納稅義務ノ起リタル翌月ノ初ヨリ免稅理由ノ生シタル月ノ終迄月割ヲ以テ之ヲ徵收スヘシ

會計年度中ニ於テ納稅義務消滅シ又ハ變更スルトキハ納稅者ヨリ之ヲ市長ニ屆出ツヘシ其屆出ヲ爲シタル月ノ終迄ハ從前ノ稅ヲ徵收スルコトヲ得

第百一條　市公共ノ事業ヲ起シ又ハ公共ノ安寧ヲ維持スルカ爲メニ夫役及現品ヲ以テ納稅者ニ賦課スルコトヲ得但學藝、美術及手工ニ關スル勞役ヲ課スルコトヲ得ス

夫役及現品ハ急迫ノ場合ヲ除クノ外直接市稅ヲ準率ト爲シ且之ヲ金額ニ算出シテ賦課スヘシ

夫役ヲ課セラレタル者ハ其便宜ニ從ヒ本人自ラ之ニ當リ又ハ適當ノ代人ヲ出スコトヲ得又急迫ノ場合ヲ除クノ外金圓ヲ以テ之ニ代ルコトヲ得

第百二條　市ニ於テ徵收スル使用料、手數料（第八十九條）市稅（第九十條夫役ニ代フル金圓（第百一條）其有物使用及加入金（第八十四條）其他市ノ收入ヲ定期內ニ納メサルトキハ市參事會ハ之ヲ督促シ猶之ヲ完納セサルトキハ國稅滯納處分法ニ依リ之ヲ徵收スヘシ其督促ヲ爲スニハ市條例ノ規定ニ依リ手數料ヲ徵收スルコトヲ得

納稅者中無資力ナル者アルトキハ市參事會ノ意見ヲ以テ會計年度內ニ限リ納稅延期ヲ許スコトヲ得其年度ヲ超ユル場合ニ於テハ市會ノ議決ニ依ル

本條ニ記載スル徵收金ノ追徵、期滿得免及先取特權ニ付テハ國稅ニ關スル規則ヲ適用ス

第百三條　地租ノ附加稅ハ地租ノ納稅者ニ賦課シ其他土地ニ對シテ賦課スル市稅ハ其所有者又ハ使用者ニ賦課スルコトヲ得

第百四條　市稅ノ賦課ニ對スル訴願ハ賦課令狀ノ交付後三箇月以內ニ之ヲ市參事會ニ申立可シ此期限ヲ經過スルトキハ其年度內減稅免稅及僧還ヲ請求スルノ權利ヲ失フモノトス

第百五條　市稅ノ賦課及市ノ營造物、市有財產竝其所得ヲ使用スル權利ニ關スル訴願ハ市參事會之ヲ裁決ス但民法上ノ權利ニ係ルモノハ此限ニアラス

前項ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其處分ノ執行ヲ停止スルコトヲ得ス

第百六條　市ニ於テ公債ヲ募集スルハ從前ノ公債元額ヲ償還スル爲メ又ハ天災時變等已ムヲ得サル支出若クハ市ノ永久ノ利益トナル可キ支出ヲ要スルニ方リ通常ノ歲入ヲ增加スルトキハ其市住民ノ負擔ニ堪ヘサルノ場合ニ限ルモノトス」

市會ニ於テ公債募集ノ事ヲ議決スルトキハ併セテ其募集ノ方法、利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定ムヘシ償還ノ初期ハ三年以內ト爲シ年々償還ノ歩合ヲ定メ募集ノ時ヨリ三十年以內ニ還了スヘシ

定額豫算內ノ支出ヲ爲スカ爲メ必要ナル一時ノ借入金ハ本條ノ例ニ依ラス其年度內ノ收入ヲ以テ償還スヘキモノトス但此場合ニ於テハ市會ノ議決ヲ要セス

第二款　市ノ歲入出豫算及決算

第百七條　市參事會ハ每會計年度收入支出ノ豫知シ得ヘキ金額ヲ見積リ年度前二箇月ヲ限リ歲入出豫算表ヲ調製スヘシ但市ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

內務大臣ハ省令ヲ以テ豫算表調製ノ式ヲ定ムルコトヲ得

第百八條　豫算表ハ會計年度前市會ノ議決ヲ取リ之ヲ府縣知事ニ報告シ竝地方慣行ノ方式ヲ以テ其要領ヲ公告スヘシ

豫算表ヲ市會ニ提出スルトキハ市參事會ハ併セテ其市ノ事務報告書及財產明細表ヲ提出スヘシ

第百九條　定額豫算外ノ費用又ハ豫算ノ不足アルトキハ市會ノ認定ヲ得テ之ヲ支出スルコトヲ得

定額豫算中臨時ノ場合ニ支出スルカ爲メニ豫備費ヲ設ケ市參事會ハ豫メ市會ノ認定ヲ受ケスシテ豫算外ノ費用又ハ豫算超過ノ費用ニ充ツルコトヲ得但市會ノ否決シタル費途ニ

充ツルコトヲ得ス

第百十條　市會ニ於テ豫算表ヲ議決シタルトキハ市長ヨリ其謄寫ヲ以テ之ヲ收入役ニ交付スヘシ其豫算表中監督官廳若クハ參事會ノ許可ヲ受ケヘキ事項アルトキハ(第百二十一條ヨリ第百二十三條ニ至ル)先ツ其許可ヲ受クヘシ

收入役ハ市參事會(第六十四條第二項第三)又ハ監督官廳ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス又收入役ハ市參事會ノ命令ヲ受クルモ其支出豫算表中ニ豫定ナキカ又ハ其命令第百九條ノ規定ニ據ラサルトキハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ規定ニ背キタル支拂ハ總テ收入役ノ責任ニ歸ス

第百十一條　市ノ出納ハ每月例日ヲ定メテ檢查シ及每年少クモ一回臨時檢查ヲ爲スヘシ例月檢查ハ市長又ハ其代理者之ヲ爲シ臨時檢查ハ市長又ハ其代理者ノ外市會ノ互選シタル議員一名以上ノ立會ヲ要ス

第百十二條　決算ハ會計年度ノ終ヨリ三箇月以內ニ之ヲ結了シ證書類ヲ併セテ收入役ヨリ之ヲ市參事會ニ提出シ市參事會ハ之ヲ審査シ意見ヲ附シテ之ヲ市會ノ認定ニ付スヘシ其市會ノ認定ヲ經タルトキハ市長ヨリ之ヲ府縣知事ニ報告スヘシ

決算報告ヲ爲ストキハ第三十八條及第四十三條ノ例ニ準シ市參事會員故障アルモノトス

第五章　特別ノ財產ヲ有スル市區ノ行政

第百十三條　市內ノ一區ニシテ特別ニ財產ヲ所有シ若クハ營造物ヲ設ケ其區限リ特ニ其費用(第九十九條)ヲ負擔スルトキハ府縣參事會ハ其市會ノ意見ヲ聞キ條例ヲ發行シ財產及營造物ニ關スル事務ノ爲メ區會ヲ設クルコトヲ得其會議ハ市會ノ例ヲ適用スルコトヲ得

第百十四條　前條ニ記載スル事務ハ市ノ行政ニ關スル規則ニ依リ市參事會之ヲ管理スヘシ但區ノ出納及會計ノ事務ハ之ヲ分別スヘシ

第六章　市行政ノ監督

第百十五條　市行政ハ第一次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第二次ニ於テ內務大臣之ヲ監督ス但法律ニ指定シタル場合ニ於テハ府縣參事會ノ參與スルハ別段ナリトス

第百十六條　此法律中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外凡市ノ行政ニ關スル府縣知事若クハ府縣參事會ノ處分若クハ裁決ニ不服アル者ハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得

市ノ行政ニ關スル訴願ハ處分若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ十四日以內ニ其理由ヲ具シテ之ヲ提出スヘシ但此法律中別ニ期限ヲ定メルモノハ此限ニ在ラス

此法律中ニ指定スル場合ニ於テ府縣知事若クハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アリテ行政裁判所ニ出訴セントスル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ二十一日以內ニ出訴スヘシ

行政裁判所ニ出訴スルコトヲ許シタル場合ニ於テハ內務大臣ニ訴願スルコトヲ得ス

訴願及訴訟ヲ提出スルトキハ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止ス但此法律中別ニ規定アリ又ハ當該官廳ノ意見ニ依リ其停止ノ爲メニ市ノ公益ニ害アリト爲ストキハ此限ニ在ラス

第百十七條　監督官廳ハ市行政ノ法律命令ニ背戾セサルヤ其事務錯亂滯セサルヤ否ヲ監視スヘシ監督官廳ハ之カ爲メ

ニ行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ豫算及決算等ノ書類帳簿ヲ徵シ並實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納ヲ檢閱スルノ權ヲ有ス

第百十八條　市ニ於テ法律勅令ニ依テ負擔シ又ハ當該官廳ノ職權ニ依テ命令スル所ノ支出ヲ定額豫算ニ載セス又ハ臨時之ヲ承認セス又ハ實行セサルトキハ府縣知事ハ理由ヲ示シテ其支出額ヲ定額豫算表ニ加ヘ又ハ臨時支出セシムヘシ

市ニ於テ前項ノ處分ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第百十九條　凡市會又ハ市參事會ニ於テ議決スヘキ事件ヲ議決セサルトキハ府縣參事會代テ之ヲ議決スヘシ

第百二十條　內務大臣ハ市會ヲ解散セシムルコトヲ得解散ヲ命シタル場合ニ於テハ同時ニ三箇月以內更ニ議員ヲ改選スヘキコトヲ命スヘシ但改選市會ノ集會スル迄ハ府縣參事會市會ニ代テ一切ノ事件ヲ議決ス

第百二十一條　左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ內務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　市條例ヲ設ケ並改正スル事

二　學藝、美術ニ關シ又ハ歷史上貴重ナル物品ノ賣却讓與質入書入交換若クハ大ナル變更ヲ爲ス事

前項第一ノ場合ニ於テハ勅裁ヲ經テ之ヲ許可スヘシ

第百二十二條　左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　新ニ市ノ負債ヲ起シ又ハ負債額ヲ增加シ及第百六條第二項ノ例ニ違フモノ但償還期限三年以內ノモノハ此限ニ在ラス

二　市特別稅並使用料手數料ヲ新設シ增額シ又ハ變更スル事

三　地租七分ノ一其他直接國稅百分ノ五十ヲ超過スル附加稅ヲ賦課スル事

四　間接國稅ニ附加稅ヲ賦課スル事

五　法律勅令ノ規定ニ依リ官廳ヨリ補助スル歩合金ニ對シ支出金額ヲ定ムル事

第百二十三條　左ノ事件ニ關スル市會ノ議決ハ府縣參事會ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　市ノ營造物ニ關スル規則ヲ設ケ並改正スル事

二　基本財產ノ處分ニ關スル事(第八十一條)

三　市有不動產ノ賣却讓與並質入書入ヲ爲ス事

四　各個人特ニ使用スル市有土地使用法ノ變更ヲ爲ス事(第八十六條)

五　各種ノ保證ヲ與フル事

六　法律勅令ニ依テ負擔スル義務ニ非スシテ向五箇年以上ニ亘リ新ニ市住民ニ負擔ヲ課スル事

七　均一ノ稅率ニ據ラスシテ國稅府縣稅ニ附加稅ヲ賦課スル事(第九十條第二項)

八　第九十九條ニ從ヒ數個人又ハ市內ノ一區ニ費用ヲ賦課スル事

九　第百一條ノ準率ニ據ラスシテ夫役及現品ヲ賦課スル事

第百二十四條　府縣知事ハ市長、助役、市參事會員、委員、區長其他市吏員ニ對シ懲戒處分ヲ行フコトヲ得其懲戒處分ハ譴責及過怠金トス其過怠金ハ二十五圓以下トス

追テ市吏員ノ懲戒法ヲ設クル迄ハ左ノ區別ニ從ヒ官吏懲戒

例ヲ適用スヘシ

一　市參事會ノ懲戒處分（第六十四條第二項第五）ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ府縣知事ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二　府縣知事ノ懲戒處分ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

三　本條第一項ニ揭ケタル市吏員職務ニ違フコト再三ニ及ヒ又ハ其情狀重キ者又ハ行狀ヲ亂リ廉恥ヲ失フ者、財產ヲ浪費シ其分ヲ守ラサル者又ハ職務擧ラサル者ハ懲戒裁判ヲ以テ其職ヲ解クコトヲ得其隨時解職スルコトヲ得可キ者ハ（第六十三條）懲戒裁判ヲ以テスルノ限ニ在ラス

四　總テ解職セラレタル者ハ自己ノ所爲ニ非スシテ職務ヲ執ルニ堪ヘサルカ爲メ解職セラレタル場合ヲ除クノ外退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

懲戒裁判ハ府縣知事其審問ヲ爲シ府縣參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

市長ノ解職ニ係ル裁決ハ上奏シテ之ヲ執行ス

監督官廳ハ懲戒裁判ノ裁決前吏員ノ停職ヲ命シ並給料ヲ停止スルコトヲ得

第百二十五條　市吏員及使丁其職務ヲ盡サス又ハ權限ヲ越エタル事アルカ爲メ市ニ對シテ賠償ス可キコトアルトキハ府縣參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ七日以內ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但出訴ヲ爲シタルトキハ府縣參事會ハ假ニ其財產ヲ差押フルコトヲ得

第七章　附則

第百二十六條　此法律ハ明治二十二年四月一日ヨリ地方ノ情況ヲ裁酌シ府縣知事ノ具申ニ依リ內務大臣指定スル地ニ之ヲ施行ス

第百二十七條　府縣參事會及行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間府縣參事會ノ職務ハ府縣知事行政裁判所ノ職務ハ內閣ニ於テ之ヲ行フ可シ

第百二十八條　此法律ニ依リ初テ議員ヲ選擧スルニ付市參事會及市會ノ職務幷市條例ヲ以テ定ム可キ事項ハ府縣知事又ハ其指命スル官吏ニ於テ之ヲ施行ス可シ

第百二十九條　社寺宗教ノ組合ニ關シテハ此法律ヲ適用セス現行ノ例規及其地ノ習慣ニ從フ

第百三十條　此法律中ニ記載セル人口ハ最終ノ人口調査ニ依リ現役軍人ヲ除キタル數ヲ云フ

第百三十一條　現行ノ租稅中此法律ニ於テ直接稅又ハ間接稅トス可キ類別ハ內務大臣及大藏大臣之ヲ告示ス

第百三十二條　明治九年十月第百三十號布告各區町村金穀公借共有物取扱土木起功規則明治十一年七月第十七號布告郡區町村編制法第四條、明治十七年五月第十四號布告區町村會法、明治十七年五月第十五號布告、明治十七年七月第二十三號布告、明治十八年八月第二十五號布告其他此法律ニ牴觸スル成規ハ此法律施行ノ日ヨリ總テ之ヲ廢止ス

第百三十三條　內務大臣ハ此法律實行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令及訓令ヲ發布ス可シ

町村制

第一章　總則
第一款　町村及其區域　（自第一條至第五條）
第二款　町村住民及其權利義務　（自第六條至第九條）
第三款　町村條例　（第十條）
第二章　町村會
第一款　組織及選擧　（自第十一條至第三十一條）
第二款　職務權限及處務規程　（自第三十二條至第五十一條）
第三章　町村行政
第一款　町村吏員ノ組織選任　（自第五十二條至第六十七條）
第二款　町村吏員ノ職務權限　（自第六十八條至第七十四條）
第三款　給料及給與　（自第七十五條至第八十條）
第四章　町村有財產ノ管理
第一款　町村有財產及町村稅　（自第八十一條至第百六條）
第二款　町村ノ歲入出豫算及決算　（自第百七條至第百十三條）
第五章　町村內各部ノ行政　（自第百十四條至第百十五條）
第六章　町村組合　（自第百十六條至第百十八條）
第七章　町村行政ノ監督　（自第百十九條至第百二十九條）
第八章　附則　（自第百三十條至第百三十九條）

町村制

第一章　總則

第一款　町村及其區域

第一條　此法律ハ市制ヲ施行スル地ヲ除キ總テ町村ニ施行スルモノトス

第二條　町村ハ法律上一個人ト均ク權利ヲ有シ義務ヲ負擔シ凡町村公共ノ事務ハ官ノ監督ヲ受ケ自ラ之ヲ處理スルモノトス

第三條　凡町村ハ從來ノ區域ヲ存シ之ヲ變更セス但將來其變更ヲ要スルコトアルトキハ此法律ニ準據ス可シ

第四條　町村ノ廢置分合ヲ要スルトキハ關係アル市町村會及郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣參事會之ヲ議決シ內務大臣ノ許可ヲ受ク可シ

町村境界ノ變更ヲ要スルトキハ關係アル町村會及地主ノ意見ヲ聞キ郡參事會之ヲ議決ス其數郡ニ涉リ若クハ市ノ境界ニ涉ルモノハ府縣參事會之ヲ議決ス

町村ノ資力法律上ノ義務ヲ負擔スルニ堪ヘス又ハ公益上ノ必要アルトキハ關係者ノ異議ニ拘ハラス町村ヲ合併シ又ハ其境界ヲ變更スルコトアル可シ

本條ノ處分ニ付其町村ノ財產處分ヲ要スルトキハ併セテ之ヲ議決ス可シ

第五條　町村ノ境界ニ關スル爭論ハ郡參事會之ヲ裁決ス其數郡ニ涉リ若クハ市ノ境界ニ涉ルモノハ府縣參事會之ヲ裁決ス其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二款　町村住民及其權利義務

第六條　凡町村內ニ住居ヲ占ムル者ハ總テ其町村住民トス

凡町村住民タル者ハ此法律ニ從ヒ公共ノ營造物並町村有財產ヲ共用スルノ權利ヲ有シ及町村ノ負擔ヲ分任スルノ義務ヲ有スルモノトス但特ニ民法上ノ權利及義務ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第七條　凡帝國臣民ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子二年以來(一)町村ノ住民トナリ(二)其町村ノ負擔ヲ分任シ及(三)其町村內ニ於ケル地租ヲ納メ若シハ直接國稅年額二圓以上ヲ納メル者ハ其町村公民トス其公民ヲ以テ救助ヲ受ケタル後二年ヲ經サル者ハ此限ニ在ラス但場合ニ依リ町村會ノ議決ヲ以テ本條ニ定ムル二個年ノ制限ヲ特免スルコトヲ得

此法律ニ於テ獨立ト稱スルハ滿二十五歲以上ニシテ一戶ヲ構ヘ且治產ノ禁ヲ受ケサル者ヲ云フ

第八條　凡町村公民ハ町村ノ選擧ニ參與シ町村ノ名譽職ニ選擧セラルヽノ權利アリ又其名譽職ヲ擔任スルハ町村公民ノ義務ナリトス

左ノ理由アルニ非サレハ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職スルコトヲ得ス

一　疾病ニ罹リ公務ニ堪ヘサル者

二　營業ノ爲メニ常ニ其町村內ニ居ルコトヲ得サル者

三　年齡滿六十歲以上ノ者

四　官職ノ爲メニ町村ノ公務ヲ執ルコトヲ得サル者

五　四年間無給ニシテ町村吏員ノ職ニ任シ爾後四年ヲ經過セサル者及六年間町村議員ノ職ニ居リ爾後六年ヲ經過セサル者

六　其他町村會ノ議決ニ於テ正當ノ理由アリト認ムル者

前項ノ理由ナクシテ名譽職ヲ拒辭シ又ハ任期中退職シ若クハ無任期ノ職務ヲ少クモ三年間擔當セス又ハ其職務ヲ實際ニ執行セサル者ハ町村會ノ議決ヲ以テ三年以上六年以下其町村公民タルノ權ヲ停止シ且同年期間其負擔ス可キ町村費ノ八分一乃至四分一ヲ增課スルコトヲ得

前項町村會ノ議決ニ不服アル者ハ郡參事會ニ訴願シ其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九條　町村公民タル者第七條ニ揭ケタル要件ノ一ヲ失フトキハ其公民タルノ權ヲ失フモノトス

町村公民タル者身代限處分中又ハ公權剝奪若クハ停止ヲ附加スル可キ重輕罪ノ爲メ裁判上ノ訊問若クハ勾留中又ハ租稅滯納處分中ハ其公民タルノ權ヲ停止ス

陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ町村ノ公務ニ參與セサルモノトス

町村公民タル者ニ限リテ任ス可キ職務ニ在ル者本條ノ場合ニ當ルトキハ其職務ヲ解ク可キモノトス

第三款　町村條例

第十條　町村ノ事務及町村住民ノ權利義務ニ關シ此法律中ニ明文ナク又ハ特例ヲ設クルコトヲ許セル事項ハ各町村ニ於テ特ニ條例ヲ設ケテ之ヲ規定スルコトヲ得

町村ニ於テハ其町村ノ設置ニ係ル營造物ニ關シ規則ヲ設クルコトヲ得

町村條例及規則ハ法律命令ニ牴觸スルコトヲ得ス且之ヲ發行スルトキハ地方慣行ノ公告式ニ依ル可シ

第二章　町村會

第一款　組織及選擧

第十一條　町村會議員ハ其町村ノ選擧人其被選擧權アル者ヨリ之ヲ選擧ス其定員ハ其町村ノ人口ニ準シ左ノ割合ヲ以テ之ヲ定ム但町村條例ヲ以テ之ヲ增減スルコトヲ得

一　人口千五百未滿ノ町村ニ於テハ　議員八人

一　人口千五百以上五千未滿ノ町村ニ於テハ　議員十二人

一　人口五千以上一萬未滿ノ町村ニ於テハ　議員十八人

一　人口一萬以上二萬未滿ノ町村ニ於テハ　議員二十四人

一　人口二萬以上ノ町村ニ於テハ　議員三十人

第十二條　町村公民(第七條)ハ總テ選擧權ヲ有ス但其公民權ヲ停止セラルヽ者(第八條第三項、第九條第二項)及陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ此限ニ在ラス

凡內國人ニシテ公權ヲ有シ直接町村稅ヲ納ムル者其額町村公民ノ最多ク納稅スル者三名中ノ一人ヨリモ多キトキハ第七條ノ要件ニ當ラスト雖モ選擧權ヲ有ス但公民權ヲ停止セラルヽ者及陸海軍ノ現役ニ服スル者ハ此限ニ在ラス

法律ニ從テ設立シタル會社其他法人ニシテ前項ノ場合ニ當ルトキモ亦同シ

第十三條　選擧人ハ分テ二級ト爲ス

選擧人中直接町村稅ノ納額多キ者ヲ合セテ選擧人全員ノ納ムル總額ノ半ニ當ル可キ者ヲ一級トシ爾餘ノ選擧人ヲ二級トス

一級二級ノ間納稅額兩級ニ跨ル者アルトキハ一級ニ入ル可シ又兩級ノ間ニ同額ノ納稅者二名以上アルトキハ其町村內ニ住居スル年數ノ多キ者ヲ以テ一級ニ入ル若シ住居ノ年數ニ依リ難キトキハ年齡ヲ以テシ年齡ニモ依リ難キトキハ町村長抽籤ヲ以テ之ヲ定ム可シ

選擧人每級各別ニ議員ノ半數ヲ選擧ス其被選擧人ハ同級內ノ者ニ限ラス兩級ニ通シテ選擧セラルルコトヲ得

第十四條　特別ノ事情アリテ前條ノ例ニ依リ難キ町村ニ於テハ町村條例ヲ以テ別ニ選擧ノ特例ヲ設クルコトヲ得

第十五條　選擧權ヲ有スル町村公民(第十二條第一項)ハ總テ被選擧權ヲ有ス

左ニ揭クル者ハ町村會議員タルコトヲ得ス

一　所屬府縣郡ノ官吏

二　有給ノ町村吏員

三　檢察官及警察官吏

四　神官僧侶及其他諸宗教師

五　小學校教員

其他官吏ニシテ常選シ之ニ應セントスルトキハ所屬長官ノ許可ヲ受ク可シ

代言人ニ非スシテ他人ノ爲メニ裁判所又ハ其他ノ官廳ニ對シテ事ヲ辨スルヲ以テ業ト爲ス者ハ議員ニ選擧セラルルコトヲ得ス

父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ町村會議員タルコトヲ得ス其同時ニ選擧セラレタルトキハ投票ノ數ニ依テ其多キ者一人ヲ當選トシ若シ同數ナレハ年長者ヲ當選トス其時ヲ異ニシテ選擧セラレタル者ハ後者議員タルコトヲ得ス

町村長若クハ助役トノ間父子兄弟タルノ緣故アル者ハ之ト同時ニ町村會議員タルコトヲ得ス若シ議員トノ間ニ其緣故アル者町村長若クハ助役ニ選擧セラレ認可ヲ受クルトキハ其緣故アル議員ハ其職ヲ退ク可シ

第十六條　議員ハ名譽職トス其任期ハ六年トシ每三年各級ニ於テ其半數ヲ改選ス若シ各級ノ議員二分シ難キトキハ初回ニ於テ多數ノ一半ヲ解任セシム初回ニ於テ解任ス可キ者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

退任ノ議員ハ再選セラルルコトヲ得

第十七條　議員中闕員アルトキハ毎三年定期改選ノ時ニ至リ同時ニ補闕選擧ヲ行フ可シ若シ定員三分ノ一以上闕員アルトキ又ハ町村會町村長若クハ郡長ニ於テ臨時補闕ヲ必要ト認ムルトキハ定期前ト雖モ其補闕選擧ヲ行フ可シ

補闕議員ハ其前任者ノ殘任期間在職スルモノトス

定期改選及補闕選擧トモ前任者ノ選擧セラレタル選擧等級ニ從テ之カ選擧ヲ行フ可シ

第十八條　町村長ハ選擧ヲ行フ毎ニ其選擧前六十日ヲ限リ選擧原簿ヲ製シ各選擧人ノ資格ヲ記載シ此原簿ニ據リテ選擧人名簿ヲ製ス可シ

選擧人名簿ハ七日間町村役場ニ於テ之ヲ關係者ノ縱覽ニ供ス可シ若シ關係者ニ於テ訴願セントスルコトアルトキハ同期限內ニ之ヲ町村長ニ申立ツ可シ町村長ハ町村會ノ裁決(第三十七條第一項)ニ依リ名簿ヲ修正ス可キトキハ選擧前十日ヲ限リテ之ニ修正ヲ加ヘテ確定名簿トナシ之ニ登錄セラレサル者ハ何人タリトモ選擧ニ關スルコトヲ得ス

本條ニ依リ確定シタル名簿ハ當選ヲ辭シ若クハ選擧ノ無效トナリタル場合ニ於テ更ニ選擧ヲ爲ストキモ亦之ヲ適用ス

第十九條　選擧ヲ執行スルトキハ町村長ハ選擧ノ場所日時ヲ定メ及選擧ス可キ議員ノ數ヲ各級ニ分チ選擧前七日ヲ限リテ之ヲ公告ス可シ

各級ニ於テ選擧ヲ行フノ順序ハ先ツ二級ノ選擧ヲ行ヒ次ニ一級ノ選擧ヲ行フ可シ

第二十條　選擧掛ハ名譽職トシ町村長ニ於テ臨時ニ選擧人中ヨリ二名以上若クハ四名ヲ選任シ町村長若クハ其代理者ハ其係長トナリ選擧會ヲ開閉シ其會場ノ取締ニ任ス

第二十一條　選擧開會中ハ選擧人ノ外何人タリトモ選擧會場ニ入ルコトヲ得ス選擧人ハ選擧會場ニ於テ協議又ハ勸誘ヲ爲スコトヲ得ス

第二十二條　選擧ハ投票ヲ以テ之ヲ行フ投票ニハ被選擧人ノ氏名ヲ記シ封緘ノ上選擧人自ラ掛長ニ差出ス可シ但選擧人ノ氏名ハ投票ニ記入スルコトヲ得ス

選擧人投票ヲ差出ストキハ自己ノ氏名及住所ヲ掛長ニ申立テ掛長ハ選擧人名簿ニ照シテ之ヲ受ケ封緘ノ儘投票函ニ投入ス可シ但投票函ハ投票ヲ終ル迄之ヲ開クコトヲ得ス

第二十三條　投票ニ記載ノ人員其選擧ス可キ定數ニ過キ又ハ不足アルモ其投票ヲ無效トセス其定數ニ過クルモノハ末尾ニ記載シタル人名ヲ順次ニ棄却ス可シ

左ノ投票ハ之ヲ無效トス

一　人名ヲ記載セス又ハ記載セル人名ノ讀ミ難キモノ

二　被選擧人ノ何人ダルヲ確認シ難キモノ

三　被選擧權ナキ人名ヲ記載スルモノ

四　被選擧人氏名ノ外他事ヲ記入スルモノ

投票ノ受理竝ニ效力ニ關スル事項ハ選擧掛假ニ之ヲ議決ス可否同數ナルトキハ掛長之ヲ決ス

第二十四條　選擧ハ選擧人自ラ之ヲ行フ可シ他人ニ託シテ投票ヲ差出スコトヲ許サス

第二十二條第二項ニ依リ選擧權ヲ有スル者ハ代人ヲ出シテ選擧ヲ行フコトヲ得若シ其獨立ノ男子ニ非サル者又ハ會社其他法人ニ係ルトキハ必ス代人ヲ以テス可シ其代人ハ內國人ニシテ公權ヲ有スル獨立ノ男子ニ限ル但一人ニシテ數人ノ代理ヲ爲スコトヲ得ス且代人ハ委任狀ヲ選擧掛ニ示シテ代

理ノ證ト爲ス可シ

第二十五條　町村ノ區域廣濶ナルトキ又ハ人口稠密ナルトキハ町村會ノ議決ニ依リ區毎ヲ定メ選擧分會ヲ設クルコトヲ得但特ニ二級選擧人ノミ此分會ヲ設クルモ妨ケナシ

分會ノ選擧掛ハ町村長ノ選任シタル代理者ヲ以テ其長トシ第二十條ノ例ニ依リ掛員二名若クハ四名ヲ選任ス

選擧分會ニ於テ爲シタル投票ハ投票函ノ儘本會ニ集テ之ヲ合算シ總數ヲ以テ當選ヲ定ム

選擧分會ハ本會ト同日時ニ之ヲ開ク可シ其他選擧ノ手續會場ノ取締等總テ本會ノ例ニ依ル

第二十六條　議員ノ選擧ハ有効投票ノ多數ヲ得ル者ヲ以テ當選ト爲投票ノ數相同キモノハ年長者ヲ取リ同年ナルトキハ掛長自ラ抽籤シテ其當選ヲ定ム

同時ニ補闕員數名ヲ選擧スルトキハ(第十七條)投票數ノ最多キ者ヲ以テ殘任期ノ最長キ前任者ノ補闕ト爲シ其數相同キトキハ抽籤ヲ以テ其順序ヲ定ム

第二十七條　選擧掛ハ選擧錄ヲ製シテ選擧ノ顚末ヲ記錄シ選擧ヲ終リタル後之ヲ朗讀シ選擧人名簿其他關係書類ヲ合綴シテ之ニ署名ス可シ

投票ハ之ヲ選擧錄ニ附屬シ選擧ヲ結了スルニ至ル迄之ヲ保存ス可シ

第二十八條　選擧ヲ終リタル後選擧掛長ハ直ニ當選者ニ其當選ノ旨ヲ告知ス可シ其當選ヲ辭セントスル者ハ五日以內ニ之ヲ町村長ニ申立ツ可シ

一人ニシテ兩級ノ選擧ニ當リタルトキハ同期限內何レノ選擧ニ應ス可キコトヲ申立ツ可シ其期限內ニ之ヲ申立テサル者ハ總テ其選擧ヲ辭シタル者トナシ第八條ノ處分ヲ爲ス可シ

第二十九條　選擧人選擧ノ効力ニ關シテ訴願セントスルトキハ選擧ノ日ヨリ七日以內ニ之ヲ町村長ニ申立ツルコトヲ得

(第三十七條第一項)

町村長ハ選擧ヲ終リタル後之ヲ郡長ニ報告シ郡長ニ於テ選擧ノ効力ニ關シ異議アルトキハ訴願ノ有無ニ拘ラス郡參事會ニ付シテ處分ヲ行フコトヲ得

選擧ノ定規ニ違背スルコトアルトキハ其選擧ヲ取消シ又被選擧人中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルトキハ其人ノ當選ヲ取消シ更ニ選擧ヲ行ハシムル可シ

第三十條　當選者中其資格ノ要件ヲ有セサル者アルコトヲ發見シ又ハ就職後其要件ヲ失フ者アルトキハ其人ノ當選ハ効力ヲ失フモノトス其要件ノ有無ハ町村會之ヲ議決ス

第三十一條　小町村ニ於テハ郡參事會ノ議決ヲ經町村條例ノ規定ニ依リ町村會ヲ設ケス選擧權ヲ有スル町村公民ノ總會ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第二款　職務權限及處務規程

第三十二條　町村會ハ其町村ヲ代表シ此法律ニ準據シテ町村一切ノ事件並從前特ニ委任セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ委任セラルヽ事件ヲ議決スルモノトス

第三十三條　町村會ノ議決ス可キ事件ノ概目左ノ如シ

一　町村條例及規則ヲ設ケ並改正スル事

二　町村費ヲ以テ支辨ス可キ事業但第六十九條ニ揭クル事務ハ此限ニ在ラス

三　歲入出豫算ヲ定メ豫算外ノ支出及豫算超過ノ支出ヲ認定スル事

四　決算報告ヲ認定スル事
五　法律勅令ニ定ムルモノヲ除クノ外使用料、手數料、町村稅及夫役現品ノ賦課徵收ノ法ヲ定ムル事
六　町村有不動產ノ賣買交換讓受讓渡並質入書入ヲ爲ス事
七　基本財產ノ處分ニ關スル事
八　歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ棄却ヲ爲ス事
九　町村有ノ財產及營造物ノ管理方法ヲ定ムル事
十　町村吏員ノ身元保證金ヲ徵シ並其金額ヲ定ムル事
十一　町村ニ係ル訴訟及和解ニ關スル事

第三十四條　町村會ハ法律命令ニ依リ其職權ニ屬スル町村吏員ノ選擧ヲ行フ可シ

第三十五條　町村會ハ町村ノ事務ニ關スル書類及計算書ヲ檢閱シ町村長ノ報告ヲ請求シテ事務ノ管理、議決ノ施行並收入支出ノ正否ヲ監查スルノ職權ヲ有ス
町村會ハ町村ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ監督官廳ニ差出スコトヲ得

第三十六條　町村會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述ス可シ

第三十七條　町村住民及公民タル權利ノ有無、選擧權及被選擧權ノ有無、選擧人名簿ノ正否並其等級ノ當否、代理ヲ以テ執行スル選擧權（第十二條第二項）及町村會議員選擧ノ効力（第二十九條）ニ關スル訴願ハ町村會之ヲ裁決ス
前項ノ訴願中町村住民及公民タル權利ノ有無並選擧權ノ有無ニ關スルモノハ町村會ノ設ケナキ町村ニ於テハ町村長之ヲ裁決ス

第三十八條　町村會ノ議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ再議議決ス可シ若シ猶同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十條　町村會ハ町村ノ事務ニ關スル書類及計算書ヲ檢閱シ町村長ノ報告ヲ請求シテ事務ノ管理、議決ノ施行並收入支出ノ正否ヲ監查スルノ職權ヲ有ス
町村會ハ町村ノ公益ニ關スル事件ニ付意見書ヲ監督官廳ニ差出スコトヲ得

第四十一條　町村會ハ官廳ノ諮問アルトキハ意見ヲ陳述ス可シ

第四十二條　町村會ハ會議ノ必要アル毎ニ議長之ヲ招集ス若シ議員四分ノ一以上ノ請求アルトキハ必ス之ヲ招集ス可シ其招集並會議ノ事件ヲ告知スルハ急施ヲ要スル場合ヲ除クノ外少クモ開會ノ三日前タル可シ但町村會ノ議決ヲ以テ豫メ會議日ヲ定ムルモ妨ケナシ

第四十三條　町村會ハ議員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ議決スルコトヲ得ス但同一ノ議事ニ付招集再同ニ至ルモ議

員猶三分ノ二ニ滿タサルトキハ此限ニ在ラス

第四十四條　町村會ノ議決ハ可否ノ多數ニ依リ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ再議議決ス可シ若シ猶同數ナルトキハ議長ノ可否スル所ニ依ル

第四十五條　議員ハ自己及其父母兄弟若クハ妻子ノ一身上ニ關スル事件ニ付テハ町村會ノ議決ニ加ハルコトヲ得ス
議員ノ數此除名ノ爲メニ減少シテ會議ヲ開クノ定數ニ滿タサルトキハ郡參事會町村會ニ代テ議決ス

第四十六條　町村會ニ於テ町村吏員ノ選擧ヲ行フトキハ其一名毎ニ匿名投票ヲ以テ之ヲ爲シ有効投票ノ過半數ヲ得ル者ヲ以テ當選トス若シ過半數ヲ得ル者ナキトキハ最多數ヲ得ル者二名ヲ取リ之ニ就テ更ニ投票セシム若シ最多數ヲ得ル者三名以上同數ナルトキハ議長自ラ抽籤シテ其二名ヲ取リ更ニ投票セシム此再投票ニ於テモ猶過半數ヲ得ル者ナキトキハ抽籤ヲ以テ當選ヲ定ム其他ハ第二十二條、第二十三條、第二十四條第一項ヲ適用ス
前項ノ選擧ニハ町村會ノ議決ヲ以テ指名推選ノ法ヲ用フルコトヲ得

第四十七條　町村會ノ會議ハ公開ス但議長ノ意見ヲ以テ傍聽ヲ禁スルコトヲ得

第四十八條　議長ハ各議員ニ事務ヲ分課シ會議及選擧ノ事ヲ總理シ開會閉會並延會ヲ命シ議場ノ秩序ヲ保持ス若シ傍聽者ノ公然贊成又ハ喧擾ヲ起ス者アルトキハ議長ハ之ヲ議場外ニ退出セシムルコトヲ得

第四十九條　町村會ハ書記ヲシテ議事錄ヲ製シテ其議決及選擧ノ顚末並出席議員ノ氏名ヲ記錄セシム可シ議事錄ハ會議ノ末之ヲ朗讀シ議長及議員二名以上之ニ署名ス可シ

町村會ノ書記ハ議長之ヲ選任ス

第五十條　町村會ハ其會議細則ヲ設ク可シ其細則ニ違背シタル議員ニ科ス可キ過怠金二圓以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

第五十一條　第三十二條ヨリ第四十九條ニ至ルノ規定ハ之ヲ町村總會ニ適用ス

第三章　町村行政

第一款　町村吏員ノ組織選任

第五十二條　町村ニ町村長及町村助役各一名ヲ置ク可シ但町村條例ヲ以テ助役ノ定員ヲ增加スルコトヲ得

第五十三條　町村長及助役ハ町村會ニ於テ其町村公民中年齡滿三十歲以上ニシテ選擧權ヲ有スル者ヨリ之ヲ選擧ス
町村長及助役ハ第十五條第二項ニ揭載スル職ヲ兼ヌルコトヲ得ス
父子兄弟タルノ緣故アル者ハ同時ニ町村長及助役ノ職ニ在ルコトヲ得ス若シ其緣故アル者助役ノ選擧ニ當ルトキハ其當選ヲ取消シ其町村長ノ選擧ニ當リテ認可ヲ得ルトキハ其緣故アル助役ハ其職ヲ退ク可シ

第五十四條　町村長及助役ノ任期ハ四年トス
町村長及助役ノ選擧ハ第四十六條ニ依テ行フ可シ但投票同數ナルトキハ抽籤ノ法ニ依ラス郡參事會之ヲ決ス可シ

第五十五條　町村長及助役ハ名譽職トス但第五十六條ノ有給町村長及有給助役ハ此限ニ在ラス
町村長ハ職務取扱ノ爲メニ要スル實費辨償ノ外勤務ニ相當スル報酬ヲ受クルコトヲ得助役ニシテ行政事務ノ一部ヲ分

ヲ收入役ニ渡スヘシ

第五十六條　町村ニ收入役一名ヲ置ク收入役ハ町村長ノ推薦ニ依リ町村會之ヲ選任ス

收入役ハ有給吏員ト爲シ其任期ハ四年トス

收入役ハ町村長及助役ヲ兼ヌルコトヲ得ス其他第五十六條第二項、第五十七條及第七十六條ヲ適用ス

收入役ノ選任ハ郡長ノ認可ヲ受ク可シ若シ認可ヲ與ヘサルトキハ郡參事會ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス郡參事會之ニ同意セサルモ猶郡長ニ於テ認可ス可カラスト爲ストキハ自己ノ責任ヲ以テ之ヲ認可ヲ與ヘサルコトヲ得其他第六十一條ヲ適用ス

郡長ノ不認可ニ對シ町村長又ハ町村會ニ於テ不服アルトキハ府縣知事ニ具申シテ認可ヲ請フコトヲ得

收入支出ノ寡少ナル町村ニ於テハ郡長ノ許可ヲ得テ町村長又ハ助役ヲシテ收入役ノ事務ヲ兼掌セシムルコトヲ得ス

第五十九條　町村長及助役ノ選舉ハ府縣知事ノ認可ヲ受ク可シ

第六十條　府縣知事前條ノ認可ヲ與ヘサルトキハ府縣參事會ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス若シ府縣參事會同意セサルモ猶府縣知事ニ於テ認可ス可カラスト爲ストキハ自己ノ責任ヲ以テ之ニ認可ヲ與ヘサルコトヲ得

第六十一條　町村長及助役ノ選舉其認可ヲ得サルトキハ再選舉ヲ爲ス可シ

再選舉ニシテ猶其認可ヲ得サルトキハ退テ選舉ヲ行ヒ認可ヲ得ルニ至ルノ間認可ノ權アル監督官廳ハ臨時ニ代理者ヲ選任シ又ハ町村費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ町村長及助役ノ職務ヲ管掌セシムル可シ

第六十二條　町村ニ收入役一名ヲ置ク收入役ハ町村長ノ推薦ニ依リ町村會之ヲ選任ス

收入役ハ有給吏員ト爲シ其任期ハ四年トス

收入役ハ町村長及助役ヲ兼ヌルコトヲ得又大ナル町村ニ於テハ町村條例ノ規定ヲ以テ助役一名ヲ有給吏員ト爲スコトヲ得

有給町村長及有給助役ハ其町村公民タル者ニ限ラス但當選ニ應シ認可ヲ得ルトキハ其公民タルノ權ヲ得

第五十七條　有給町村長及有給助役ハ三箇月前ニ申立ツルトキハ隨時退職ヲ求ムルコトヲ得此場合ニ於テハ退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

第五十八條　有給町村長及有給助役ハ他ノ有給ノ職務ヲ兼任シ又ハ株式會社ノ社長及重役トナルコトヲ得ス其他ノ營業ハ郡長ノ認許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五十九條　町村長及助役ノ選舉ハ府縣知事ノ認可ヲ受ク可シ

第六十條　府縣知事前條ノ認可ヲ與ヘサルトキハ府縣參事會ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス若シ府縣參事會同意セサルモ猶府縣知事ニ於テ認可ス可カラスト爲ストキハ自己ノ責任ヲ以テ之ニ認可ヲ與ヘサルコトヲ得

府縣知事ノ不認可ニ對シ町村長又ハ町村會ニ於テ不服アルトキハ內務大臣ニ具申シテ認可ヲ請フコトヲ得

第六十一條　町村長及助役ノ選舉其認可ヲ得サルトキハ再選舉ヲ爲ス可シ

再選舉ニシテ猶其認可ヲ得サルトキハ退テ選舉ヲ行ヒ認可ヲ得ルニ至ルノ間認可ノ權アル監督官廳ハ臨時ニ代理者ヲ選任シ又ハ町村費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ町村長及助役ノ職務ヲ管掌セシムル可シ

第六十二條　町村ニ收入役一名ヲ置ク收入役ハ町村長ノ推薦ニ依リ町村會之ヲ選任ス

收入役ハ有給吏員ト爲シ其任期ハ四年トス

收入役ハ町村長及助役ヲ兼ヌルコトヲ得又大ナル町村ニ於テハ町村條例ノ規定ヲ以テ助役一名ヲ有給吏員ト爲スコトヲ得

有給町村長及有給助役ハ其町村公民タル者ニ限ラス但當選ニ應シ認可ヲ得ルトキハ其公民タルノ權ヲ得

第五十七條　有給町村長及有給助役ハ三箇月前ニ申立ツルトキハ隨時退職ヲ求ムルコトヲ得此場合ニ於テハ退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

第五十八條　有給町村長及有給助役ハ他ノ有給ノ職務ヲ兼任シ又ハ株式會社ノ社長及重役トナルコトヲ得ス其他ノ營業ハ郡長ノ認許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五十九條　町村長及助役ノ選舉ハ府縣知事ノ認可ヲ受ク可シ

第六十條　府縣知事前條ノ認可ヲ與ヘサルトキハ府縣參事會ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス若シ府縣參事會同意セサルモ猶府縣知事ニ於テ認可ス可カラスト爲ストキハ自己ノ責任ヲ以テ之ニ認可ヲ與ヘサルコトヲ得

府縣知事ノ不認可ニ對シ町村長又ハ町村會ニ於テ不服アルトキハ內務大臣ニ具申シテ認可ヲ請フコトヲ得

第六十一條　町村長及助役ノ選舉其認可ヲ得サルトキハ再選舉ヲ爲ス可シ

再選舉ニシテ猶其認可ヲ得サルトキハ退テ選舉ヲ行ヒ認可ヲ得ルニ至ルノ間認可ノ權アル監督官廳ハ臨時ニ代理者ヲ選任シ又ハ町村費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ町村長及助役ノ職務ヲ管掌セシムル可シ

第六十二條　町村ニ收入役一名ヲ置ク收入役ハ町村長ノ推薦ニ依リ町村會之ヲ選任ス

收入役ハ有給吏員ト爲シ其任期ハ四年トス

收入役ハ町村長及助役ヲ兼ヌルコトヲ得又大ナル町村ニ於テハ町村條例ノ規定ヲ以テ助役一名ヲ有給吏員ト爲スコトヲ得

有給町村長及有給助役ハ其町村公民タル者ニ限ラス但當選ニ應シ認可ヲ得ルトキハ其公民タルノ權ヲ得

第五十七條　有給町村長及有給助役ハ三箇月前ニ申立ツルトキハ隨時退職ヲ求ムルコトヲ得此場合ニ於テハ退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

第五十八條　有給町村長及有給助役ハ他ノ有給ノ職務ヲ兼任シ又ハ株式會社ノ社長及重役トナルコトヲ得ス其他ノ營業ハ郡長ノ認許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五十九條　町村長及助役ノ選舉ハ府縣知事ノ認可ヲ受ク可シ

第六十條　府縣知事前條ノ認可ヲ與ヘサルトキハ府縣參事會ノ意見ヲ聞クコトヲ要ス若シ府縣參事會同意セサルモ猶府縣知事ニ於テ認可ス可カラスト爲ストキハ自己ノ責任ヲ以テ之ニ認可ヲ與ヘサルコトヲ得

府縣知事ノ不認可ニ對シ町村長又ハ町村會ニ於テ不服アルトキハ內務大臣ニ具申シテ認可ヲ請フコトヲ得

第六十一條　町村長及助役ノ選舉其認可ヲ得サルトキハ再選舉ヲ爲ス可シ

再選舉ニシテ猶其認可ヲ得サルトキハ退テ選舉ヲ行ヒ認可ヲ得ルニ至ルノ間認可ノ權アル監督官廳ハ臨時ニ代理者ヲ選任シ又ハ町村費ヲ以テ官吏ヲ派遣シ町村長及助役ノ職務ヲ管掌セシムル可シ

ハ其區會ニ於テ之ヲ選舉ス

第六十五條　町村ハ町村會ノ議決ニ依リ臨時又ハ常設ノ委員ヲ設クルコトヲ得其委員ハ名譽職トス

委員ハ町村會ニ於テ町村會議員又ハ町村公民中選舉權ヲ有スル者ヨリ選舉シ町村長又ハ其委任ヲ受ケタル助役ヲ以テ委員長トス

常設委員ノ組織ニ關シテハ町村條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第六十六條　區長及委員ニハ職務取扱ノ爲メニ要スル實費辨償ノ外町村會ノ議決ニ依リ勤務ニ相當スル報酬ヲ給スルコトヲ得

第六十七條　町村吏員ハ任期滿限ノ後再選セラルヽコトヲ得

町村吏員及使丁ハ別段ノ規定又ハ規約アルモノヲ除クノ外隨時解職スルコトヲ得

第二款　町村吏員ノ職務權限

第六十八條　町村長ハ其町村ヲ統轄シ其行政事務ヲ擔任ス

一　町村長ノ擔任スル事務ノ概目左ノ如シ

町村會ノ議事ヲ準備シ及其議決ヲ執行スル事若シ町村會ノ議決其權限ヲ越エ法律命令ニ背キ又ハ公衆ノ利益ヲ害スト認ムルトキハ町村長ハ自己ノ意見ニ依リ又ハ監督官廳ノ指揮ニ依リ理由ヲ示シテ議決ノ執行ヲ停止シ之ヲ再議セシメ猶其議決ヲ更メサルトキハ郡參事會ノ裁決ヲ請フ可シ其權限ヲ越エ又ハ法律命令ニ背クニ依テ議決ノ執行ヲ停止シタル場合ニ於テ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二　町村ノ設置ニ係ル營造物ヲ管理スル事若シ特ニ之カ管理者アルトキハ其事務ヲ監督スル事

三　町村ノ歲入ヲ管理シ歲入出豫算表其他町村會ノ議決ニ依テ定マリタル收入支出ヲ命令シ會計及出納ヲ監視スル事

四　町村ノ權利ヲ保護シ町村有ノ財產ヲ管理スル事

五　町村吏員及使丁ヲ監督シ懲戒處分ヲ行フ事其懲戒處分ハ譴責及五圓以下ノ過怠金トス

六　町村ノ諸證書及公文書類ヲ保管スル事

七　外部ニ對シテ町村ヲ代表シ町村ノ名義ヲ以テ其訴訟竝和解ニ關シ又ハ他廳若クハ人民ト商議スル事

八　法律勅令ニ依リ又ハ町村會ノ議決ニ從テ使用料、手數料、町村稅及夫役現品ヲ賦課徵收スル事

九　其他法律命令又ハ上司ノ指令ニ依テ町村長ニ委任シタル事務ヲ處理スル事

第六十九條　町村長ハ法律命令ニ從ヒ左ノ事務ヲ管掌ス

一　司法警察補助官タルノ職務及法律命令ニ依テ其管理ニ屬スル地方警察ノ事務但別ニ官署ヲ設ケテ地方警察事務ヲ管掌セシムルトキハ此限ニ在ラス

二　浦役場ノ事務

三　國ノ行政竝府縣郡ノ行政ニシテ町村ニ屬スル事務但別ニ吏員ノ設ケアルトキハ此限ニ在ラス

右三項中ノ事務ハ監督官廳ノ許可ヲ得テ之ヲ助役ニ分掌セシムルコトヲ得

本條ニ揭載スル事務ヲ執行スルカ爲メニ要スル費用ハ町村ノ負擔トス

第七十條　町村助役ハ町村長ノ事務ヲ補助ス

町村長ハ町村會ノ同意ヲ得テ助役ヲシテ町村行政事務ノ一部ヲ分掌セシムルコトヲ得

助役ハ町村長故障アルトキ之ヲ代理ス助役數名アルトキハ上席者之ヲ代理ス可シ

第七十一條　町村收入役ハ町村ノ收入ヲ受領シ其費用ノ支拂ヲ爲シ其他會計事務ヲ掌ル

第七十二條　書記ハ町村長ニ屬シ庶務ヲ分掌ス

第七十三條　區長及其代理者ハ町村長ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受ケテ區內ニ關スル町村長ノ事務ヲ補助執行スルモノトス

第七十四條　委員（第六十五條）ハ町村行政事務ノ一部ヲ分掌シ又ハ營造物ヲ管理シ若クハ監督シ又ハ一時ノ委託ヲ以テ事務ヲ處辨スルモノトス

委員長ハ委員ノ議決ニ加ハルノ權ヲ有ス助役ヲ以テ委員長ト爲ス場合ニ於テモ町村長ハ臨時委員會ニ出席シテ其委員長ト爲リ並其議決ニ加ハルノ權ヲ有ス

常設委員ノ職務權限ニ關シテハ町村條例ヲ以テ別段ノ規定ヲ設クルコトヲ得

第三款　給料及給與

第七十五條　名譽職員ハ此法律中別ニ規定アルモノヲ除クノ外職務取扱ノ爲メニ要スル實費ノ辨償ヲ受クルコトヲ得

實費辨償額、報酬額及書記料ノ額（第六十三條第一項）ハ町村會之ヲ議決ス

第七十六條　有給町村長有給助役其他有給吏員及使丁ノ給料額ハ町村會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

町村會ノ議決ヲ以テ町村長及助役ノ給料額ヲ定ムルトキハ郡長ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス郡長ニ於テ之ヲ許可ス可ラスト認ムルトキハ郡參事會ノ議決ニ付シテ之ヲ確定ス

第七十七條　町村條例ノ規定ヲ以テ有給吏員ノ退隱料ヲ設クルコトヲ得

第七十八條　有給吏員ノ給料、退隱料其他第七十五條ニ定ムル給與ニ關シテ異議アルトキハ關係者ノ申立ニ依リ郡參事會之ヲ裁決ス其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七十九條　退隱料ヲ受クル者官職又ハ府縣郡市町村及公共組合ノ職務ニ就キ給料ヲ受クルトキハ其間之ヲ停止シ又ハ更ニ退隱料ヲ受クルノ權ヲ得ルトキ其額舊退隱料ト同額以上ナルトキハ舊退隱料ハ之ヲ廢止ス

第八十條　給料、退隱料、報酬及辨償等ハ總テ町村ノ負擔トス

第四章　町村有財產ノ管理

第一款　町村有財產及町村稅

第八十一條　町村ハ其不動產、積立金穀等ヲ以テ基本財產ト爲シ之ヲ維持スルノ義務アリ

臨時ニ收入シタル金穀ハ基本財產ニ加入ス可シ但寄附金等寄附者其使用ノ目的ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

第八十二條　凡町村有財產ハ全町村ノ爲メニ之ヲ管理シ及共用スルモノトス但特ニ民法上ノ權利ヲ有スル者アルトキハ此限ニ在ラス

第八十三條　舊來ノ慣行ニ依リ町村住民中特ニ其町村有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ有スル者アルトキハ町村會ノ議決

ヲ經ルニ非サレハ其慣慣ヲ改ムルコトヲ得ス

第八十四條　町村住民中特ニ其町村有ノ土地物件ヲ使用スル權利ヲ得ントスル者アルトキハ町村條例ノ規定ニ依リ使用料若クハ一時ノ加入金ヲ徵收シ又ハ使用料加入金ヲ共ニ徵收シテ之ヲ許可スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十五條　使用權ヲ有スル者（第八十三條、第八十四條）ハ使用ノ多寡ニ準シテ其土地物件ニ係ル必要ナル費用ヲ分擔ス可キモノトス

第八十六條　町村會ハ町村ノ爲メニ必用ナル場合ニ於テハ使用權（第八十三條、第八十四條）ヲ取上ケ又ハ制限スルコトヲ得但特ニ民法上使用ノ權利ヲ有スル者ハ此限ニ在ラス

第八十七條　町村有財產ノ賣却貸與又ハ建築工事及物品調達ノ請負ハ公ケノ入札ニ付ス可シ但臨時急施ヲ要スルトキ及入札ノ價額其費用ニ比シテ得失相償ハサルトキ又ハ町村會ノ認許ヲ得ルトキハ此限ニ在ラス

第八十八條　町村ハ其必要ナル支出及從前法律命令ニ依テ賦課セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ賦課セラルヽ支出ヲ負擔スルノ義務アリ

町村ハ其財產ヨリ生スル收入及使用料、手數料（第八十九條）並科料、過怠金其他法律勅令ニ依リ町村ニ屬スル收入ヲ以テ前項ノ支出ニ充テ猶不足アルトキハ町村稅（第九十條）及夫役現品（第百一條）ヲ賦課徵收スルコトヲ得

第八十九條　町村ハ其所有物及營造物ノ使用ニ付又ハ特ニ數個人ノ爲メニスル事業ニ付使用料又ハ手數料ヲ徵收スルコトヲ得

第九十條　町村稅トシテ賦課スルコトヲ得可キ目左ノ如シ

一　國稅府縣稅ノ附加稅

二　直接又ハ間接ノ特別稅

附加稅ハ直接ノ國稅又ハ府縣稅ニ附加シ均一ノ稅率ヲ以テ町村ノ全部ヨリ徵收スルヲ常例トス特別稅ハ附加稅ノ外別ニ町村限リ稅目ヲ起シテ課稅スルコトヲ要スルトキ賦課徵收スルモノトス

第九十一條　此法律ニ規定セル條項ヲ除クノ外使用料、手數料（第八十九條）特別稅（第九十條第一項第二）及從前ノ町村費ニ關スル細則ハ町村條例ヲ以テ之ヲ規定ス可シ其條例ニハ科料一圓九十五錢以下ノ罰則ヲ設クルコトヲ得

科料ニ處シ及之ヲ徵收スルハ町村長之ヲ掌ル其處分ニ不服アル者ハ令狀交付後十四日以內ニ司法裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第九十二條　三箇月以上町村內ニ滯在スル者ハ其町村稅ヲ納ムルモノトス但其課稅ハ滯在ノ初ニ遡リ徵收ス可シ

第九十三條　町村內ニ住居ヲ揔ヘス又ハ三箇月以上滯在スルコトナシト雖トモ町村內ニ土地家屋ヲ所有シ又ハ營業ヲ爲ス者（店舖ヲ定メサル行商ヲ除ク）ハ其土地家屋營業若クハ其所得ニ對シテ賦課スル町村稅ヲ納ムルモノトス其法人タルトキモ亦同シ但郵便電信及官設鐵道ノ業ハ此限ニ在ラス

第九十四條　所得稅ニ附加稅ヲ賦課シ及町村ニ於テ特別ニ所得稅ヲ賦課セントスルトキハ納稅者ノ町村外ニ於ケル所有ノ土地家屋又ハ營業（店舖ヲ定メサル行商ヲ除ク）ヨリ收入スル所得ハ之ヲ控除ス可キモノトス

第九十五條　數市町村ニ住居ヲ揔ヘ又ハ滯在スル者ニ前條ノ

町村稅ヲ賦課スルトキハ其所得ヲ各市町村ニ平分シ其一部分ニノミ課稅スヿヲ得

第九十六條　所得稅法第三條ニ揭ケル所得ハ町村稅ヲ免除ス

第九十七條　左ニ揭ケル物件ハ町村稅ヲ免除ス

一　政府、府縣郡市町村及公共組合ニ屬シ直接ノ公用ニ供スル土地、營造物及家屋

二　社寺及官立公立ノ學校病院其他學藝、美術及慈善ノ用ニ供スル土地、營造物及家屋

三　官有ノ山林又ハ荒蕪地但官有山林又ハ荒蕪地ノ利益ニ係ル事業ヲ起シ內務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ得ヲ其費用ヲ徵收スルハ此限ニ在ラス

新開地及開墾地ハ町村條例ニ依リ年月ヲ限リ免稅スルコトヲ得

第九十八條　前二條ノ外町村稅ヲ免除スヿヲ得キモノハ別段ノ法律勅令ニ定ムル所ニ從ヲ皇族ニ係ル町村稅ノ賦課ハ追テ法律勅令ヲ以テ定ムル迄現今ノ例ニ依ル

第九十九條　數個人ニ於テ專ラ使用スル所ノ營造物アルトキハ其修築及保存ノ費用ハ之ヲ其關係者ニ賦課スヿヲ得

町村內ノ一部ニ於テ專ラ使用スル營造物アルトキハ其部內ニ住居シ若クハ滯在シ又ハ土地家屋ヲ所有シ營業（店舖ヲ定メサル行商ヲ除ク）ヲ爲ス者ニ於テ其修築及保存ノ費用ヲ負擔スヿヲ得シ但其一部ノ所有財產アルトキハ其收入ヲ以テ先ツ其費用ニ充ツヿヲ得シ

第百條　町村稅ハ納稅義務ノ起リタル翌月ノ初ヨリ免稅理由ノ生シタル月ノ終迄月割ヲ以テ之ヲ徵收スヿヲ得シ

會計年度中ニ於テ納稅義務消滅シ又ハ變更スルトキハ納稅者ヨリ之ヲ町村長ニ屆出ツヿヲ得シ其屆出ヲ爲シタル月ノ終迄ハ從前ノ稅ヲ徵收スルコトヲ得

第百一條　町村公共ノ事業ヲ起シ又ハ公共ノ安寧ヲ維持スルカ爲メ夫役及現品ヲ以テ納稅者ニ賦課スルコトヲ得但學藝、美術及手工ニ關スル勞役ヲ課スルコトヲ得ス

夫役及現品ハ急迫ノ場合ヲ除クノ外直接町村稅ヲ準率ト爲シ且ツ之ヲ金額ニ算出シテ賦課スヿヲ得シ

夫役ヲ課セラレタル者ハ其便宜ニ從ヒ本人自ラ之ニ當リ又ハ適當ノ代人ヲ出スコトヲ得又急迫ノ場合ヲ除クノ外金圓ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

第百二條　町村ニ於テ徵收スル使用料、手數料（第八十九條）町村稅（第九十條）夫役ニ代フル金圓（第百一條）共有物使用料及加入金（第八十四條）其他町村ノ收入ヲ定期內ニ納メサルトキハ町村長ハ之ヲ督促シ猶之ヲ完納セサルトキハ國稅滯納處分法ニ依リ之ヲ徵收スヿヲ得シ其督促ヲ爲スニハ町村條例ノ規定ニ依リ手數料ヲ徵收スルコトヲ得

納稅者中無資力ナル者アルトキハ町村長ノ意見ヲ以テ會計年度內ニ限リ納稅延期ヲ許スコトヲ得其年度ヲ超ユル場合ニ於テハ町村會ノ議決ニ依ル

本條ニ記載スル徵收金ノ追徵期滿得免及先取特權ニ付テハ國稅ニ關スル規則ヲ適用ス

第百三條　地租ノ附加稅ハ地租ノ納稅者ニ賦課シ其他土地ニ對シテ賦課スル町村稅ハ其所有者又ハ使用者ニ賦課スルコトヲ得

第百四條　町村稅ノ賦課ニ對スル訴願ハ賦課令狀ノ交付後三箇月以內ニ之ヲ町村長ニ申立ツヿヲ得シ此期限ヲ經過スルトキハ其年度內減稅免稅及償還ヲ請求スルノ權利ヲ失フモノトス

第百五條　町村稅ノ賦課及町村ノ營造物、町村有ノ財產竝其所得ヲ使用スル權利ニ關スル訴願ハ町村長之ヲ裁決ス但民法上ノ權利ニ係ルモノハ此限ニ在ラス

前項ノ裁決ニ不服アル者ハ郡參事會ニ訴願シ其郡參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

本條ノ訴願及訴訟ノ爲メニ其處分ノ執行ヲ停止スルコトヲ得ス

第百六條　町村ニ於テ公債ヲ募集スルハ從前ノ公債元額ヲ償還スル爲メ又ハ天災時變等已ムヲ得サル支出若クハ町村永久ノ利益トナル可キ支出ヲ要スルニ方リ通常ノ歲入ヲ增加スルトキハ其町村住民ノ負擔ニ堪ヘサルノ場合ニ限ルモノトス

町村會ニ於テ公債募集ノ事ヲ議決スルトキハ併セテ其募集ノ方法、利息ノ定率及償還ノ方法ヲ定ムヿヲ可シ償還ノ初期ハ三年以內ト爲シ年々償還ノ步合ヲ定メ募集ノ時ヨリ三十年以內ニ還了スヿヲ可シ

定額豫算內ノ支出ヲ爲スヿヲ爲メ必要ナル一時ノ借入金ハ本條ノ例ニ依ラス其年度內ノ收入ヲ以テ償還スヿヲ可キモノトス

第二款　町村ノ歲入出豫算及決算

第百七條　町村長ハ每會計年度收入支出ノ豫知シ得可キ金額ヲ見積リ年度前二箇月ヲ限リ歲入出豫算表ヲ調製スヿヲ可シ但町村ノ會計年度ハ政府ノ會計年度ニ同シ

內務大臣ハ省令ヲ以テ豫算表調製ノ式ヲ定ムルコトヲ得

第百八條　豫算表ハ會計年度前町村會ノ議決ヲ取リ之ヲ郡長ニ報告シ竝地方慣行ノ方式ヲ以テ其要領ヲ公告スヿヲ可シ

豫算表ヲ町村會ニ提出スルトキハ町村長ハ併セテ其町村事務報告書及財產明細表ヲ提出スヿヲ可シ

第百九條　定額豫算外ノ費用又ハ豫算ノ不足アルトキハ町村會ノ認定ヲ得テ之ヲ支出スルコトヲ得

定額豫算中臨時ノ場合ニ支出スルカ爲メニ豫備費ヲ置キ町村長ハ豫メ町村會ノ認定ヲ受クスシテ豫算外ノ費用又ハ豫算超過ノ費用ニ充ツルコトヲ得但町村會ノ否決シタル費途ニ充ツルコトヲ得ス

第百十條　町村會ニ於テ豫算表ヲ議決シタルトキハ町村長ヨリ其謄寫ヲ以テ之ヲ收入役ニ交付スヿヲ可シ其豫算表中監督官廳若クハ參事會ノ許可ヲ受ク可キ事項アルトキハ（第百二十五條ヨリ第百二十七條ニ至ル）先ツ其許可ヲ受ク可シ

收入役ハ町村長（第六十八條第二項第三）又ハ監督官廳ノ命令アルニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス又收入役ハ町村長ノ命令ヲ受クルモ其支出豫算表中ニ豫定ナキカ又ハ其命令第百九條ノ規定ニ依ラサルトキハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

前項ノ規定ニ背キタル支拂ハ總テ收入役ノ責任ニ歸ス

第百十一條　町村ノ出納ハ每月例日ヲ定メテ檢查シ及每年少クモ一回臨時檢查ヲ爲スヿヲ可シ例月檢查ハ町村長又ハ其代理者之ヲ爲シ臨時檢查ハ町村長又ハ其代理者ノ外町村會ノ互選シタル議員一名以上ノ立會ヲ要ス

第百十二條　決算ハ會計年度ノ終ヨリ三箇月以內ニ之ヲ結了シ證書類ヲ併セテ收入役ヨリ之ヲ町村長ニ提出シ町村長ハ

之ヲ審査シ意見ヲ附シテ之ヲ町村會ノ認定ニ付ス可シ第六十二條第六項ノ場合ニ於テハ前例ニ依リ町村長ヨリ直ニ之ヲ町村會ニ提出ス可シ其町村會ノ認定ヲ經タルトキハ町村長ハ之ヲ郡長ニ報告ス可シ

第百十三條　決算報告ヲ爲ストキハ第四十條ノ例ニ準シテ議長代理者共ニ故障アルモノトス

第五章　町村内各部ノ行政

第百十四條　町村内ノ區（第六十四條）又ハ町村内ノ一部若クハ合併町村（第四條）ニシテ別ニ其區域ヲ存シテ一區ヲ爲スモノ特別ニ財産ヲ所有シ若クハ營造物ヲ設ケ其一區限リ特ニ其費用（第九十九條）ヲ負擔スルトキハ郡參事會ハ其町村會ノ意見ヲ聞キ條例ヲ發行シ財産及營造物ニ關スル事務ノ爲メ區會又ハ區總會ヲ設クルコトヲ得其會議ハ町村會ノ例ヲ適用スルコトヲ得

第百十五條　前條ニ記載スル事務ハ町村ノ行政ニ關スル規則ニ依リ町村長之ヲ管理ス可シ但區ノ出納及會計ノ事務ハ之ヲ分別ス可シ

第六章　町村組合

第百十六條　數町村ノ事務ヲ共同處分スル爲メ其協議ニ依リ監督官廳ノ許可ヲ得テ其町村ノ組合ヲ設クルコトヲ得

法律上ノ義務ヲ負擔スルニ堪ヘ可キ資力ヲ有セサル町村ニシテ他ノ町村ト合併（第四條）スルノ協議整ハス又ハ其事情ニ依リ合併ヲ不便ト爲ストキハ郡參事會ノ議決ヲ以テ數町村ノ組合ヲ設クルコトヲ得

第百十七條　町村組合ヲ設クルノ協議ヲ爲ストキハ（第百十六條第一項）組合會議ノ組織、事務ノ管理方法並其費用ノ支辨方法ヲ併セテ規定ス可シ

前條第二項ノ場合ニ於テハ其關係町村ノ協議ヲ以テ組合費用ノ分擔法等其他必要ノ事項ヲ規定ス可シ若シ其協議整ハサルトキハ郡參事會ニ於テ之ヲ定ム可シ

第百十八條　町村組合ハ監督官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレハ之ヲ解クコトヲ得ス

第七章　町村行政ノ監督

第百十九條　町村ノ行政ハ第一次ニ於テ郡長之ヲ監督シ第二次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第三次ニ於テ内務大臣之ヲ監督ス但法律ニ指定シタル場合ニ於テ郡參事會及府縣參事會ノ參與スルハ別段ナリトス

第百二十條　此法律中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外凡町村ノ行政ニ關スル郡長若クハ郡參事會ノ處分若クハ裁決ニ不服アル者ハ府縣知事若クハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣知事若クハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得

町村ノ行政ニ關スル訴願ハ處分書若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ十四日以内ニ其理由ヲ具シテ之ヲ提出ス可シ但此法律中別ニ期限ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス

此法律中ニ指定スル場合ニ於テ府縣知事若クハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アリテ行政裁判所ニ出訴セントスル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ二十一日以内ニ出訴ス可シ

行政裁判所ニ出訴スルコトヲ許シタル場合ニ於テハ内務大臣ニ訴願スルコトヲ得ス

訴願及訴訟ヲ提出スルトキハ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止ス但此法律中別ニ規定アリ又ハ當該官廳ノ意見ニ依リ其停止ノ爲メニ町村ノ公益ニ害アリト爲ストキハ此限ニ在ラス

第百二十一條　監督官廳ハ町村行政ノ法律命令ニ背戻セサルヤ其事務錯亂澁滯セサルヤ否ヲ監視ス可シ監督官廳ハ之カ爲メニ行政事務ニ關シテ報告ヲ爲サシメ豫算及決算等ノ書類帳簿ヲ徵シ竝實地ニ就テ事務ノ現況ヲ視察シ出納ヲ檢閱スルノ權ヲ有ス

第百二十二條　町村又ハ其組合ニ於テ法律勅令ニ依テ負擔シ又ハ當該官廳ノ職權ニ依テ命令スル所ノ支出ヲ定額豫算ニ載セス又ハ臨時之ヲ承認セス又ハ實行セサルトキハ郡長ハ理由ヲ示シテ其支出額ヲ定額豫算表ニ加ヘ又ハ臨時支出セシムル可シ

町村又ハ其組合ニ於テ前項ノ處分ニ不服アルトキハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第百二十三條　凡町村會ニ於テ議決ス可キ事件ヲ議決セサルトキハ郡參事會代テ之ヲ議決ス可シ

第百二十四條　内務大臣ハ町村會ヲ解散セシムルコトヲ得解散ヲ命シタル場合ニ於テハ同時ニ三箇月以内更ニ議員ヲ改選ス可キコトヲ命ス可シ但改選町村會ノ集會スル迄ハ郡參事會町村會ニ代テ一切ノ事件ヲ議決ス

第百二十五條　左ノ事件ニ關スル町村會ノ議決ハ内務大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　町村條例ヲ設ケ竝改正スル事

二　學藝、美術ニ關シ又ハ歴史上貴重ナル物品ノ賣却讓與質入書入交換若クハ大ナル變更ヲ爲ス事

前項第一ノ場合ニ於テ人口一萬以上ノ町村ニ係ルトキハ勅裁ヲ經テ之ヲ許可ス可シ

第百二十六條　左ノ事件ニ關スル町村會ノ議決ハ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　新ニ町村ノ負債ヲ起シ又ハ負債額ヲ增加シ及第百六條第二項ノ例ニ遵フモノ但償還期限三年以内ノモノハ此限ニ在ラス

二　町村特別稅竝使用料、手數料ヲ新設シ增額シ又ハ變更スル事

三　地租七分ノ一其他直接國稅百分ノ五十ヲ超過スル附加稅ヲ賦課スル事

四　間接國稅ニ附加稅ヲ賦課スル事

五　法律勅令ノ規定ニ依リ官廳ヨリ補助スル歩合金ニ對シ支出金額ヲ定ムル事

第百二十七條　左ノ事件ニ關スル町村會ノ議決ハ郡參事會ノ許可ヲ受クルコトヲ要ス

一　町村ノ營造物ニ關スル規則ヲ設ケ竝改正スル事

二　基本財産ノ處分ニ關スル事（第八十一條）

三　町村有不動産ノ賣却讓與竝質入書入ヲ爲ス事

四　各個人特ニ使用スル町村有土地使用法ノ變更ヲ爲ス事（第八十六條）

五　各種ノ保證ヲ與フル事

六　法律勅令ニ依テ負擔スル義務ニ非スシテ向五箇年以上ニ亘リ新ニ町村住民ニ負擔ヲ課スル事

七　均一ノ稅率ニ據ラスシテ國稅府縣稅ニ附加稅ヲ賦課ス

ル事（第九十條第二項）

八　第九十九條ニ從ヒ數個人又ハ町村內ノ一部ニ費用ヲ賦課スル事

九　第百一條ノ準率ニ據ラスシテ夫役及現品ヲ賦課スル事

第百二十八條　府縣知事郡長ハ町村長、助役、委員、區長其他町村員ニ對シ懲戒處分ヲ行フコトヲ得其懲戒處分ハ譴責及過怠金トス郡長ノ處分ニ係ル過怠金ハ十圓以下府縣知事ノ處分ニ係ルモノハ二十五圓以下トス

退ヲ町村吏員ノ懲戒法ヲ設クル迄ハ左ノ區別ニ從ヒ官吏懲戒例ヲ適用ス可シ

一　町村長ノ懲戒處分（第六十八條第二項第五）ニ不服アル者ハ郡長ニ訴願シ其郡長ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ其府縣知事ノ裁決ニ不服アル者ハ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

二　郡長ノ懲戒處分ニ不服アル者ハ府縣知事ニ訴願シ府縣知事ノ懲戒處分及其裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

三　本條第一項ニ揭ケタル町村吏員職務ニ違フコト再三ニ及ヒ又ハ其情狀重キ者又ハ行狀ヲ亂リ廉耻ヲ失フ者、財產ヲ濫費シ其分ヲ守ラサル者又ハ職務擧ラサル者ハ懲戒裁判ヲ以テ其職ヲ解クコトヲ得其隨時解職スルコトヲ得可キ者ハ（第六十七條）懲戒裁判ヲ以テスルノ限ニ在ラス

總テ解職セラレタル者ハ自己ノ所爲ニ非スシテ職務ヲ執ルニ堪ヘサルカ爲メ解職セラレタル場合ヲ除クノ外退隱料ヲ受クルノ權ヲ失フモノトス

第百二十九條　町村吏員及使丁其職務ヲ盡サス又ハ權限ヲ越エタル事アルカ爲メ町村ニ對シテ賠償ス可キコトアルトキハ郡參事會之ヲ裁決ス其裁決ニ不服アル者ハ裁決書ヲ交付シ又ハ之ヲ告知シタル日ヨリ七日以內ニ府縣參事會ニ訴願シ其府縣參事會ノ裁決ニ不服アル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得但訴願ヲ爲シタルトキハ郡參事會ハ假ニ其財產ヲ差押フルコトヲ得

第八章　附則

第百三十條　郡參事會、府縣參事會及行政裁判所ヲ開設スル迄ノ間郡參事會ノ職務ハ郡長、府縣參事會ノ職務ハ府縣知事、行政裁判所ノ職務ハ內閣ニ於テ之ヲ行フ可シ

第百三十一條　此法律ニ依リ初テ議員ヲ選擧スルニ付町村長及町村會ノ職務竝町村條例ヲ以テ定ム可キ事項ハ郡長又ハ其指命スル官吏ニ於テ之ヲ施行ス可シ

第百三十二條　此法律ハ北海道、沖繩縣其他勅令ヲ以テ指定スル島嶼ニ之ヲ施行セス別ニ勅令ヲ以テ其制ヲ定ム

第百三十三條　前條ノ外特別ノ事情アル地方ニ於テハ町村會及町村長ノ具申又ハ郡參事會ノ具申ニ依リ勅令ヲ以テ此法律中ノ條規ヲ中止スルコトアル可シ

第百三十四條　社寺宗教ノ組合ニ關シテハ此法律ヲ適用セス現行ノ例規及其地ノ習慣ニ從フ

第百三十五條　此法律中ニ記載セル人口ハ最終ノ人口調査ニ依リ現役軍人ヲ除キタル數ヲ云フ

第百三十六條　現行ノ租稅中此法律ニ於テ直接稅又ハ間接稅トス可キ類別ハ內務大臣及大藏大臣之ヲ告示ス

第百三十七條　此法律ハ明治二十二年四月一日ヨリ地方ノ情況ヲ裁酌シ府縣知事ノ具申ニ依リ內務大臣ノ指揮ヲ以テ之ヲ施行ス可シ

第百三十八條　明治九年十月第百三十號布告各區町村金穀公借共有物取扱土木起功規則、明治十一年七月第十七號布告郡區町村編制法第六條及第九條但書、明治十七年五月第十四號布告區町村會法、明治十七年五月第十五號布告、明治十七年七月第二十三號布告、明治十八年八月第二十五號布告其他此法律ニ牴觸スル成規ハ此法律施行ノ日ヨリ總テ之ヲ廢止ス

第百三十九條　內務大臣ハ此法律實行ノ責ニ任シ之カ爲メ必要ナル命令及訓令ヲ發布ス可シ

○市制中東京京都大阪ノ三市ニ特例ヲ設ク

明治二十二年三月法律第十二號

除市制中東京市京都市大阪市ニ特例ヲ設クルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　東京市京都市大阪市ニ於テハ市長及助役ヲ置カス市長ノ職務ハ府知事之ヲ行ヒ助役ノ職務ハ書記官之ヲ行フ

第二條　東京市京都市大阪市ノ市參事會ハ府知事書記官及名譽職參事會員ヲ以テ之ヲ組織ス

第三條　東京市京都市大阪市ニ於テハ收入役書記其他ノ附屬員ヲ置カス府廳ノ官吏其職務ヲ行フ

第四條　東京市京都市大阪市ニ於テハ從來ノ區ヲ存シ每區ニ區長一名及書記ヲ置キ有給吏員ト爲シ市參事會之ヲ選任ス但書記ノ人員ハ市會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第五條　東京市京都市大阪市ニ於テハ區長代理者ヲ置カス區長事故アルトキハ上席書記之ヲ代理ス

第六條　東京市京都市大阪市ニ於テハ府知事ハ區長ヲシテ其區內ニ關スル國ノ行政及府ノ行政竝收入役ノ事務ヲ補助執行セシムルコトヲ得

第七條　東京市京都市大阪市ニ於テ區ノ廢置分合ヲ要スルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第八條　東京市京都市大阪市ニ於テハ區ヲ以テ市會議員選擧區ト爲ス

○町村制ヲ施行セサル島嶼ヲ指定ス

明治二十二年一月勅令第一號

除町村制ヲ施行セサル島嶼指定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

町村制第百三十二條ニ依リ町村制ヲ施行セサル島嶼左ノ通指定ス

東京府管下

小笠原島　伊豆七島

長崎縣管下

對馬國

島根縣管下
隱岐國
鹿兒島縣管下
大隅國大島郡
大島　德之島　喜界島　沖永良部島　與論島
薩摩國川邊郡
硫黄島　黑島　竹島　口之島　臥蛇島　平島　中之島
悪石島　諏訪之瀨島　寶島

○市制施行地ヲ指定ス

明治二十二年二月内務省告示第一號

明治二十一年法律第一號市制第百二十六條ニ據リ市制施行地左ノ通指定ス

市制施行地

東京府管下　東京
大阪府管下　大阪　堺
兵庫縣管下　神戸　姫路
新潟縣管下　新潟
三重縣管下　津
靜岡縣管下　靜岡
愛手縣管下　盛岡
山形縣管下　山形　米澤
福井縣管下　福井
富山縣管下　富山　高岡
岡山縣管下　岡山
山口縣管下　赤間關
德島縣管下　德島

京都府管下　京都
神奈川縣管下　橫濱
長崎縣管下　長崎
茨城縣管下　水戸
愛知縣管下　名古屋
宮城縣管下　仙臺
青森縣管下　弘前
秋田縣管下　秋田
石川縣管下　金澤
島根縣管下　松江
廣島縣管下　廣島
和歌山縣管下　和歌山
香川縣管下　高松

愛媛縣管下　松山
福岡縣管下　福岡　久留米
鹿兒島縣管下　鹿兒島
高知縣管下　高知
熊本縣管下　熊本

○佐賀縣管下佐賀ヲ市制施行地ニ指定ス

明治二十二年三月内務省告示第十號

明治二十一年法律第一號市制第百二十六條ニ據リ佐賀縣管下佐賀ヲ市制施行地ニ指定ス

○岐阜及甲府ヲ市制施行地ニ指定

明治十二年六月内務省告示第十八號

明治二十一年法律第一號市制第百二十六條ニ據リ岐阜縣管下岐阜山梨縣管下甲府ヲ市制施行地ニ指定ス

○鳥取ヲ市制施行地ニ指定

明治二十二年九月内務省告示第二十四號

明治二十一年法律第一號市制第百二十六條ニ據リ鳥取縣管下鳥取ヲ市制施行地ニ指定ス

○行政又ハ司法區域ニ關スル市ノ所屬

明治二十三年四月勅令第七十一號

縣行政又ハ司法區域ニ關スル市ノ所屬ノ件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

行政事務又ハ司法事務ニ關シ郡區ヲ以テ其區域ヲ定メタルモノニシテ市制ヲ施行シタル場合ニ於テハ特ニ市ノ屬スヘキ區域ヲ定メタルモノヲ除クノ外左ノ區別ニ隨ヒ其所屬ヲ定ルモノトス

一　區ヲ市トナシタルモノニ付テハ市ノ區域ニ依ル但東京市京都市大阪市ニ在テハ仍區ノ區域ニ依ル

二　郡内ノ町村ヲ市トナシタルモノニ付テハ仍其從前屬シタル郡ノ區域ニ包含スルモノトス

三　二郡以上ニ渉ル町村ヲ合シテ市トナシタルモノニ付テハ其人口ノ最モ大ナル部分ノ屬シタル郡ノ區域ニ包含スルモノトス

四　此勅令發布前ニ行ヒタル選舉ハ第三ノ規定ニ合ハサルモノアルモ其當選者ニ限リ改選ヲ要セス

區域變動ノ爲メ關係ノ郡ヨリ選舉スヘキ縣會議員ノ數ニ增減ヲ爲スヘキ必要アルトキハ本年ノ通常縣會ノ議決ヲ取リ明治二十二年法律第七號第二條第二項ニ依リ處分スヘシ

○市町村名及市役所町村役場ノ位置變更方

明治二十三年八月法律第七十七號

縣市町村名及市役所町村役場ノ位置變更ニ關スル件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　市町村ノ名稱ヲ變更シ若ハ村ヲ町ト爲シ町ヲ村ト爲サントスルトキハ關係アル市町村會及郡參事會ノ意見ヲ明記シ府縣參事會之ヲ議決シ内務大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第二條　市役所町村役場ノ位置ヲ變更スル市町村會ノ議決ハ府縣知事ノ認可ヲ受クヘシ

○區町村公共ノ共有物ハ區町村會ニ於テ評決セシム

明治二十年十一月内務省訓令第四十七號

區町村公共ノ經濟ニ屬スヘキ共有物ニ關スル事件ハ渾テ區町村會ニ於テ評決セシムヘシ

但本文ニ牴觸スル從前ノ指令訓令ハ取消ス

○區町村費支辨ノ事業ニ關スル寄附金穀物件ノ費途使用方及區町村費ノ雜收入區町村會ノ評決ニ付セシム

明治二十年十二月内務省訓令第五十一號

區町村費ヲ以テ支辨スヘキ事業ニ關シ寄附スル金穀物件ハ區町村會ノ評決ヲ經テ寄附者ノ指定シタル費途又ハ使用ニ充テシムヘシ

區町村費ノ雜收入ハ他ノ收入ト同シク區町村會ノ評決ニ付セシムヘシ

○區町村會法

明治十七年五月布告第十四號

明治十三年四月第十八號布告區町村會法左ノ通改正ス

區町村會法

第一條　區町村會ハ區町村費ヲ以テ支辨スル事件及其經費ノ支出徵收方法ヲ議定ス

第二條　區町村會ノ會期、議員ノ員數、任期、改選及其他ノ規則ハ府知事縣令之ヲ定ム

第三條　區會ハ區長之ヲ招集シ其議案ヲ發ス町村會ハ戶長之ヲ招集シ其議案ヲ發ス

第四條　區會ノ評決ハ區長之ヲ施行シ町村會ノ評決ハ戶長之ヲ施行ス若シ其評決ヲ不適當ナリトスルトキハ其施行ヲ止メ府知事縣令ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第五條　區長ニ於テ區會、那[區長]長[戶長]ニ於テ町村會ノ議事若シ法ニ背キ又ハ治安ヲ害スルコトアリト認ムルトキハ其會議ヲ中止シ府知事縣令ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第六條　府知事縣令ニ於テ區町村會ノ議事若シ法ニ背キ又ハ治安ヲ害スルコトアリト認ムルトキハ何時ニテモ區町村會ヲ停止シ又ハ之ヲ解散シテ改選セシムルコトヲ得

第七條　前條ノ場合ニ於テ停止又ハ解散ヲ命シタルトキハ更ニ開會ヲ命シ又ハ改選スル迄ノ間區長戶長ハ經費ノ支出徴收方法ヲ定メ府知事縣令ノ認可ヲ得テ施行スルコトヲ得

第八條　區町村ニ於テ議員ヲ選舉セス又ハ議員招集ニ應セスシテ會議ヲ開クヲ得ス及議定スヘキ議案ヲ議定セス又ハ會期內ニ於テ議案ヲ評決シ終ラサルトキハ前條ノ例ニ依ル

第九條　議員ヲ選舉スルヲ得ヘキ者ハ滿二十歲以上ノ男子ニシテ其區町村ニ住居シ其區町村內ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル但府縣會規則第十三條第一款第二款第三款ニ觸ルル者及陸海軍軍人現役ノ者ハ選舉人タルコトヲ得ス

第十條　議員タルコトヲ得ヘキ者ハ滿二十五歲以上ノ男子ニシテ其區町村ニ住居シ其區町村內ニ於テ地租ヲ納ムル者ニ限ル但府縣會規則第十三條第一款第二款第三款第四款ニ觸ルル者ハ議員タルコトヲ得ス

第十一條　區會ノ議長ハ區長町村會ノ議長ハ戶長ヲ以テ之ニ充ツ區長戶長若シ事故アルトキハ[區長戶長]ニ於テ議員中ヨリ議長ヲ指定スルコトヲ得

第十二條　府知事縣令其管轄內ニ於テ町村會ヲ開設シ得ヘカラサル狀況アルヲ認ムルトキハ內務卿ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第十三條　府知事縣令ハ數區町村ニ關涉スル事件アルトキハ其區域ヲ定メラ聯合區町村會ヲ開設スルコトヲ得

第十四條　府知事縣令ハ水利土功ニ關スル事項ニシテ區町村會若クハ聯合區町村會ニ於テ評決スルヲ得サルモノアルトキ特ニ其區域ヲ定メテ水利土功會ヲ開設スルコトヲ得

第十五條　聯合區町村會及水利土功會ハ總テ本法ニ準據ス其區域區長戶長數人ノ所轄ニ涉ルモノハ府知事縣令便宜郡區長ヲシテ之ヲ管理セシム但戶長ヲシテ其評決ヲ施行セシムルコトアルヘシ

○水利土功及學事ニ關スル町村聯合會ハ區町村會法ニ依リ市町村制施行後モ存續スルヲ得　明治二十二年三月法律第十一號

陸水利土功及學事ニ關スル會議存續ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

從來開設シタル水利土功會又ハ水利土功若クハ學事ニ關スル町村聯合會ハ明治十七年五月第十四號布告區町村會法ニ依リ又學區會ハ同法第十四條第十五條ニ準據シ市制町村制施行後ト雖モ別ニ規定ヲ設クルマテ之ヲ存續スルコトヲ得

○市町村會議員選舉罰則　明治二十三年五月法律第三十九號

陸市町村會議員選舉罰則ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

市町村會議員選舉罰則

第一條　凡テ選舉資格ニ必要ナル事項ヲ詐稱シテ選舉人名簿ニ記載セラレタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス議員タルコトヲ得サルノ實ヲ告クスシテ議員トナリタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二條　投票ヲ得又ハ他人ニ投票ヲ得セシメ若クハ他人ノ爲ニ投票ヲ爲スコトヲ抑止スルノ目的ヲ以テ直接又ハ間接ニ金錢物品手形若クハ公私ノ職務ヲ選舉人ニ授與シ又ハ授與スルコトヲ約束シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

其授與又ハ約束ヲ受ケタル者亦同シ

第三條　第二條ニ記載シタル目的ヲ以テ選舉會場ノ近傍若クハ選舉人往來ノ途中ニ於テ選舉人ニ酒食ヲ供シ又ハ選舉會場ニ往復スル爲車馬ノ類ヲ給シタル者ハ第二條物品授與ノ例ニ依リ處斷ス

其供給ヲ受ケタル者亦同シ

第四條　第二條ニ記載シタル目的ヲ以テ選舉人ノ爲ニ選舉會場ニ往復スル車馬賃又ハ路費若クハ休泊料ノ類ヲ代辨シ又ハ代辨スルコトヲ約束シタル者ハ第二條金錢授與ノ例ニ依リ處斷ス

其代辨又ハ約束ヲ受ケタル者亦同シ

第五條　第二條第三條及第四條ニ記載シタル所業ヲ爲シテ第二條ニ記載シタル目的ヲ達シタル者ハ刑法第二百三十四條ノ例ヲ以テ論ス

第六條　第二條ニ記載シタル目的ヲ以テ選舉人ニ暴行ヲ加ヘタル者ハ十五日以上三月以下ノ輕禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第七條　第二條ニ記載シタル目的ヲ以テ選舉人ヲ脅逼シ拐引シ若クハ其往來ノ便ヲ妨ケ若クハ詐僞ノ手段ヲ以テ其選舉權ノ施行ヲ妨害シタル者ハ第六條暴行ノ例ニ依リ處斷ス

第八條　第六條及第七條ニ記載シタル所業ヲ爲シテ第二條ニ記載シタル目的ヲ達シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕錮禁ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第九條　選舉人ヲ脅逼シ若クハ選舉會場ヲ喧擾シ又ハ投票函ヲ抑留毀壞若クハ劫奪スルノ目的ヲ以テ多衆ヲ嘯聚シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其情ヲ知リ嘯聚ニ應シタル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮又ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條　選舉ノ際選舉ニ關スル吏員若クハ選舉掛ニ暴行ヲ加ヘ又ハ暴行ヲ以テ選舉會場ヲ喧擾シ又ハ投票函ヲ抑留毀壞若クハ劫奪シタル者ハ三月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處シ十圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十一條　多衆ヲ嘯聚シテ第十條ノ罪ヲ犯シタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

其情ヲ知リ嘯聚ニ應シタル者ハ十五日以上六月以下ノ輕禁錮又ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條　第九條第十條第十一條ノ場合ニ於テ犯罪者戎器又ハ兇器ヲ拋棄シタルトキハ各本刑ニ一等ヲ加フ

第十三條　選擧會場所在ノ郡市内ニ於テ選擧ノ氣勢ヲ張ル爲多衆集合シ若クハ隊伍ヲ組ミテ往來シ又ハ篝火松明ヲ挾キ若クハ鐘鼓法螺喇叭ノ類ヲ鳴ラシ旗幟其他ノ標章ヲ用井ル等ノ所業ヲ爲シ警察官ノ制止ヲ受ルモ仍其命ニ從ハサル者ハ十五日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第十四條　被選人タルコトヲ得ル者ヲ指シテ選擧人タルコトヲ得ス又ハ當選ヲ承諾スルノ意ナシトノ虚報ヲ流傳セシメタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十五條　戎器又ハ兇器ヲ拋棄シテ選擧會場ニ入リタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十六條　第二條ニ記載シタル目的ヲ以テ張札ノ類ヲ公然揭示シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十七條　他人ノ姓名ヲ詐稱シテ投票ヲ爲シ又ハ選擧人タルコトヲ得スシテ投票ヲ爲シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條　當選人第二條乃至第十六條ニ依リ刑ニ處セラレタルトキハ其當選ハ無効トス

第十九條　本法ニ規定シタルモノノ外刑法ニ正條アルモノハ各其條ニ依リ重キニ從テ處斷ス

第二十條　本法ニ關スル犯罪ハ六箇月ヲ以テ期滿免除トス

第二十一條　本法ハ市町村會ノ外市制町村制竝ニ明治二十二年法律第十一號ニ據リテ開設スル各種ノ議會ノ議員選擧ニモ適用ス

○浦役場及浦役人　明治九年十二月太政官達第百十七號

從來浦役人ノ名稱有之候得共其事務ノ定限モ無之ニ付自今左ノ條款ニ從ヒ浦役場ヲ設置シ浦役人ヲ命スヘシ此旨相達候事

第一條　浦役場ハ沿海大市及ヒ商船輻湊ノ地ニ於テハ便宜ノ場所ヲ撰テ之ヲ設置ス可シ

第二條　浦役場ハ當分ノ中區務所等ヲ以テ代用シ浦役人ハ〔區長也若クハ〔戸長〕ニ兼勤申付書記用掛等ヲシテ輔助セシムヘシ

第三條　浦役人ハ其地繫泊ニ關スル庶務（警察事務裁判事務其他主管アル事務ヲ除キ）及ヒ難破船取扱難破船證文付與等ノ事ヲ掌ラシムヘシ

第四條　浦役場設置ノ地名ハ明治十年三月三十一日限リ内務省ニ報告シ以後毎年十二月中ニ其廢置變換等ヲ同省ヘ報告スヘシ

第十八類　訴類及裁判

第一章　訴願

○訴願法　明治二十三年十月法律第百五號

陛訴願法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

訴願法

第一條　訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ揭ク ル事件ニ付之ヲ提起スルコトヲ得

一　租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件

二　租稅滯納處分ニ關スル事件

三　營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件

四　水利及土木ニ關スル事件

五　土地ノ官民有區分ニ關スル事件

六　地方警察ニ關スル事件

其他法律勅令ニ於テ特ニ訴願ヲ許シタル事件

第二條　訴願セントスル者ハ處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シ直接上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

訴願ノ裁決ヲ受ケタル後更ニ上級行政廳ニ訴願スルトキハ其裁決ヲ爲シタル行政廳ヲ經由スヘシ

國ノ行政ニ付此法律ニ依リ郡參事會又ハ市參事會ノ處分若クハ裁決ニ對シテ訴願セントスル者ハ其處分若クハ裁決ヲ爲シタル郡參事會又ハ市參事會ヲ經由シテ府縣參事會ニ之ヲ提起スヘシ

第三條　各省大臣ノ處分ニ對シ訴願セントスル者ハ其省ニ之ヲ提起スヘシ

第四條　裁判所ノ裁判各省ノ裁決及第二條第三項府縣參事會ノ裁決ヲ經タルモノハ其事件ニ付更ニ訴願スルコトヲ得ス

第五條　訴願ハ文書ヲ以テ之ヲ提起スヘシ

訴願書ノ侮辱誹毀ニ渉ルモノハ之ヲ受理セス

第六條　訴願書ハ其不服ノ要點理由要求及訴願人ノ身分職業住所年齡ヲ記載シ之ニ署名捺印スヘシ

訴願書ニハ證據書類ヲ添ヘ竝下級行政廳ノ裁決ヲ經タルモノハ其裁決書ヲ添フヘシ

第七條　多數ノ人員共同シテ訴願セントスルトキハ其訴願書ニ各訴願人ノ身分職業住所年齡ヲ記載シ署名捺印シ其中ヨリ三名以下ノ總代人ヲ選ヒ之ニ委任シ總代委任ノ正當ナルコトヲ證明スヘシ

法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ訴願ヲ提起スルコトヲ得

第八條　行政處分ヲ受ケタル後六十日ヲ經過シタルトキハ其處分ニ對シ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ノ裁決ヲ經タル訴願ニシテ其裁決ヲ受ケタル後三十日ヲ經過シタルモノハ更ニ上級行政廳ニ訴願スルコトヲ得ス

行政廳ニ於テ宥恕スヘキ事由アリト認ムルトキハ期限經過後ニ於テモ仍之ヲ受理スルコトヲ得

第九條　法律勅令ニ依リ訴願ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ之ヲ却下ス

其訴願書ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ期限ヲ指定シテ還付

スヘシ

第十條　訴願書ハ郵便ヲ以テ之ヲ差出スコトヲ得
郵便遞送ノ日數ハ第八條ノ訴願期限内ニ之ヲ算入セス

第十一條　第二條第一項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ十日以内ニ辨明書及必要文書ヲ添ヘ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第二項ノ場合ニ於テ訴願書ノ經由ニ當レル行政廳ハ訴願書ヲ受取リタル日ヨリ三日以内ニ上級行政廳ニ之ヲ發送スヘシ

第二條第三項ノ場合ニ於テ訴願書ヲ發送スルトキ亦前二項ノ例ニ依ルヘシ

第十二條　訴願ハ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外行政處分ノ執行ヲ停止セス但行政廳ハ其職權ニ依リ又ハ訴願人ノ願ニ依リ必要ナリト認ムルトキハ其執行ヲ停止スルコトヲ得

第十三條　訴願ハ口頭審問ヲ爲サス其文書ニ就キ之ヲ裁決ス但行政廳ニ於テ必要ナリト認ムルトキハ口頭審問ヲ爲スコトヲ得

第十四條　訴願ノ裁決ハ文書ヲ以テ之ヲ爲シ其理由ヲ付スヘシ訴願ヲ却下スルトキ亦同シ

第十五條　訴願ノ裁決書ハ其處分ヲ爲シタル行政廳ヲ經由シテ之ヲ訴願人ニ交付スヘシ訴願書ヲ却下スルトキ亦同シ

第十六條　上級行政廳ニ於テ爲シタル裁決ハ下級行政廳ヲ羈束ス

第十七條　訴願ノ手續ニ關シ他ノ法律勅令ニ別段ノ規程アルモノハ各其規程ニ依ル

附則

第十八條　明治十五年十二月第五十八號布告請願規則ハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第十九條　此法律施行ノ前請願規則ニ依リ受理シタル請願ハ仍其規則ニ依リ之ヲ處分ス
請願規則ニ依リ下級行政廳ノ指令ヲ受ケタル者訴願スルヲ得ヘキ場合ニ於テ更ニ訴願セントスルトキハ此法律ニ從ヒ其上級行政廳ニ之ヲ提起スヘシ

第二十條　第八條ノ訴願期限ハ此法律施行ノ前行政處分ヲ受ケ又ハ請願規則ニ依リ指令ヲ受ケタル事件ニシテ其處分又ハ指令ヲ受ケタル日ヨリ滿五年ヲ經過セサルモノニ對シテハ此法律施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス

第二十一條　行政廳ニ呈出スル請願ハ此法律ニ依ルノ限ニ在ラス

○行政廳違法處分ニ關スル行政裁判

明治二十三年十月法律第百六號

訴行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律勅令ニ別段ノ規程アルモノヲ除ク外左ニ揭クル事件ニ付行政廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ毀損セラレタリトスル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

一　海關稅ヲ除ク外租稅及手數料ノ賦課ニ關スル事件
二　租稅滯納處分ニ關スル事件
三　營業免許ノ拒否又ハ取消ニ關スル事件

四　水利及土木ニ關スル事件
五　土地ノ官民有區分ノ查定ニ關スル事件

○行政裁判法

明治二十三年六月法律第四十八號

訴行政裁判法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

行政裁判法

第一章　行政裁判所組織

第一條　行政裁判所ハ之ヲ東京ニ置ク

第二條　行政裁判所ニ長官一人及評定官ヲ置ク評定官ノ員數ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
行政裁判所ニ書記ヲ置ク其員數及職務ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條　長官ハ勅任トス評定官ハ勅任又ハ奏任トス
長官及評定官ハ三十歳以上ニシテ五年以上高等行政官ノ職ヲ奉シタル者若クハ裁判官ノ職ヲ奉シタル者ヨリ內閣總理大臣ノ上奏ニ依リ任命セラルヽモノトス
書記ハ長官之ヲ判任ス

第四條　長官及評定官ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス
一　公然政事ニ關係スルコト
二　政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ衆議院議員府縣郡市町村會ノ議員若クハ參事會員タルコト
三　兼官ノ場合ヲ除ク外俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就クコト
四　商業ヲ營ミ其他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ムコト

第五條　第六條ノ場合ヲ除ク外長官及評定官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其意ニ反シテ退官轉官又ハ非職ヲ命セラルヽコトナシ
行政裁判所ノ長官又ハ評定官ヲ兼任スル者ハ此本官在職中前項ヲ適用ス

懲戒處分ノ法ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條　長官及評定官身體若クハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルトキハ內閣總理大臣ハ行政裁判所ノ總會ノ決議ニ依リ其退職ヲ上奏スルコトヲ得

第七條　長官ハ行政裁判所ノ事務ヲ總理ス
長官故障アルトキハ評定官中官等最モ高キ者之ヲ代理ス官等同シキトキハ任官ノ順序ニ依リ其先ナル者之ヲ代理ス

第八條　長官ハ自ラ裁判長トナリ若クハ評定官ニ裁判長ヲ命スルコトヲ得
部ヲ分ツノ必要アルトキハ其組織及事務分配ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第九條　行政裁判所ノ裁判ハ裁判長及評定官ヲ併セ五人以上ノ列席合議ヲ要ス但列席ノ人員ハ奇數ニ限ル若シ缺席ノ爲偶數トナリタルトキハ官等最モ低キ評定官ヲ議決ヨリ除ク官等同シキトキハ任官ノ順序ニ依リ其後ナル者ヲ除ク議決ハ過半數ニ依ル

第十條　長官又ハ評定官ハ左ノ場合ニ於テ評議及議決ニ加ハルコトヲ得ス
一　裁判スヘキ事件自己又ハ父母兄弟姉妹若クハ妻子ノ身上ニ關スルトキ
二　裁判スヘキ事件一私人ノ資格ヲ以テ意見ヲ述ヘタルモ

ノ又ハ理事者代理者若クハ職務外ノ地位ニ於テ取扱ヒタルモノニ關スルトキ

三　裁判スヘキ事件行政官タルノ資格ヲ以テ其事件ノ處分又ハ裁決ニ參與シタルモノニ關スルトキ

第十一條　前條ノ場合ニ於テ原告又ハ被告ハ原因ヲ疏明シテ文書又ハ口頭ヲ以テ長官又ハ評定官ヲ忌避スルコトヲ得前項ノ場合ニ於テ行政裁判所ハ本人ヲ回避セシメ之ヲ議決ス

第十二條　忌避若クハ除斥ノ原因タル事情ニ付キ長官又ハ評定官ヨリ申出アルトキ又ハ他ノ事由ヨリシテ長官又ハ評定官ヲ法律ニ依リ評議及決議ニ加ハルヲ得サルノ疑アルトキハ行政裁判所ハ本人ヲ回避セシメ之ヲ議決ス

第十三條　行政裁判所ノ處務規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條　行政裁判所ノ辯護人タルコトヲ得ルハ行政裁判所ノ認許シタル辯護士ニ限ル

第二章　行政裁判所ノ權限

第十五條　行政裁判所ハ法律勅令ニ依リ行政裁判所ニ出訴ヲ許シタル事件ヲ審判ス

第十六條　行政裁判所ハ損害要償ノ訴訟ヲ受理ス

第十七條　行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除ク外地方上級行政廳ニ訴願シ其裁決ヲ經タル後ニ非サレハ之ヲ提起スルコトヲ得ス

各省大臣ノ處分又ハ內閣直轄官廳又ハ地方上級行政廳ノ處分ニ對シテハ直ニ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

各省又ハ內閣ニ訴願ヲ爲シタルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得ス

第十八條　行政裁判所ノ判決ハ其事件ニ付關係ノ行政廳ヲ羈束ス

第十九條　行政裁判所ノ裁判ニ對シテハ再審ヲ求ムルコトヲ得ス

第二十條　行政裁判所ハ其權限ニ關シテハ自ラ之ヲ決定ス

行政裁判所ト通常裁判所又ハ特別裁判所トノ間ニ起ル權限ノ爭議ハ權限裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第二十一條　行政裁判所ノ判決ノ執行ハ通常裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第三章　行政訴訟手續

第二十二條　行政訴訟ハ行政廳ニ於テ處分書若クハ裁決書ヲ交付シ又ハ告知シタル日ヨリ六十日以內ニ提起スヘシ六十日ヲ經過シタルトキハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得ス但法律勅令ニ特別ノ規程アルモノハ此限ニ在ラス

訴訟提起ノ日限其他此法律ニ依リ行政裁判所ノ指定スル日限ノ計算竝ニ災害事變ノ爲メ遲延シタル期限ニ關シテハ民事訴訟ノ規程ヲ適用ス

第二十三條　行政訴訟ハ法律勅令ニ特別ノ規程アルモノヲ除ク外行政廳ノ處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止セス但行政廳及行政裁判所ハ其職權ニ依リ又ハ原告ノ願ニ依リ必要ト認ムルトキハ其處分又ハ裁決ノ執行ヲ停止スルコトヲ得

第二十四條　行政訴訟ハ文書ヲ以テ行政裁判所ニ提起スヘシ法律ニ依リ法人ト認メラレタル者ハ其名ヲ以テ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十五條　訴狀ハ左ノ事項ヲ記載シ原告署名捺印スヘシ

一　原告ノ身分、職業、住所、年齡

二　被告ノ行政廳又ハ其他ノ被告

三　要求ノ事件及其理由

四　立證

五　年月日

訴狀ニハ原告ノ經歷シタル訴願書裁決書竝ニ證據書類ヲ添フヘシ

第二十六條　訴狀ニハ被告ニ送付スル爲メニ必要文書ノ副本ヲ添フヘシ

第二十七條　行政裁判所ハ原告ノ訴狀ニ據テ審査シ若シ法律勅令ニ依リ行政訴訟ヲ提起スヘカラサルモノナルカ又ハ適法ノ手續ニ違背スルモノナルトキハ其理由ヲ付シタル裁決書ヲ以テ之ヲ却下スヘシ

其訴狀ノ方式ヲ缺クニ止マルモノハ之ヲ改正セシムル爲メ期限ヲ指定シテ還付スヘシ

第二十八條　行政裁判所ニ於テ訴狀ヲ受理シタルトキハ其副本ヲ被告ニ送付シ相當ノ期限ヲ指定シテ答辯書ヲ差出サシムヘシ

答辯書ニハ原告ニ送付スル爲メ必要文書ノ副本ヲ添フヘシ

第二十九條　行政裁判所ハ必要ナリト認ムルトキハ其期限ヲ指定シタル原告被告交互ニ辯駁書及再度ノ答辯書ヲ差出サシムヘシ

第三十條　行政裁判所ハ訴狀及答辯書ノ附屬文書ノ副本ヲ原告被告交互ニ送付スル代リニ所內ニ於テ之ヲ閱覽セシムルコトヲ得

第三十一條　行政裁判所ハ訴訟審問中其事件ノ利害ニ關係アル第三者ヲ訴訟ニ加ハラシメ又ハ第三者ノ願ニ依リ訴訟ニ加ハルコトヲ許可スルヲ得

前項ノ場合ニ於テハ行政裁判所ノ判決ハ第三者ニ對シテモ亦其効力ヲ有ス

第三十二條　行政官廳ハ其官吏又ハ其申立ニ依リ主務大臣ヨリ命シタル委員ヲシテ訴訟代理ヲ爲サシムルコトヲ得

代理者ハ委任狀ヲ以テ代人タルコトヲ證明スヘシ

第三十三條　行政裁判所ハ豫メ指定シタル期日ニ於テ原告被告及第三者ヲ召喚シテ審廷ヲ開キ口頭審問ヲ爲スヘシ

原告被告及第三者ニ於テ口頭審問ヲ爲スコトヲ望マサル旨ヲ申立タル場合ニ於テハ行政裁判所ハ文書ニ就キ直ニ判決ヲ爲スコトヲ得

第三十四條　審廷ニ於テハ原告被告及第三者ノ辯明ヲ聽クヘシ

審廷ニ於テハ裁判長ノ許可ヲ得タル者ヨリ順次發言スヘシ

原告被告及第三者ハ事實上及法律上ノ點ニ就キ文書ニ證サントル所ヲ補足シ又ハ誤謬ヲ更正シ若クハ新ニ證憑ヲ提出シ及證書ヲ提示スルコトヲ得

第三十五條　主務大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テハ公益ヲ辯護スル爲メ委員ヲ命シ審廷ニ差出スコトヲ得

行政裁判所ハ判決ヲ爲ス前ニ委員ヲシテ意見ヲ陳述セシムヘシ

第三十六條　行政裁判所ノ對審判決ハ之ヲ公開ス

安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アリ又ハ行政廳ノ要求アルトキハ行政裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得

第三十七條　公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ公衆ヲ退

カシムルノ前之ヲ言渡ス

第三十八條　行政裁判所ハ原告被告及第三者ニ出廷ヲ命シ竝ニ必要ト認ムル證憑ヲ徴シ證人及鑑定人ヲ召喚シ審問ニ應シ證明及鑑定ヲ爲サシムルコトヲ得

證人又ハ鑑定人トシテ審問ニ應シ證明及鑑定ヲ爲スヘキ義務ニ關シテハ民事訴訟ノ規程ヲ適用ス其義務ヲ盡サヽル場合ニ於テ處分スヘキ科罰ハ行政裁判所自ラ之ヲ判決ス

行政裁判所ハ口頭審問ニ於テ擧證ノ手續ヲ爲シ又ハ評定官ニ委任シ若クハ通常裁判所又ハ行政廳ニ囑託シテ之カ調査ヲ爲サシムルコトヲ得

第三十九條　行政裁判所ニ於テ審問中ノ事件ニ關シ民事上ノ訴訟起ルコトアリテ通常裁判ノ確定ヲ待ツノ必要アリト認ムルトキハ其審判ヲ中止スルコトヲ得

第四十條　審問手續ニ關スル故障ノ申立ハ行政裁判所自ラ之ヲ判決ス

第四十一條　召喚ノ期日ニ於テ原告若クハ被告若クハ第三者出廷セサルコトアルモ行政裁判所ハ其審判ヲ中止セス

原告被告及第三者共ニ出廷セサルトキハ行政裁判所ハ審問ヲ行ハス直ニ判決ヲ爲スコトヲ得

第四十二條　裁判宣告書ハ理由ヲ付シ裁判長評定官及書記之ニ署名捺印シ其謄本ニ行政裁判所ノ印章ヲ捺シ之ヲ原告被告及第三者ニ交付スヘシ

行政訴訟ノ文書ニハ訴訟用印紙ヲ貼用スルヲ要セス

第四十三條　行政訴訟手續ニ關シ此法律ニ規程ナキモノハ行政裁判所ノ定ムル所ニ依リ民事訴訟ニ關スル規程ヲ適用スルコトヲ得

第四章　附則

第四十四條　此法律ハ明治二十三年十月一日ヨリ施行ス

第四十五條　第二十條第二項ノ權限爭議ハ權限裁判所ヲ設クル迄ノ間樞密院ニ於テ之ヲ裁定ス

裁定ノ手續ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第四十六條　從前ノ法令ニシテ此法律ト牴觸スルモノハ此法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第四十七條　此法律施行ノ前既ニ行政訴訟トシテ受理シ審理中ニ係ルモノハ仍從前ノ成規ニ依リ處分スヘシ

○行政裁判所處務規程　明治二十三年八月勅令第百九十二號

廢行政裁判所處務規程ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

行政裁判所處務規程

第一章　行政訴訟各事件ノ掛評定官ハ行政裁判所長官ノ指定ニ依ル

第二條　行政裁判法第八條ニ依リ評定官ヲシテ裁判長ヲシテムルトキハ同法第七條第二項ノ順序ニ從ヒ之ヲ命スヘキモノトス

第三條　裁判長ハ一事件毎ニ審判準備ノ爲メ掛評定官中ノ一名若ハ二名ニ專理員ヲ指命スルコトヲ得

第四條　裁判長行政裁判法第三十八條第二項ノ場合ニ於テ科罰ヲ言渡シタルトキハ書記ヲシテ訴訟ノ記錄ニ之ヲ記入セシム

第五條　每年七月十一日ヨリ九月十日マテノ間ハ行政裁判所ニ於テ緊急ノ事項ト認ムルモノヽ外既ニ著手シタル訴訟ヲ中止シ竝ニ新ナル訴訟ニ著手セス

第六條　行政裁判所ノ總會議ハ評定官總員三分ノ二以上列席スルニ非サレハ議決ヲ爲スコトヲ得ス

第七條　總會議ノ議事ハ長官之ヲ整理ス若シ長官故障アルトキハ評定官中官等最モ高キ者之ヲ代理ス

第八條　行政裁判所ハ訴訟ノ呼出狀及其他ノ書類ヲ使丁若ハ郵便ヲ以テ送達シ又ハ通常裁判所ニ囑託シテ送達セシムルコトヲ得

第九條　行政裁判所ハ法律命令ノ範圍內ニ於テ其職權ニ屬スル事件ニ付告示ヲ發スルコトヲ得

第十條　行政裁判所長官ハ法律命令ノ範圍內ニ於テ事務取扱ノ順序方法ニ關スル規定ヲ設クルコトヲ得

書記ノ職務ニ關スル規程ハ行政裁判所之ヲ定ム

○行政訴訟豫納金手續　明治二十三年十一月行政裁判所告示第二號

行政訴訟豫納金手續左ノ通相定ム

豫納金手續

第一條　行政訴訟ヲ爲ス者ハ臨時特別費ヲ除クノ外訴訟提出ノ際ニ於テ書類送達等ノ費用ニ充ツル爲メ金二圓ヲ豫納スヘシ

第二條　豫納ヲ爲サントスル者ハ當廳ノ保管金送付書ヲ以テ之ニ金員ヲ添ヘ大藏省預金局ニ納付スヘシ

第三條　第一條ノ豫納金ニ於テ仍ホ不足ナルトキハ追納セシムルコトアルヘシ

追納手續モ亦前條ニ依ルヘシ

中止シ竝ニ新ナル訴訟ニ著手セス

第六條　行政裁判所ノ總會議ハ評定官總員三分ノ二以上列席スルニ非サレハ議決ヲ爲スコトヲ得ス

第七條　總會議ノ議事ハ長官之ヲ整理ス若シ長官故障アルトキハ評定官中官等最モ高キ者之ヲ代理ス

第八條　行政裁判所ハ訴訟ノ呼出狀及其他ノ書類ヲ使丁若ハ郵便ヲ以テ送達シ又ハ通常裁判所ニ囑託シテ送達セシムルコトヲ得

第九條　行政裁判所ハ法律命令ノ範圍內ニ於テ其職權ニ屬スル事件ニ付告示ヲ發スルコトヲ得

第十條　行政裁判所長官ハ法律命令ノ範圍內ニ於テ事務取扱ノ順序方法ニ關スル規定ヲ設クルコトヲ得

書記ノ職務ニ關スル規程ハ行政裁判所之ヲ定ム

○行政訴訟豫納金手續　明治二十三年十一月行政裁判所告示第二號

行政訴訟豫納金手續左ノ通相定ム

豫納金手續

第一條　行政訴訟ヲ爲ス者ハ臨時特別費ヲ除クノ外訴訟提出ノ際ニ於テ書類送達等ノ費用ニ充ツル爲メ金二圓ヲ豫納スヘシ

第二條　豫納ヲ爲サントスル者ハ當廳ノ保管金送付書ヲ以テ之ニ金員ヲ添ヘ大藏省預金局ニ納付スヘシ

第三條　第一條ノ豫納金ニ於テ仍ホ不足ナルトキハ追納セシムルコトアルヘシ

追納手續モ亦前條ニ依ルヘシ

第四條　豫納金ノ殘額アルトキハ訴訟事件終局ノ後之ヲ還付ス

第二章　裁判

○裁判所構成法　明治二十三年二月法律第六號

廢裁判所構成法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此ノ法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

第一編　裁判所及檢事局

第一章　總則

第二章　區裁判所

第三章　地方裁判所

第四章　控訴院

第五章　大審院

第二編　裁判所及檢事局ノ官吏

第一章　判事又ハ檢事ニ任セラルヽニ必要ナル準備及資格

第二章　判事

第三章　檢事

第四章　裁判所書記

第五章　執達吏

第六章　廷丁

第三編　司法事務ノ取扱

第一章　開廷

第二章　裁判所ノ用語

第三章　裁判ノ評議及言渡
第四章　裁判所及檢事局ノ事務章程
第五章　司法年度及休暇
第六章　法律上ノ共助
第四編　司法行政ノ職務及監督權

裁判所構成法

第一編　裁判所及檢事局

第一章　總則

第一條　左ノ裁判所ヲ通常裁判所トス
第一　區裁判所
第二　地方裁判所
第三　控訴院
第四　大審院

第二條　通常裁判所ニ於テハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス但シ法律ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第三條　地方裁判所控訴院及大審院ヲ合議裁判所トシ數人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ總テノ事件ヲ審問裁判ス但シ訴訟法又ハ特別法ニ別段規定シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四條　裁判所ノ設立廢止及管轄區域竝ニ其ノ變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五條　各裁判所ニ相應ナル員數ノ判事ヲ置ク

第六條　各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事ハ刑事ニ付公訴ヲ起シ其ノ取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナル適用ヲ請

求シ及判決ノ適當ニ執行セラルルヤヲ監視シ又民事ニ於テモ必用ナリト認ムルトキハ通知ヲ求メ其ノ意見ヲ述フルコトヲ得又裁判所ニ屬シ若ハ之ニ關ル司法及行政事件ニ付公益ノ代表者トシテ法律上其ノ職權ニ屬スル監督事務ヲ行フ」

檢事ハ裁判所ニ對シ獨立シテ其ノ事務ヲ行フ

檢事局ノ管轄區域ハ其ノ附置セラレタル裁判所ノ管轄區域ニ同シ

若一人ノ檢事若ハ數人ノ檢事惡ク差支アリテ或ル事件ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ裁判所長又ハ區裁判所ニ於テハ判事若ハ監督判事ハ其ノ事件猶豫スヘカラサルニ於テハ判事ニ檢事ノ代理ヲ命シ其ノ事件ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第七條　檢事局ニ相應ナル員數ノ檢事ヲ置ク

第八條　各裁判所ニ書記課ヲ設ク書記課ハ往復會計記錄其ノ他此ノ法律又ハ他ノ法律ニ特定シタル事務ヲ取扱フ

裁判所ニ附置セラレタル檢事局ニ於テ前項ノ如キ事務ヲ取扱フ爲必要ナリト認メタルトキニ限リ別ニ書記課ヲ設クルコトヲ得但シ合議裁判所ノ檢事局ニ限ル

司法大臣ハ裁判所ノ會計事務ヲ專任スル爲特別官吏ヲ裁判所ニ置クコトヲ得

第九條　區裁判所ニ執達吏ヲ置ク執達吏ハ裁判所ヨリ發スル文書ヲ送達シ及裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前項ノ外執達吏ハ此ノ法律又ハ他ノ法律ニ定メタル特別ノ職務ヲ行フ

第十條　法律ヲ以テ特定シタルモノヲ除ク外左ノ場合ニ於テ適當ノ申請アルトキハ關係アル各裁判所ヲ併セテ之ヲ管轄スル直近上級ノ裁判所ハ何レノ裁判所ニ於テ本件ヲ裁判ス

ルノ權アルヤヲ裁判ス

第一　權限アル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得ス且此ノ法律第十三條ニ依リ之ニ代ルヘキコトヲ定メラレタル裁判所モ亦之ヲ行フコトヲ得サルトキ

第二　裁判所管轄區域ノ境界明確ナラサルカ爲其ノ權限ニ付疑ヲ生シタルトキ

第三　法律ニ從ヒ又ハ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上ノ裁判所裁判權ヲ互有スルトキ

第四　二以上ノ裁判所權限ヲ有セストノ確定判決ヲ爲シ又ハ權限ヲ有セストノ確定判決ヲ受ケタルモ其ノ裁判所ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキトキ

第二章　區裁判所

第十一條　區裁判所ノ裁判權ハ單獨判事之ヲ行フ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ其ノ裁判事務ヲ各判事ニ分配ス

此ノ事務分配ハ毎年地方裁判所長前以テ之ヲ定ム

區裁判所判事ノ取扱ヒタル事ハ裁判事務分配上其ノ事他ノ判事ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其効力ヲ失フコトナシ」

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ハ其ノ一人ヲ監督判事トシ之ニ其ノ行政事務ヲ委任ス

第十二條　事務分配ニ關シ定マリタルトキハ司法年度中之ヲ變更セス但シ一人ノ判事ノ分擔多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其他ノ事故ニ因リ久ク闕勤スル者アル等引續キ差支ヲ生シタル場合ハ此限ニ在ラス

第十三條　區裁判所ノ判事差支アルトキハ毎年地方裁判所長

ノ前以テ定メタル順序ニ從ヒ互ニ相代理ス但シ監督判事ノ職務ハ其ノ裁判所ノ判事官等ノ順序ニ從ヒ之ヲ代理ス

一ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ事務ヲ取扱フコトヲ得サルトキ之ニ代ルヘキ他ノ區裁判所ハ前項ニ同シク毎年前以テ之ヲ定ム

第十四條　區裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ反訴ニ關リテハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ依ル

第一　百圓ヲ超過セサル金額又ハ價額百圓ヲ超過セサル物ニ關ル請求

第二　價額ニ拘ラス左ノ訴訟

（イ）　住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取明渡使用占據若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

（ロ）　不動產ノ經界ノミニ關ル訴訟

（ハ）　占有ノミニ關ル訴訟

（ニ）　屋主ト屋人トノ間ニ屋期限一年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

（ホ）　左ニ揭ケタル事項ニ付旅人ト旅店若ハ飮食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

（一）　賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

（二）　旅店若ハ飮食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲預ケタル手荷物金錢又ハ有價物

第十五條　區裁判所ノ判事差支アルトキハ毎年地方裁判所長

法ニ從ヒ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有ス

第一　未成年者瘋癲者白癡者失踪者其ノ他法律若ハ判決ニ因リ治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ後見人若ハ管財人ヲ監督スル事

第二　不動産及艦舶ニ關ル權利關係ヲ登記スル事

第三　商業登記及特許局ニ登錄シタル特許意匠及商標ノ登記ヲ爲ス事

第十六條　區裁判所ハ刑事ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　違警罪

第二　本刑五十圓以下ノ罰金ヲ附加シ若ハ附加セサル二月以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金ニ該ル輕罪

第三　刑法第二編第一章ヲ除キ其ノ他ノ輕罪ニシテ本刑二百圓以下ノ罰金ヲ附加シ若ハ附加セサル二年以下ノ禁錮又ハ單ニ三百圓以下ノ罰金ニ該リ其ノ情第二ニ揭ケタル刑ヨリ重キ刑ニ處スルコトヲ要セスト認メ地方裁判所若ハ其ノ支部ノ檢事局ヨリ區裁判所ニ移付シタルモノ

前項ノ手續ニ因リ訴追ヲ爲シ犯罪ノ證明アリタル場合ニ於テ判決ヲ爲ス前何時ニテモ其ノ情第二ニ揭ケタル刑ニアハ相當ニ罰スルコトヲ得スト認ムルトキハ區裁判所ハ之ヲ裁判スル權限ヲ有セストノ言渡ヲ爲ス此ノ場合ニ於テハ檢事ハ被告人ヲシテ相當ノ裁判所ニ於テ裁判ヲ受シムル爲適當ノ手續ヲ爲ス

第十七條　前數條ニ揭ケタルモノヲ除ク外區裁判所ノ權限ハ此ノ章ニ揭ケタル事件ニ關リ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第十八條　各區裁判所ノ檢事局ニ檢事ヲ置ク

區裁判所檢事局ノ檢事ノ事務ハ其ノ地ノ警察官憲兵將校下士又ハ林務官之ヲ取扱フコトヲ得

司法大臣ハ適當ナル場合ニ於テハ區裁判所判事試補又ハ郡市町村ノ長ヲシテ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

第三章　地方裁判所

第十九條　地方裁判所ヲ第一審ノ合議裁判所トス

各地方裁判所ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第二十條　各地方裁判所ニ地方裁判所長ヲ置ク

地方裁判所長ハ裁判所ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

地方裁判所ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第二十一條　司法大臣ハ毎年各地方裁判所ノ判事一人若ハ二人以上ニ其ノ裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事ノ豫審ヲ爲スコトヲ命ス

第二十二條　各地方裁判所ノ事務ハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ各部及各豫審判事ニ之ヲ分配ス

各地方裁判所ノ各部長及部員ノ配置及所長部長部員差支アルトキノ代理モ亦毎年前以テ之ヲ定ム

前二項ニ揭ケタル諸件ハ裁判所長部長及部ノ上席判事一人ノ會議ニ於テ裁判所長會長トナリ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

地方裁判所長ハ次年自ラ部長トナルヘキ部ヲ指定スヘシ

第二十三條　或ル部ニ於テ著手シタル事務ニシテ司法年度ノ終若ハ休暇ノ始ニ臨ミ未タ終結ニ至ラサルモノハ裁判所長便利ト認ムルトキ同部員ヲシテ引續キ之ヲ結了セシムルコ

トヲ得

豫審判事ノ取扱フ事務ニシテ未タ終結ニ至ラサルモノモ亦前項ニ同シ

第二十四條　第二十二條ニ從ヒ事務ノ分配及判事ノ配置ニタヒ定マリタルトキハ休暇中ヲ除キ一部ノ事務多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ久ク闕勤スル者アル等引續キ差支アルニ非サレハ司法年度中之ヲ變更セス」裁判所ノ事務其ノ現在ノ部ニ過多ナル場合ニ於テ司法大臣適宜ト認ムルトキハ新ニ一部又ハ數部ヲ設クルコトヲ得

第二十五條　地方裁判所ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同裁判所ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ裁判所長ハ其ノ管轄區域內ノ區裁判所判事又ハ豫備判事ニ其代理ヲ命スルコトヲ得

第二十六條　地方裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　第一審トシテ

區裁判所ノ權限又ハ第三十八條ニ定メタル控訴院ノ權限ニ屬スルモノヲ除キ其ノ他ノ請求

第二　第二審トシテ

(イ)　區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ)　區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十七條　地方裁判所ハ刑事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　第一審トシテ

區裁判所ノ權限又ハ第三十八條ニ定メタル控訴院ノ權限ニ屬スルモノヲ除キ其ノ他ノ請求

第二　第二審トシテ

(イ)　區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ)　區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十八條　地方裁判所ハ破產事件ニ付一般ノ裁判權ヲ有ス

第二十九條　地方裁判所ハ非訟事件ニ關ル區裁判所ノ決定及命令ニ對シ法律ニ定メタル抗告ニ付裁判權ヲ有ス

第三十條　地方裁判所ノ權限竝ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第三十一條　司法大臣ハ地方裁判所ト其ノ管轄區域內ノ區裁判所ト遠隔ナルカ若ハ交通不便ナルカ爲至當ト認ムルトキハ地方裁判所ニ屬スル民事及刑事ノ事務ノ一部分ヲ取扱フ爲一若ハ二以上ノ支部ノ設置ヲ命スルコトヲ得且支部ヲ開クヘキ區裁判所ヲ定ム

支部ニハ之ヲ設置シタル區裁判所若ハ近隣ノ區裁判所ノ判事ヲ用ユルコトヲ得此ノ場合ニ於テ判事ヲ選用スルノ權ハ司法大臣ニ屬ス

司法大臣ハ支部ニ勤ムヘキ豫審判事及檢事ヲ命ス

司法大臣ハ支部ノ本部タル地方裁判所ノ管轄區域內ノ區裁判所判事ニ豫審判事ヲ命スルコトヲ得

代理ニ關ル第二十五條ハ支部ニモ亦之ヲ適用ス

第三十二條　地方裁判所ニ於テハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　第一審トシテ

ヲ審問裁判ス其ノ三人ノ判事中一人ヲ裁判長トス且豫備判事ハ如何ナル事情アルモ二人以上其ノ部ニ列席スルコトヲ得ス其ノ他ノ事件ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第三十三條　各地方裁判所ノ檢事局ニ檢事正ヲ置ク檢事正ハ檢事局ノ事務取扱ヲ分配指揮及監督ス但シ檢事局ノ其ノ他ノ檢事ハ事務取扱ニ付何等ノ事件ニ拘ラス特別ノ許可ヲ受ケスシテ檢事正ヲ代理スルノ權ヲ有ス

第四章　控訴院

第三十四條　控訴院ヲ第二審ノ合議裁判所トス

各控訴院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第三十五條　各控訴院ニ控訴院長ヲ置ク

控訴院長ハ控訴院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

控訴院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第三十六條　事務ノ分配及結了並ニ判事ノ代理ニ付テハ第二十二條第二十三條及第二十五條ヲ左ノ變更ヲ以テ控訴院ニ適用ス

第一　前項ニ掲ケタル各條ヲ以テ地方裁判所長ニ與ヘタルモノトス

第二　控訴院ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同院ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ控訴院所在地ノ地方裁判所長ニ通知シ其ノ控訴院ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得

第三十七條　控訴院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴

第二　區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付爲シタル地方裁判所ノ判決ニ對スル上告

第三　地方裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第三十八條　皇族ニ對スル民事訴訟ニ付第一審及第二審ノ裁判權ハ東京控訴院ニ屬ス但シ第一審ノ訴訟手續ニ付テハ地方裁判所ノ第一審手續ヲ適用ス

第三十九條　控訴院ノ權限竝其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第四十條　控訴院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ五人ノ判事ヲ以テ組立タル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ五人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其ノ他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第四十一條　第三十八條ノ場合ニ於テ第一審ハ五人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判シ第二審ハ特ニ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判ス其ノ五人又ハ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス

第四十二條　各控訴院ノ檢事局ニ檢事長ヲ置ク

檢事長竝ニ其ノ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

第五章　大審院

第四十三條　大審院ヲ最高裁判所トス

大審院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ置ク

第四十四條　大審院ニ大審院長ヲ置ク

大審院長ハ大審院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

大審院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第四十五條　大審院ノ事務ノ分配竝ニ代理ノ順序ハ毎年部長ト協議シ大審院長前以テ之ヲ定ム

大審院長ハ次年自ラ上席ヒントスル部ヲ指定スヘシ

大審院ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同院ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ大審院長ヨリ其ノ所在地ノ控訴院長ニ通知シ其ノ控訴院ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得

第四十六條　大審院長ハ何時ニテモ部長若ハ部員ノ承諾ヲ得テ之ヲ他ノ部ニ轉セシムルコトヲ得

第四十七條　大審院ニ於テ一タヒ定マリタル部ノ組立ヲ變更シタルトキハ現ニ取扱中ノ事務ニ付テハ第二十三條ヲ適用ス

司法年度中事務分配ノ變更ニ付テハ第二十四條ヲ適用ス

第四十八條　大審院ニ於テ裁判ヲ爲スニ當リ法律ノ點ニ付テ表シタル意見ハ其ノ訴訟一切ノ事ニ付下級裁判所ヲ羈束ス

第四十九條　大審院ノ或ル部ニ於テ上告ヲ審問シタル後法律ノ同一ノ點ニ付曾テ一若ハ二以上ノ部ニ於テ爲シタル判決ト相反スル意見アルトキハ其ノ部ハ之ヲ大審院長ニ報告シ大審院長ハ其ノ報告ニ因リ事件ノ性質ニ從ヒ民事ノ總部若ハ刑事ノ總部又ハ民事及刑事ノ總部ヲ聯合シテ之ヲ再ヒ審問シ及裁判スルコトヲ命ス

第五十條　大審院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　終審トシテ

（イ）第三十七條第二ニ依リ爲シタル判決及第三十八條ノ第一審ノ判決ニ非サル控訴院ノ判決ニ對スル上告

（ロ）控訴院ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二　第一審ニシテ終審トシテ

刑法第二編第一章及第二章ニ掲ケタル重罪竝ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮又ハ更ニ重キ刑ニ處スヘキモノノ豫審及裁判

第五十一條　前條第二ニ掲ケタル事件ニ付大審院ハ必要ナリト認ムルトキハ事件ノ審問裁判ヲ爲ス爲控訴院若ハ地方裁判所ニ於テ法廷ヲ開クコトヲ得

此ノ場合ニ於テハ控訴院判事ヲ以テ部員ニ加フルコトヲ得但シ其ノ半數ニ滿ツルコトヲ得ス

第五十二條　大審院ノ權限竝ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第五十三條　大審院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ七人ノ判事ヲ以テ組立タル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其ノ他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第五十四條　第四十九條ニ定メタル場合ニ於テハ聯合部ノ判

事少クトモ三分ノ二列席スルコトヲ要ス
前項ノ場合ニ於テ民事ノ總部若ハ刑事ノ總部聯合スルトキ又ハ民事及刑事ノ總部聯合スルトキハ總部ノ判事中官等最モ高キ者ヲ部長ト爲ス大審院長ハ至當ナリト認ムルトキハ自ラ總部ニ長タルノ權ヲ有ス

第五十五條　大審院長ハ第五十條ニ依リ大審院ニ於テ第一審ニシテ終審ヲ爲スヘキ各別ノ場合ニ付大審院ノ判事ニ豫審ヲ命ス但シ便宜ニ依リ各裁判所判事ヲシテ豫審ヲ爲サシムルコトヲ得

第五十六條　大審院ノ檢事局ニ檢事總長ヲ置ク
檢事總長並ニ其他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

第二編　裁判所及檢事局ノ官吏

第一章　判事又檢事ニ任セラルルニハ必要ナル準備及資格

第五十七條　判事又ハ檢事ニ任セラルルニハ第六十五條ニ掲ケタル場合ヲ除キ二回ノ競爭試驗ヲ經ルコトヲ要ス

第五十八條　志願者前條ノ競爭試驗ヲ受ケ得ルニハ必要ナル資格並ニ此ノ試驗ニ關ル細則ハ判事檢事登用試驗規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第一回試驗ニ及第シタル者ハ第二回試驗ヲ受クルノ前試補トシテ裁判所及檢事局ニ於テ三年間實地修習ヲ爲スコトヲ要ス
前項ノ修習ニ關ル細則モ亦試驗規則中ニ之ヲ定ム

第五十九條　司法大臣ハ試補ノ行狀罷免スルニ足レリト認ムルトキハ何時ニテモ之ヲ罷免スルコトヲ得此ノ罷免ニ關ル細則モ亦試驗規則中ニ之ヲ定ム

第六十條　一年以上修習ヲ爲シタル試補ハ其ノ修習ヲ現ニ監督スル判事ノ命アルトキハ區裁判所ニ於テ或ル司法事務ヲ取扱フコトヲ得
豫審判事及地方裁判所ノ受命判事モ亦其ノ附屬ノ試補ヲシテ自己ニ代リ或ル事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第六十一條　試補ハ如何ナル場合ニ於テモ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有セス

第一　訴訟事件ト非訟事件トニ拘ラス裁判ヲ爲ス事

第二　證據ヲ調フル事但シ前條第二項ノ場合ヲ除ク

第三　登記ヲ爲ス事

第六十二條　第二回ノ競爭試驗ニ及第シタル試補ハ判事又ハ檢事ニ任セラルルコトヲ得

第六十三條　新任ノ判事又ハ檢事ハ闕位アルトキ之ヲ區裁判所若ハ地方裁判所ノ判事又ハ區裁判所若ハ地方裁判所ノ檢事局ノ檢事ニ補ス
司法大臣ハ闕位アルマテ新任ノ判事又ハ檢事ニ豫備判事又ハ豫備檢事トシテ勤務スルコトヲ命シ之ヲ司法省又ハ區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其ノ裁判所ノ檢事局ニ用ウ

第六十四條　區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其ノ檢事局ニ用ヰラレタル豫備判事又ハ豫備檢事ハ判事又ハ檢事差支アリテ職務ニ從事スルコトヲ得ス且通常代理ノ規程ニ依リ難キコトアルトキハ第三十二條ノ制限ニ從ヒ司法大臣ハ之ニ其ノ判事又ハ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

司法大臣ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ判事又ハ其ノ檢事局ノ檢事ニ一時闕位アル間ハ此ノ法律ノ範圍內ニ於テ豫備判

事又ハ豫備檢事ヲ以テ之ヲ充ツスコトヲ得

第六十五條　三年以上帝國大學法科教授若ハ辯護士タル者ハ此ノ章ニ掲ケタル試驗ヲ經スシテ判事又ハ檢事ニ任セラルルコトヲ得
帝國大學法科卒業生ハ第一回試驗ヲ經スシテ試補ヲ命セラルルコトヲ得

第六十六條　左ニ掲ケタル者ハ判事又ハ檢事ニ任セラルルコトヲ得ス

第一　重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三　身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

第二章　判事

第六十七條　判事ハ勅任又ハ奏任トシ其ノ任官ヲ終身トス

第六十八條　大審院長ハ勅任判事ノ中ヨリ天皇之ヲ補シ各控訴院長及大審院ノ部長ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任判事ノ中ヨリ之ヲ補ス其ノ他ノ判事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第六十九條　五年以上判事タル者又ハ五年以上檢事帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレンシ者ニ非サレハ控訴院判事ニ補セラルルコトヲ得ス

第七十條　十年以上判事タル者又ハ十年以上檢事帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレンシ者ニ非サレハ大審院判事ニ補セラルルコトヲ得ス

第七十一條　第六十九條及第七十條ニ掲ケタル年限ヲ算スルニハ補職ノ時マテ各一其ノ條ニ列記シタル職務ノ一ノミニ引續キ從事シタルコトヲ必要トセス

第七十二條　判事ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

第一　公然政事ニ關係スル事

第二　政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ府縣郡市町村ノ議會ノ議員トナル事

第三　俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就ク事

第四　商業ヲ營ミ又ハ其ノ他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ム事

第七十三條　第七十四條及第七十五條ノ場合ヲ除ク外判事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ轉官轉所停職免職又ハ減俸セラルルコトナシ但シ豫備判事タルトキ及補闕ノ必要ナル場合ニ於テ轉所ヲ命セラルルハ此ノ限ニ在ラス
前項ハ懲戒取調又ハ刑事訴追ノ始若ハ其ノ間ニ於テ法律ノ許ス停職ニ關係アルコトナシ

第七十四條　判事身體若ハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキハ司法大臣ハ控訴院又ハ大審院ノ總會ノ決議ニ依リ之ニ退職ヲ命スルコトヲ得

第七十五條　法律ヲ以テ裁判所ノ組織ヲ變更シ又ハ之ヲ廢シタル場合ニ於テ其ノ判事ヲ補スヘキ闕位ナキトキハ司法大臣ハ之ニ俸給ノ半額ヲ給シテ闕位ヲ待タシムルノ權ヲ有ス

第七十六條　判事ノ官等俸給及進級ニ關ル規程ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第七十七條　判事ハ退職シタルトキハ恩給法ニ依リ恩給ヲ受ク

第七十八條　判事ノ俸給ハ判事ニ對シ懲戒取調又ハ刑事訴追

ヲ始メタルカ故ニ停職シタルニ拘ラス引續キ之ヲ給ス

第三章　檢事

第七十九條　檢事ハ勅任又ハ奏任トス

第七十六條及第七十七條ハ檢事ニモ亦之ヲ適用ス

第七十六條　檢事總長及檢事長ノ職ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任檢事ノ中ヨリ之ヲ補ス其ノ他ノ檢事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第八十條　檢事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ之ヲ免職スルコトナシ

第八十一條　檢事ハ如何ナル方法ヲ以テスルモ判事ノ裁判事務ニ干渉シ又ハ裁判事務ヲ取扱フコトヲ得ス

第八十二條　檢事ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ

第八十三條　檢事總長檢事長及檢事正ハ其ノ各管轄區域內ノ裁判所ノ檢事ノ職務ノ範圍內ニ在ル事務ヲ自ラ取扱フノ權ヲ有ス

檢事總長檢事長及檢事正ハ其ノ管轄區域內ニ於テ或ル檢事ノ取扱フヘキ事務ヲ他ノ檢事ニ移スノ權ヲ有ス

第八十四條　司法警察官ハ檢事ノ職務上其ノ檢事局管轄區域內ニ於テ發シタル命令及其ノ檢事ノ上官ノ發シタル命令ニ從フ

司法省又ハ檢事局及內務省又ハ地方官廳ハ協議シテ警察官中各裁判所ノ管轄區域內ニ於テ司法警察官トシテ勤務シ前項ノ命令ヲ受ケ及之ヲ執行スル者ヲ定ム

第四章　裁判所書記

第八十五條　裁判所ニ第八條ニ從ヒ相應ナル員數ノ書記ヲ置ク

區裁判所ノ各判事及合議裁判所ノ各部ノ爲少クトモ一人ノ書記ヲ置ク

第八十六條　地方裁判所ノ書記課ニ監督書記ヲ置ク控訴院及大審院ノ書記課ニ書記長ヲ置ク

區裁判所及檢事局ノ書記課ニ二人以上ノ書記ヲ置キタルトキハ其ノ一人ヲ監督書記トス

監督書記及書記長ハ各其ノ上官ノ命令ニ服從シテ書記課ノ事務ヲ指揮監督ス

第八十七條　書記其ノ職務ノ範圍內ニ於テ取扱ヒタル事ハ既ニ定マリタル事務分配上其ノ事他ノ書記ニ屬シタリトノ事實ノミニ依リ其ノ効力ヲ失フコトナシ

第八十八條　書記ハ司法大臣之ヲ任シ及之ヲ補ス

書記長ハ奏任トス

書記長ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第八十九條　書記ニ任セラルルニハ勅令ノ定ムル所ニ依リ試驗ヲ經ルコトヲ要ス

志願者前項ノ試驗ヲ受ケ得ルニ必要ナル資格竝ニ此ノ試驗及試驗ヲ經タル後爲スヘキ修習ニ關ル細則ハ裁判所書記登用試驗規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第九十條　書記ニ任セラレタル者閥位ナキ間ハ豫備書記ニ補ス

豫備書記ハ書記トシテ臨時勤務ヲ命セラルルコトヲ得

第九十一條　書記ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ

裁判所ノ開廷ニ於テハ裁判長ノ命令ニ從ヒ又判事一人ナルトキハ其ノ判事ノ命令ニ從フ

書記ハ檢事局ニ勤務スルトキ又ハ特別ノ事務ニ付判事若ハ檢事ニ附屬シタルトキモ亦其ノ檢事局又ハ判事若ハ檢事ノ

命令ニ從フ

前二項ノ命令ニシテ口述ノ書取ニ關ルカ又ハ書類記錄ノ調製若ハ變更ニ關ル場合ニ於テ其ノ調製若ハ變更ヲ正當ナラスト認ムルトキ書記ハ自己ノ意見ヲ記シテ之ニ添フルコトヲ得

前四項ニ揭ケタルモノヲ除ク外書記ノ職務及其ノ事務取扱方法ハ書記ニ關ル規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第九十二條　合議裁判所長又ハ區裁判所ノ判事若ハ監督判事ハ其ノ裁判所ニ於テ修習中ノ試補ニ書記ノ事務ヲ臨時取扱ハシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ職務上署名ヲ要スルトキハ特別ノ許可ヲ得テ署名スル旨ヲ記ス

第九十三條　豫備書記ハ事務ノ取扱ニ於テハ書記ニ同シ但シ書記規則中ニ制限ヲ設ケタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第五章　執達吏

第九十四條　各區裁判所ニ第九條ニ從ヒ相應ナル員數ノ執達吏ヲ置ク

第九十五條　執達吏ハ司法大臣之ヲ任シ及之ヲ補ス司法大臣ハ控訴院長ニ其ノ管轄區域內ノ裁判所ノ執達吏ヲ任シ及補スルノ權ヲ委任スルコトヲ得

執達吏ニ任セラルルニ必要ナル資格竝ニ試驗ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第九十六條　執達吏ハ手數料ヲ受ケ其ノ手數料一定ノ額ニ達セサルトキ補助金ヲ受ク

第九十七條　執達吏ハ其ノ所屬區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所管轄區域內ノ何レノ場所ニ於テモ其ノ職務ヲ行フ

第九十八條　裁判所ヨリ發スル文書ニシテ送達ヲ要スルモノハ執達吏ヲ以テ之ヲ送達ス但シ書記ヨリ直接ニ若ハ郵便ヲ以テ送達スルコトヲ法律ノ許ス場合ハ此ノ限ニ在ラス

執達吏ハ刑事ニ付警察官ヲ以テ執行ヲ爲ササル場合ニ限リ裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前二項ニ揭ケタルモノヲ除ク外執達吏ノ權限ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第九十九條　執達吏ハ其ノ職務ヲ適實ニ行フ爲保證金ヲ出スコトヲ要ス執達吏ノ職務細則竝ニ保證金ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第百條　執達吏ハ其ノ所屬裁判所ノ上官ノ命ヲ受ケタル書記及其ノ裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ上官ノ命ヲ受ケタル書記及其ノ書記ノ上官ノ命令ニ從フ

第六章　廷丁

第百一條　廷丁ハ大審院控訴院及地方裁判所ニ於テハ裁判所長區裁判所ニ於テハ地方裁判所長之ヲ雇ヒ及其ノ雇ヲ解ク

第百二條　廷丁ハ開廷ニ出頭セシメ及其司法大臣ノ發シタル一般ノ規則中ニ定メタル事務ヲ取扱ハシム

區裁判所ハ執達吏ヲ用ヒルコト能ハサルトキハ其ノ裁判所所在地ニ於テ書類ヲ送達スル爲廷丁ヲ用ヒルコトヲ得

第三編　司法事務ノ取扱

第一章　開廷

第百三條　開廷ハ裁判所又ハ支部ニ於テ之ヲ爲ス

司法大臣ニ於テ事情ニ因リ必要ナリト認ムルトキハ區裁判所ヲシテ其ノ管轄區域內ノ一定ノ場所ニ於テ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第百四條　訴訟審問ノ上席及指揮ハ合議裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル裁判長ニ屬シ區裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル判事ニ屬ス

裁判長ニ屬スル權ハ裁判上一人ニテ執務スル判事ニモ亦屬ス

第百五條　裁判所ニ於テ對審ノ公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ其ノ決議ハ其ノ理由ト共ニ公衆ヲ退カシムル前之ヲ言渡ス此ノ場合ニ於テ裁判所ノ判決ヲ言渡ストキハ再ヒ公衆ヲ入廷セシムヘシ

第百六條　裁判長ハ公開ヲ停メタルトキモ入廷ノ特許ヲ與フルコトヲ至當ト認ムル者ヲ入廷セシムルノ權ヲ有ス

第百七條　裁判長ハ婦女兒童及相當ナル衣服ヲ著セサル者ヲ法廷ヨリ退カシムルコトヲ得其理由ハ之ヲ訴訟ノ記錄ニ記入ス

第百八條　開廷中秩序ノ維持ハ裁判長ニ屬ス

第百九條　裁判長ハ審問ヲ妨クル者又ハ不當ノ行狀ヲ爲ス者ヲ法廷ヨリ退カシムルノ權ヲ有ス

前項ニ掲ケタル造犯者ノ行狀ニ因リ之ヲ勾引シ開廷ノトキマテ之ヲ勾留スルノ必要アリト認ムルトキ裁判長ハ之ヲ命令スルノ權ヲ有ス閉廷ノトキ裁判所ハ之ヲ釋放スルコトヲ命シ又ハ五圓以下ノ罰金若ハ五日以内ノ拘留ニ處スルコトヲ得

此ノ處罰ニ對シテハ上告ヲ許シ控訴ヲ許サス且其ノ所爲ノ輕罪若ハ重罪ニ該ルヘキモノナルカ又ハ懲戒上罰スヘキモノナルトキハ詳細ニ之ヲ記入シ裁判長ハ其ノ事件ヲ更ニ處分スルノ權アル官廳ニ報告ヲ爲ス

第百十條　前條ノ規程ハ左ノ變更ヲ以テ當事者證人及鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス

第一　裁判所ハ閉廷ヲ待タスシテ本條ノ造犯者ヲ速時ニ罰スルコトヲ得

第二　造犯者原告ナルトキハ裁判所ハ處罰ノ上仍本人宥恕ヲ請フカ又ハ恭順ヲ表シテ不敬ノ罪ヲ謝スルマテ其ノ審問ヲ中止スルコトヲ得

第百十一條　裁判長ハ不當ノ言語ヲ用ヰル辯護士ニ對シ同事件ニ付引續キ陳述スルノ權ヲ行フコトヲ禁スルコトヲ得其ノ禁止ハ此ノ行狀ニ付懲戒上ノ訴追ヲ爲スコトヲ妨ケス

第百十二條　裁判所ノ開廷中秩序ヲ維持スル爲第百九條第百十條及第百十一條ヲ以テ與ヘタル權ハ豫審判事又ハ受命判事又ハ法律ニ從ヒ其職務ヲ行フ試補モ亦之ヲ行フコトヲ得」此ノ場合ニ於テノ異議ハ二十四時以内ニ其ノ判事又ハ試補ニ之ヲ申出ルコトヲ得

豫審判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ノ屬スル裁判所ノ刑事部若ハ刑事支部ニ於テ前項ノ異議ヲ裁判ス受命判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ニ命シタル裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第百十三條　第百九條第百十條第百十一條及第百十二條ヲ以テ與ヘタル權ヲ行ヒタルトキハ訴訟ノ記錄ニ之ヲ記入シ及其ノ理由ヲ記ス

前項ノ場合ニ於テ其ノ所爲ノ重罪若ハ輕罪ニ該ルヘキモノナルカ又ハ懲戒上罰スヘキモノナルトキハ詳細ニ之ヲ記入シ裁判長ハ其ノ事件ヲ更ニ處分スルノ權アル官廳ニ報告ヲ爲ス

第百十四條　判事檢事及裁判所書記ハ公開シタル法廷ニ於テ

ハ一定ノ制服ヲ著ス

前項ノ開廷ニ於テ審問ニ參與スル辯護士モ亦一定ノ職服ヲ著スルコトヲ要ス

第二章　裁判所ノ用語

第百十五條　裁判所ニ於テハ日本語ヲ用ヰ

當事者證人又ハ鑑定人ノ中日本語ニ通セサル者アルトキハ訴訟法又ハ特別法ニ通事ヲ用ヰルコトヲ要スル場合ニ於テ之ヲ用ヰ

第百十六條　通事ノ任命及使用並ニ訴訟手續上其ノ行フヘキ職務ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第百十七條　通事ノ得難キ場合ニ於テ書記其ノ言語ニ通スルトキハ裁判長ノ承諾ヲ得テ通事ニ用ヰルルコトヲ得

第百十八條　外國人ノ當事者タル訴訟ニ關係ヲ有スル者及其ノ訴訟ノ審問ニ參與スル官吏ノ或ル外國語ニ通スル場合ニ於テ裁判長便利ト認ムルトキハ其ノ外國語ヲ以テ口頭審問ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ審問ノ公正記錄ハ日本語ヲ以テ之ヲ作ル

第三章　裁判ノ評議及言渡

第百十九條　合議裁判所ノ裁判ハ此ノ法律ニ從ヒ定數ノ判事之ヲ評議シ及之ヲ言渡ス

第百二十條　四日以上引續クヘキ見込アル刑事ノ審問ニ於テ裁判所長ハ補充判事一人ヲ命シ之ニ立會ハシムルコトヲ得此ノ補充判事ハ其ノ審問中或ル判事ノ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ引續キ參與スルコトヲ得サル場合ニ於テ之ニ代リ審問及裁判ヲ完結スルノ權ヲ有ス

第百二十一條　判事ノ評議ハ之ヲ公行セス但シ豫備判事及試補ノ傍聽ヲ許スコトヲ得

判事ノ評議ハ其ノ裁判長之ヲ開キ且之ヲ整理ス其ノ評議ノ順末並ニ各判事ノ意見及多少ノ數ニ付テハ嚴ニ秘密ヲ守ルコトヲ要ス

第百二十二條　評議ノ際各判事意見ヲ述フルノ順序ハ官等ノ最モ低キ者ヲ始トシ裁判長ヲ終トス官等同キトキハ年少ノ者ヲ始トシ受命ノ事件ニ付テハ受命判事ヲ始トス

第百二十三條　裁判ハ過半數ノ意見ニ依ル

金額ニ付判事ノ意見三說以上ニ分レ其ノ說各過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ニ合算ス

刑事ニ付其ノ意見三說以上ニ分レ各過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス

第百二十四條　判事ハ裁判スヘキ問題ニ付自己ノ意見ヲ表スルコトヲ拒ムコトヲ得ス

第四章　裁判所及檢事局ノ事務章程

第百二十五條　裁判所及檢事局ノ標準ト爲スヘキ規則ハ司法大臣之ヲ定ム

控訴院長及檢事長ハ前項ノ規則ニ依リ各自管轄區域内ノ裁判所及檢事局ニ對シテ事務ノ一般ノ取扱ニ關リ成ルヘク統一ヲ旨トシ殊ニ裁判所及檢事局ノ開廳時間及開廷ノ時日ニ付訓令ヲ發ス

大審院ハ自ラ其ノ事務章程ヲ定ム但シ之ヲ實施スル前司法大臣ノ認可ヲ受ク

第五章　司法年度及休暇

第百二十六條　司法年度ハ一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ハル

第百二十七條　裁判所ノ休暇ハ七月十一日ニ始マリ九月十日ニ終ハル

第百二十八條　休暇中ハ左ノ事件ノ外既ニ著手シタル民事訴訟ヲ中止スト雖モ新ナル訴訟ニ著手セス

第一　爲替手形若ハ約束手形其ノ他ノ流通證書ニ關ル請求

第二　船舶又ハ運送賃又ハ積荷ニ對スル請求

第三　財産差押事件

第四　住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取明渡使用占據若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

第五　差押ノ請求

第六　保證ヲ出サシムルノ請求

第七　取掛リタル建築ノ繼續ニ關ル事件

第八　前數項ニ揭ケタルモノヲ除ク外區裁判所ノ判事ニ於テ又ハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ休暇部長ニ於テ直ニ著手スヘキ緊急ノモノト認メタル請求若ハ事件

第百二十九條　休暇中ニ拘ラス刑事訴訟非訟事件判決執行破産事件竝ニ民事訴訟法ニ依リ略式ヲ以テ取扱フコトヲ得ヘキ訴訟ハ之ヲ停止スルコトナシ

第百三十條　合議裁判所ニ於テハ休暇中事務取扱ノ爲休暇部ト稱スル一若ハ二以上ノ部ヲ設ク

休暇部ノ組立ハ休暇ノ始マル前裁判所長之ヲ定ム第二十三條ハ此ノ部ニモ亦之ヲ適用ス

二人以上ノ判事ヲ置キタル區裁判所ノ休暇事務取扱方法ハ監督判事之ヲ定ム

第六章　法律上ノ共助

第百三十一條　裁判所ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依リ互ニ法律上ノ輔助ヲ爲ス

法律上ノ輔助ハ別ニ法律ニ定メタル場合ノ外ハ所要ノ事務ヲ取扱フヘキ地ノ區裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

第百三十二條　檢事局モ亦各自ノ管轄區域內ニ於テ取扱フヘキ事務ニ付互ニ法律上ノ輔助ヲ爲ス

第百三十三條　裁判所書記課モ亦其ノ權內ノ事件又ハ其ノ配下ノ執達吏ノ權內ノ事件ニ付キ互ニ法律上ノ輔助ヲ爲ス

第四編　司法行政ノ職務及監督權

第百三十四條　合議裁判所長區裁判所ノ判事若ハ監督判事檢事總長檢事長檢事正ハ司法大臣ノ由ヲ以テ司法行政ノ職務ヲ行フノ官吏トス

第百三十五條　司法行政監督權ノ施行ハ左ノ規程ニ依ル

第一　司法大臣ハ各裁判所及各檢事局ヲ監督ス

第二　大審院長ハ大審院ヲ監督ス

第三　控訴院長ハ其ノ控訴院及其ノ管轄區域內ノ下級裁判所ヲ監督ス

第四　地方裁判所長ハ其ノ裁判所若ハ其ノ支部及其ノ管轄區域內ノ區裁判所ヲ監督ス

第五　區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ其ノ裁判所所屬ノ書記及執達吏ヲ監督ス

第六　檢事總長ハ其ノ檢事局及下級檢事局ヲ監督ス

第七　檢事長ハ其ノ檢事局及其ノ局ノ附置セラレタル控訴院管轄區域內ノ檢事局ヲ監督ス

第八　檢事正ハ其ノ檢事局及其ノ局ノ附置セラレタル地方裁判所管轄區域內ノ檢事局ヲ監督ス

第百三十六條　前條ニ揭ケタル監督權ハ左ノ事項ヲ包含ス

第一　官吏不適當又ハ不充分ニ取扱ヒタル事務ニ付其注意ヲ促シ竝ニ適當ニ其ノ事務ヲ取扱フコトヲ之ニ訓令スル事

第二　官吏ノ職務上ト雖トモ拘ラス其ノ地位ニ不相應ナル行狀ニ付之ニ諭告スル事

但シ此ノ諭告ヲ爲ス前其ノ官吏ヲシテ辯明ヲ爲スコトヲ得セシムヘシ

第百三十七條　第十八條及第八十四條ニ揭ケタル官吏ハ第百三十五條ニ依リ行フヘキ監督ヲ受クルノ官吏中ニ之ヲ包含ス

第百三十八條　裁判所若ハ檢事局ノ官吏ニシテ適當ニ其ノ職務ヲ行ハサル者又ハ其ノ行狀其ノ地位ニ不相應ナル者ニ付第百三十六條ヲ適用スルコト能ハサルトキハ懲戒法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第百三十九條　前數條ニ揭ケタル司法行政ノ職務及監督權ハ判事若ハ檢事其ノ官吏タルノ資格又ハ其ノ他ノ資格ヲ以テ爲シタル事ニ對シテ起リタル請求ニ付其ノ請求ヲ滿足セシムル爲之ヲ執行スルコトヲ得ス

第百四十條　司法事務取扱ノ方法ニ對スル抗告殊ニ或ル事務ノ取扱方ニ對シ又ハ取扱ノ遲滯若ハ拒絕ニ對スル抗告ハ此ノ編ニ揭ケタル司法行政ノ職務及監督權ニ依リ之ヲ處分ス

第百四十一條　裁判所及檢事局ハ司法大臣又ハ監督權アル判事若ハ檢事ノ要求アルトキハ法律上ノ事項又ハ司法行政ニ關ル事項ニ付意見ヲ述フ

第百四十二條　司法官廳ニ對シテ起リタル民事ノ訴訟ニ於テハ其ノ訴訟ヲ受クタル裁判所ノ檢事局ハ司法官廳ヲ代表ス

第百四十三條　此ノ編ニ揭ケタル前各條ノ規程ハ裁判上執務タル判事竝裁判權ニ影響ヲ及ホシ又ハ之ヲ制限スルコトナシ

附則

第百四十四條　此ノ法律ノ施行ニ關ル規程竝ニ從來ノ法律ニシテ此ノ法律ニ牴觸スト雖モ當分ノ內仍ホ効力ヲ有セシムルモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

○裁判所構成法施行條例　明治二十三年三月法律第二十二號

朕裁判所構成法施行條例ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

裁判所構成法施行條例

第一條　從來ノ治安裁判所ハ裁判所構成法ニ定メタル區裁判所トシ從來ノ始審裁判所ハ裁判所構成法ニ定メタル地方裁判所トシ又從來ノ控訴院ハ裁判所構成法ニ定メタル控訴院大審院トス

第二條　始審裁判所從來ノ檢事局ハ裁判所構成法ニ定メタル地方裁判所ノ檢事局トス控訴院大審院ノ檢事局モ亦同シ

第三條　區裁判所ノ管轄區域ヲ爲ス町村ノ變更ハ之ヲ區裁判

所管轄區域ニ及ホスモノトス

第四條　裁判所構成法實施前他ノ裁判所第一審トシテ受理シタル民事訴訟及刑事訴訟ニシテ同法ニ依リ區裁判所ノ管轄ニ屬シタルモノハ現在ノ區相當ノ區裁判所ニ移ルモノトス既ニ爲シタル裁判ハ區裁判所ニ移ルモノト看做ス

第五條　裁判所構成法ニ依リ地方裁判所ノ第二審ニ屬スヘキモ既ニ控訴院ニ於テ受理シタル事件ハ控訴院之ヲ裁判スヘシ又控訴院ノ管轄ニ屬スヘキモ既ニ大審院ニ於テ受理シタル民事刑事ノ上告ハ大審院之ヲ裁判スヘシ

第六條　裁判所構成法實施前重罪裁判所ニ於テ受理シタル刑事訴訟ハ現在ノ區相當ノ地方裁判所ニ移ルモノトス既ニ爲シタル裁判ハ地方裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

第七條　裁判所構成法實施前始審裁判所ニ於テ受理シタル郡長區長戸長又ハ市長町長村長ニ對スル民事訴訟ハ同法ニ依リ區裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノト雖其ノ地方裁判所之ヲ裁判シ控訴院ニ於テ受理シタル官廳ニ對スル民事訴訟ハ其ノ控訴院之ヲ裁判スヘシ

第八條　裁判所構成法實施前高等法院ニ於テ受理シタル刑事訴訟ハ現在ノ區相當ノ裁判所ニ移ルモノトス高等法院ニ於テ裁判スヘキ事件ヲ通常裁判所ニ於テ受理シタルモノモ亦同シ

第九條　明治十八年第三十一號布告逆謀罪即決例ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十條　明治十八年第十二號布告普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交涉ノ件處分法ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十一條　明治二十一年勅令第六十四號ハ仍効力ヲ有ス區裁判所出張所ニ於テ判事若支アルトキハ裁判所書記ヲシテ登記事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

北海道及島嶼ニシテ區裁判所遠隔ノ地方ニ於テ司法大臣ハ郡長町長又ハ村長ニ委任シテ登記事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第十二條　東京地方裁判所管內小笠原島及伊豆七島ニ於テ民事刑事ノ訴訟ニシテ區裁判所ノ裁判權ニ屬スルモノ及非訟事件ハ裁判所設置マテ島吏之ヲ取扱フ但シ刑事訴訟ノ手續ハ便宜之ヲ取扱フコトヲ得

第十三條　沖繩縣ニ於テ民事刑事ノ訴訟及非訟事件ニシテ區裁判所及地方裁判所ノ裁判權ニ屬スルモノハ裁判所設置マテ同縣官吏之ヲ取扱フ但シ控訴院ノ裁判權ニ屬スルモノハ長崎控訴院ノ管轄トス

第十四條　樺戸空知釧路ノ集治監ノ囚人罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ノ裁判ニ關ル明治十五年第十六號第四十一號及明治十八年第四十二號布告ハ仍効力ヲ有ス

前項ノ裁判ハ地方裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

第十五條　明治二十一年勅令第七十一號清國竝ニ朝鮮國駐在領事裁判規則ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十六條　裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官檢察官ハ同法第二編第一章ノ要件ヲ必要トセス

第十七條　裁判所構成法實施ノ際在職ノ書記ハ同法第二編第四章第八十九條ノ要件ヲ必要トセス

第十八條　裁判所構成法實施後三年間ハ司法大臣ハ試補實地修習ノ時間ヲ一年六箇月マテニ減縮スルコトヲ得

明治十七年太政官達第百二號判事登用規則及明治二十年勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則ニ依リ試補ト爲リタル者ハ第二回試驗ヲ要セスシテ之ヲ判事又ハ檢事ニ任スルコトヲ得

第十九條　裁判所構成法實施後一年間ハ司法大臣ハ同法第二編第二章第六十九條及第七十條ノ規程ニ拘ラス補職ヲ爲スコトヲ得

第二十條　三年以上裁判官又ハ檢察官ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上舊參事院議官又ハ議官補ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上法制局參事官ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上司法省高等官（會計局ノ高等官ヲ除ク）ノ職ヲ奉シタル者ハ裁判所構成法實施後一年間ハ之ヲ判事又ハ檢事ニ任スルコトヲ得

第二十一條　裁判所構成法第二編第二章第七十四條及第七十五條ハ檢事ニモ亦之ヲ適用ス

○小笠原島裁判事務權限及控訴裁判管轄

（明治十四年十月布告第五十六號）

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所（即チ警察署ニ始審裁判所（即チ輕罪裁判所）ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民刑事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○伊豆七島裁判事務及管轄

（明治十四年十月布告第五十七號）

伊豆七島裁判事務當分該島吏ヘ民事ハ百圓以下及勸解竝ニ刑事ハ過警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上刑事輕罪以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○治安裁判所出張所裁判假規程

（明治二十二年五月勅令第六十七號）

治安裁判所出張所裁判假規程

第一條　治安裁判所出張所ニ於テ取扱フ民事事件ハ左ノ如シ

一　金錢其他換用物若クハ有價證券ノ一定シタル員額又ハ特定ノ物品ニ對スル請求

二　逃物ノ全部若クハ一部ノ明渡又ハ修繕ノ請求

前二項ノ事件ハ原被告其管轄區域內ニ現在スルカ若クハ原被告共ニ出廷シテ審問裁判ヲ請フトキニ限ル

三　勸解

第二條　前條ニ記載セル事件タリトモ急速ノ取調ヲ要シ出張

裁判開始ノ期ヲ待ヲ難キモノ又ハ第二ノ事件ニシテ契約ニ付爭アルモノハ從前ノ通リ治安裁判所本廳ニ於テ取扱ハシム

第三條　出張裁判ノ管轄區域開廷ノ場所及ヒ期日ハ司法大臣ノ告示ヲ以テ之ヲ定ム

出張スヘキ裁判官ハ毎年若クハ毎期管轄始審裁判所長之ヲ定ム

第四條　出張裁判官ハ繁難ナリト認ムル事件ヲ治安裁判所本廳ニ移スノ命令ヲ爲スコトヲ得

第五條　出張裁判ヲ開クヘキ場所ニ該ル治安裁判所出張所ハ豫メ訴狀ノ送達其他期日ニ至リ直チニ審問裁判ヲ爲スニ必要ナル手續ヲ爲スヘシ

書類ハ原告人ヲシテ送達セシムルヿ可シ

第六條　裁判及ヒ命令ノ執行ニシテ開期內ニ終結シ難キモノ及ヒ執行ニ關シ出張裁判閉期後ニ起ル故障ハ治安裁判所本廳ニ於テ取扱ハシム

○地方裁判所支部ノ事務ヲ取扱フヘキ判事檢事及區裁判所判事補職

明治二十四年八月司法省令第五號

地方裁判所支部ノ事務ヲ取扱フヘキ判事檢事及區裁判所監督判事補職等ノ件ニ付左ノ通リ相定ム

一地方裁判所ノ支部ヲ置ク區裁判所ノ判事又ハ檢事ヲ地方裁判所判事又ハ檢事ニ兼補シタル處自今地方裁判所判事又ハ檢事ニ兼補スルヲ止メ區裁判所ノ判事又ハ檢事ハ當然地方裁判所支部ノ事務ヲ取扱フヘキモノトス

二區裁判所監督判事モ亦補職スルヲ止メ自今特ニ之ヲ命スルモノトス

但シ現在ノ監督判事ハ別ニ辭令書ヲ用ヒス其區裁判所判事ニ補シ其廳ノ監督ヲ命シタルモノトス

○判事試補ニ書記事務ヲ取扱シムル件

明治二十二年三月司法省訓令第一五八號

始審裁判所長又ハ治安裁判所上席判事ハ其廳詰判事試補ニ書記事務ヲ取扱ハシムルコト事務練習上必要ナリト認ムルトキハ之ヲシテ一時書記事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

○沖繩縣及小笠原島裁判官檢察官ノ職務

明治二十一年五月勅令第三十五號

豫沖繩縣及小笠原島ニ於ケル裁判官檢察官職務ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

沖繩縣及小笠原島ニ於テハ當分ノ內同廳官吏ヲシテ裁判官檢察官ノ職務ヲ行ハシム

○清國竝朝鮮國駐在領事裁判規則

明治二十一年十月勅令第七十一號

豫清國並朝鮮國駐在領事裁判規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　清國竝朝鮮國駐在ノ日本帝國領事ハ其管轄內ニ在ル日本人民ニ對スル民事訴訟及ヒ公訴私訴ニシテ治安裁判所

違警罪裁判所始審裁判所輕罪裁判所ノ權限ニ屬スルモノヲ審判スルノ權ヲ有ス但治安裁判所違警罪裁判所ノ權限ニ屬スル訴件ニ付領事ノ爲シタル裁判ハ終審ノ裁判ナリトス

第二條　豫審判事ノ職務ハ領事之ヲ行ヒ檢察官ノ職務ハ副領事警察官若クハ領事館書記生之ヲ行フ

第三條　裁判所書記ノ職務ハ領事館書記生若クハ其他ノ館員之ヲ行フ

第四條　輕罪ニ付テハ豫審ヲ爲サヽルモノトス

第五條　重罪ニ關スル豫審ノ手續及ヒ豫審終結ノ言渡ニ付故障ヲ爲スコトヲ許サス但豫審終結ノ言渡ニ對シテハ直ニ上告ヲ爲スコトヲ得

第六條　治罪法ニ定ムル忌避同避ノ規則ハ之ヲ適用セス

第七條　民事訴訟及ヒ私訴ノ裁判ニ對スル控訴ハ長崎控訴院重罪ニ係ル公判ハ長崎重罪裁判所ノ管轄トス

第八條　民事訴訟及ヒ私訴ノ裁判ニ對スル控訴上告ハ本人若クハ代言人ノ出廷ヲ要セス書面ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得禁錮ノ言渡ヲ除クノ外公訴ノ裁判ニ對スル控訴モ亦同シ

第九條　此規則ニ於テ領事ト稱スルハ總領事領事又ハ其代理及ヒ委任狀ヲ有シタル副領事又ハ其代理ヲ云フ

○執達吏規則

明治二十三年七月法律第五十一號

豫執達吏規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

執達吏規則

第一條　執達吏ハ區裁判所ニ屬シ法律ニ從ヒ訴訟ニ關スル書類ヲ送達シ及裁判ヲ執行スルモノトス

第二條　執達吏ハ當事者ノ委任ニ依リ左ノ事務ヲ取扱フコトヲ得

第一　告知及催告ヲ爲スコト

第二　動產不動產ノ任意競賣ヲ爲スコト

第三　拒證書ヲ作ルコト

第三條　執達吏ハ法律規則ニ定メタル職務ノ外裁判所及檢事局ノ命令ニ依リ其職務ニ應スル事務殊ニ左ノ事務ヲ取扱フノ義務アリ

第一　書類物品ノ送付ヲ爲スコト

第二　罰金科料過料ヲ徵收シ及沒收物品ヲ取上ケ若クハ賣却スルコト

第三　令狀ノ執行ヲ爲スコト

第四條　執達吏ハ所屬區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ノ監督ヲ受ク

他ノ判事又ハ檢事ニシテ職務上事務ヲ命シタルトキハ其事務ニ限リ執達吏ニ對シ監督權ヲ有ス

第五條　執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ住居ヲ定ムヘシ但地方裁判所長ノ許可ヲ得タルトキハ其區裁判所管轄內ニ限リ他ノ地ニ住居ヲ定ムルコトヲ得

第六條　執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ役場ヲ設クヘシ

第七條　一區裁判所ニ數名ノ執達吏アルトキハ裁判所及檢事局ノ命令ニ依ル事務ト裁判所書記ヲ經テ委任スヘキ事務トヲ各執達吏ニ分配スヘシ此分配ハ成ルヘク土地ノ區域ニ從フヘシ

事務分配ハ每司法年度ノ終ニ於テ區裁判所ノ一人ノ判事若

クハ監督判事前以テ之ヲ定ム

執達吏ノ爲シタル事務ハ事務分配上其事務他ノ執達吏ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其効力ヲ失フコトナシ

第八條　執達吏ハ左ノ場合ニ於テハ其職務ノ施行ヨリ除斥セラルヘシ

第一　自己又ハ其婦カ當事者若クハ被害者タルトキ又ハ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ被害者ト共同權利者共同義務者若クハ償還義務者タルノ關係ヲ有スルトキ

第二　自己又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ被害者又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第三　自己カ同一ノ事件ニ付證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ又ハ法律上代理人ト爲ルノ權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第九條　執達吏ハ民事訴訟ニ付テ其婦又ハ自己若クハ其婦ノ親族ノ爲ニノミ訴訟代理人及輔佐人トシテ法廷ニ出ルコトヲ得但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第十條　執達吏ハ其職務ヲ行フヘキ命令若クハ委任ヲ受クルトキハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十一條　執達吏ハ特別ノ命令若クハ委任ヲ受ケタル場合ノ外自己ノ責任ヲ以テ左ニ揭クル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルコトヲ得

第一　執達吏ノ登用試驗ニ及第シタル者

第二　執達吏ノ職務修習者ニシテ三箇月以上其職務ヲ修習シタル者

第三　裁判所書記ノ登用試驗ニ及第シタル者

第四　區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行フニ適當ト認メタル者

第十二條　執達吏正當ノ理由アリテ其職務ヲ行フコトヲ得サルトキ又ハ之ヲ委任スルコトヲ得サルトキハ命令ヲ爲シタル裁判所及檢事局又ハ委任ヲ爲シタル本人ニ速ニ其旨ヲ通知スヘシ

委任ヲ爲シタル本人ニ通知スルコト能ハサルトキ又ハ急速ノ處分ヲ要スルトキハ其旨ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ申立ツヘシ

第十三條　前條ノ場合其他執達吏差支アルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ第十一條ニ揭クル者ニ執達吏ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第十四條　執達吏ハ一定ノ制服ヲ著スヘシ

臨時職務執行ノ委任ヲ受ケタル者ハ區裁判所ヨリ交付スヘキ鑑札ヲ携帶スヘシ

第十五條　執達吏ハ裁判所書記ヲ經タルト否トヲ問ハス委任ヲ受ケ職務ヲ行フニ付テハ定規ノ手數料ヲ受ケ及立替金ノ辨濟ヲ受ク

執達吏ハ定規ノ手數料ヲ增減シ又ハ手數料及立替金ノ外報酬ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條　執達吏第三條ニ揭クル職務ヲ行フニ付テハ立替金ノ外手數料ヲ受クルコトヲ得ス

第十七條　執達吏第十一條ノ場合ニ於テ臨時職時執行ノ委任ヲ爲シタルトキハ其委任ヲ受ケタル者ニ報酬トシテ手數料十分ノ三以上ヲ支給スヘシ

第十八條　第十三條ノ場合ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行ヒタル者ハ其職務ニ付定メタル手數料ヲ受ケ及立替金ノ辨濟ヲ受ク

第十九條　執達吏一年間ニ收入セシ手數料百八拾圓ニ充タサルトキハ國庫ヨリ其不足額ヲ支給ス

條二十條　執達吏死亡シタルトキ又ハ停職免職若クハ勾留セラレタルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ左ノ處分ヲ爲スヘシ

第一　官印帳簿其他職務ニ關スル書類ヲ區裁判所ニ差出サシムルコト

第二　執達吏職務上保管シタル物品及ヒ書類ノ保全ニ必要ノ手數ヲ爲スコト

第二十一條　執達吏ハ官吏恩給法ニ照シ恩給ヲ受ク其恩給年額ハ第十九條ニ定メタル金額ヲ俸給額ト看做シテ算定ス

第二十二條　執達吏ハ此規則ニ依ルノ外總テ一般官吏ノ例ニ依ル

附　則

第二十三條　執達吏ヲ置カサル間ハ區裁判所書記執達吏ノ職務ヲ行フ此場合ニ於テハ自己ノ責任ヲ以テ第十一條ニ揭クル者又ハ自己ノ適當ト思量スル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルコトヲ得

裁判所書記前項ノ委任ヲ爲シタルトキハ委任ヲ受ケタル者ニ執達吏ノ職務ニ付定メタル手數料十分ノ七以上ヲ支給スヘシ

○執達吏手數料　明治二十三年七月法律第五十二號

除執達吏手數料規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

執達吏手數料規則

第一條　執達吏ハ此規則ニ從ヒ手數料ヲ受ク

第二條　書類送達ノ手數料ハ一通ニ付五錢トス

第三條　有體動產及未タ土地ヨリ離レサル果實竝爲替證券其他裏書ヲ以テ移轉スルコトヲ得ル證券ノ差押、假差押ニ付テノ手數料ハ左ノ區別ニ從フ

執行スヘキ債權額	手數料
弐拾圓マテ	三拾錢
五拾圓マテ	五拾錢
百圓マテ	七拾五錢
弐百五拾圓マテ	壹圓
五百圓マテ	壹圓弐拾五錢
千圓マテ	壹圓五拾錢

千圓ヲ超ユルトキハ弐圓トス

若シ執務三時間以上ニ渉ルトキハ一時間毎ニ本條ニ定メタル手數料ノ十分ノ三ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

第四條　執達吏差押、假差押ヲ爲スヘキ場所ニ臨ムト雖差押フヘキ物ナキトキ又ハ差押フヘキ物ヲ換價スルモ强制執行ノ費用ヲ償フヲ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ前條ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク

第五條　民事訴訟法第五百五十六條第二項、第五百八十六條第二項、第六百十五條ノ場合及既ニ差押、假差押ニ著手シタル執達吏ノ死亡若クハ其他ノ理由ニ依リ委任ノ消滅シタル

現行日本法令大全

第十八類　第二章　裁判

トキ物ヲ換價スル爲其委任ヲ引受ケタル場合ニ於テハ執達吏ハ第三條ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク

第六條　特定ノ動産又ハ代替物ノ一定ノ數量ヲ債務者ヨリ取上ケ之ヲ債權者ニ引渡ス場合ニ於テハ其手數料ヲ五拾錢トス若シ執務二時間以上ニ渉ルトキハ一時間毎ニ拾五錢ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

前項ノ場合ニ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖引渡スヘキ物ナキトキハ前項ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク

第七條　民事訴訟法第七百三十一條第一項ノ場合ニ於テハ執務三時間以內ハ手數料ヲ五拾錢トス若シ其執務三時間以上ニ渉ルトキハ一時間毎ニ拾五錢ヲ加フ但其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

前項ノ場合ニ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖船舶アラサルトキハ前項ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク

第八條　民事訴訟法第六百四十三條第三項ニ依リ不動產ノ取調ヲ爲ス場合ニ於テハ第三條ニ定メタル區別ニ從ヒ其手數料ヲ受ク

第九條　動產、不動產及船舶ノ競賣ニ付テノ手數料ハ左ノ區別ニ從フ但競賣ニ依リ得タル金額執行スヘキ債權額ニ超過スルトキハ其債權額ヲ以テ競賣金額ト看做ス

競賣金額	手數料
貳拾圓マテ	六拾錢
五拾圓マテ	壹圓
百圓マテ	壹圓五拾錢
貳百五拾圓マテ	貳圓
五百圓マテ	貳圓五拾錢
千圓マテ	四圓

以上千圓毎ニ壹圓ヲ加フ

任意競賣ニ付テモ亦前項ニ同シ

第十條　執達吏執行行爲ヲ爲スヘキ場所ニ臨マサル以前ニ民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ強制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ強制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手數料ノ十分ノ三ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手數料ヲ三拾錢トス

第十一條　執達吏執行行爲ヲ爲スヘキ場所ニ臨ミタル後民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ強制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ強制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手數料ノ半額ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ此手數料ヲ五拾錢トス

第十二條　第三條乃至第十一條ノ手數料ヲ受クヘキ行爲ニハ強制執行ノ場合ニ於ケル左ノ行爲ヲ包含ス

第一　警察上ノ援助ヲ求メ又ハ證人鑑定人ノ立會ヲ爲サシムルコト

第二　執行行爲ニ關スル催告其他ノ通知ヲ爲シ又ハ書類ノ送達ヲ爲スコト

第三　記名證券ヲ買主ノ氏名ニ書換ヘ及必要ナル陳述ヲ催告スル行爲ヲ爲スコト

第四　支拂其他ノ給付、差押金錢及賣却金ヲ受取リ、交付シ若クハ供託シ又ハ受取證書ヲ交付シ又ハ差押物ヲ還付スルコト

第五　競賣ノ公告ヲ爲スコト

第十三條　執達吏ハ立替金トシテ左ノ費用ノ辨濟ヲ受ク

第一　書記料
第二　郵便料、電信料
第三　公告料
第四　證人、鑑定人ノ手當
第五　職工、役夫ノ手當
第六　有價證券ノ記名書換及流通ヲ止メタル證券ノ流通ヲ回復スル爲ノ費用
第七　人及物ノ送致費用
第八　物ノ保存竝監視ノ費用
第九　果實收獲ノ費用
第十　旅費

第十四條　前條ノ書記料ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ受ク

第一　法律ニ依リ又ハ利害關係人ノ求ニ依リ證書及記錄中ニ存スル書類ノ謄本ヲ作リタルトキ

但法律ニ依リ交付スヘキ送達證書ノ謄本ハ此限ニ在ラス

第二　供託ヲ爲スニ際シ執行裁判所ニ差出スヘキ屆書ヲ作リタルトキ

第三　差押命令ノ送達後第三債務者ノ爲ス陳述ヲ筆記シタルトキ

書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付貳錢五厘トス但十二行ニ滿タサルモ半枚ト看做シテ算定ス

第十五條　強制執行ニ關セサル告知及催告ヲ爲ストキハ其手數料拾錢ヲ受ク

第十六條　執達吏拒證書ヲ作リタルトキハ手數料拾錢ヲ受ク」

拒者ノ營業場又ハ住居ノ問合ヲ爲シ拒證書ヲ作リタルトキハ手數料貳拾錢ヲ受ク

第十七條　證人ニ支給スヘキ日當ハ貳拾錢以下鑑定人ニ支給スヘキ日當ハ五拾錢以下トシ執達吏土地ノ情況ニ從ヒ之ヲ支給ス若シ一里以上ノ地ヨリ呼出シタルトキハ第十八條ノ規定ニ從ヒ旅費ヲ支給ス

第十八條　執達吏自己ノ役場ヨリ一里以上ノ地ニ至リ職務ヲ行フトキハ一里毎ニ拾錢以下ノ旅費ヲ受ク但一里ニ滿タサルモ一里ト看做シテ算定ス

右旅費ノ額ハ控訴院長ノ認可ヲ經テ地方裁判所長之ヲ定ム

第十九條　執達吏ハ總テノ事務ヲ擔任スルニ當リ手數料及立替金ノ概算額ヲ委任者ヨリ豫納セシム若シ豫納セサルトキハ委任ニ應セサルコトヲ得但裁判所及檢事局ノ命令ニ依ルトキ又ハ訴訟上ノ救助ヲ受クル者ノ爲ニ事務ヲ擔任スルトキハ此限ニ在ラス

第二十條　執達吏ハ委任ノ終了シタル後手數料及立替金ノ辨濟ヲ受クヘキモノトス但民事訴訟法第五百五十四條ニ規定シタル場合ハ此限ニ在ラス

第二十一條　執達吏裁判所及檢事局ノ命令ニ依リ其職務ヲ行フ爲ニ要シタル立替金ハ三箇月毎ニ確定シテ之ヲ支給ス

右立替金ハ國庫ヨリ之ヲ支辨ス

第二十二條　訴訟上ノ救助ヲ付與シタル場合ニ於テハ執達吏ノ立替金ハ國庫ヨリ支辨ス但債務者ヨリ辨濟シ能ハサル場合ニ限ル

第二十三條　執達吏ハ其職務執行ニ付作リタル書類ノ正本又ハ謄本ニ手數料及立替金ノ額ヲ附記スヘシ又執務時間ニ應シ其辨濟ヲ受クヘキトキハ調書ニ其執務時間ヲ附記スヘシ

若シ之ヲ附配セサルトキハ最短ノ時間ニ付テ定メタル金額ヲ以テ算定ス

第三章　訴訟　訴訟費用

第一款　訴訟

○民事訴訟法　明治二十三年四月法律第二十九號

除民事訴訟法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

民事訴訟法目錄

第一編　總則

第一章　裁判所

第一節　裁判所ノ事物ノ管轄

第二節　裁判所ノ土地ノ管轄

第三節　管轄裁判所ノ指定

第四節　裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第五節　裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第六節　檢事ノ立會

第二章　當事者

第一節　訴訟能力

第二節　共同訴訟人

第三節　第三者ノ訴訟參加

第四節　訴訟代理人及ヒ輔佐人

第五節　訴訟費用

第六節　保證

第七節　訴訟上ノ救助

第三章　訴訟手續

第一節　口頭辯論及ヒ準備書面

第二節　送達

第三節　期日及ヒ期限

第四節　懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第五節　訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第二編　第一審ノ訴訟手續

第一章　地方裁判所ノ訴訟手續

第一節　判決前ノ訴訟手續

第二節　判決

第三節　闕席判決

第四節　計算事件、財產分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續

第五節　證據調ノ總則

第六節　人證

第七節　鑑定

第八節　書證

第九節　檢證

第十節　當事者本人ノ訊問

第十一節　證據保全

第二章　區裁判所ノ訴訟手續

第一節　通常ノ訴訟手續

第二節　督促手續

第三編　上訴

第一章　控訴

第二章　上告

第三章　抗告

第四編　再審

第五編　證書訴訟又ヒ爲替訴訟

第六編　強制執行

第一章　總則

第二章　金錢ノ債權ニ付テノ強制執行

第一節　動產ニ對スル強制執行

第一款　通則

第二款　有體動產ニ對スル強制執行

第三款　債權及ヒ他ノ財產權ニ對スル強制執行

第四款　配當手續

第二節　不動產ニ對スル強制執行

第一款　通則

第二款　強制競賣

第三款　強制管理

第三節　船舶ニ對スル強制執行

第三章　金錢ノ支拂ヲ目的トセサル債權ニ付テノ強制執行

第四章　假差押及ヒ假處分

第七編　公示催促手續

第八編　仲裁手續

民事訴訟法

第一編　總則

第一章　裁判所

第一節　裁判所ノ事物ノ管轄

第一條　裁判所ノ事物ノ管轄ハ裁判所構成法ノ規定ニ從フ

第二條　訴訟物ノ價額ニ依リ管轄ノ定マルトキニ以下數條ノ規定ニ從フ

第三條　訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於ケル價額ニ依リ之ヲ算定ス果實、損害賠償及ヒ訴訟費用ハ法律上相牽連スル主タル請求ニ附帶シ一ノ訴ヲ以テ請求スルトキハ之ヲ算入セス

第四條　一ノ訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲ストキハ前條第二項ニ揭ケルモノヲ除ク外其額ヲ合算ス

本訴ト反訴トノ訴訟物ノ價額ハ之ヲ合算セス

第五條　訴訟物ノ價額ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ定ム

第一　債權ノ擔保又ハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權カ訴訟物ナルトキハ其債權ノ額ニ依ル但物權ノ目的物ノ價額寡キトキハ其額ニ依ル

第二　地役カ訴訟物ナルトキハ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ニ依ル但地役ノ爲メ承役地ノ價額ノ減シタル額カ要役地ノ地役ニ依リ得ル所ノ價額ヨリ多キトキハ其減額ニ依ル

第三　賃貸借又ハ永貸借ノ契約ノ有無又ハ其時期カ訴訟物ナルトキハ爭アル時期ニ當ル借賃ノ額ニ依ル但一箇年借賃ノ二十倍ノ額カ右ノ額ヨリ寡キトキハ其二十倍ノ額ニ依ル

第四　定時ノ供給又ハ收益ニ付テノ權利カ訴訟物ナルトキハ一箇年收入ノ二十倍ノ額ニ依ル但收入權ノ期限定マリタルモノニ付テハ其將來ノ收入ノ總額カ

二十倍ノ額ヨリ寡キトキハ其額ニ依ル

第六條　訴訟物ノ價額ハ必要ナル場合ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

裁判所ハ申立ニ因リ證據調ヲ命シ又ハ職權ヲ以テ檢證若クハ鑑定ヲ命スルコトヲ得

第七條　地方裁判所ノ判決ニ對シテハ其事件カ區裁判所ノ事物ノ管轄ニ屬スヘキ理由ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第八條　事物ノ管轄ニ付キ區裁判所又ハ地方裁判所カ管轄違ナリト宣言シ其裁判確定シタルトキハ此裁判ハ後ニ其事件ノ繫屬スヘキ裁判所ヲ羈束ス

第九條　地方裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ原告ノ申立ニ因リ同時ニ判決ヲ以テ原告ノ指定シタル自己ノ管轄內ノ區裁判所ニ其訴訟ヲ移送ス可シ

區裁判所カ事物ノ管轄違ナリトシテ訴ヲ却下スルトキハ同時ニ判決ヲ以テ其訴訟ヲ所屬ノ地方裁判所ニ移送ス可シ

移送ノ申立ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ

移送言渡ノ判決確定シタルトキハ其訴訟ハ移送ヲ受ケタル裁判所ニ繫屬スルモノト看做ス

第二節　裁判所ノ土地ノ管轄（裁判籍）

第十條　人ノ普通裁判籍ハ其住所ニ依リテ定マル

普通裁判籍アル地ノ裁判所ハ其人ニ對スル總テノ訴ニ付キ管轄ヲ有ス但訴ニ付キ專屬裁判籍ヲ定メサル場合ニ限ル

第十一條　軍人、軍屬ハ裁判籍ニ付テハ兵營地若クハ軍艦定繫所ヲ以テ住所トス但此規定ハ豫備、後備ノ軍籍ニ在ル者及ヒ兵役義務履行ノ爲メノミニ服從スル軍人、軍屬ニ之ヲ適用セス

第十二條　外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏并ニ其家族、從者ノ裁判籍上ノ住所ハ本邦ニ於テハ第三條乃至第五條ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ定ム

住所ナリトス此住所ナキモノニ付テハ司法大臣ノ命令ヲ以テ豫メ定メタル東京內ノ區ヲ以テ其住所ナリトス

第十三條　內國ニ住所ヲ有セサル者ノ普通裁判籍ハ本人ノ現在地ニ依リテ定マル若シ其現在地ノ知レサルカ又ハ外國ニ在ルトキハ其最後ニ有セシ內國ノ住所ニ依リテ定マル

然レトモ外國ニ住所ヲ有スル者ニ對シテハ內國ニ於テ生シタル權利關係ニ限リ前項ノ裁判籍ニ於テ訴ヲ起スコトヲ得

第十四條　國ノ普通裁判籍ハ訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ所在地ニ依リテ定マル但訴訟ニ付キ國ヲ代表スル官廳ノ規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘラルヽコトヲ得ル會社其他ノ社團又ハ財團ノ普通裁判籍ハ其所在地ニ依リテ定マル此所在地ハ別段ノ定ナキトキハ事務所所在ノ地トス若シ事務所ナキトキ又ハ數所ニ於テ事務ヲ取扱フトキハ其首長又ハ事務擔當者ノ住所ヲ以テ事務所ト看做ス

第十五條　生徒、屆人、營業使用人、職工、習業者其他性質上一定ノ地ニ永ク寓在スル者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其現在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

兵役義務履行ノ爲メノミニ服從スル軍人、軍屬ニ對シテハ其ノ兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ前項ノ訴ヲ起スコトヲ得

第十六條　製造、商業其他ノ營業ニ付キ直接ニ取引ヲ爲ス店舖ヲ有スル者ニ對シテハ其店舖所在地ノ裁判所ニ營業上ニ關スル訴ヲ起スコトヲ得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用逃物アル地所ヲ利用スル所有者、用益者又ハ賃借人ニ對スル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴ハ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

第十七條　內國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財產又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

債權ニ付テハ債務者（第三債務者）ノ住所ヲ以テ其財產ノ所在地トス又債權ニ付キ物カ擔保ノ實ヲ負フトキハ其物ノ所在地ヲ以テ財產ノ所在地トス

第十八條　契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ銷除、廢罷、解除又ハ其不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第十九條　會社其他ノ社團ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十條　不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行爲ノ有リタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十一條　辨護士又ハ執達吏ノ手數料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ハラス本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十二條　不動產ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動產上ノ訴殊ニ本權並ニ占有ノ訴及ヒ分割並ニ經界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス

地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス

第二十三條　不動產上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動產上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ得

不動產上ノ裁判籍ニ於テハ不動產ノ所有者若クハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動產ニ加ヘタル損害ノ訴ヲ起スコトヲ得

第二十四條　相續權、遺贈其他死亡ニ因リテ效果ヲ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スコトヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ其裁判所ノ管轄區內ニ存在スルトキニ限ル

第二十五條　第二十二條ノ規定ヲ除クノ外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

第三節　管轄裁判所ノ指定

第二十六條　管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外尙ホ不動產上ノ裁判籍ニ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ不動產カ數箇ノ裁判所ノ管轄區內ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲ス

第二十七條　管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其ノ決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第二十八條　管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス

管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコト

スル訴ヲ起スコトヲ得

前項ノ裁判籍ハ住家及ヒ農業用逃物アル地所ヲ利用スル所有者、用益者又ハ賃借人ニ對スル訴ニ付テモ亦之ヲ適用ス但此訴ハ地所ノ利用ニ付テノ權利關係ヲ有スルトキニ限ル

第十七條　內國ニ住所ヲ有セサル債務者ニ對スル財產權上ノ請求ニ付テノ訴ハ其財產又ハ訴ヲ爲シテ請求スル物ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

債權ニ付テハ債務者（第三債務者）ノ住所ヲ以テ其財產ノ所在地トス又債權ニ付キ物カ擔保ノ實ヲ負フトキハ其物ノ所在地ヲ以テ財產ノ所在地トス

第十八條　契約ノ成立若クハ不成立ノ確定又ハ其履行若クハ銷除、廢罷、解除又ハ其不履行若クハ不十分ノ履行ニ關スル賠償ノ訴ハ其訴訟ニ係ル義務ヲ履行ス可キ地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第十九條　會社其他ノ社團ノ社團ヨリ社員ニ對シ又ハ社員ヨリ社員ニ對シ其社員タル資格ニ基ク請求ノ訴ハ其會社其他ノ社團ノ普通裁判籍アル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十條　不正ノ損害ノ訴ハ責任者ニ對シ其行爲ノ有リタル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十一條　辨護士又ハ執達吏ノ手數料及ヒ立替金ニ付キ其委任者ニ對スル訴ハ訴訟物ノ價額ノ多寡ニ拘ハラス本訴訟ノ第一審裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

第二十二條　不動產ニ付テハ其所在地ノ裁判所ハ總テ不動產上ノ訴殊ニ本權並ニ占有ノ訴及ヒ分割並ニ經界ノ訴ヲ專ラニ管轄ス

地役ニ付テノ訴ハ承役地所在地ノ裁判所專ラニ之ヲ管轄ス

第二十三條　不動產上ノ裁判籍ニ於テハ債權ノ擔保ヲ爲ス從タル物權ニ基ク不動產上ノ訴ニ附帶シテ同一被告ニ對スル債權ノ訴ヲ起スコトヲ得

不動產上ノ裁判籍ニ於テハ不動產ノ所有者若クハ占有者ニ對スル人權ノ訴又ハ不動產ニ加ヘタル損害ノ訴ヲ起スコトヲ得

第二十四條　相續權、遺贈其他死亡ニ因リテ效果ヲ生スル處分ニ基ク請求ノ訴ハ遺產者死亡ノ時普通裁判籍ヲ有セシ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

相續裁判籍ニ於テハ遺產債權者ヨリ遺產者又ハ相續人ニ對スル請求ノ訴ヲ起スコトヲ得但遺產ノ全部又ハ一分カ其裁判所ノ管轄區內ニ存在スルトキニ限ル

第二十五條　第二十二條ノ規定ヲ除クノ外原告ハ數箇ノ管轄裁判所ノ中ニ就キ選擇ヲ爲スコトヲ得

第三節　管轄裁判所ノ指定

第二十六條　管轄裁判所ノ指定ハ裁判所構成法ニ定メタル場合ノ外尙ホ不動產上ノ裁判籍ニ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ不動產カ數箇ノ裁判所ノ管轄區內ニ散在スルトキモ亦之ヲ爲スコト

第二十七條　管轄裁判所ノ指定ニ付キ申請ヲ爲ス場合及ヒ其ノ決定ヲ爲ス裁判所ハ裁判所構成法第十條ノ規定ニ從フ

第二十八條　管轄裁判所ノ指定ニ付テノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ其申請ニ付キ管轄權ヲ有スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

右裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ其申請ヲ決定ス

管轄裁判所ヲ定メタル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコト

ヲ得ス

第四節　裁判所ノ管轄ニ付テノ合意

第二十九條　第一審裁判所ハ當然管轄權ヲ有セサルモ當事者ノ合意ニ因リ管轄權ヲ有スル但書面ヲ以テ合意ヲ爲シ且其合意カ一定ノ權利關係及ヒ其權利關係ヨリ生スル訴訟ニ係ルトキニ限ル

第三十條　被告カ管轄違ノ申立ヲ爲サシテ本案ノ口頭辯論ヲ爲ストキハ亦前條ト同一ノ効力ヲ生ス

第三十一條　左ノ場合ニ於テハ第二十九條及ヒ第三十條ノ規定ヲ適用セス

第一　財産權上ノ請求ニ非サル訴訟ニ係ルトキ

第二　專屬管轄ニ屬スル訴ナルトキ

第五節　裁判所職員ノ除斥及ヒ忌避

第三十二條　判事ハ左ノ場合ニ於テ法律ニ依リ其職務ノ執行ヨリ除斥セラルヘシ

第一　判事又ハ其妻カ原告若クハ被告タルトキ又ハ訴訟ニ係ル請求ニ付キ當事者ノ一方若クハ雙方ト共同權利者、共同義務者若クハ償還義務者タル關係ヲ有スルトキ

第二　判事又ハ其妻カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第三　判事カ同一ノ事件ニ付キ證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ又ハ訴訟代理人タル任ヲ受クルトキ若クハ受ケタルトキ又ハ法律上代理人タル權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有シタルトキ

第四　判事カ不服ノ申立アル裁判ヲ前審又ハ仲裁ニ於テ爲スニ當リ判事又ハ仲裁人トシテ干與シタルトキ但此場合ニ於テ判事ハ受命判事又ハ受託判事トシテハ職務ノ執行ヨリ除斥セラルルコト無シ

第三十三條　判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルルトキ及ヒ偏頗ノ恐アルトキハ總テノ場合ニ於テ各當事者ヨリ之ヲ忌避スルコトヲ得

偏頗ノ忌避ハ判事ノ不公平ナル裁判ヲ爲スコトヲ疑フニ足ル可キ事情アルトキ之ヲ爲スコトヲ得

第三十四條　判事カ法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラルル場合ニ於ケル判事ノ忌避ハ其ノ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス之ヲ爲スコトヲ得

偏頗ノ恐アル場合ニ於テハ原告若クハ被告其覺知シタル忌避ノ原因ヲ主張セスシテ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後ハ其判事ヲ忌避スルコトヲ得ス

第三十五條　忌避ノ申請ハ判事所屬ノ裁判所ニ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコト得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明スルコトヲ要ス忌避セラレタル判事ノ職務上ノ陳述ハ其疏明ノ用ニ充ツルコトヲ得

原告若クハ被告カ判事ノ面前ニ於テ申立ヲ爲シ又ハ相手方ノ申立ニ對シ陳述ヲ爲シタル後其判事ニ對シ偏頗ノ忌避ヲ爲ストキハ忌避ノ原因其後ニ生シ又ハ之ヲ其後ニ覺知シタルコトヲ疏明ス可シ

第三十六條　忌避セラレタル判事合議裁判所ニ屬スルトキハ其裁判所忌避ノ申請ヲ裁判ス但忌避セラレタル判事ハ其裁

判ニ參與スルコトヲ得

若シ其裁判所右判事ノ退去ニ因リ決定ヲ爲スコト能ハサルトキハ直近上級ノ裁判所其申請ヲ裁判ス

區裁判所判事忌避セラレタルトキハ上級ノ地方裁判所其申請ヲ裁判ス若シ區裁判所判事カ忌避ノ申請ヲ正當ナリト爲ストキハ裁判ヲ要セス

第三十七條　忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得忌避セラレタル判事ハ先ツ申請ノ理由ニ付キ職務上意見ヲ述フ可シ

第三十八條　忌避ノ申請ヲ正當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス其申請ヲ不當ナリト宣言スル決定ニ對シテハ即事抗告ヲ爲スコトヲ得

第三十九條　忌避セラレタル判事ハ忌避申請ノ完結スルマテ總テノ行爲ヲ避ク可シ然レトモ偏頗ノ爲ニ忌避セラレタル判事ハ猶職ヲ可カラサル行爲ヲ爲ス可シ

第四十條　忌避申請ノ管轄裁判所ハ其申請アラサルモ忌避ノ原因タル事情ニ付キ判事ヨリ申出アルト又ハ他ノ事由ヨリシテ判事カ法律ニ依リ除斥セラルヘキヿ疑アルトキモ亦裁判ヲ爲ス

此裁判ハ豫メ當事者ヲ審訊セスシテ之ヲ爲ス又其裁判ハ之ヲ當事者ニ送達スルコトヲ要セス

第四十一條　本節ノ規定ハ裁判所書記ニモ之ヲ準用ス但其裁判ハ書記所屬ノ裁判所之ニ爲ス

第六節　檢事ノ立會

第四十二條　檢事ハ左ノ訴訟ニ付キ意見ヲ述フル爲メ其口頭辯論ニ立會フ可シ

第一　公ノ法人ニ關スル訴訟

第二　婚姻ニ關スル訴訟

第三　夫婦間ノ財産ニ關スル訴訟

第四　親子若クハ養親子ノ分限其他總テ人ノ分限ニ關スル訴訟

第五　無能力者ニ關スル訴訟

第六　養料ニ關スル訴訟

第七　失踪者及ヒ相續人廢缺ノ遺産ニ關スル訴訟

第八　證書ノ僞造若クハ變造ノ訴訟

第九　再審

檢事ノ陳述ハ當事者ノ辯論終リタルトキ之ヲ爲ス

當事者ハ檢事ノ意見ニ對シ事實ノ更正ノミニ付キ陳述ヲ爲スコトヲ得

第二章　當事者

第一節　訴訟能力

第四十三條　原告若クハ被告カ自ラ訴訟ヲ爲シ又ハ訴訟代理人ヲシテ之ヲ爲サシムル能力ト法律上代理人ニ依レル訴訟無能力者ノ代表ト法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ又ハ一ノ訴訟行爲ヲ爲スニ付テノ特別授權ノ必要トハ民法ノ規定ニ從フ

第四十四條　外國人ハ自國ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有セサルモ本邦ノ法律ニ從ヒ訴訟能力ヲ有スルモノナルトキハ之ヲ有スルモノト見做ス

第四十五條　裁判所ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス職權ヲ以テ訴訟能力、法律上代理人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠缺ナキヤ否ヤヲ調査ス可シ

裁判所ハ遲滯ノ爲メ原告若クハ被告ニ危害アリ且其欠缺ノ

補正ヲ爲シ得ルモノト認ムルトキハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人ニ其欠缺ノ補正ヲ爲ス條件ヲ以テ一時訴訟ヲ停ス事ヲ得此場合ニ於テ裁判所ハ欠缺補正ノ爲メ相當ノ期間ヲ定メ其期間ノ滿了前ニ判決ヲ爲スコトヲ得ス但其欠缺ノ補正ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

第四十六條　訴訟無能力者又ハ相續人ノ未定ノ遺産又ハ不分明ナル相續人ニ對シ訴ヲ起ス可キ場合ニ於テ法律上代理人アラサルトキハ其事件ノ繼續ス可キ裁判所ノ裁判長ハ申立ニ因リ遲滯ノ爲ニ危害ノ恐アル場合ニ限リ特別代理人ヲ任ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ其裁判ハ申請人ニ之ヲ送達シ又申請ヲ認許シタルトキハ其任セラレタル特別代理人ニモ亦之ヲ送達ス可シ

申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

裁判長ヨリ任セラレタル特別代理人ハ法律上代理人又ハ相續人ノ出頭スルマテ訴訟行爲ニ付キ法律上代理人ノ權利及ヒ義務ヲ有ス

第四十七條　第十五條ニ揭ケタル場合ニ於テ訴訟無能力者カ其現在地又ハ兵營地若クハ軍艦定繫所ノ裁判所ニ訴ヲ受ケ可キ場合ニ於テ其法律上代理人他ノ地ニ住スルトキハ遲滯ノ爲メ危害ナシト雖モ前條ノ規定ニ從ヒ特別代理人ヲ任スルコトヲ得

此他裁判ニ對シ抗告ヲ許ス規定ヲ除ク外總テ前條ノ規程ヲ適用ス

第二節　共同訴訟人

第四十八條　左ノ場合ニ於テハ共同訴訟人トシテ數人カ共ニ訴ヲ爲シ又ハ訴ヲ受クルコトヲ得

第一　數人カ訴訟物ニ付キ權利共通若クハ義務共通ノ地位ニ立ツトキ

第二　同一ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第三　性質ニ於テ同種類ナル事實上及ヒ法律上ノ原因ニ基ク同種類ナル請求又ハ義務カ訴訟ノ目的物タルトキ

第四十九條　共同訴訟人ハ其資格ニ於テ各別ニ相手方ニ對立シ其一人ノ訴訟行爲及ヒ懈怠又ハ相手方ヨリ其一人ニ對スル訴訟行爲及ヒ懈怠ハ他ノ共同訴訟人ニ利害ヲ及ホサス

第五十條　然レトモ總テノ共同訴訟人ニ對シ訴訟ニ係ル權利關係カ合一ニノミ確定スヘキトキニ限リ左ノ規定ヲ適用ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノ攻擊及ヒ防禦ノ方法（證據方法ヲ包含ス）ハ他ノ共同訴訟人ノ利益ニ於テノ効ヲ生ス

共同訴訟人中ノ或ル人カ爭ヒ又ハ認諾セサルトキト雖モ總テノ共同訴訟人カ悉ク爭ヒ又ハ認諾セサルモノト看做ス

共同訴訟人中ノ或ル人ノミカ期日又ハ期間ヲ懈怠シタルトキハ其懈怠シタル者ハ代理ヲ任シタルモノト看做ス

然レトモ懈怠シタル共同訴訟人ニハ其懈怠セサリシ場合ニ於テ爲スヘキ總テノ送達及ヒ呼出ヲ爲スコトヲ要ス其懈怠シタル共同訴訟人ハ何時タリトモ其後ノ訴訟手續ニ再ヒ加

ハルコトヲ得

第三節　第三者ノ訴訟參加

第五十一條　他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ノ目的物ノ全部又ハ一分ヲ自己ノ爲ニ請求スル第三者ハ本訴訟ノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ其訴訟カ第一審ニ於テ繫屬シタル裁判所ニ當事者雙方ニ對スル訴（主參加）ヲ爲シテ其請求ヲ主張スルコトヲ得

第三者カ原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ自己ノ債權ニ損害ヲ生スルコトヲ主張スルトキモ亦同シ

第五十二條　本訴訟カ第一審ニ繫屬スルト上級審ニ繫屬スルトヲ問ハス原告、被告若クハ主參加人ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ主參加ニ付テノ權利拘束ノ終ニ至ルマテ之ヲ中止スルコトヲ得

中止ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

中止ヲ命スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五十三條　他人ノ間ニ權利拘束ト爲リタル訴訟ニ於テ其一方ノ勝訴ニ依リ權利上利害ノ關係ヲ有スル者ハ訴訟ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス權利拘束ノ繼續スル間ハ其一方ヲ補助（從參加）スル爲メ之ニ附隨スルコトヲ得

第五十四條　從參加人ハ其附隨スル時ニ於ケル訴訟ノ程度ヲ妨ケサル限リハ其主タル原告若クハ被告ノ爲ニ攻擊及ヒ防禦ノ方法ヲ施用シ且總テノ訴訟行爲ヲ有効ニ行ヒ殊ニ主タル原告若クハ被告ノ爲ニ存スル期間內ニ故障、支拂命令ニ對スル異議又ハ上訴ヲ爲ス權利ヲ有ス

從參加人ノ陳述及ヒ行爲ト主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ト相牴觸スル場合ニ於テハ主タル原告若クハ被告ノ陳述及ヒ行爲ヲ以テ標準ト爲ス但民法ニ於テ此ニ異ナル規定アルトキハ此限ニ在ラス

第五十五條　從參加人ハ訴訟ヨリ脫退シタルトキト雖モ其補助シタル原告若クハ被告トノ關係ニ於テハ其訴訟ノ確定裁判ヲ不當ナリト主張スルコトヲ得ス

從參加人ハ其ノ附隨ノ時ノ訴訟ノ程度ニ因リ又ハ主タル原告若クハ被告ノ所爲ニ因リ攻擊及ヒ防禦ノ方法ヲ施用スルコトヲ妨ケラルルトキ又ハ主タル原告若クハ被告カ從參加人ノ當時知ラサリシ攻擊及ヒ防禦ノ方法ヲ故意又ハ重過失ニ因リ施行セサリシトキニ限リ其補助シタル原告若クハ被告カ訴訟ヲ不十分ニ爲シタリト主張スルコトヲ得

第五十六條　從參加ハ本訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ申請ヲ以テ之ヲ爲ス可シ申請ニハ當事者及ヒ訴訟ヲ表示シ又一定ノ利害關係及ヒ附隨セシトスル陳述ヲ開示ス可シ

申請ハ當事者ニ之ヲ送達ス可シ

從參加ハ故障、異議又ハ上訴ト併合シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五十七條　原告若クハ被告カ從參加ニ付キ異議ヲ述フルトキハ當事者及ヒ從參加人ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ參加ノ許否ヲ裁判ス其裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

利害關係ノ存否ニ付キ爭アルトキハ從參加人其關係ヲ疏明スルノミヲ以テ參加ヲ許スニ足ル

右ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

參加ヲ許サヽル裁判確定セサル間ハ從參加人ヲ本訴訟ニ立

會ハシメ殊ニ總テノ期日ニ之ヲ呼出シ又本訴訟ニ關係アル裁判ヲ爲シタルトキハ從參加人ニ其裁判ヲ送達ス可シ

第五十八條　從參加人ハ常事者雙方ノ承諾ヲ得テ其附隨シタル原告若クハ被告ニ代リ訴訟ヲ擔任スルコトヲ得此場合ニ於テハ其原告若クハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴訟ヨリ其原告若クハ被告ヲ脫退セシムル可シ

第五十九條　原告若クハ被告若シ敗訴スルトキハ第三者ニ對シ擔保又ハ賠償ノ請求ヲ爲シ得ヘシト信シ又ハ第三者ヨリ請求ヲ受ク可キコトヲ恐ルル場合ニ於テハ訴訟ノ權利拘束間第三者ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

訴訟ノ告知ヲ受ケタル者ハ更ニ訴訟ヲ告知スルコトヲ得

第六十條　訴訟告知ハ訴訟ノ繫屬スル裁判所ニ其訴訟告知ノ理由及ヒ訴訟ノ程度ヲ記載シタル書面ヲ提出シテ之ヲ爲ス可シ

此書面ハ第三者ニ送達スルコトヲ要ス又訴訟ヲ告知スル原告若クハ被告ノ相手方ニハ其謄本ヲ送付ス可シ

第六十一條　訴訟ハ訴訟告知ニ拘ハラス之ヲ續行ス

第三者參加ス可キコトヲ陳述スルトキハ從參加ノ規定ヲ適用ス

第六十二條　第三者ノ名ヲ以テ物ヲ占有スルコトヲ主張スル者其物ノ占有者トシテ被告ト爲リタルトキハ本案ノ辯論前第三者ヲ指名シ之ニ訴訟ヲ爲サシムル爲メ其呼出ヲ求ムルトキハ第三者ノ陳述ヲ爲シ又ハ之ヲ爲ス可キ期日マテ本案ノ辯論ヲ拒ムコトヲ得

第三者カ被告ノ主張ヲ爭フトキ又ハ陳述ヲ爲ササルトキハ被告ハ原告ノ申立ニ應スルコトヲ得

第三者カ訴訟ヲ引受クルトキハ裁判所ハ被告ノ申立ニ因リ其被告カ訴訟ヨリ脫退セシムル可シ其物ニ付テノ裁判ハ被告ニ對シテモ効力ヲ有シ且之ヲ執行スルコトヲ得

第四節　訴訟代理人及ヒ補佐人

第六十三條　原告若クハ被告自ラ訴訟ヲ爲ササルトキハ辯護士ヲ以テ訴訟代理人トシ之ヲ爲ス

辯護士ノ在ラサル場合ニ於テハ訴訟能力者タル親族若クハ屬人ヲ以テ訴訟代理人ト爲シ若シ此等ノ者ノ在ラサルトキハ他訴訟能力者ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

區裁判所ニ於テハ辯護士ノ在ルトキト雖モ訴訟能力者タル親族若クハ屬人ヲ以テ訴訟代理人ト爲スコトヲ得

第六十四條　訴訟委任ハ裁判所ノ記錄ニ備フ可キ書面ヲ以テ之ヲ證ス可シ

私署證書ハ相手方ノ求ニ因リ之ヲ認證ス可シ其認證ハ公證人之ヲ爲シ又相當官吏之ヲ爲スコトヲ得

口頭辯論ノ期日又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ口頭委任ヲ爲シ其陳述ヲ調書ニ記載セシムルトキハ書面委任ト同一ナリトス

第六十五條　訴訟委任ハ反訴、主參加、故障、假差押若クハ假處分又ハ强制執行ニ因リ生スル訴訟行爲ヲ併セ訴訟ニ關スル總テノ訴訟行爲ヲ爲シ及ヒ相手方ヨリ辨濟スル費用ノ領收ヲ爲ス權ヲ授與ス訴訟代理人ハ特別ノ委任ヲ受クルニ非サレハ控訴若クハ上告ヲ爲シ、再審ヲ求メ、代人ヲ任シ、和解ヲ爲シ、訴訟物ヲ拋棄シ又ハ相手方ヨリ主張シタル請求ヲ認諾

スル權ヲ有セス

第六十六條　訴訟委任ハ法律上ノ範圍（第六十五條第一項ヲ制限スルモ其制限ハ相手方ニ對シ効力ナシ

然レトモ辯護士ニ依レル代理ヲ除クノ外ハ各箇ノ訴訟行爲ニ付キ委任ヲ爲スコトヲ得

第六十七條　訴訟代理人數人アルトキハ共同若クハ各別ニ其代理スルコトヲ得但委任ニ之ト異ナル定アルモ相手方ニ對シ其効力ナシ

第六十八條　訴訟代理人カ委任ノ範圍內ニ於テ爲シタル訴訟上ノ行爲及ヒ不行爲ハ原告若クハ被告ニ對シテハ其本人ノ行爲又ハ不行爲ト同一ナリトス

然レトモ代理人ノ事實上ノ陳述ハ其代理人ト共ニ裁判所ニ出頭シタル原告若クハ被告ヨリ即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正シタルトキニ限リ其効力ヲ失フ

第六十九條　委任者ノ死亡、訴訟能力若クハ法律上代理ノ變更委任ノ廢罷及ヒ代理ノ辭絕ニ因ル委任ノ消滅ヲ通知スルマテ相手方ニ對シ其効力ナシ

此通知書ハ原告若クハ被告ヨリ受訴裁判所ニ之ヲ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

代理人ハ辭絕ヲ爲スモ委任者他ノ方法ヲ以テ自己ノ權利ノ防衞ヲ爲ササル間ハ其委任者ノ爲メニ行爲ヲ爲スコトヲ得

第七十條　委任ノ欠缺ハ原告若クハ被告ノ爲メ其代理人ナキモノト看做ス

裁判所ハ職權ヲ以テ委任ノ欠缺ヲ調査シ委任ナク又ハ適式ノ委任ナク代理人トシテ出頭スル者ニ事情ニ從ヒ費用及ヒ損害ノ保證ヲ立テシメ又ハ之ヲ立テシメスシテ假ニ訴訟ヲ爲スヲ許スコトヲ得判決ハ欠缺ヲ補正シ又ハ之ヲ補正スル爲メ裁判所ノ適宜ニ定ムル期間ノ滿了後ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得但欠缺ノ補正ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結マテ之ヲ追完スルコトヲ得

第七十一條　原告若クハ被告ハ辯護士ヲ補佐人ト爲シ又ハ何時ニテモ裁判所ノ取消シ得ヘキ許可ヲ得テ他ノ訴訟能力者ヲ補佐人ト爲シテ共ニ出頭スルコトヲ得其補佐人ハ口頭辯論ニ於テ權利ヲ伸張シ又ハ防禦スル爲メ原告若クハ被告ヲ補助スルモノトス

補佐人ノ演述ハ原告若クハ被告即時ニ之ヲ取消シ又ハ更正セサルトキニ限リ原告若クハ被告自ラ演述シタルモノト看做ス

第五節　訴訟費用

第七十二條　敗訴ノ原告若クハ被告ハ訴訟ノ費用ヲ負擔シ殊ニ訴訟ニ因リ生シタル費用ヲ相手方ニ辨濟スル可シ但其費用ハ裁判所ノ意見ニ於テ相當ナル權利伸張又ハ權利防禦ニ必要ナリト認ムルモノニ限ル

訴訟中ニ訴ヲ取下ケ、請求ヲ拋棄シ又ハ相手方ノ請求ヲ認諾スル原告若クハ被告ハ敗訴ノ原告若クハ被告ニ同シ

第七十三條　當事者ノ各方一分ハ勝訴ト爲リ一分ハ敗訴ト爲ルトキハ其費用ヲ相消シ又ハ割合ヲ以テ之ヲ分擔ス可シ第一ノ場合ニ於テハ各當事者ハ其支出シタル費用ヲ自ラ負擔シ他ノ一方ニ對シ辨濟ヲ請求スルコトヲ得ス

然レトモ裁判所ハ相手方ノ要求格外ニ過分ナルニ非ス且別段ノ費用ヲ生セサリシトキ又ハ判事ノ意見、鑑定人ノ鑑定若クハ相互ノ計算ニ因リ要求額ヲ定ムルニ非サレハ容易ニ過分ノ要求ヲ避クルコトヲ得サリシトキハ當事者ノ一方ニ訴

訟費用ノ全部ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十四條　被告直チニ請求ヲ認諾シ且其作爲ニ因リ訴ヲ起スニ至ラシメタルニ非サルトキハ訴訟費用ハ原告ノ勝訴ト爲リタルニ拘ハラス其負擔ニ歸ス

第七十五條　期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ爲ニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滯ヲ生セシメタル原告若クハ被告ハ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラス此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔ス可シ

第七十六條　裁判所ハ無益ナル攻撃又ハ防禦ノ方法（證據方法ヲ包含ス）ヲ主張シタル原告若クハ被告ヲシテ本案ノ勝訴者ト爲リタルニ拘ハラス其方法ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十七條　無益ナル上訴又ハ取下クタル上訴ノ費用ハ之ヲ提出シタル原告若クハ被告ノ負擔ニ歸ス

第七十八條　上訴ニ因リ裁判ノ全部又ハ一分ヲ廢棄若クハ變更スルトキハ訴訟ノ總費用（上訴ノ費用ヲ包含ス）ノ裁判ハ本案ノ終局裁判ト併合シテ更ニ之ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告カ前審ニ於テ主張スルコトヲ得ヘカリシ事實又ハ攻撃若クハ防禦ノ方法ヲ新ニ提出スルニ因リ勝訴者ト爲ルトキハ其原告若クハ被告ニ上訴費用ノ全部又ハ一分ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七十九條　當事者カ訴訟物ニ付キ和解ヲ爲ストキハ其訴訟ノ費用及ヒ和解ノ費用ハ共ニ相消シタルモノト看做ス但當事者別段ノ合意ヲ爲シタルトキハ此限ニ在ラス

第八十條　法律ノ規定ニ從ヒ費用ニ付キ共同訴訟人ノ連帶義務ノ生セサルトキニ限リ其共同訴訟人ハ相手方ニ對シ平等ニ費用ヲ負擔ス然レトモ共同訴訟人ノ訴訟ニ於クル利害ノ關係著シク相異ナルトキハ裁判所ハ其利害關係ノ割合ニ從ヒ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

共同訴訟人中ノ或ル人カ特別ノ攻撃又ハ防禦ノ方法ヲ主張シタルトキハ他ノ共同訴訟人ハ此カ爲ニ生シタル費用ヲ負擔セス

第八十一條　從參加ニ對シ原告若クハ被告カ異議ヲ述フルトキハ其異議ノ決定ニ於テ從參加人ト其原告若クハ被告トノ中間訴訟ノ費用ニ付キ第七十二條乃至第七十八條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

從參加ヲ許シタルトキ又ハ異議ヲ述ヘサルトキハ本訴訟ノ判決ニ於テ從參加人ト相手方ナル原告若クハ被告トノ間ニ從參加ニ因リ生シタル費用ニ付テモ亦前數條ノ規定ニ從ヒテ裁判ヲ爲ス可シ

第八十二條　費用ノ點ニ限リタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス然レトモ本案ノ裁判ニ對シ許ス可キ上訴ヲ提出シ且追行スルトキニ限リ費用ノ點ニ付キ不服ヲ申立ツルコトヲ得

費用ノ點ニ限リタルトキト雖トモ相手方ヨリ提出シタル上訴ニ附帶スル場合ニ於テハ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第八十三條　裁判所書記、法律上代理人、辯護士其他ノ代理人及ヒ執達吏ノ過失又ハ懈怠ニ因リ費用ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其費用ノ辨濟ヲ負擔セシムル決定ヲ爲スコトヲ得但其決定前關係人ニ口頭又ハ書面ニテ陳辯ヲ爲ス機會ヲ與フ可シ

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十四條　辨濟ス可キ費用額ノ確定ハ申請ニ因リ訴訟ノ第一審ニ繫屬シタル裁判所ノ決定ヲ以テ之ヲ爲ス

申請ハ第七十二條第二項又ハ上訴取下ノ場合ヲ除ク外執行シ得ヘキ裁判ニ依ルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ニハ費用計算書、相手方ニ付與ス可キ計算書ノ謄本及ヒ各箇費用額ノ疏明ニ必要ナル證書ヲ添附ス可シ

第八十五條　費用額確定ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

裁判所ハ裁判所書記ニ費用計算書ノ計算上ノ檢査ヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ計算ヲ付與シテ裁判所ノ定ムル期間內ニ陳述ヲ爲ス可キ旨ヲ之ニ催告スルコトヲ得此決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第八十六條　當事者ハ訴訟費用ノ全部又ハ一分ヲ割合ニ從ヒ分擔ス可キトキハ裁判所ハ費用額確定ノ決定ヲ爲ス前相手方ニ裁判所ノ定ムル期間內ニ其費用ノ計算書ヲ差出ス可キ旨ヲ催告ス可シ此期間ヲ徒過シタル後ハ費用額確定ノ決定ハ相手方ノ費用ヲ過ミス之ヲ爲ス可シ但相手方ハ後ニ自己ノ費用ヲ以テ其費用額確定ノ申請ヲ爲ス妨ト爲ルコト無シ

第六節　保證

第八十七條　訴訟上ノ保證ハ當事者カ別段ノ合意ヲ爲ス場合又ハ此法律ニ於テ保證ヲ定ムルコトヲ裁判所ノ自由ナル意見ニ任スル場合ヲ除ク外裁判所ノ意見ニ於テ擔保ニ十分ナリトスル現金又ハ有價證券ヲ供託シテ之ヲ爲ス

第八十八條　原告又ハ原告ノ從參加人タル外國人ハ被告ニ對シ其求ニ因リ訴訟費用ニ付キ保證ヲ立ツ可シ

左ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツル義務ヲ生セス

第一　國際條約又ハ原告ノ屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人カ同一ノ場合ニ於テ保證ヲ立ツル義務ナキトキ

第二　反訴ノ場合

第三　證書訴訟及ヒ爲替訴訟ノ場合

第四　公示催告ニ基キ起シタル訴ノ場合

第八十九條　裁判所ハ前條第一項ノ場合ニ於テハ保證ヲ立ツ可キ數額ヲ確定ス可シ

此數額ヲ確定スルニハ被告ノ訴ヲ受ケタルカ爲メ各審級ニ於テ支出ス可キ訴訟費用ノ額ヲ標準ト爲ス可シ

訴訟中ニ保證ノ不足ヲ生シ且追增保證ヲ立ツ可キコトヲ被告カ求ムルトキハ前項ト同一ノ手續ニ依ル可シ但爭ナキ請求ノ部分カ擔保ニ十分ナルトキハ此限ニ在ラス

第九十條　裁判所ハ保證ヲ立ツ可キ期間ヲ定ム可シ

此期間ノ經過後裁判アルマテニ保證ヲ立テサル場合ニ於テハ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ訴ヲ取下ケタリト宣言シ又原告カ上訴ヲ爲シタルトキハ其上訴ヲ取下ケタリト宣言ス可シ

第七節　訴訟上ノ救助

第九十一條　何人ヲ問ハス自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害スルニ非サレハ訴訟費用ヲ出タスコト能ハサル者ハ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得但其目的トスル權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルトキニ限ル

第九十二條　外國人ハ國際條約又ハ其屬スル國ノ法律ニ依リ本邦人ガ同一ノ場合ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ求ムルコトヲ得ルトキニ限リ之ヲ求ムルコトヲ得

第九十三條　訴訟上救助ノ申請ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ且證據方法ヲ開示シテ其救助ヲ求ムル審級ノ裁判所ニ之ヲ提出ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

原告若クハ被告ハ申請ノ提出ト共ニ管轄市町村長ヨリ發シタル證書ヲ出ダスコトヲ要ス其證書ニハ原告若クハ被告ノ身分、職業、財產幷ニ家族ノ實況及ヒ其納ムヘキ直稅ノ額ヲ開示シテ訴訟費用支拂ノ無資力ヲ證ス可シ

第九十四條　訴訟上ノ救助ハ各審ニ於テ各別ニ之ヲ附與スル第一審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルモ之ヲ附與スルモノトス

前審ニ於テ訴訟上ノ救助ヲ受ケタルトキハ上級審ニ於テハ無資力ヲ證スルコトヲ要セス相手方上訴ヲ提出シタルトキハ上級審ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ求ムル原告若クハ被告ノ權利ノ伸張又ハ防禦ノ輕忽ナラス又ハ見込ナキニ非スト見ユルヤヲ調査スルコトヲ要セス

第九十五條　訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル條件ノ存セサリシトキ又ハ消滅シタルトキハ何時タリトモ之ヲ取消スコトヲ得

第九十六條　訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ死亡ト共ニ消滅ス

第九十七條　訴訟上ノ救助ハ之ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲ニ左ノ効力ヲ生ス

第一　裁判費用（國庫ノ立替金ヲ包含ス）ヲ辯濟スルコトノ假免除

第二　訴訟費用ノ保證ヲ立ツルコトノ免除

第三　送達及ヒ執行行爲ヲ爲サシムル爲メ一時無報酬ニテ執達吏ノ附添ヲ求ムル權利

受訴裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ一時無報酬ニテ辨護士ノ附添ヲ命スルコトヲ得

第九十八條　訴訟上ノ救助ハ相手方ニ生シタル費用ヲ辨濟スル義務ニ影響ヲ及ホサス

第九十九條　救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ノ爲メ假ニ濟清ヲ免除シタル裁判費用ハ訴訟費用ニ付キ確定裁判ヲ受ケタル相手方又ハ訴若クハ上訴ノ取下、拋棄、認諾若クハ和解ニ因リ訴訟費用ヲ負擔スル可キ相手方ヨリ之ヲ取立ツルコトヲ得

救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ニ附添ヒタル執達吏又ハ辯護士ハ同一ノ條件アルトキハ亦自己ノ權利ニ依リ費用確定ノ方法ヲ以テ其手數料及ヒ立替金ヲ取立ツルコトヲ得

第百條　救助ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ自己及ヒ其家族ノ必要ナル生活ヲ害セスシテ費用ノ濟清ヲ爲シ得ルニ至ルトキハ假免除ヲ得タル數額（第九十七條第一號）ヲ直チニ追拂ヒスル義務アリ

第百一條　裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後訴訟上救助ノ付與竝ニ辯護士附添ノ命令ニ付テノ申請、訴訟上救助ノ取消及ヒ數額追拂ノ義務ニ付キ決定ヲ爲ス

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第百二條　訴訟上ノ救助ヲ附與シ又ハ其取消ヲ拒ミ若クハ費用追拂ヲ命スルコトヲ拒ム決定ニ對シテハ檢事ニ限リ抗告ヲ爲スコトヲ得

辯護士ノ附添ヲ命スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

訴訟上ノ救助ヲ拒ミ若クハ取消シ又ハ辯護士ノ附添ヲ拒ミ又ハ費用ノ追拂ヲ命スル決定ニ對シテハ原告若クハ被告ハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三章　訴訟手續

第一節　口頭辯論及ヒ準備書面

第百三條　判決裁判所ニ於ケル訴訟ニ付テノ當事者ノ辯論ハ口頭ナリトス但此法律ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第百四條　口頭辯論ハ書面ヲ以テ之ヲ準備ス

第百五條　準備書面ニハ左ノ諸件ヲ揭ク可シ

第一　當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業、住所、裁判所、訴訟物及ヒ附屬書類ノ表示

第二　原告若クハ被告カ法廷ニ於テ爲サント欲スル申立

第三　申立ノ原因タル事實上ノ主張

第四　相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述

第五　原告若クハ被告カ事實上主張ノ證明又ハ攻撃ノ爲メ用ヰントスル證據方法及ヒ相手方ノ申出タル證據方法ニ對スル陳述

第六　原告若クハ被告又ハ其訴訟代理人ノ署名及ヒ捺印

第七　年月日

第百六條　準備書面ニ於テ提出ス可キ事實ハ簡明ニ之ヲ記載ス可シ此他事實上ノ關係ノ說明竝ニ法律上ノ討論ハ書面ニ之ヲ揭クルコトヲ得ス

第百七條　準備書面ニハ訴訟ヲ爲ス可キ資格ニ付テノ證書ノ原本、正本又ハ謄本其他總テ原告若クハ被告ノ手中ニ存スル證書ニシテ書面中ニ申立ノ原因トシテ引用シタルモノノ謄本ヲ添附ス可シ

證書ノ一部分ノミヲ要用トスルトキハ其ノ冒頭、事件ニ屬スル部分、終尾、日附、署名及ヒ印章ヲ謄寫シタル抄本ヲ添附スルヲ以テ足ル

證書カ既ニ相手方ニ知レタルトキ又ハ大部ナルトキハ其證書ヲ表示シ且相手方ニ之ヲ閱覽セシメント欲スル旨ヲ附記スルヲ以テ足ル

第百八條　當事者ハ準備書面及ヒ其附屬書類竝ニ相手方ニ付與スル爲メ必要ナル謄本ヲ裁判所書記課ニ差出ス可シ

第百九條　裁判長ハ口頭辯論ヲ開キ且之ヲ指揮ス

裁判長ハ發言ヲ許シ又其命ニ從ハサル者ニ發言ヲ禁スルコトヲ得

裁判長ハ事件ニ付十分ナル說明ヲ爲サシメ且間斷ナク辯論ノ終了スルコトニ注意ス又必要ナル場合ニ於テハ直チニ辯論續行ノ期日ヲ定ム

裁判所ニ於テ事件ニ付キ十分ナル說明ヲ爲セリト認ムルトキハ裁判長ハ口頭辯論ヲ閉チ及ヒ裁判所ノ判決竝ニ決定ヲ言渡ス

第百十條　口頭辯論ハ當事者ノ申立ヲ爲スニ因リテ始マル

當事者ノ演述ハ事實上及ヒ法律上ノ點ニ於ケル訴訟關係ヲ包括ス可シ

口頭演述ニ換ヘテ書類ヲ援用スルコトヲ許ス文字上ノ旨趣ヲ要用トスルトキハ其要用ナル部分ニ限リ之ヲ朗讀スル

コトヲ得

第百十一條　各當事者ハ相手方ノ主張シタル事實ニ對シ陳述ヲ爲ス可シ

明カニ爭ハサル事實ハ原告若クハ被告ノ他ノ陳述ヨリ之ヲ爭ハントスル意思カ顯レサルトキハ自白シタルモノト見做ス

不知ノ陳述ハ原告若クハ被告ノ自己ノ行爲ニ非ス又自己ノ實驗シタルモノニモ非サル事實ニ限リ之ヲ許ス此場合ニ於テ不知ヲ以テ答ヘタル事實ハ爭ヒタルモノト看做ス

第百十二條　裁判長ハ臨檢上調査ス可キ點ニ關シ相手方ヨリ起ササル疑ノ存スルトキハ其疑ニ付キ注意ヲ爲スコトヲ得」

裁判長ハ問ヲ發シテ不明瞭ナル申立ヲ釋明シ主張シタル事實ノ不十分ナル證明ヲ補充シ證據方法ヲ申出ヲ其他事件ノ關係ヲ定ムルニ必要ナル陳述ヲ爲サシムル可シ

陪席判事ハ裁判長ニ告クテ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ相手方ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得ス然レトモ其問ヲ發ス可キ旨ヲ裁判長ニ求ムルコトヲ得

若シ其問ニ對シテ答ヘス又ハ判然答ヘサルトキハ相手方ノ利益ト爲ル可キ答ヲ爲シタルモノト看做スコトヲ得

第百十三條　事件ノ指揮ニ關スル裁判長ノ命又ハ裁判長若クハ陪席判事ノ發シタル問ニ對スル辯論ニ與カル者ヨリ不適法ナリトシテ異議ヲ述ヘタルトキハ裁判所ハ其異議ニ付キ直チニ裁判ヲ爲ス

第百十四條　裁判所ハ事件ノ關係ヲ明瞭ナラシムル爲メ原告若クハ被告ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

第百十五條　裁判所ハ原告若クハ被告ノ援用シタル證書ニシテ其手中ニ存スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

裁判所ハ外國語ヲ以テ作リタル證書ニ付テハ其譯書ヲ添附ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十六條　裁判所ハ當事者ノ所持スル訴訟記錄ニシテ事件ノ辯論及ヒ裁判ニ關スルモノヲ提出ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十七條　裁判所ハ檢證及ヒ鑑定ヲ命スルコトヲ得

此手續ハ申立ニ因リ命スル檢證及ヒ鑑定ニ付テノ規定ニ從フ

第百十八條　裁判所ハ一箇ノ訴ニ於テ爲シタル數個ノ請求又ハ本訴及ヒ反訴ニ付テノ辯論ヲ分離シテ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第百十九條　同一ノ請求ニ關シ數個ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタルトキハ裁判所ハ先ツ辯論ヲ其一二ニ制限ス可キヲ命スルコトヲ得

第百二十條　裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數個ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノノ辯論及ヒ裁判ヲ併合ス可キヲ命スルコトヲ得但其訴訟ノ目的物タル請求ヲ元來一個ノ訴ニ於テ主張シ得ヘキトキニ限ル

第百二十一條　裁判所ハ訴訟ノ全部又ハ一分ノ裁判カ他ノ繫屬スル訴訟ニ於テ定マル可キ權利關係ノ成立又ハ不成立ニ繫ルトキハ他ノ訴訟ノ完結ニ至マテ辯論ヲ中止ス可シ

第百二十二條　裁判所ハ民事訴訟中斷ス可キ行爲ノ嫌疑生スルトキハ刑事訴訟手續ノ完結ニ至マテ辯論ヲ中止ス可シ但其斷ス可キ行爲カ訴訟ノ裁判ニ影響ヲ及ホストキニ限ル

第百二十三條　裁判所ハ分離若クハ併合ニ關シ發シタル命ヲ

取消スコトヲ得

第百二十四條　裁判所ハ閉チタル辯論ノ再開ヲ命スルコトヲ得

第百二十五條　裁判所ハ辯論ニ與カル者日本語ニ通セサルトキハ通事ヲ立會ハシムル但裁判所構成法第百十八條ノ場合ハ此限ニ在ラス

第百二十六條　裁判所ハ辯論ニ與カル者聾又ハ唖ナルトキ之ニ文字ヲ以テ理會セシムルコトヲ得サル場合ニ限リ通事ヲ立會ハシムルコトヲ得

第百二十七條　裁判所ハ相當ノ演述ヲ爲ス能力ノ缺クタル原告若クハ被告又ハ訴訟代理人若クハ輔佐人ニ其後ノ演述ヲ禁シ且新期日ヲ定メ辯護士ヲシテ演述セシムル可キコトヲ命ス可シ

裁判所ハ裁判所ニ於テ辯論ヲ棄トスル訴訟代理人若クハ輔佐人ヲ退斥セシムルコトヲ得此場合ニ於テハ新期日ヲ定メ且退斥ノ決定ヲ原告若クハ被告ニ送達ス可シ

本條ノ規定ニ從ヒ爲シタル命ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

辯護士ニハ本條ノ規定ヲ適用セス

第百二十八條　辯論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ辯論ノ場所ヨリ退斥セラレタルトキハ中立ニ因リ本人ノ任意ニ退去シタル同一ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得但裁判所構成法第百十條ニ依リ中止シタル場合ハ此限ニ在ラス

前條ノ場合ニ於テ禁止又ハ退斥ノ命ヲ受ケタル者再ヒ出頭スルトキハ前項ノ方法ヲ以テ之ヲ取扱フコトヲ得

第百二十九條　口頭辯論ニ付テハ調書ヲ作ル可シ

調書ニハ左ノ諸件ヲ揭ク可シ

第一　辯論ノ場所、年月日

第二　判事、裁判所書記及ヒ立會ヒタル檢事若クハ通事ノ氏名

第三　訴訟物及ヒ當事者ノ氏名

第四　出頭シタル當事者、法律上代理人、訴訟代理人及ヒ輔佐人ノ氏名若シ原告若クハ被告闕席シタルトキハ其闕席シタルコト

第五　公ニ辯論ヲ爲シ又ハ公開ヲ禁シタルコト

第百三十條　辯論ノ進行ニ付テハ其要領ノミヲ調書ニ記載ス可シ

調書ニ記載シテ明確ニス可キ諸件ハ左ノ如シ

第一　自白、認諾、拋棄及ヒ和解

第二　明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述

第三　證人及ヒ鑑定人ノ供述但其供述ハ以前聽カサルモノナルトキ又ハ以前ノ供述ニ異ナルトキニ限ル

第四　檢證ノ結果

第五　書面ニ作リ調書ニ添附セサル裁判（判決、決定及ヒ命令）

第六　裁判ノ言渡

附錄トシテ調書ニ添附シ且調書ニ附錄トシテ表示シタル書類ニ於テハ此限ニ在ラス

第百三十一條　前條第一號乃至第四號ニ揭ケタル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞カセ又ハ閱覽ノ爲メ之ヲ關係人ニ示ス

調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルコト及ヒ承諾ヲ爲シタルコ

ト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記ス可シ

第百三十二條　調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ

裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ニ代リ署名捺印ス區裁判所判事差支アルトキハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル

第百三十三條　受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事カ法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシム

前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス

第百三十四條　口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書ヲ以テノミ之ヲ證スルコトヲ得

第百三十五條　此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴、抗告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲シ又ハ證言ヲ拒ム場合ニ於テハ裁判所書記ハ、其調書ヲ作ル可シ

第二節　送達

第百三十六條　送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシムル裁判所書記ハ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キコトヲ囑托ス

裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ亦送達ヲ爲サシムルコトヲ得」

第二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人ヲ以下ニ規定スル送達吏ト爲ス

第百三十七條　送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルトキハ其正本又ハ其謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス

第百三十八條　訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ又ハ訴ヘラルルコトヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於テハ送達ハ其一人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

第百三十九條　豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍屬ニ對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス

第百四十條　囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス

第百四十一條　送達ハ財產權上ノ訴訟ニ付テハ總理代人ニ之ヲ爲シ又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲スヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ効力ヲ有ス

第百四十二條　訴訟代理人アルトキハ送達ハ其代理人委任ノ旨趣ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲ス權ヲ有スルトキニ限リ其代理人ニ之ヲ爲ス

然レトモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルトキト雖モ効力ヲ有ス

第百四十三條　受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ撰定シテ之ヲ届出ツ可シ

假住所撰定ノ届出ハ過トモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ

又其前ニ書面ヲ差出ストキハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏員交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲スコトヲ得此送達ハ其書類ノ原告若クハ被告ニ到達スルト否トヲ問ハス又何時ニ到達スルトヲ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第百四十四條　送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ其人カ其地ニ住居又ハ事務所ヲ有スルトキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサリシトキニ限リ効力ヲ有ス

第百四十五條　送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルトキハ其住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ其送達ハ交付ス可キ書類ヲ其地ノ市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作リ之ヲ住居ノ戸ニ貼附シ且近隣ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スコトヲ得

第百四十六條　住居ノ外ニ事務所ヲ有スル人ニ對スル送達ハ事務所ニ於テ之ニ出會ハサルトキハ其事務所ニ在ル營業使用人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ハ辨護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於テル送達ハ雇生ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第百四十七條　第百三十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ此等ノ者受取ニ付キ差支アルトキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得

第百四十八條　前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ第百四十五條第二項ニ準シ送達ヲ爲ス可シ但住居ニ於テル送達ヲ施行スルヲ得サルコトノ明白ナルトキニ限ル

前項ノ場合ニ於テハ送達告知書ノ貼附ハ事務所又ハ住居ノ戸ニ之ヲ爲ス

第百四十九條　法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムトキハ交付ス可キ書類ヲ送達ス可キ場所ニ差置ク可シ

第百五十條　日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲ス可キ送達ハ裁判官ノ許可ヲ得ルトキニ限リ之ヲ施行スルコトヲ得

前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除ク外ハ夜間ニ爲ス可キ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日沒ヨリ日出マテノ時間ヲ謂フ

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ

許可ノ命令ハ認證シタル謄本ヲ以テ送達ノ際之ヲ交付ス可シ

本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取リタルトキニ限リ効力ヲ有ス

第百五十一條　送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ場所、

年月日時、方法及ヒ受取人ノ受取證幷ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書ヲ作ルコトヲ要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取書ヲ出ダスコトヲ拒ミタルトキ又ハ受取證ヲ作ルコト能ハサル旨ヲ述フルトキハ之ヲ送達證書ニ記載スヘシ

第百四十三條　第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ報告書ヲ以テ之ヲ送達ノ證ト爲スニ足ル

第百五十二條　外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏竝ニ其家族從者ニ對スル送達ハ外務大臣ニ嘱託シテ之ヲ爲ス

第百五十三條　前條ノ場合ヲ除ク外外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ嘱託シテ之ヲ爲ス

第百五十四條　出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乘組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ嘱託シテ之ヲ爲スコトヲ得

第百五十五條　前三條ノ場合ニ於テ必要ナル嘱託書ハ受訴裁判所ノ裁判長之ヲ發ス

送達ハ嘱託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ノ送達施行濟ノ證書ヲ以テ之ヲ證ス

第百五十六條　原告若クハ被告ノ現在地知レサルトキ又ハ外國ニ於テ爲ス可キ送達ニ付テハ其規定ニ從フコト能ハス若クハ之ニ從フモ其効ナキコトヲ豫知スルトキハ其送達ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第百五十七條　公示送達ハ原告若クハ被告ノ申立ニ因リ裁判所ノ命ヲ以テ裁判所書記之ヲ取扱フ

此送達ハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ揭示板ニ貼附シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ其裁判ノ部分ノミヲ貼附ス可シ」

右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本ヲ一個又ハ數個ノ新聞紙ニ一回又ハ數回揭載ス可キヲ命スルコトヲ得其抄本ニハ裁判所當事者幷ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ揭クルコトヲ要ス

第百五十八條　公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四日ヲ經過シタル日ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス然レトモ裁判所ハ公示送達ヲ命スルニ際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルトキハ相當ナル期限ヲ定ムルコトヲ得

同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對シテ爲ス其後ノ公示送達ハ貼附ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第三節　期日及ヒ期間

第百五十九條　期日ハ裁判長日及ヒ時ヲ以テ定ム

第百六十條　期日ハ已ムヲ得サル場合ニ限リ日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニ之ヲ定ムルコトヲ得

第百六十一條　期日ニ付テノ呼出ハ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記正本ノ送達ヲ以テ之ヲ爲ス但在廷シタル者ニ期日ヲ定メ出頭ヲ命シタルトキハ之ヲ送達スルコトヲ要セス

第百六十二條　期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク但臨檢又ハ裁判所ニ出頭スルニ差支アル人ノ審問其他裁判所内ニ於テ爲スコトヲ得サル行爲ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第百六十三條　期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル

原告若クハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ爲ササルトキハ期日ヲ怠リタルモノト看做ス

第百六十四條　裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期限ノ進行ハ期間ヲ定メタル書類ノ送達ヲ以テ始マリ又其送達ヲ要セサル場

合ニ於テハ期間ノ言渡ヲ以テ始マル但期間指定ノ際此ヨリ遲キ起期ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

第百六十五條　期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ又日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス

第百六十六條　一日ノ期間ハ二十四時トシ一ケ月ノ期間ハ三十日トシ一ケ年ノ期間ハ曆ニ從フ

期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝祭日ニ當ルトキハ其日ヲ期間ニ算入セス

第百六十七條　法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地ニ住居セサル原告若クハ被告ノ爲メ其住居地ト裁判所所在地トノ距離ノ割合ニ應シ海陸路八里毎ニ一日ヲ伸長ス八里以外ノ端數三里ヲ超ユルトキモ亦同シ

裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住所ヲ有スル原告若クハ被告ノ爲メ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

第百六十八條　期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依リテ停止ス其期間ノ殘餘ノ部分ハ休暇ノ終ヲ以テ其進行ヲ始ム期間ノ初カ休暇ニ當ルトキハ其期間ノ進行ハ終ヲ以テ始マル

前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニハ之ヲ適用セス

不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ揭クタル期間ニ限ル

休暇事件トハ裁判所構成法第百二十八條、第百二十九條ニ揭クタル事件ヲ謂フ

第百六十九條　期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ期日ノ指定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得但申立ニ因レル期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除ク外顯著ナル理由アル

トキニ限リ之ヲ許ス

第百七十條　期間ハ不變期間ヲ除ク外當事者ノ合意ノ申立ニ因リ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得

裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ申立ニ因リ顯著ナル理由アルトキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得然レトモ法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸長ハ此法律ニ特定シタル場合ニ限リ之ヲ許ス

伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ滿了ヨリ之ヲ起算ス

第百七十一條　期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テノ申請ノ理由ハ之ヲ疏明ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾書ヲ提出セサルトキハ相手方ヲ審訊シタル後ニ限リ之ヲ許スコトヲ得又相手方カ異議ヲ述フルトキハ顯著ナル差支ノ理由及ヒ其差支ヲ除去スルコトノ特別ナル困難ヲ生シタルコトヲ證スルトキニ限リ之ヲ許スコトヲ得訴訟代理人ノ差支ニ原因スル期日ノ再度ノ變更又ハ期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾アルニ非サレハ之ヲ許サス

期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ニ付テノ申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第百七十二條　本節ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ與ヘタル權ハ受命判事又ハ受託判事モ亦其定ムル可キ期日及ヒ期間ニ付キ之ヲ行フコトヲ得

第四節　懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第百七十三條　訴訟行爲ヲ怠リタル原告若クハ被告ハ其訴訟

行爲ヲ爲ス權利ヲ失フ但此法律ニ於テ追完ヲ許ストキハ此限ニ在ラス

法律上懈怠ノ結果ハ當然生スルモノトス但此法律ニ於テ失權ヲ爲サシムルコトニ付キ相手方ノ申立ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

第百七十四條　天災其他避ク可ラサル事變ノ爲ニ不變ノ期間ヲ遵守スルコヲ得サル原告若クハ被告ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許ス

原告若クハ被告カ故障期間ヲ懈怠シタルトキハ其過失ニ非スシテ瞬席判決ノ送達ヲ知ラサリシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀回復ヲ許ス

第百七十五條　原狀回復ハ十四日ノ期間內ニ之ヲ申立ツルコトヲ要ス

右期間ハ障碍ノ止ミタル日ヨリ始マル此期間ハ當事者ノ合意ニ因リ之ヲ伸長スルコトヲ得ス

懈怠シタル不變期間ノ終ヨリ起算シテ一ケ年ノ滿了後ハ原狀回復ヲ申立ツルコトヲ得ス

第百七十六條　原狀回復ハ追完スル訴訟行爲ニ付キ裁判ヲ爲ス權アル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申立ツ可シ

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　原狀回復ノ原因タル事實

第二　原狀回復ノ疏明方法

第三　懈怠シタル訴訟行爲ノ追完

即時抗告ノ提出ヲ懈怠シタルトキハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第百七十七條　原狀回復ノ申立ニ付テノ訴訟手續ハ追完スル訴訟行爲ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ合併ス然レトモ裁判所ハ先ツ申立ニ付テノ辯論及ヒ裁判ノミニ其訴訟手續ヲ制限スルコトヲ得

申立ノ許否ニ關スル裁判及ヒ其裁判ニ對スル不服ノ申立ニ付テハ追完スル訴訟行爲ニ於テ行ハル可キ規定ヲ適用ス然レトモ申立ヲ爲シタル原告若クハ被告ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

原狀回復ノ訴訟ハ申立人之ヲ負擔ス但相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生シタルモノハ此限ニ在ラス

第五節　訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第百七十八條　原告若クハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テハ承繼人カ訴訟手續ヲ受繼クマテ之ヲ中斷ス

受繼ヲ遲滯シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ受繼及ヒ本案辯論ノ爲メ其承繼人ヲ呼出ス

承繼人期日ニ出頭セサルトキハ申立ニ因リ相手方ノ主張シタル承繼ヲ自白シタルモノト看做シ且裁判所ハ瞬席判決ヲ以テ承繼人訴訟手續ヲ受繼キタリト言渡ス又本案ノ辯論ハ故障期間ノ滿了後始メテ之ヲ爲シ又其期間內ニ故障ヲ申立テタルトキハ其完結後始メテ之ヲ爲ス

第百七十九條　原告若クハ被告ノ財產ニ付キ破產ノ開始シタル場合ニ於テ訴訟手續カ破產財團ニ關スルトキハ破產ニ付テノ規定ニ從ヒ手續ヲ受繼キ又ハ破產手續ヲ解止スルマテ之ヲ中斷ス

第百八十條　原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ原告若クハ被告ノ訴訟能

力ヲ得ル前ニ消滅シタルトキハ訴訟手續ハ法律上代理人又ハ新法律上代理人カ其任務ヲ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ續行セントスルコトヲ其代理人ニ通知スルマテ之ヲ中斷ス

第百八十一條　原告若クハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場合ニ於テハ訴訟手續ノ受繼ニ關シ遺產ニ付キ管理人ヲ任設スルトキハ前條ノ規定又ハ遺產ニ付キ破產ヲ開始スルトキハ第百七十九條ノ規定ヲ適用ス

第百八十二條　戰爭其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルトキハ此事情ノ繼續間訴訟手續ヲ中斷ス

第百八十三條　訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告若クハ被告カ死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ消滅スルトキハ委任消滅ノ通知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷ス

訴訟手續ノ受繼ニ付テハ第百七十八條、第百八十條、第百八十一條ノ規定ニ從フ

第百八十四條　原告若クハ被告カ戰時兵役ニ服スルトキ又ハ官廳ノ布告、戰爭其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所ト交通ノ絕エタル地ニ在ルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ障碍ノ消除スルマテ訴訟手續ノ中止ヲ命スルコトヲ得

第百八十五條　訴訟手續中止ノ申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

此裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第百八十六條　訴訟手續ノ中斷及中止ハ各期間ノ進行ヲ止メ及ヒ中斷又ハ中止ノ終リタル後更ニ全期間ノ進行ヲ始ムル効力ヲ有ス

中斷及ヒ中止ノ間本案ニ付キ爲シタル原告若クハ被告ノ訴訟行爲ハ他ノ一方ニ對シ其効力ナシ

口頭辯論ノ終結後ニ生シタル中斷ハ其辯論ニ基キテ爲ス可キ裁判ノ言渡ヲ妨クルコト無シ

第百八十七條　中斷シ又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼及ヒ本節ニ定メタル通知ハ原告若クハ被告ヨリ其書面ヲ受訴裁判所ニ差出シ裁判所ハ相手方ニ之ヲ送達ス可シ

第百八十八條　當事者ハ訴訟手續ヲ休止ス可キ合意ヲ爲スコトヲ得

其合意ハ不變期間ノ變行ニ影響ヲ及ホサス

口頭辯論ノ期日ニ於テ當事者雙方出頭セサルトキハ訴訟手續ハ其一方ヨリ更ニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム可キコトヲ申立ツルマテ之ヲ休止ス

一ケ年內ニ前項ノ申立ヲ爲ササルトキハ本訴及ヒ反訴ヲ取下クタルモノト看做ス

第百八十九條　本節ノ規定其他此法律ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ中止ヲ命スル裁判ニ對シテハ抗告ヲナスコトヲ得又其中止ヲ拒ム裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二編　第一審ノ訴訟手續

第一章　地方裁判所ノ訴訟手續

第一節　判決前ノ訴訟手續

第百九十條　訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

此訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二　起シタル請求ノ一定ノ目的物及ヒ其請求ノ一定ノ原因

第三　一定ノ申立

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作リ且裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ依リ定マル場合ニ於テ訴訟物カ一定ノ金額ニ非サルトキハ其價額ヲ掲ク可シ

第百九十一條　同一ノ被告ニ對スル原告ノ請求數個アル場合ニ於テ其各請求ニ付キ受訴裁判所カ管轄權ヲ有シ且法律ニ於テ同一種類ノ訴訟手續ヲ許ストキハ原告ハ其請求ヲ一個ノ訴ニ併合スルコトヲ得但民法ノ規定ニ反スルトキハ此限ニ在ラス

第百九十二條　訴狀カ第百九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適セサルトキハ相當ノ期間ヲ定メ裁判長ノ命令ヲ以テ其期間內ニ欠缺ヲ補正ス可キコトヲ命ス若シ原告此命ニ從ハサルトキハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス可シ

此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第百九十三條　訴狀カ第百九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適スルトキハ口頭辯論ノ期日ヲ定メテ之ヲ被告ニ送達ス可シ

第百九十四條　訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニハ少ナクトモ二十日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

外國ニ於テ送達ヲ施行ス可キトキハ裁判長相當ノ時間ヲ定ム

第百九十五條　訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達ニ因リテ生ス」

權利拘束ハ左ノ効力ヲ有ス

第一　權利拘束ノ繼續中原告若クハ被告ヨリ同一ノ訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ於テ本訴又ハ反訴ヲ以テ請求ヲ爲シタルトキハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得

第二　受訴裁判所ノ管轄ハ訴訟物ノ價額ノ增減、住所ノ變更其他管轄ヲ定ムル事情ノ變更ニ因リテ變換スルコト無シ

第三　原告ハ訴ノ原因ヲ變更スル權利ナシ但變更シタル訴ニ對シ本案ノ口頭辯論前被告カ異議ヲ述ヘサルトキハ此限ニ在ラス

第百九十六條　原告カ訴ノ原因ヲ變更セスシテ左ノ諸件ヲ爲ストキハ被告ハ異議ヲ述フルコトヲ得ス

第一　事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルコト

第二　本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮スルコト

第三　最初求メタル物ノ滅盡又ハ變更ニ因リ賠償ヲ求ムルコト

第百九十七條　訴ノ原因ニ變更ナシトスル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第百九十八條　訴ノ全部又ハ一分ハ本案ニ付キ被告ノ第一口頭辯論ノ始マルマテニ被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下ク又其後口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ之ヲ取下クルコトヲ得

訴ノ取下ハ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲サヽルトキハ書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ノ書面ハ之ヲ被告ニ送達ス可シ

適法ナル取下ハ權利拘束ノ總テノ効力ヲ消滅セシムル結果

ヲ生ス取下タル訴ヲ再ヒ起シタルトキハ被告ハ全訴訟費用ノ辨濟ヲ受クルマテ應訴ヲ拒ムコトヲ得

第百九十九條　訴狀送達ノ際十四日ノ期間內ニ答辯書ヲ差出ス可キコトヲ被告ニ催告ス可シ

答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス

第二百條　訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルトキハ被告ハ原告ニ對シ其裁判所ニ反訴ヲ起スコトヲ得

然レトモ財產權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴又ハ目的物ニ付キ專屬管轄ノ規定アル反訴ハ若シ其反訴カ本訴ナルトキ其裁判所ニ於テ管轄權ヲ有ス可キ場合ニ限リ之ヲ爲スコトヲ許ス

反訴ニ對シテハ更ニ反訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百一條　反訴ハ答辯書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭辯論中相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

然レトモ答辯書差出ノ期間內ニ差出シタル書面ヲ以テ起ササル反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲ス可キ場合ニ於テ同時ニ被告カ自己ノ過失ニ因ラスシテ其以前反訴ヲ起スヲ得サリシコトヲ疏明スルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ許ス

第二百二條　訴ニ關スル此法律ノ定規ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ因リ差異ノ生ス可キトキハ此限ニ在ラス

第二百三條　裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第百九十九條ニ定メタル時間ヲ相當ニ短縮若クハ伸長シ又ヲ第百九十四條ニ定メタル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限リ二十四時マテニ短縮スルコトヲ得

前項時間ノ短縮ハ此カ爲メ答辯書ヲ差出スコトヲ得サルトキト雖モ亦之ヲ爲スコトヲ得

本條ノ規定ハ第百六十七條ニ掲クタル規定ヲ妨ケス

第二百四條　各當事者ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上ノ主張若クハ證據方法又ハ申立ニ付キ相手方カ豫メ穿鑿ヲ爲スニ非サレハ陳述ヲ爲ス能ハスト豫知スル事項アルトキハ口頭辯論ノ前ニ書面ニテ差出ス可シ但其書面ヲ相手方ニ送達スル時間及ヒ相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲ス時間ヲ得セシム可シ

口頭辯論ノ延期ヲ爲ストキハ裁判所ハ爾後必要ナル準備書面ヲ差出ス可キ期間ヲ定ムルコトヲ得

第二百五條　口頭辯論ハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第二百六條　妨訴ノ抗辯ハ本案ニ付テノ被告ノ辯論前同時ニ之ヲ提出ス可シ

左ニ掲クルモノヲ妨訴ノ抗辯トス

第一　無訴權ノ抗辯

第二　裁判所管轄違ノ抗辯

第三　權利拘束ノ抗辯

第四　訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辯

第五　訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辯

第六　再訴ニ付キ前訴訟費用未濟ノ抗辯

第七　延期ノ抗辯

本案ニ付キ被告ノ口頭辯論ノ始マリタル後ハ妨訴ノ抗辯ハ被告ノ有効ニ抛棄スルコトヲ得サルモノナルトキ又ハ被告ノ過失ニ非スシテ本案ノ辯論前ニ其抗辯ヲ主張スル能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限リ之ヲ主張スルコトヲ得

第二百七條　被告カ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムトキ

又ハ裁判所カ申立ニ因リ若クハ職權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スルトキハ其抗辯ニ付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得

第二百八條　裁判所ハ訴訟ニ關シテハ終局判決ト雖モ攻擊又ハ防禦ノ方法ニ於テハ口頭辯論ヲ命スルコトヲ得但妨訴ノ抗辯アリタルトキハ其完結後之ヲ爲ス

妨訴ノ抗辯ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做ス但裁判所ハ申立ニ因リ本案ニ付キ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得

第二百九條　攻擊及ヒ防禦ノ方法(反訴、抗辯、再抗辯等)ハ第二百一條ニ規定スル制限ヲ以テ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ提出スルコトヲ得

第二百十條　被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ訴訟ヲ遲延スルヿヲ以テ又ハ甚シキ惡意ニ因リ又ハ重大ナル過失ニ因リ早ク之ヲ提出セサリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ之ヲ却下スルコトヲ得

第二百十一條　訴訟ノ進行中ニ爭ト爲リタル權利關係ノ成立又ハ不成立カ訴訟ノ裁判ノ全部又ハ一分ニ影響ヲ及ホストキハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ原告ハ訴ノ申立ノ擴張ニ依リ又被告ハ反訴ノ提起ニ依リ判決ヲ以テ其權利關係ヲ確定センコトヲ申立ツルコトヲ得

第二百十二條　訴狀其他ノ準備書面ニ於テ主張セサル請求ノ權利拘束ハ口頭辯論ニ於テ其請求ヲ主張シタル時ヲ以テ始マル

第二百十三條　各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辯駁センカ爲ニ用井ントスル證據方法ヲ開示シ且相手方ヨリ開示シタル證據方法ニ付キ陳述スルヿヲ要ス

各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ第六節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十四條　證據方法及ヒ證據抗辯ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スルコトヲ得

證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後レタル提出ニ付テハ第二百十條ノ規定ヲ準用ス

第二百十五條　證據調竝ニ證據決定ヲ以テスル特別ノ證據調手續ノ命令ハ第五節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十六條　當事者ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ證據調ノ結果ニ付キ辯論ヲ爲スヿヲ要ス

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲シタルトキハ當事者ハ證據調ニ關スル審問調書ニ基キ其結果ヲ演述スヿヲ要ス

第二百十七條　裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限リハ辯論ノ全旨趣及ヒ或ル證據調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ムヿヲ要ス否ヤヲ自由ナル心證ヲ以テ判斷スヿヲ要ス

第二百十八條　裁判所ニ於テ顯著ナル事實ハ之ヲ證スルヿヲ要セス

第二百十九條　地方習慣法、商慣習及ヒ規約又ハ外國ノ現行法ハ之ヲ證スヿヲ要シ裁判所ハ當事者カ其證明ヲ爲スト否トニ拘ハラス職權ヲ以テ必要ナル取調ヲ爲スコトヲ得

第二百二十條　此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張ヲ疏明スヿヲ要シ裁判官ヲシテ其主張ヲ眞實ナリト認メシムヿヲ要ス

據方法ヲ申出ツルヿヲ以テ足ル但即時ニ爲スコトヲ得サル證據調ハ疏明ノ方法トシテハ之ヲ許サス

第二百二十一條　裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス自ラ又ハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ訴訟又ハ或ル爭點ノ和解ヲ試ムル權アリ和解ヲ試ムル爲ニハ當事者ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

第二百二十二條　判決ヲ受ク可キ事項ノ申立ハ書面ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要ス

書面ニ掲ケサル申立アルトキハ調書ニ附錄トシテ添附ス可キ書面ヲ差出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

重要ノ點ニ於テ以前申立テタルモノト異ナル申立ニ付テモ亦同シ本條ノ規定ヲ遵守セサルトキハ申立ナキモノト看做ス

第二百二十三條　前條ノ申立ヲ除ク外書面ニ掲ケサル重要ナル陳述又ハ其書面ノ旨趣ト重要ノ點ニ於テ差異ノ存スル事項ハ其差異カ附加、削除其他ノ變更ニ係ルヲ問ハス申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ調書若クハ其附錄トシテ添附ス可キクメ差出シタル書面ニ依リテ之ヲ明確ニス可シ

第二百二十四條　當事者ハ訴訟記錄ヲ閱覽シ且裁判所書記ヲシテ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與セシムルコトヲ得

裁判長ハ第三者カ權利上ノ利害ヲ疏明スルトキニ限リ當事者ノ承諾ナクシテ訴訟記錄ノ閱覽及ヒ其抄本並ニ謄本ノ付與ヲ許スコトヲ得

判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類並ニ評議又ハ處罰ニ關スル書類ハ其原本ナルト謄本ナルトヲ問ハス之ヲ閱覽スルコトヲ許サス

第二節　判決

第二百二十五條　訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス

同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數個ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦同シ

第二百二十六條　一ノ訴ヲ以テ起シタル數個ノ請求中ノ一個又ハ一個ノ請求中ノ一分又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若クハ反訴ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ結局判決(一分判決)ヲ以テ裁判ヲ爲ス

然レトモ裁判所ハ事件ノ事情ニ從ヒテ一分判決ヲ相當トセサルトキハ之ヲ爲ササルコトヲ得

第二百二十七條　各個ノ獨立ナル攻擊若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ爭カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得

第二百二十八條　請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ爭アルトキハ裁判所ハ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

請求ノ原因ニ付キ裁判ヲ爲シタル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做シ其判決確定ニ至ルマテ爾後ノ手續ヲ中止ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ其數額ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

第二百二十九條　口頭辯論ノ際原告其訴ヘタル請求ヲ拋棄シ又ハ被告之ヲ認諾スルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百三十條　判決ハ辯論ヲ經タル總テノ攻擊及ヒ防禦ノ方法ヲ包括ス

然レトモ數個ノ獨立ナル攻擊又ハ防禦ノ方法中其一個ヲ適

切ナリトスルトキハ裁判所ハ他ノ方法ニ付キ判斷スル義務ナシ

第二百三十一條　裁判所ハ申立テサル事物ヲ原告若クハ被告ニ時セシムルノ權ナシ

裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費用ノ負擔ニ限リ申立アラサルモ判決ヲ爲スヿヲ可シ然レトモ一分判決ヲ爲ス場合ニ於テハ費用ノ裁判ヲ後ノ判決ニ讓ルコトヲ得

第二百三十二條　判決ハ其基本タル口頭辯論ニ臨席シタル判事ニ限リ之ヲ爲ス

第二百三十三條　判決ハ口頭辯論ノ終結スル期日又ハ直チニ指定スル期日ニ於テ之ヲ言渡ス但其期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得ス

第二百三十四條　判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ依リ之ヲ爲ス欠席判決ノ言渡ハ其主文ヲ作ラサル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルトキハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告クヿヲ可シ

第二百三十五條　判決ノ言渡ハ當事者又ハ其一方ノ在廷スルト否トニ拘ハラス其効力ヲ有ス

言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又ハ他ニ其判決ヲ使用スル原告若クハ被告ノ權ハ此法律ニ特定シタル場合ヲ除ク外相手方ニ其判決ヲ送達スルト否トニ拘ハラサルモノトス

第二百三十六條　判決ニハ左ノ諸件ヲ揭ク可シ

第一　當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所

第二　事實及ヒ爭點ノ摘示但其摘示ハ當事者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出シタル申立ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三　裁判ノ理由

第四　判決主文

第五　裁判所ノ名稱、裁判ヲ爲シタル判事ノ官氏名

第二百三十七條　判決ノ原本ニハ裁判ヲ爲シタル判事署名捺印ス若シ陪席判事署名捺印スルニ差支アルトキハ其理由ヲ開示シテ裁判長其旨ヲ附記シ裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ヲ附記ス

判決ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ裁判所書記ニ之ヲ交付ス可シ

裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本領收ノ日ヲ原本ニ附記シ且其附記ニ署名捺印ス可シ

第二百三十八條　各當事者ハ判決ノ送達アランコトヲ申立ツルコトヲ得其申立アリタルトキハ判決ノ正本ヲ送達ス可シ

第二百三十九條　未タ判決ヲ言渡サス又ハ未タ判決ノ原本ニ署名捺印セサル間ハ裁判所書記ハ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與スルコトヲ得ス

裁判所書記ハ判決ノ正本、抄本及ヒ謄本ニ署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ捺シテ之ヲ認證ス可シ

第二百四十條　裁判所ハ其言渡シタル結局判決及ヒ中間判決ノ中ニ包含シタル裁判ニ褐束セラル

第二百四十一條　裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ判決中ノ違算、書損及ヒ此ニ類スル著シキ誤謬ヲ更正ス」

此更正ニ付テハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ得

右更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得

得ス更正ヲ宣言スル決定ニ對シテ即時ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百四十二條　主タル請求若クハ附帶ノ請求又ハ費用ノ全部若クハ一分ノ裁判ヲ爲スニ際シ脫漏シタルトキハ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ以テ判決ヲ補充ス可シ

判決ノ言渡後直チニ追加裁判ノ申立ヲ爲ササルトキハ遲クトモ判決ノ正本ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

追加裁判ノ申立アルトキハ即時又ハ新期日ヲ定メテ口頭辯論ヲ爲サシムル可シ其辯論ハ訴訟ノ完結セサル部分ニ限リ之ヲ爲ス

第二百四十三條　判決ヲ更正シ又ハ補充スル裁判ハ判決ノ原本及ヒ正本ニ之ヲ追加シ若シ正本ニ之ヲ追加スルコトヲ得サルトキハ更正又ハ補充ノ裁判ノ正本ヲ作ル可シ

第二百四十四條　判決ハ其主文ニ包含スルモノニ限リ確定力ヲ有ス

第二百四十五條　口頭辯論ニ基キ爲ス裁判所ノ決定ハ之ヲ言渡スコトヲ要ス

第二百三十三條、第二百三十四條ノ規定ハ裁判所ノ決定ニ之ヲ準用シ又第二百三十五條、第二百三十九條及ヒ第二百四十條ノ規定ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長竝ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ニ之ヲ準用ス

言渡ヲ爲ササル裁判所ノ決定及ヒ言渡ヲ爲ササル裁判長竝ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

第三節　闕席判決

第二百四十六條　原告若クハ被告口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テハ出頭シタル相手方ノ申立ニ依リ闕席判決ヲ爲ス

第二百四十七條　出頭セサル一方カ原告ナルトキハ裁判所ハ闕席判決ヲ以テ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十八條　出頭セサル一方カ被告ナルトキハ裁判所ハ被告カ原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ請求ヲ正當ト爲ストキハ闕席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其請求ヲ正當ト爲ササルトキハ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

第二百四十九條　延期シタル口頭辯論ノ期日又ハ口頭辯論ヲ續行スル爲ニ定メタル期日モ亦第二百四十六條ノ辯論期日ニ同シ

第二百五十條　原告若クハ被告出頭スルモ辯論ヲ爲ササルトキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ退廷シタルトキハ出頭セサルモノト看做ス

第二百五十一條　原告若クハ被告カ本案ノ辯論ヲ爲シタルトキハ各個ノ事實、證書又ハ發問ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルモ本節ノ規定ヲ適用セス

第二百五十二條　左ノ場合ニ於テハ闕席判決ノ申立ヲ却下ス然レトモ出頭シタル原告若クハ被告ハ口頭辯論ノ延期ヲ申立ツルコトヲ得

第一　出頭シタル原告若クハ被告カ裁判所ノ職權上調査ス可キ事情ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキ

第二　出頭セサル原告若クハ被告ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知セサルトキ

辯論ヲ延期シタルトキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可シ

第二百五十三條　關席判決ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得又其決定ヲ取消シタルトキハ出頭セサリシ原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出サスシテ關席判決ヲ爲ス

第二百五十四條　裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ職權ヲ以テ關席判決ノ申立ニ付テノ辯論ヲ延期スルコトヲ得

第一　出頭セサル原告若クハ被告カ合式ニ呼出サレサリシトキ

第二　出頭セサル原告若クハ被告カ天災其他避ク可カラサル事變ノ爲ニ出頭スル能ハサルコトノ眞實ト認ムル可キ事情アルトキ

出頭セサリシ原告若クハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

第二百五十五條　關席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ其判決ニ對シ故障ヲ申立ツルコトヲ得

故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不變期間ニシテ關席判決ノ送達ヲ以テ始マル

故障申立ハ判決ノ送達前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

外國ニ於テ送達ヲ爲ス可キトキ又ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲ス可キトキハ裁判所ハ關席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ後日決定ヲ以テ之ヲ定ム此決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得

第二百五十六條　故障申立ハ關席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ爲ス

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　故障ヲ申出テラレタル關席判決ノ表示

第二　其判決ニ對スル故障ノ申立

此書面ニハ本案ニ付テノ口頭辯論準備ノ爲ニ必要ナル事項アルトキモ亦之ヲ揭ク可シ

第二百五十七條　判然許ス可カラサル故障又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル故障ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百五十八條　前條ノ場合ヲ除ク外裁判所ハ故障申立ノ書面ヲ相手方ニ送達シ且故障ニ付キ口頭辯論ノ新期日ヲ定メ當事者ノ雙方ヲ呼出ス可シ

第二百五十九條　裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ故障ヲ申立テタルヤ否ヤヲ調査ス可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ不適法トシテ却下ス

第二百六十條　故障ヲ適法トスルトキハ訴訟ハ關席前ノ程度ニ復ス

第二百六十一條　新辯論ニ基キ爲ス可キ判決カ關席判決ト符合スルトキハ關席判決ヲ維持スルコトヲ言渡シ其符合セサル場合ニ於テハ新判決ニ於テ關席判決ヲ廢棄ス

第二百六十二條　法律ニ從ヒ關席判決ヲ爲シタルトキ關席ニ因リテ生シタル費用ハ相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生セサルモノニ限リ故障ノ爲メ關席判決ヲ變更スル場合ニ於テモ其關席ニシタル原告若クハ被告ニ之ヲ負擔セシム

第二百六十三條　故障ヲ申立テタル原告若クハ被告ニ口頭辯論

ノ期日又ハ辯論延期ノ期日ニ出頭セサルトキハ第二百五十二條及ヒ第二百五十四條ニ規定シタル場合ヲ除ク外出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄却スル新關席判決ヲ言渡ス

新關席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二百六十四條　故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テハ控訴ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テノ規定ヲ準用ス

第二百六十五條　本節ノ規定ハ反訴又ハ既ニ原因ノ確定シタル請求ノ變額ノ定ヲ目的物トスル訴訟手續ニ之ヲ準用ス

中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルトキハ其關席訴訟手續及ヒ關席判決ハ其中間訴訟ヲ完結スルニ止マリ本節ノ規定ヲ之ニ準用ス

第四節　計算ノ事件財產ノ分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續

第二百六十六條　計算ノ當否、財產ノ分別又ハ此ニ類スル關係ヲ目的トスル訴訟ニ於テ計算書又ハ財產目錄ニ對シ許多ノ爭アル請求ノ生シ又ハ許多ノ爭アル異議ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ受命判事ノ面前ニ於ケル準備手續ヲ命スルコトヲ得

第二百六十七條　準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ決定執行ノ期日ヲ定ム可シ若シ裁判長此期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム又受命判事其委任ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ判事ヲ任ス

第二百六十八條　準備手續ニ於テハ調書ヲ以テ左ノ諸件ヲ明確ニス可シ

第一　如何ナル請求ヲ爲スヤ及ヒ如何ナル攻擊、防禦ノ方法ヲ主張スルヤ

第二　如何ナル請求及ヒ如何ナル攻擊、防禦ノ方法ヲ爭フヤ又ハ之ヲ爭ハサルヤ

第三　爭ト爲リタル請求及ヒ爭ト爲リタル攻擊、防禦ノ方法ニ付テハ其事實上ノ關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方法、主張シタル證據抗辯、證據方法竝ニ證據抗辯ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ提出シタル申立

此手續ハ受訴裁判所ニ於テ訴訟又ハ中間訴訟カ判決又ハ證據決定ヲ爲スニ熟スルマテ之ヲ續行ス可シ

第二百六十九條　原告若クハ被告カ期日ニ於テ受命判事ノ面前ニ出頭セサルトキハ受命判事ハ前條ノ規定ニ依リ調書ヲ以テ出頭シタル原告若クハ被告ノ提供ヲ明確ニシ且新期日ヲ定メ出頭セサル原告若クハ被告ニハ調書ノ謄本ヲ付與シテ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ原告若クハ被告カ新期日ニモ亦出頭セサルトキハ送達セシ調書ニ揭ケタル相手方ノ事實上ノ主張ヲ自白シタリト看做シ其主張ニ付テ爲ス準備手續ハ完結シタルモノトス

第二百七十條　受訴裁判所ハ準備手續ノ終結後ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百七十一條　當事者ハ口頭辯論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ調書ニ基キ演述ス可シ

原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ準備手續ニ於テ爭ハサル請求ハ一分判決ヲ以テ之ヲ完結ス其他ニ付テハ申立ニ因リテ關席判決ヲ爲ス可シ

第二百七十二條　受命判事ノ調書ヲ以テ明確ニス可キ事實又

ハ證書ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ之ヲ拒ミタルトキハ口頭辨論ニ於テ之ヲ追完スルコトヲ得ス

時求、攻撃若クハ防禦ノ方法、證據方法及ヒ證據抗辯ニシテ受命判事ノ調書ヲ以テ之ヲ明確ニセサルモノニ付テハ後日ニ至リ始メテ生シ又ハ後日ニ至リ始メテ原告若クハ被告ノ知リタルコトヲ疏明スルトキニ限リ口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得

第五節　證據調ノ總則

第二百七十三條　證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ以テ通例トス

證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限リ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

此證據調ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第二百七十四條　當事者ノ申立テタル數多ノ證據中其調フ可キ限度ハ裁判所之ヲ定ム

當事者ノ演述ニ引續キ直チニ證據調ヲ爲サスシテ受訴裁判所ニ於テ新期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之ヲ爲ス可キトキハ證據決定ニ因リ之ヲ命スル可シ

第二百七十五條　證據調ニ付キ不定時間ノ障害アルトキハ申立ニ因リ相當ノ時間ヲ定ム可シ此期間ノ滿了後ト雖モ訴訟手續ヲ遲滯セシメサル限リハ其證據方法ヲ用ヰルコトヲ得

第二百七十六條　證據決定ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一　證ス可キ係爭事實ノ表示

第二　證據方法ノ表示殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問ス可キトキハ其表示

第三　證據方法ヲ申出タル原告若クハ被告ノ表示

第二百七十七條　證據決定ノ變更ハ其決定ノ施行完結前ニ在リテハ新ナル辯論ニ基クトキニ限リ之ヲ申立ツルコトヲ得

證據決定ノ施行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

第二百七十八條　受訴裁判所ノ部員ヲ證據調ヲ爲ス可キトキハ裁判長證據決定言渡ノ際受命判事ヲ指名シ其證據調ノ期日ヲ定ム若シ其期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム

受命判事其命ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ部員ヲ命ス

第二百七十九條　他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キトキハ裁判長ハ其囑託書ヲ發ス可シ

證據調ニ關スル書類ハ原本ヲ以テ受託判事ヨリ受訴裁判所書記ニ之ヲ送致シ其書記ハ之ヲ受領シタルコトヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十條　受命判事又ハ受託判事カ證據調ノ期日ヲ定メタルトキハ其期日及ヒ場所ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十一條　外國ニ於テ爲ス可キ證據調ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐在ノ帝國ノ公使若クハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス其囑託ニ付テハ第百五十二條及ヒ第百五十五條ノ規定ヲ準用ス

第二百八十二條　受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトノ至當ナル原因ノ爾後ニ生シタルトキハ其裁判所ニ證據調ヲ囑託スルコトヲ得此囑託ヲ爲シタルトキハ當事者ニ之ヲ通知ス可シ

第二百八十三條　受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調

ノ際ニ爭ヲ生シ其爭ノ完結スルニ非サレハ證據調ヲ續行スルコトヲ得ス且其判事之ヲ裁判スル權ナキトキハ其完結ハ受訴裁判所之ヲ爲ス

第二百八十四條　當事者ノ一方又ハ雙方證據調ノ期日ニ出頭セサルトキハ事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ證據調ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告ノ出頭セサルカ爲ニ證據調ノ全部又ハ一分ヲ爲スコトヲ得サル場合ニ於テハ其追完又ハ補充ハ此カ爲メ訴訟手續ノ遲滯セサルトキ又ハ擧證者其過失ニ非スシテ前期日ニ出頭スル能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限リ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ申立ニ因リ之ヲ命ス

第二百八十五條　裁判所ハ事件ノ永タ判決ヲ爲スニ熟セスト認ムルトキハ證據調ノ補充ヲ決定スルコトヲ得

第二百八十六條　證據調又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムル必要アルトキハ擧證者又ハ當事者雙方前期日ニ出頭セサリシトキト雖モ職權ヲ以テ之ヲ定ム

第二百八十七條　受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ストキハ其期日ハ同時ニ口頭辯論ヲ續行スル期日ナリトス

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトヲ命シタルトキハ受訴裁判所ハ證據決定中ニ併セテ口頭辯論續行ノ期日ヲ定ムルコトヲ得若シ之ヲ定メサルトキハ證據調ノ終結後職權ヲ以テ其期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第二百八十八條　擧證者ハ裁判所ノ定ムル期間內ニ證據調ノ費用ヲ豫納ス可シ若シ其期間內ニ豫納セサルトキハ證據調ヲ爲サス但期間ノ滿了後ト雖モ豫納シタルトキハ訴訟手續ノ遲滯ヲ生セサル場合ニ限リ證據調ヲ許ス

第六節　人證

第二百八十九條　何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限リハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ證言スル義務アリ

第二百九十條　官吏、公吏ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬廳ノ許可ヲ得タルトキニ限リ證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス

此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐アルトキニ限リ之ヲ拒ムコトヲ得

右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之ヲ通知ス可シ

第二百九十一條　人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊問ヲ受ク可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第二百九十二條　證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　證人及ヒ當事者ノ表示

第二　證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實ノ表示

第三　證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時

第四　出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨

第五　裁判所ノ名稱

第二百九十三條　豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ヲ證人トシテ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲ニ其呼出ヲ受ケタル者ノ服勤ヲ許ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ムル求ヲ爲ス義

務アリ

第二百九十四條　合式ニ呼出サレタル證人ニシテ正當ノ理由ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナシト雖モ決定ヲ以テ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ貳拾圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ

證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得

證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ嘱託シテ之ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シ

第二百九十五條　證人其出頭セサリシコトヲ後日ニ正當ノ理由ヲ以テ辨解スルトキハ罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ」

證人ノ不參届及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十六條　皇族證人ナルトキハ受命判事又ハ受託判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス若シ其所在地外ニ滯在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滯在中ハ其在地ニ於テ之ヲ訊問ス

第二百九十七條　左ニ掲クル者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一　原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第二　原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者

第三　原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ仕フル者

裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ムノ權利アル旨ヲ告ク可シ

第二百九十八條　左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一　官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者カ其職務上ノ默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二　醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、神職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受クタルニ因リテ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ

第三　問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ揭クタル者ノ恥辱ニ歸スルカ又ハ其刑事上ノ訴追ヲ招ク恐アルトキ

第四　問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ揭クタル者ノ爲メ直接ニ財產權上ノ損害ヲ生セシムル可キトキ

第五　證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非サレハ答辯スルコト能ハサルトキ

第二百九十九條　證人ハ第二百九十七條第一號及ヒ第二百九十八條第四號ノ場合ニ於テ左ノ事項ニ付キ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第一　家族ノ出產、婚姻又ハ死亡

第二　家族ノ關係ニ因リ生スル財產事件ニ關スル事實

第三　證人トシテ立會タル場合ニ於タル權利行爲ノ成立及ヒ旨趣

第四　原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係爭ノ權利關係ニ關シ爲シタル行爲

前條第一號、第二號ニ揭クタル者其默秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルトキハ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第三百條　證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又ハ期日ニ於テ其拒絕ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ疏明ス可シ

期日前ニ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スル義務ナシ

裁判所書記ハ拒絕ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調書ヲ作リタルトキハ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第三百一條　拒絕ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シタル後決定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲シタル拒絕ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ス原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シテ決定ヲ爲ス

右決定ニ對シテハ卽時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

第三百二條　原因ヲ開示セシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ棄却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルトキハ申立ヲ要セスシテ決定ヲ以テ證人ニ對シ其拒絕ニ依リテ生シタル費用ノ賠償及ヒ四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス

證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所ニ嘱託シテ之ヲ爲ス

第三百三條　原告若クハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人トノ間ニ第二百九十七條第一號乃至第三號ノ關係アルトキハ其證人ヲ忌避スルコトヲ得

第三百四條　忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之ヲ爲ス可シ此時限後ハ其前ニ忌避ノ原因ヲ主張スルヲ得サリシコトヲ疏明スルトキニ限リ其證人ヲ忌避スルコトヲ得

忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因ハ之ヲ疏明ス可シ

第三百五條　忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス忌避ノ原因ナシト宣言スル決定ニ對シテハ卽時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百六條　各證人ニハ其攜帶ス可キ呼出狀其他適當ノ方法ヲ以テ人違ナラサルコトヲ判然ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲ爲サシムル可シ

然レトモ宣誓ニ特別ノ原因アルトキ殊ニ之ヲ爲サシムル可キヤ否ヤニ付キ疑ノ存スルトキハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百七條　證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ眞心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宣フ可シ

又訊問後ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ眞心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事ヲモ默秘セス又何事ヲモ附加セサリシ旨ノ誓ヲ宣フ可シ

第三百八條　判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ偽證ノ罰ヲ諭示ス可シ

第三百九條　宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百條乃至第三百二條ノ規定ヲ適用ス

第三百十條　左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメスシテ參考ノ爲メ之ヲ

訊問スルコトヲ得

第一　訊問ノ時汝タ滿十六歲ニ達セサル者

第二　宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必要ナル精神上ノ發達ノ缺ク者

第三　刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者

第四　第二百九十七條及ヒ第二百九十八條第三號并ニ第四號ノ規定ニ依リ證言ヲ拒絕スル權利アリテ之ヲ行使セサル者但第二百九十八條第三號并ニ第四號ノ場合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ關スル事實ニ付キ證言ヲ爲ス可キコトヲ申立テラレタルトキニ限ル

第五　訴訟ノ成敗ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

第三百十一條　證人訊問ハ後ニ訊問ス可キ證人ノ在ラサル場所ニ於テ各別ニ之ヲ爲ス

證人ノ供述互ニ齟齬シタルトキハ之ヲ對質セシムルコトヲ得

第三百十二條　證人訊問ハ證人ニ其氏名、年齡、身分、職業及ヒ住居ヲ問フテ以テ始マル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於テ證言ノ信用ニ關スル事情殊ニ當事者トノ關係ニ付テノ問ヲ爲ス可シ

第三百十三條　證人ニハ其訊問事項ニ付キ知リタルモノヲ率述シテ供述セシムル可シ

證人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知リ得タル原因ヲ穿鑿スル爲メ必要ナル場合ニ於テハ尙ホ他ノ問ヲ發ス可シ

第三百十四條　證人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他證書ヲ用ヰルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用ヰルコトヲ得

第三百十五條　陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ證人ニ問ヲ發スルコトヲ得

當事者ハ證人ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得ス然レトモ當事者ハ證人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲ニ其必要ナリトスル問ヲ發センコトヲ裁判長ニ申立ツルコトヲ得

發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス

第三百十六條　調書ニハ證人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ又ハ宣誓セスシテ訊問ヲ受ケタルヤヲ記載ス可シ

第三百十七條　受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ證人ノ再訊問ヲ命スルコトヲ得

第一　證人訊問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルトキ

第二　證人訊問ノ完全ナラサルトキ

第三　證人ノ供述カ明白ナラス又ハ兩義ニ渉ルトキ

第四　證人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルトキ

第五　此他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルトキ

第三百十八條　左ノ場合ニ於テ證人ニ依レル證據調ハ受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第一　眞實ヲ探知スル爲メ現場ニ就キ證人ヲ訊問スルノ必要ナルトキ

第二　證人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサルトキ

第三　證人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在リテ其裁判所ニ出頭スルニ付キ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルトキ

第三百十九條　第二百九十四條、第二百九十五條、第三百二條及ヒ第三百九條ニ掲クタル證人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證言ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答フルコトヲ拒ムトキハ此拒絕ノ當否ニ付キ裁判ヲ爲ス權ハ受訴裁判所ニ屬ス

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若クハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ命スルコトヲ得

第三百二十條　證人ヲ申立テタル原告若クハ被告ハ其訊問ノ開始マテハ此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得其後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限リ之ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百二十一條　各證人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲ニ旅行ヲ要スルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムルコトヲ得

擧證者ノ豫納シタル金額不足スルトキハ職權ヲ以テ其不足額ヲ取立ツ可シ

第七節　鑑定

第三百二十二條　鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ人證ニ付テノ規定ヲ準用ス

第三百二十三條　鑑定ノ申出ハ鑑定ス可キ事項ヲ表示シテ之ヲ

スルトキ

第三百十九條　第二百九十四條、第二百九十五條、第三百二條及ヒ第三百九條ニ掲クタル證人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ受託判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證言ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ發シタル問ニ答フルコトヲ拒ムトキハ此拒絕ノ當否ニ付キ裁判ヲ爲ス權ハ受訴裁判所ニ屬ス

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ否ムトキハ原告若クハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ命スルコトヲ得

第三百二十條　證人ヲ申立テタル原告若クハ被告ハ其訊問ノ開始マテハ此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得其後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限リ之ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百二十一條　各證人ハ日當ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲ニ旅行ヲ要スルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムルコトヲ得

擧證者ノ豫納シタル金額不足スルトキハ職權ヲ以テ其不足額ヲ取立ツ可シ

第七節　鑑定

第三百二十二條　鑑定ニ付テハ以下數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ人證ニ付テノ規定ヲ準用ス

第三百二十三條　鑑定ノ申出ハ鑑定ス可キ事項ヲ表示シテ之ヲ

第三百二十四條　立會フ可キ鑑定人ノ選定及ヒ其員數ノ指定ハ受訴裁判所之ヲ爲ス其裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ一名マテニ制限シ又ハ何時ニテモ既ニ任命シタル者ニ代ヘ他ノ鑑定人ヲ任命スルコトヲ得

裁判所ハ鑑定人トシテ訊問ヲ受クルニ適當ナル者ヲ指名ス可キ旨ヲ當事者ニ催告スルコトヲ得

當事者カ一定ノ者ヲ鑑定人ニ爲スコトヲ合意シタルトキハ裁判所ハ其合意ニ從フ可シ然レトモ裁判所ハ當事者ノ爲ス可キ選定ヲ一定ノ員數ニ制限スルコトヲ得

第三百二十五條　外國ノ書類又ハ產物ノ審查ヲ要スル場合ニ於テ必要ナル能力ヲ有スル本邦人ノ在ラサルトキハ裁判所ハ外國人ヲ鑑定人ニ任命スルコトヲ得

第三百二十六條　左ニ掲クル者鑑定ヲ命セラレタルトキハ之ヲ爲ス義務アリ

第一　必要ナル種類ノ鑑定ヲ爲ス爲ニ公ニ任命セラレタル者

第二　鑑定ヲ爲スニ必要ナル學術、技藝若クハ職業ニ常ニ從事スル爲ニ公ニ任命セラレ若クハ授權セラレタル者

右ノ外鑑定ヲ爲ス可キ旨ヲ裁判所ニ於テ述ヘタル者ハ鑑定人タル義務ナキトキト雖モ鑑定ヲ爲ス義務アリ

第三百二十七條　鑑定人カ證書ヲ拒ムコトヲ得ルト同一ノ原因ニ依リ鑑定ヲ拒ム權利アリ

官吏、公吏ハ其所屬廳ニ於テ異議アルトキハ之ヲ鑑定人トシテ訊問スルコトヲ得ス

第三百二十八條　鑑定ヲ爲ス義務アル鑑定人出頭セス又ハ鑑

定ヲ拒ミタル場合ニ於テハ其者ニ對シ此カ爲ニ生シタル費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡スコトヲ得

第三百二十九條　鑑定人ハ其鑑定ヲ爲ス前ニ其鑑定人タル義務ヲ公平且誠實ニ履行スヘキ旨ノ誓ヲ宣フヘシ

第三百三十條　受訴裁判所ハ其意見ヲ以テ左ノ諸件ヲ定ムヘシ

第一　鑑定人ノ意見ハ口頭又ハ書面ニテ之ヲ述ヘシムヘキヤ

第二　數名ノ鑑定人ヲ訊問スヘキ場合ニ於テ各意見カ異ナルトキハ共同ニテ鑑定書ヲ作ラシムヘキヤ又ハ各別ニ之ヲ作ラシムヘキヤ

第三　口頭辯論ノ際鑑定人ノ總員又ハ其一名ヲシテ鑑定書ヲ說明セシムヘキヤ

第四　鑑定ノ結果カ不十分ナルトキハ同一又ハ他ノ鑑定人ヲシテ再ヒ鑑定ヲ爲サシムヘキヤ

第三百三十一條　受訴裁判所ハ鑑定人ノ任命ヲ受命判事又ハ受託判事ニ委任スルコトヲ得此場合ニ於テハ受命判事又ハ受託判事ハ第三百二十四條及ヒ第三百三十條第一號并ニ第二號ノ規定ニ依リ受訴裁判所ニ屬スル權ヲ有ス

第三百三十二條　鑑定人ハ日當、旅費及ヒ立替金ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此場合ニ於テハ第三百二十一條ノ規定ヲ準用ス

第三百三十三條　特別ノ智識ヲ要セシ過去ノ事實又ハ事情ニシテ其實驗ヲ爲シタル者ノ訊問ニ因リテ鑑定ス可キトキハ人證ニ付テノ規定ヲ適用ス

第八節　書證

第三百三十四條　書證ノ申出ハ證書ヲ提出シテ之ヲ爲ス

第三百三十五條　舉證者其使用セントスル證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ相手方ニ其證書ノ提出ヲ命センコトヲ申立テテ之ヲ爲ス可シ

第三百三十六條　相手方ハ左ノ場合ニ於テ證書ヲ提出スル義務アリ

第一　舉證者カ民法ノ規定ニ從ヒ訴訟外ニ於テモ證書ノ引渡又ハ其提出ヲ求ムルコトヲ得ルトキ

第二　證書カ其趣旨ニ因リ舉證者及ヒ相手方ニ共通ナルトキ

第三百三十七條　相手方ハ其手ニ存スル證書ニシテ其訴訟ニ於テ舉證ノ爲メ引用シタルモノヲ提出スル義務アリ準備書面中ニノミ引用シタルトキト雖モ亦同シ

第三百三十八條　證書ノ提出ヲ命センコトノ申立ニハ左ノ諸件ヲ揭ケ可シ

第一　證書ノ表示

第二　證書ニヨリ證ス可キ事實ノ表示

第三　證書ノ旨趣

第四　證書カ相手方ノ手ニ存スル旨ヲ主張スル理由タル事情

第五　證書ヲ提出スヘキ義務ノ原因ノ表示

第三百三十九條　裁判所ハ證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且申立ヲ正當ナリト認ムル場合ニ於テ相手方カ證書ノ其手ニ存スルコトヲ自白スルトキ又ハ申立ニ對シ陳述セサルトキハ證據決定ヲ以テ證據ノ提出ヲ命ス

第三百四十條　相手方カ證書ヲ所持セサル旨ヲ申立ツルトキハ此申立ノ眞實ナルヤ否ヤヲ定ムル爲メ又ハ證書ノ所在ヲ穿鑿スル爲メ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルヤ否ヤヲ穿鑿スル爲メ本章第十節ノ規定ニ從ヒテ相手方本人ヲ訊問ス可シ

相手方カ官廳ナルトキハ證書カ其官廳ノ保藏ニ係ラス又ハ其所在ヲ開示スルヲ得サル旨ノ長官ノ證明書ヲ以テ訊問ニ換ヘ裁判所ハ此證明書ヲ差出サシムルヲ爲メ相當ノ期間ヲ定ムヘシ

第三百四十一條　證書ヲ所持スルコトヲ自白シ又ハ之ヲ所持セスト申立テサル相手方カ其證書ヲ提出ス可シトノ命ニ從ハス又ハ相手方カ所持セスト申立テタル證書ニ付キ訊問ヲ受ケテ供述ヲ爲スコトヲ拒ミタルトキ又ハ舉證者ノ使用ヲ妨クル目的ヲ以テ故意ニ證書ヲ隱匿シ若クハ使用ニ耐ヘサラシメタルコトノ明確ナルトキハ舉證者ノ差出シタル證書ノ謄本ヲ正當ナルモノト看做ス若シ謄本ヲ差出ササルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ證書ノ性質及ヒ旨趣ニ付キ舉證者ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

前條第二項ニ揭ケタル證明書ヲ裁判所ノ定メタル期間内ニ差出ササルトキハ相手方タル官廳ニ對シ前項ト同一ノ結果ヲ生ス

第三百四十二條　舉證者其使用セントスル證書カ第三者ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ其證書ヲ取寄スル爲メ期間ヲ定メンコトヲ申立テテ之ヲ爲ス

第三百四十三條　第三者ハ舉證者ノ相手方ニ於ケルト同一ナル理由ニ因リ證書ヲ提出スル義務アリ然レトモ强テ證書ヲ提出セシムルコトハ訴ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四十四條　第三百四十二條ニ從ヒ申立ヲ爲スニハ第三百三十八條第一號乃至第三號及ヒ第五號ノ要件ヲ厲ミ且證書カ第三者ノ手ニ存スルコトヲ疏明ス可シ

第三百四十五條　證書ニ依リ證ス可キ事實ノ重要ニシテ且其申立カ前條ノ規定ニ適スルトキハ裁判所ハ證書提出ノ期間ヲ定ムヘシ

第三者ニ對スル訴訟ノ完結シタルトキハ又ハ舉證者カ訴ノ提起、訴訟ノ繼續又ハ强制執行ヲ遲延シタルトキハ相手方ハ前項ノ期間ノ滿了前ト雖モ訴訟手續ノ繼續ヲ申立ルコトヲ得

第三百四十六條　舉證者其使用セントスル證書カ官廳又ハ公吏ノ手ニ存スル旨ヲ主張スルトキハ書證ノ申出ハ證書ノ送付ヲ官廳又ハ公吏ニ囑託セラレンコトヲ申立テテ之ヲ爲ス此規定ハ當事者カ法律上ノ規定ニ從ヒ裁判所ノ助力ヲ以テ取寄スルコトヲ得ヘキ證書ニハ之ヲ適用セス

官廳又ハ公吏カ第三百三十六條ノ規定ニ基キ證書ヲ提出スル義務アル場合ニ於テ其送付ヲ拒ムトキハ第三百四十二條乃至第三百四十五條ノ規定ヲ適用ス

第三百四十七條　證據決定ヲ爲シタル後第三百四十二條及ヒ第三百四十六條ノ規定ニ從ヒ書證ヲ申出タル場合ニ於テ證書取寄ノ手續ノ爲ニ訴訟ノ完結ヲ遲延スルニ至ル可ク且裁判所ニ於テ原告若クハ被告カ訴訟ヲ遲延スル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ書證ヲ早ク申出テサリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ其書證ノ申出ヲ却下スルコトヲ

得

第三百四十八條　口頭辯論ノ際證書ヲ提出スルニ於テハ其騰本ヲ以テ之ニ代フルコトヲ得

損若クハ紛失ノ恐アリ又ハ他ノ顯著ナル障碍アルトキハ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ證書ヲ提出スル旨ヲ命スルコトヲ得

第三百四十九條　公正證書ハ正本又ハ認證ヲ受ケタル謄本ヲ以テ之ヲ提出スルコトヲ得然レトモ裁判所ハ擧證者ニ正本ノ提出ヲ命スルコトヲ得

受命判事又ハ受託判事ハ證書ノ明細書及ヒ其謄本ヲ調書ニ添附シ又證書ノ一分ノミ必要ナルトキハ第百七條第二項ノ規定ニ從ヒテ作リタル抄本ヲ之ニ添附スル可シ

私署證書ハ原本ヲ以テ之ヲ提出スル可シ若シ當事者カ未タ提出セサル原本ノ眞正ニ付キ一致シ只其證書ノ効力又ハ解釋ニ付テノミ爭ヲ爲ストキハ謄本ヲ提出スルヲ以テ足ル然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ擧證者ニ原本ノ提出ヲ命スルコトヲ得

第三百五十條　擧證者ハ證書ヲ提出シタル後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ限リ此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得

提出シタル謄本ニ換ヘテ正本又ハ原本ヲ提出スル可キ旨ノ命ニ從ハサルトキハ裁判所ハ心證ヲ以テ謄本ニ如何ナル證據力ヲ付スル可キヤヲ裁判ス

第三百五十一條　公正證書又ハ檢眞ヲ經タル私署證書ヲ僞造若クハ變造ナリト主張スル者ハ其證書ノ眞否ヲ確定センコトノ申立ヲ爲ス可シ

此場合ニ於テハ裁判所ハ其證書ノ眞否ニ付キ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

第三百五十二條　私署證書ノ眞否ニ付キ爭アルトキハ裁判所ハ擧證者ノ申立ニ因リ檢眞ヲ爲スコトヲ得

第三百五十三條　私署證書ノ檢眞ハ總テノ證據方法及ヒ手跡若クハ印章ノ對照ニ因リテ之ヲ爲ス

證書ノ眞否ヲ證セントスル當事者ハ裁判所ノ定ムル期間內ニ手跡若クハ印章ヲ對照スル爲ニ適當ナル書類ヲ提出スル可シ

眞正ナリトノ自白又ハ證明シタル適當ノ對照書類ナキトキハ對照ノ爲メ原告若クハ被告ニ對シ裁判所ニ於テ一定ノ期辭ノ手記ヲ命スルコトヲ得其手記シタル語辭ハ調書ノ附錄トシテ之ニ添附ス可シ

裁判所ハ手跡若クハ印章ヲ對照シタル結果ニ付キ自由ナル心證ヲ以テ裁判ヲ爲シ又必要ナル場合ニ於テハ鑑定ヲ爲サシメタル後之ヲ爲ス

原告若クハ被告カ裁判所ノ定メタル期限內ニ對照書類ヲ提出セサルトキ又ハ對照ス可キ語辭ヲ手記ス可キ裁判所ノ命ニ對シ十分ナル辯解ヲ爲サスシテ之ニ從ハサルトキ又ハ書樣ヲ變シテ手記シタルトキハ證書ノ眞否ニ付テノ相手方ノ主張ハ其他ノ證據ヲ要セスシテ之ヲ眞正ナリト看做スコトヲ得

第三百五十四條　提出シタル證書ハ直チニ之ヲ還付シ又適當ナル場合ニ於テハ其際本ヲ記錄ニ留メテ之ヲ還付ス可シ

然レトモ證書ノ僞造又ハ變造ナリト爭フトキハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後ニ非サレハ之ヲ還付スルコトヲ得ス

第三百五十五條　公正證書ノ僞造若クハ變造ナルコトヲ眞實ニ反キテ爭フトキハ前項ト同一ナル條件ヲ以テ二十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

第三百五十六條　本節ノ規定ハ事件ノ性質ニ於テ許ス限リハ事跡ノ記念又ハ權利ノ證徵ノ爲メ作リタル劃符、界標等ノ如キモノニモ之ヲ準用ス

第九節　檢證

第三百五十七條　檢證ノ申出ハ檢證物ヲ表示シ及ヒ證ス可キ事實ヲ開示シテ之ヲ爲ス

第三百五十八條　受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ際シ鑑定人ノ立會ヲ命スルコトヲ得

受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第三百五十九條　檢證ヲ爲ス際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ナラシメ又必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附錄トシテ添附ス可キ圖面ヲ作リ之ヲ明確ナラシム可シ

若シ既ニ記錄ニ圖面ノ存スルトキハ之ヲ檢證物ニ對照シ必要ナル場合ニ於テハ之ヲ更正ス可シ

第十節　當事者本人ノ訊問

第三百六十條　當事者ノ提出シタル許ス可キ證據ヲ調ヘタル結果ニ因リ證ス可キ事實ノ眞否ニ付キ裁判所カ心證ヲ得ルニ足ラサルトキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ヲ訊問スルコトヲ得

第三百六十一條　裁判所ハ原告若クハ被告ヲ訊問スルコトヲ決定シ且原告若クハ被告ノ自身カ決定言渡ノ際在廷スルトキハ直チニ其訊問ヲ爲スヲ以テ通例トス

第三百六十二條　訊問ヲ受ケル原告若クハ被告ハ供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用井ルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用井ルコトヲ得

第三百六十三條　原告若クハ被告カ十分ナル理由ナクシテ供述スルコトヲ拒ミ又ハ訊問期日ニ出頭セサルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ訊問ニ因リテ擧證ス可キ相手方ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

第三百六十四條　訴訟無能力者ノ法律上代理人カ訴訟ヲ爲ストキハ法律上代理人若クハ訴訟無能力者ヲ訊問ス可キヤ又ハ此等ノ者ヲ共ニ訊問ス可キヤ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ決定ス

法律上代理人數人アルトキハ其一人ヲ訊問ス可キヤ又ハ數人ヲ訊問ス可キヤモ亦前項ニ同シ

第十一節　證據保全

第三百六十五條　證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アルトキハ證據保全ノ爲メ若クハ鑑定人ノ訊問又ハ檢證ヲ申立ツルコトヲ得

第三百六十六條　訴訟カ既ニ繫屬シタルトキハ此申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ訊問ヲ受ク可キ者ノ現在地又ハ檢證ス可キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ得

訴訟ノ未タ繫屬セサルトキハ前項ニ記載シタル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ要ス

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三百六十七條　申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

貴アルトキハ五十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

又私署證書ノ眞正ナルコトヲ眞實ニ反キテ爭フトキハ前項ト同一ナル條件ヲ以テ二十圓以下ノ過料ヲ言渡ス

第三百五十六條　本節ノ規定ハ事件ノ性質ニ於テ許ス限リハ事跡ノ記念又ハ權利ノ證徵ノ爲メ作リタル劃符、界標等ノ如キモノニモ之ヲ準用ス

第九節　檢證

第三百五十七條　檢證ノ申出ハ檢證物ヲ表示シ及ヒ證ス可キ事實ヲ開示シテ之ヲ爲ス

第三百五十八條　受訴裁判所ハ檢證ヲ爲スニ際シ鑑定人ノ立會ヲ命スルコトヲ得

受訴裁判所ハ檢證及ヒ鑑定人ノ任命ヲ其部員一名ニ命シ又ハ區裁判所ニ囑託スルコトヲ得

第三百五十九條　檢證ヲ爲ス際發見シタル事項ハ調書ニ記載シテ之ヲ明確ナラシメ又必要ナル場合ニ於テハ調書ノ附錄トシテ添附ス可キ圖面ヲ作リ之ヲ明確ナラシム可シ

若シ既ニ記錄ニ圖面ノ存スルトキハ之ヲ檢證物ニ對照シ必要ナル場合ニ於テハ之ヲ更正ス可シ

第十節　當事者本人ノ訊問

第三百六十條　當事者ノ提出シタル許ス可キ證據ヲ調ヘタル結果ニ因リ證ス可キ事實ノ眞否ニ付キ裁判所カ心證ヲ得ルニ足ラサルトキハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ヲ訊問スルコトヲ得

第三百六十一條　裁判所ハ原告若クハ被告ヲ訊問スルコトヲ決定シ且原告若クハ被告ノ自身カ決定言渡ノ際在廷スルトキハ直チニ其訊問ヲ爲スヲ以テ通例トス

第三百六十二條　訊問ヲ受ケル原告若クハ被告ハ供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用井ルコトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用井ルコトヲ得

第三百六十三條　原告若クハ被告カ十分ナル理由ナクシテ供述スルコトヲ拒ミ又ハ訊問期日ニ出頭セサルトキハ裁判所ハ其意見ヲ以テ訊問ニ因リテ擧證ス可キ相手方ノ主張ヲ正當ナリト認ムルコトヲ得

第三百六十四條　訴訟無能力者ノ法律上代理人カ訴訟ヲ爲ストキハ法律上代理人若クハ訴訟無能力者ヲ訊問ス可キヤ又ハ此等ノ者ヲ共ニ訊問ス可キヤ裁判所ノ意見ヲ以テ之ヲ決定ス

法律上代理人數人アルトキハ其一人ヲ訊問ス可キヤ又ハ數人ヲ訊問ス可キヤモ亦前項ニ同シ

第十一節　證據保全

第三百六十五條　證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アルトキハ證據保全ノ爲メ若クハ鑑定人ノ訊問又ハ檢證ヲ申立ツルコトヲ得

第三百六十六條　訴訟カ既ニ繫屬シタルトキハ此申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ爲ス可シ

切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ訊問ヲ受ク可キ者ノ現在地又ハ檢證ス可キ物ノ所在地ヲ管轄スル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ得

訴訟ノ未タ繫屬セサルトキハ前項ニ記載シタル區裁判所ニ申請ヲ爲スコトヲ要ス

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第三百六十七條　申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　相手方ノ表示
第二　證據調ヲ爲ス可キ事實ノ表示
第三　證據方法殊ニ證人若クハ鑑定人ノ訊問ヲ爲ス可キトキハ其表示
第四　證據ヲ紛失スル恐アリ又ハ之ヲ使用シ難キ恐アル理由此理由ハ之ヲ疏明ス可シ

第三百六十八條　申請ニ付テノ決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得
申請ヲ許容スル決定ニハ證據調ヲ爲ス可キ事實及ヒ證據方法殊ニ訊問ス可キ證人若クハ鑑定人ノ氏名ヲ記載ス可シ此決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三百六十九條　證據調ノ期日ニハ申立人ヲ呼出シ又決定及ヒ申請ノ謄本ヲ送達シテ其權利防衛ノ爲ニ相手方ヲモ呼出ス可シ
切迫ナル危險ノ場合ニ於テハ適當ナル時間ニ相手方ヲ呼出スコトヲ得サリシトキト雖モ證據調ヲ妨クルコト無シ

第三百七十　證據調ハ本章第六節、第七節及ヒ第九節ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス
證據調ノ調書ハ證據調ヲ命シタル裁判所ニ之ヲ保存ス可シ各當事者ハ證據調ノ調書ヲ訴訟ニ於テ使用スル權利アリ
受訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ再度ノ證據調ヲ命シ又ハ既ニ調ヘタル證據ノ補充ヲ命スルコトヲ得

第三百七十一條　證據調ハ第三百六十五條ノ條件ナキトキト雖モ相手方ノ承諾ニ因リ之ヲ許スコトヲ得

第三百七十二條　申立人カ相手方ヲ指定セサルトキハ申立人自己ノ過失ニ非スシテ相手方ヲ指定シ能ハサルコトヲ疏明スル場合ニ限リ其申請ヲ許ス
申請ヲ許容シタルトキハ裁判所ハ其知レサル相手方ノ權利防衛ノ爲ニ臨時代理人ヲ任スルコトヲ得

第二章　區裁判所ノ訴訟手續

第一節　通常ノ訴訟手續

第三百七十三條　區裁判所ノ通常ノ訴訟手續ニ付テハ區裁判所ノ構成又ハ第一編及ヒ本節ノ規定ニ依リ差異ノ生セサル限リハ地方裁判所ノ訴訟手續ニ付テノ規定ヲ適用ス

第三百七十四條　訴ハ書面又ハ口頭ヲ以テ裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第三百七十五條　起訴アリタルトキハ裁判所書記ハ訴狀ヲ被告ニ送達スル手續ヲ爲ス
準備書面ノ交換ハ之ヲ爲スコトヲ要セス

第三百七十六條　原告若クハ被告ハ其申立及ヒ事實上ノ主張ニシテ豫メ通知スルニ非サレハ相手方ニ於テ之ニ對シ陳述ヲ爲シ得ヘカラサルモノヲ口頭辯論ノ前直接ニ相手方ニ通知スルコトヲ得

第三百七十七條　口頭辯論ノ期日ト訴狀送達トノ間ニ少ナクトモ三日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス急迫ナル場合ニ於テハ此時間ヲ二十四時マテニ短縮スルコトヲ得
送達ヲ外國ニ於テ爲ス可キトキハ事情ニ應シテ時間ヲ定ムル可シ

第三百七十八條　當事者ハ通常ノ裁判日ニ於テハ豫メ期日ノ指定ナクシテ裁判所ニ出頭シ訴訟ニ付キ辯論ヲ爲スコトヲ得
此場合ニ於テ訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス

第三百七十九條　數個ノ妨訴ノ抗辯ヲ本案ノ辯論前同時ニ提出ス可キ規定ハ裁判所管轄選ノ抗辯ニ限リ之ヲ適用ス
被告ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ム權利ナシ然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ右抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得

第三百八十條　第二百二十二條、第二百六十六條乃至第二百七十二條ノ規定ハ區裁判所ノ訴訟手續ニ之ヲ適用ス
然レトモ原告若クハ被告ノ申立及ヒ陳述ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ訴訟關係ヲ十分ニ明確ナラシムル爲メ必要ナルモノニ限リ調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシムル可シ

第三百八十一條　訴ヲ起サントスル者ハ和解ノ爲メ請求ノ目的物ヲ開示シテ相手方ヲ其普通裁判籍ヲ有スル區裁判所ニ呼出ス可キコトヲ申立ツルコトヲ得其申立ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
當事者雙方出頭シ和解ノ調ヒタルトキハ調書ヲ以テ之ヲ明確ナラシム可シ
和解ノ調ハサルトキハ當事者雙方ノ申立ニ因リ其訴訟ニ付キ直チニ辯論ヲ爲ス此場合ニ於ケル訴ノ提起ハ口頭ノ演述ヲ以テ之ヲ爲ス
相手方カ出頭セス又ハ和解ノ調ハサルトキハ此カ爲ニ生シタル費用ハ訴訟費用ノ一分ト看做ス

第二節　督促手續

第三百八十二條　一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ニ付キ債權者ハ通常ノ訴訟手續ニ依ラスシテ督促手續ニ依リ條件附ノ支拂命令ヲ債務者ニ對シ發センコトヲ申立ツルコトヲ得
申請ノ旨趣ニ依レハ申請者反對給付ヲ爲スニ非サレハ其請求ヲ主張スルコトヲ得サルトキ又ハ支拂命令ノ送達ヲ外國ニ於テ爲シ若クハ公示送達ヲ以テ爲ス可キトキハ督促手續ヲ許サス

第三百八十三條　支拂命令ハ區裁判所之ヲ發ス
此命令ハ區裁判所ノ第一審ノ事物ノ管轄ノ制限ナキモノト看做シ通常ノ訴訟手續ニ於ケル訴ノ提起ニ付キ普通裁判籍又ハ不動產上裁判籍ノ屬ス可キ區裁判所ノ管轄ニ專屬ス

第三百八十四條　支拂命令ヲ發スルコトノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
此申請ハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス
第一　當事者及ヒ裁判所ノ表示
第二　請求ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因ノ表示若シ請求ノ數個ナルトキハ其各個ノ一定ノ數額、目的物及ヒ原因ノ表示
第三　支拂命令ヲ發センコトノ申立

第三百八十五條　裁判所ハ申請ヲ調査シ其申請カ前三條ノ規定ニ適當セス又ハ申請ノ旨趣ニ於テ請求ノ理由ナク又ハ現時理由ナキコトノ顯ハルルトキハ其申請ヲ却下ス
請求ノ一分ノミニ付キ支拂命令ヲ發スルコトヲ得サルトキハ亦其申請ヲ却下ス然レトモ數個ノ請求中或ルモノニ理由ナクシテ其他ノモノニ理由アリト見ユルモノニ限リ申請ヲ許容ス右却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス然レトモ通常ノ訴訟手續ニ依リ訴追スルヲ妨クルコト無シ

第三百八十六條　支拂命令ハ豫メ債務者ヲ審訊セスシテ之ヲ

發ス

支拂命令ニハ第三百八十四條第一號及ヒ第二號ニ揭クタル申請ノ要件ヲ記載シ且即時ノ强制執行ヲ避ケント欲セハ此命令送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ請求ヲ滿足セシメ及ヒ其手續ノ費用ニ付キ定ムル數額ヲ債權者ニ辨濟ス可ク又ハ裁判所ニ異議ヲ申立ツ可キ旨ノ債務者ニ對スル命令ヲ記載ス可シ

前項ノ期間ハ爲替ヨリ生スル請求ニ付テハ二十四時間其他ノ請求ニ付テハ申立ニ依リ三日マテニ之ヲ短縮スルコトヲ得

第三百八十七條　權利拘束ノ効力ハ支拂命令ヲ債務者ニ送達スルヲ以テ始マル

支拂命令ノ送達ハ之ヲ債權者ニ通知ス可シ

第三百八十八條　債務者ハ支拂命令ニ對シ書面又ハ口頭ヲ以テ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

第三百八十九條　債務者カ請求ノ全部又ハ一分ニ對シ適當ナル時間ニ異議ヲ申立ツルトキハ支拂命令ノ効力ヲ失フ然レトモ權利拘束ノ効力ヲ存續ス

數個ノ請求中或ルモノニ對シ異議ヲ申立テタルトキハ支拂命令ハ其他ノ請求及ヒ之ニ相當スル費用ノ部分ニ付キ効力ヲ有ス

第三百九十條　適當ナル時間ニ異議ヲ申立テタル場合ニ於テ請求ニ付キ起ス可キ訴カ區裁判所ノ管轄ニ屬スルトキハ其訴ハ支拂命令ノ送達ト同時ニ區裁判所ニ之ヲ起シタルモノト看做ス其口頭辯論ノ期日ハ第三百七十七條ノ規定ニ從ヒテ之ヲ定ム

第三百九十一條　請求ニ付キ起ス可キ訴カ地方裁判所ノ管轄ニ屬スル場合ニ於テハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタル命令送達ノ日ヨリ十四日ノ期間内ニ請求ヲ滿足セシメント欲セハ此期間内ニ債權者ニ通知ス可シ

債權者其通知書ノ送達アリタル日ヨリ起算シ一箇月ノ期間内ニ管轄裁判所ニ訴ヲ起ササルトキハ權利拘束ノ効力ヲ失フ

第三百九十二條　督促手續ノ費用ハ適當ナル時間ニ異議ノ申立アリタル場合ニ於テハ起ス可キ訴訟ノ費用ノ一分ト看做ス

前條ノ場合ニ於テ期間内ニ訴ヲ起ササルトキハ手續ノ費用ハ債權者ノ負擔ニ歸ス

第三百九十三條　支拂命令ハ其命令中ニ揭クタル期間ノ經過後債權者ノ申請ニ依リ之ヲ假ニ執行シ得ヘキコトヲ宣言ス但假執行ノ宣言前債務者異議ヲ申立テサルトキニ限ル

右假執行ノ宣言ハ支拂命令ニ付ス可キ執行命令ヲ以テ之ヲ爲ス其執行命令ニハ債權者ニ於テ計算スル手續ノ費用ヲ揭ク可シ

債權者ノ申請ヲ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第三百九十四條　執行命令ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル闕席判決ト同一ナリトス其執行命令ニ對シテハ第二百五十五條乃至第二百六十四條ノ規定ニ從ヒテ故障ヲ申立ツルコトヲ得

請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ區裁判所ハ其故障ヲ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ申立テタルヤノ點ノミニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス此場合ニ於テハ第三百九十一條第二項ニ定メタル期間ハ故障ヲ許ス判決ノ確定ヲ以テ始マル

第三百九十五條　時期ニ後レテ申立テタル異議ハ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

此却下ノ命令ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第三編　上訴

第一章　控訴

第三百九十六條　控訴ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ第一審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテ之ヲ爲ス

第三百九十七條　終局判決前ニ爲シタル裁判ハ又控訴裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス ト明記シタルトキ又ハ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルトキハ此限ニ在ラス

第三百九十八條　闕席判決ニ對シテハ期日ヲ懈怠シタル者ヨリ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス但故障ヲ許ササル闕席判決ニ對シテハ懈怠ナカリシコトヲ理由トスルトキニ限リ控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得

第三百九十九條　控訴ハ口頭辯論ノ前ニ於テハ被控訴人ノ承諾ナクシテ之ヲ取下クルコトヲ得

控訴ノ取下ハ上訴權ヲ喪失スル結果ヲ生ス

第四百條　控訴期間ハ一ケ月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達ヲ以テ始マル

判決ノ送達前ニ提起シタル控訴ハ無効トス

第四百一條　控訴人ハ自己ノ控訴ヲ拋棄シタルトキ又ハ控訴期間ノ經過シタルトキト雖モ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

第四百二條　被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ拋棄シタルトキ又ハ控訴期間ノ經過シタルトキト雖モ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

附帶控訴ハ本訴ノ係屬スル裁判所ニ於テ口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得

第四百三條　附帶控訴ハ控訴狀ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得

此控訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　控訴セラルル判決ノ表示

第二　此判決ニ對シ控訴ヲ爲ス旨ノ陳述

此他控訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作リ且判決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル變更ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ揭ク若シ新ニ主張セントスル事實及ヒ證據方法アルトキハ其新ナル事實及ヒ證據方法ヲモ揭ク可シ

第四百二條　判然許ス可カラサル控訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル控訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス

此却下ノ命令ニ對シテハ即日抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百三條　控訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第百九十四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ催告ニ付テハ第百九十九條ノ規定ヲ適用ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第二百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四條　答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作リ且被控訴人ノ一定ノ申立及ヒ其主張セントスル新ナル事實及ヒ證據方法ヲ揭ク可シ

第四百五條　被控訴人ハ自己ノ控訴ヲ拋棄シタルトキ又ハ控訴期間ノ經過シタルトキト雖モ附帶控訴ヲ爲スコトヲ得

闕席判決ニ對シ附帶控訴ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトニ付テハ第三百九十八條ノ規定ニ從フ

第四百六條　左ノ場合ニ於テハ附帶控訴ハ其効力ヲ失フ

第一　控訴ヲ不適法トシテ判決ヲ以テ棄却シタルトキ
第二　控訴ヲ取下ケタルトキ
然レトモ被控訴人カ控訴期間内ニ附帯控訴ヲ爲シタルトキハ之ヲ獨立ノ控訴ト看做ス

第四百七條　答辯書ニ新ナル事實若クハ證據方法ヲ掲ケ又ハ附帶控訴ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲ケタルトキハ之ヲ控訴人ニ送達スヘシ

第四百八條　右ノ外控訴ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス

第四百九條　當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ其兩控訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ同時ニ爲スヲ以テ通例トス

第四百十條　口頭辯論ハ其期日ニ於テ被控訴人ノ控訴期間ノ末タ經過セサルトキハ其申立ニ因リ期間ノ滿了マテ之ヲ延期ス

瞬席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ヨリ其判決ニ對シ故障ヲ申立テ相手方ヨリ控訴ヲ起シタルトキハ控訴ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ故障ノ完結マテ職權ヲ以テ之ヲ延期ス

第四百十一條　控訴裁判所ニ於ケル訴訟ハ不服ノ申立ニ因リ定マリタル範圍内ニ於テ更ニ之ヲ辯論ス

第四百十二條　當事者ハ其控訴ノ申立及ヒ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ當否ヲ明瞭ナラシムル爲メ必要ナル限リハ口頭辯論ノ際第一審ニ於ケル辯論ノ結果ヲ演述スヘシ
演述ノ不正確又ハ不完全ナル場合ニ於テハ裁判長ハ其更正若クハ補完ヲ爲サシメ又必要ナル場合ニ於テハ辯論ヲ再開シ又之ヲ爲サシムヘシ

第四百十三條　訴ノ變更ハ相手方ノ承諾アルトキ雖モ之ヲ許サス

第四百十四條　妨訴ノ抗辯ハ職權ヲ以テ調査スヘカラサルモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限リ之ヲ主張スルコトヲ得
本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得ス然レトモ裁判所ハ職權ヲ以テ妨訴ノ抗辯ニ付キ分離シタル辯論ヲ命スルコトヲ得

第四百十五條　當事者ハ第一審ニ於テ主張セサリシ攻撃防禦ノ方法殊ニ新ナル事及ヒ證據方法ヲ提出スルコトヲ得

第四百十六條　新ナル請求ハ第百九十六條第二號及ヒ第三號ノ場合又ハ相殺スルコトヲ得ヘキモノニシテ且原告若クハ被告カ其過失ニ非スシテ第一審ニ於テ提出シ能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限リ之ヲ起スコトヲ得

第四百十七條　事實又ハ證書ニ付第一審ニ於テ爲ササリシ陳述又ハ拒ミタル陳述ハ第二審ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十八條　第一審ニ於テ爲シタル裁判上ノ自白ハ第二審ニ於テモ亦其効力ヲ有ス

第四百十九條　控訴裁判所ハ控訴ヲ許ス可キヤ否ヤ又控訴ヲ法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ起シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可シ若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ控訴ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百二十條　第一審ノ裁判ハ變更ヲ申立テタル部分ニ限リ之ヲ變更スルコトヲ得

第四百二十一條　第一審ニ於テ是認シ又ハ非認シタル請求ニ

關スル總ノ爭點ニシテ申立ニ從ヒ辯論及ヒ裁判ヲ必要トスルモノハ第一審ニ於テ此爭點ニ付辯論及ヒ裁判ヲ爲ササルトキト雖モ控訴裁判所ニ於テ其辯論及ヒ裁判ヲ爲ス

第四百二十二條　控訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付尚ホ辯論ヲ必要トスルトキハ其事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス可シ

第一　不服ヲ申立テラレタル判決カ瞬席判決ナルコト
第二　不服ヲ申立テラレタル判決カ瞬席判決ニ對スル故障ヲ不適法トシテ棄却シタルモノナルトキ
第三　不服ヲ申立テラレタル判決カ妨訴ノ抗辯ノミニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナルトキ

第四　請求カ其原因及ヒ數額ニ付キ爭アル場合ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決カ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲シタルモノナルトキ

第五　不服ヲ申立テラレタル判決カ證書訴訟及ヒ爲替訴訟ニ於テ敗訴ノ被告ニ對訴訟ヲ以テ追行ヲ爲ス權ヲ留保シタルモノナキトキ

第四百二十三條　第一審ニ於テ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルトキハ控訴裁判所ハ其判決及ヒ違背シタル訴訟手續ノ部分ヲ廢棄シ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻スコトヲ得

第四百二十四條　控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ

第四百二十五條　判決ヲ控訴人ノ不利益ニ變更スルコトハ相手方カ控訴又ハ附帶控訴ノ方法ヲ以テ判決ニ付キ不服ヲ申立テタル部分ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第四百二十六條　第二百十條ノ規定ニ從ヒテ防禦ノ方法ヲ却下スルトキハ其防禦ノ方法ヲ主張スル權ハ之ヲ被告ニ留保ス可シ

判決ニ此留保ヲ掲ケサルトキハ第二百四十二條ノ規定ニ從ヒテ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得
留保ヲ掲ケタル判決ハ上訴及ヒ强制執行ニ付テハ終局判決ト看做ス

第四百二十七條　防禦ノ方法ニシテ被告ニ其主張ヲ留保スルモノニ付テハ其訴訟ニ其二審ニ繫屬ス
爾後ノ手續ニ於テ訴ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルルトキハ前判決ヲ廢棄シテ其訴ヲ棄却シ且申立ニ因リ判決ニ基キ支拂ヒタルモノ又ハ給付シタルモノヲ返還ス可キコトヲ言渡シ竝ニ費用ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ

第四百二十八條　控訴人カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セサルトキハ出頭シタル被控訴人ノ申立ニ因リ瞬席判決ヲ以テ控訴ノ棄却ヲ言渡ス可シ

第四百二十九條　被控訴人口頭辯論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テ出頭シタル控訴人ヨリ瞬席判決ノ申立ヲ爲ストキハ第一審裁判ノ憑據ト爲リタルモノニ牴觸セサル控訴人ノ事實上ノ供述ハ被控訴人之ヲ自白シタルモノト看做シ且第一審裁判所ノ事實上ノ確定ヲ補充シ若クハ辨駁スル爲メ控訴人ノ申立テタル適法ノ證據調ハ既ニ之ヲ爲シ及ヒ其結果ヲ得タルモノト看做シ瞬席判決ヲ爲ス

第四百三十條　判決中ノ事實ノ摘示ニ付テハ前審ノ判決ヲ引用スルコトヲ得

第四百三十一條　控訴裁判所ノ書記ハ控訴狀ノ提出ヨリ二十四時間ニ第一審裁判所ノ書記ニ訴訟記錄ノ送付ヲ求ムヘシ」

控訴完結ノ後其記錄ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル謄本ト共ニ第一審裁判所ノ書記ニ之ヲ返還ス可シ

第二章　上告

第四百三十二條　上告ハ地方裁判所及ヒ控訴院ノ第二審ニ於テ爲シタル終局判決ニ對シテ之ヲ爲ス

第四百三十三條　終局判決前ニ爲シタル裁判ト雖モ上告裁判所ノ判斷ヲ受ク但此法律ニ於テ不服ヲ申立ツルコトヲ得スト明記シタルトキハ此限ニ在ラス

第四百三十四條　上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第四百三十五條　法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス

第四百三十六條　裁判ハ左ノ場合ニ於テハ當ニ法律ニ違背シタルモノトス

第一　規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セサリシトキ

第二　法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事カ裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其効ナカリシトキハ此限ニ在ラス

第三　判事カ忌避セラレ且忌避ノ申請ヲ理由アリト認メタルニ拘ハラス裁判ニ參與シタルトキ

第四　裁判所カ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ

第五　訴訟手續ニ於テ原告若クハ被告カ法律ノ規定ニ從ヒ代理セラレサリシトキ

第六　訴訟手續ノ公行ニ付テノ規定ニ違背シタル口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲シタルトキ

第七　裁判ニ理由ヲ付セサルトキ

第四百三十七條　上告期間ハ一箇月トス此期間ハ不變期間ニシテ判決ノ送達前ニ提起シタル上告ハ無効トス

第四百三十八條　上告ノ提起ハ上告狀ヲ上告裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス

此上告狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　上告セラルル判決ノ表示

第二　此判決ニ對シ上告ヲ爲ス旨ノ陳述

此他上告狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作リ特ニ判決ニ對シ如何ナル程度ニ於テ不服ナルヤ及ヒ判決ニ付キ如何ナル程度ニ於テ破毀ヲ爲ス可キヤノ申立ヲ掲ク且法則ヲ適用セス若クハ不當ニ適用シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其法則ノ表示又ハ訴訟手續ニ付テノ規定ニ違背シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其欠缺ヲ明カニスル事實ノ表示又ハ法律ニ違背シテ事實ヲ確定シ若クハ證據ヲ提出シタリト看做シタルコトヲ上告ノ理由トスルトキハ其事實ノ表示ヲ掲ク可シ

第四百三十九條　上告裁判所ハ上告人ヲ呼出シ其陳述ヲ聽キ上告ヲ許ス可カラサルモノナルトキ又ハ法律上ノ方式及ヒ期間ニ於テ起ササルトキ又ハ第四百三十四條ノ規定ニ依ラサルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却ス可シ

上告人カ呼出ノ期日ニ出頭セサルトキハ上告ヲ取下クタルモノト看做ス但出頭セサリシコトヲ期日ヨリ七日ノ期間内ニ十分ナル理由ヲ以テ辯解シタルトキハ更ニ期日ヲ定ム

第四百四十條　上告狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニ存スルコトヲ要スル時間ニ付テハ第百九十四條ノ規定ヲ適用シ答辯書ヲ差出ス可キ期間ノ儘告ニ付テハ第百九十九條ノ規定ヲ適用ス

前項ノ場合ニ於テモ亦第二百三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第四百四十一條　答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作リ且一定ノ申立ヲ掲ク可シ

第四百四十二條　被上告人ハ附帶上告ヲ爲スコトヲ得

此附帶上告ニ付テハ附帶控訴ノ規定ヲ準用ス

第四百四十三條　答辯書ニ附帶上告ヲ爲ス旨ノ陳述ヲ掲クタルトキハ之ヲ上告人ニ送達ス可シ

第四百四十四條　右ノ外上告ノ訴訟手續ニハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ノ規定ヲ準用ス但本章ノ規定ニ依リ差異ノ生スルモノハ此限ニ在ラス

第四百四十五條　上告裁判所ハ當事者ノ爲シタル申立ノミニ付キ調査ヲ爲ス

第四百四十六條　上告裁判所ハ裁判ヲ爲スニ付キ控訴裁判所カ其裁判ノ憑據トシタル事實ヲ標準トス此事實ノ外ハ第四百三十八條第三項ニ掲クタル事實ニ限リ之ヲ斟酌スルコトヲ得

證據調ヲ必要トスルトキハ上告裁判所ハ之ヲ命ス可シ

第四百四十七條　上告ヲ理由アリトスルトキハ不服ヲ申立テタル判決ヲ破毀ス可シ

訴訟手續ニ關スル規定ニ違背シタルニ因リ判決ヲ破毀スルトキハ其違背シタル部分ニ限リ訴訟手續ヲモ亦破毀ス可シ

第四百四十八條　判決ヲ破毀スル場合ニ於テハ第四百五十一條ノ規定ヲ除ク外更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ事件ヲ控訴裁判所ニ差戻シ又ハ之ヲ他ノ同等ナル裁判所ニ移送ス可シ

事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ新口頭辯論ニ基キ裁判ヲ爲スコトヲ要ス

第四百四十九條　當事者ハ破毀セラレタル判決ノ以前ニ於ケル口頭辯論ニ當リ提出スルコトヲ得ヘカリシ事項ヲ新口頭辯論ニ際シ提出スル權利アリ

第四百五十條　事件ノ差戻又ハ移送ヲ受ケタル裁判所ハ上告裁判所ノ爲シタル法律ニ係ル判斷ニシテ判決ヲ破毀スル基本ト爲シタルモノヲ以テ新ナル辯論及ヒ裁判ノ基本ト爲ス義務アリ

第四百五十一條　上告裁判所ハ左ノ場合ニ於テ事件ニ付キ裁判ヲ爲ス可シ

第一　確定シタル事實ニ法律ヲ適用スルニ當リ法律ニ違背シタル爲ニ判決ヲ破毀シ且其事件カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキ

第二　無訴權ノ爲メ又ハ裁判所ノ管轄違ナル爲ニ判決ヲ破毀スルトキ

第四百五十二條　上告ヲ理由ナシトスルトキハ之ヲ棄却ス可シ

第四百五十三條　裁判カ其理由ニ於テ法律ニ違背シタルトキト雖モ他ノ理由ニ因リ裁判ノ正當ナルトキハ上告ヲ棄却ス可シ

第四百五十四條　左ノ諸件ニ關スル控訴ノ規定ハ上告ニ之ヲ

準用ス

第一　隔席判決ニ對スル不服ノ申立

第二　控訴ノ取下

第三　當事者ノ雙方ヨリ控訴ヲ起シタル場合ニ於ケル訴訟手續及ヒ控訴ト故障トヲ同時ニ爲シタルトキノ訴訟手續

第四　口頭辯論ノ延期

第五　口頭辯論ノ際ニ於ケル當事者ノ演述

第六　妨訴ノ抗辯ニ付テノ辯論

第七　控訴ヲ起シタル者ノ不利益ト爲ル裁判ヲ爲ス可カラサルコト

第八　記錄ノ送付竝ニ返還

第三章　抗告

第四百五十五條　抗告ハ訴訟手續ニ關スル申請ヲ口頭辯論ヲ經スシテ却下シタル裁判ニ對シ其他此法律ニ於テ特ニ揭ケタル場合ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第四百五十六條　抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲ス

抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ因リ新ナル獨立ノ抗告理由ヲ生シタルトキニ非サレハ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百五十七條　抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ處スル裁判所ニ抗告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス

訴訟ヲ區裁判所ニ屬シ若クハ事ヲ屬シタルトキ又ハ區人、鑑定人ヨリ若クハ證書ヲ提出スル義務アリト宣言ヲ受ケタル第三者ヨリ抗告ヲ爲ストキハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百五十八條　抗告ハ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ以テ證據ト爲スコトヲ得

第四百五十九條　不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長カ再度ノ考案若クハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナシトスルトキハ裁判所又ハ裁判長ハ意見ヲ付シテ三日ノ期間内ニ抗告ヲ抗告裁判所ニ送付シ又適當トスル場合ニ於テハ訴訟記錄ヲモ送付ス可シ

第四百六十條　抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ニ限リ執行停止ノ効力ヲ有ス

然レトモ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ハ抗告ニ付テノ裁判アルマテ其執行ノ中止ヲ命スルコトヲ得

抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ノ執行中止ヲ命スルコトヲ得

第四百六十一條　抗告ハ急迫ナル場合ニ限リ直チニ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ハ裁判ヲ爲ス前ニ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ意見及ヒ記錄ヲ要求スルコトヲ得

抗告裁判所ハ事件ヲ急迫ナラスト認ムルトキハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ其事件ヲ送付シ且其旨ヲ抗告人ニ通知ス可シ

第四百六十二條　抗告裁判所ハ口頭辯論ヲ經スシテ裁判ヲ爲

スヲ以テ通例トス

抗告裁判所ハ抗告人ト反對ノ利害關係ヲ有スル者ニ抗告ヲ通知シタル書面ノ上ノ陳述ヲナサシムルコトヲ得

陳述ハ口頭ヲ以テ抗告ヲ爲シ得ヘキ場合ニ於テハ亦口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

抗告裁判所ハ口頭辯論ノ爲ニ當事者ヲ呼出スコトヲ得

第四百六十三條　抗告裁判所ハ抗告ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ方式ニ從ヒ若クハ其期間ニ於テ提出シタルヤ否ヤヲ職權ヲ以テ調査ス可シ

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ抗告ヲ不適法トシテ棄却ス可シ

第四百六十四條　抗告ヲ適法ニシテ且理由アリトスルトキハ抗告裁判所ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ廢棄シテ自ラ更ニ裁判ヲ爲シ又ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ委任シテ裁判ヲ爲サシムルコトヲ得

抗告裁判所ノ裁判ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ニ之ヲ通知ス可シ

第四百六十五條　受命判事若クハ受託判事ノ裁判又ハ裁判所書記ノ處分ノ變更ヲ求ムルニハ先ツ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ム可シ

抗告ハ受訴裁判所ノ裁判ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

第一項ノ規定ハ大審院ニモ亦之ヲ適用ス

第四百六十六條　即時抗告ノ場合ニ於テハ左ノ特別ノ規定ニ從フ

抗告ハ七日ノ不變期限内ニ之ヲ爲ス可シ其期間ハ裁判ノ送達ヨリ始マリ第二百五十三條、第六百八十條及第七百六十九條第三者ヨリ抗告ヲ爲ストキハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百六十七條　抗告ハ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ以テ證據ト爲スコトヲ得

第四百六十八條　抗告ハ執行停止ノ効力ヲ有ス

第四百六十九條　抗告裁判所ハ抗告ヲ理由アリト認メタルトキハ原裁判ヲ取消シ又ハ變更スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ理由ナシト認メタルトキハ抗告ヲ棄却ス可シ

第四百七十條　抗告裁判所ハ抗告ヲ棄却シ又ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百七十一條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百七十二條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百七十三條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百七十四條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百七十五條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百七十六條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百七十七條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百七十八條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百七十九條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百八十條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百八十一條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百八十二條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百八十三條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百八十四條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百八十五條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百八十六條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百八十七條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百八十八條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百八十九條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百九十條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百九十一條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百九十二條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百九十三條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百九十四條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百九十五條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百九十六條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百九十七條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百九十八條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第四百九十九條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百一條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百二條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百三條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百四條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百五條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百六條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百七條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百八條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百九條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百十條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百十一條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百十二條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百十三條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百十四條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百十五條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百十六條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百十七條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百十八條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百十九條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百二十條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百二十一條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百二十二條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百二十三條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百二十四條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百二十五條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百二十六條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百二十七條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百二十八條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百二十九條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百三十條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百三十一條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百三十二條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百三十三條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百三十四條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百三十五條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百三十六條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百三十七條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百三十八條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百三十九條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百四十條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百四十一條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百四十二條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百四十三條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百四十四條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百四十五條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百四十六條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百四十七條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百四十八條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百四十九條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百五十條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百五十一條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百五十二條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百五十三條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百五十四條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百五十五條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百五十六條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百五十七條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百五十八條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百五十九條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百六十條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百六十一條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百六十二條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百六十三條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百六十四條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

第五百六十五條　抗告裁判所ハ抗告ニ付テノ裁判ヲ爲スニ付テハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可シ

抗告ヲ取下ケタルトキハ抗告ニ關スル費用ノ負擔ヲ命スル裁判ヲ爲ス可

第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テ上訴若クハ故障ヲ以テ取消ヲ主張シ得ヘカリシトキハ取消ノ訴ヲ許サス

第四百六十九條　左ノ場合ニ於テハ原狀回復ノ訴ニ因リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第一　刑法ニ掲ケタル職務上ノ義務ニ違背シタル罪ヲ訴訟ニ關シ犯シタル判事カ裁判ニ參與シタリシトキ

第二　原告若クハ被告ノ法律上代理人若クハ訴訟代理人又ハ相手方若クハ其ノ法律上代理人若クハ訴訟代理人カ罰セラル可キ行爲ヲ訴訟ニ關シテ爲シタリシトキ

第三　判決ノ憑據ト爲リタル證書カ僞造又ハ變造ナリシトキ

第四　證人若クハ鑑定人カ偽述ニ因リ又ハ通事カ判決ノ憑據ト爲リタル通譯ニ因リ僞造ノ罪ヲ犯シタリシトキ

第五　判決ノ憑據ト爲リタル刑事上ノ判決カ他ノ確定ト爲リタル刑事上ノ判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタリシトキ

第六　原告若クハ被告カ同一ノ事件ニ付テノ判決ニシテ前ニ確定ト爲リタルモノヲ發見シ其判決カ不服ヲ申立テラレタル判決ト牴觸スルトキ

第七　相手方若クハ第三者ノ所爲ニ依リ以前ニ提出スルコトヲ得サリシ證書ニシテ原告若クハ被告ノ利益ト爲ル可キ裁判ヲ爲スニ至ラシム可キモノヲ發見シタルトキ

第一號乃至第四號ノ場合ニ於テハ罰セラル可キ行爲ニ付テ判決カ確定ト爲リタルトキ又ハ證據欠缺外ナル理由ヲ以テ刑事訴訟手續ノ開始若クハ實行ヲ爲シ得サルトキニ限リ再審ヲ求ムルコトヲ得

第四百七十條　原狀回復ノ訴ハ原告若クハ被告カ自己ノ過失ニ非スシテ前訴訟手續ニ於テ殊ニ故障又ハ控訴若クハ附帶控訴ニ依リ原狀回復ノ理由ヲ主張スルコト能ハサリシトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第四百七十一條　不服ヲ申立テラレタル判決前ニ同一ノ裁判所又ハ下級ノ裁判所ニ於テ爲シタル裁判ニ關スル不服ノ理由ハ再審ヲ求ムル訴ト共ニ之ヲ主張スルコトヲ得但不服ヲ申立テラレタル判決カ其裁判ニ根據スルトキニ限ル

第四百七十二條　再審ヲ求ムル訴ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所ノ管轄ニ專屬ス

同一ノ事件ニ付キ一分ハ下級ノ裁判所又一分ハ上級ノ裁判所ニ於テ爲シタル數個ノ判決ニ對スル訴ハ上級ノ裁判所ノ管轄ニ專屬ス

督促手續ニ依リテ區裁判所ノ發シタル執行命令ニ對シ再審ヲ求ムル訴ハ其命令ヲ發シタル區裁判所ノ管轄ニ專屬ス然レトモ其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ請求ニ付テノ訴訟ヲ管轄スル裁判所ニ專屬ス

第四百七十三條　訴ノ提起及ヒ其後ノ訴訟手續ニハ以上數條ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケサル限リハ其訴ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可キ裁判所ノ訴訟手續ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百七十四條　訴ハ一ケ月ノ不變期間內ニ之ヲ起ス可シ

此期間ハ原告若クハ被告カ不服ノ理由ヲ知リタル日ヲ以テ始マル若シ原告若クハ被告カ判決ノ確定前ニ不服ノ理由ヲ

知リタルトキハ判決ノ確定ヲ以テ始マル

判決確定ノ日ヨリ起算シ五ケ年ノ滿了後ハ訴ヲ爲スコトヲ得ス

前二項ノ規定ハ第四百六十八條第四號ノ場合ニ之ヲ適用セス此場合ニ於テ其訴ノ提起ノ期間ハ原告若クハ被告又ハ其法律上代理人カ送達ニ因リ判決アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

第四百七十五條　訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ受クル判決ノ表示

第二　取消又ハ原狀回復ノ訴ヲ起ス旨ノ陳述

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ作リ且不服ノ理由ノ表示、此理由及ヒ不變期間ナリ不變期間ノ遵守ヲ明白ナラシムル事實ニ付テノ證據方法又如何ナル程度ニ於テ不服ヲ申立テラレタル判決ヲ廢棄若クハ破毀ス可キヤノ申立又本案ニ付キ更ニ如何ナル裁判ヲ爲ス可キヤノ申立ヲモ掲ク可シ

第四百七十六條　判然許ス可カラサル訴又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル訴ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第四百七十七條　原告ハ口頭辯論ノ期日ニ於テ相手方ノ陳述ノ有無ニ拘ハラス再審ヲ求ムル理由及ヒ法律上ノ期間ノ遵守ヲ明白ニスル事實ヲ疏明ス可シ

第四百七十八條　許ス可カラサル訴又ハ法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ノ經過後ニ起シタル訴ハ職權ヲ以テ判決ニ因リ不適法トシテ之ヲ棄却ス可シ

第四百七十九條　本案ニ付テノ辯論及ヒ裁判ハ不服申立ノ理由ノ存スル部分ニ限リ更ニ之ヲ爲ス可シ

裁判所ハ本案ニ付テノ辯論前ニ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲スコトヲ得此場合ニ於テハ本案ニ付テノ辯論ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ許否ニ付テノ辯論ノ續行ト見做ス

第四百八十條　原告ノ不利益ト爲ル判決ノ變更ハ相手方カ再審ヲ求ムル訴ヲ起シテ變更ヲ申立テタルトキニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第四百八十一條　訴カ上告裁判所ニ屬スルトキハ上告裁判所ハ再審ヲ求ムル理由及ヒ其許否ニ付テノ辯論ノ完結カ係爭事實ノ確定及ヒ擔保ニ繫ルトキト雖モ其完結ヲ爲ス可シ

第四百八十二條　上訴ハ訴ニ付キ裁判ヲ爲シタル裁判所ノ判決ニ對シ一般ニ爲スコトヲ得ヘキトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第四百八十三條　第三者ト原告及ヒ被告ノ共謀ニ因リ第三者ノ債權ヲ詐害スル目的ヲ以テ判決ヲ爲サシメタリト主張シ其判決ニ對シ不服ヲ申立ツルトキハ原狀回復ノ訴ニ因レル再審ノ規定ヲ準用ス

此場合ニ於テハ原告及ヒ被告ヲ共同被告ト爲ス

第五章　證書訴訟及ヒ爲替訴訟

第四百八十四條　一定ノ金額ノ支拂其他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ヲ起ス理由タル總テノ必要ナル事實ヲ證書ニ依リ證スルコトヲ得ヘキトキハ證書訴訟ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得

第四百八十五條　訴狀ニハ證書訴訟トシテ訴フル旨ノ陳述ヲ

揭ケ且證書ノ原本又ハ謄本ヲ添フルコトヲ要ス

第四百八十六條　本案ノ辯論ハ妨訴ノ抗辯ニ基キ之ヲ拒ムコトヲ得ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ此抗辯ニ付キ辯論ノ分離ヲ命スルコトヲ得

第四百八十七條　反訴ハ之ヲ爲スコトヲ得ス

證書ノ眞否及ヒ第四百八十四條ニ揭ケタル以外ノ事實ニ關シテハ證書ノミヲ以テ適法ノ證據方法ト爲スコトヲ得

證書ノ申出ハ證書ノ提出ヲ以テノミ之ヲ爲スコトヲ得

第四百八十八條　原告ハ口頭辯論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ要セスシテ通常ノ手續ニテ訴訟ヲ繫屬セシメテ證書訴訟ヲ止ムルコトヲ得

第四百八十九條　訴ヲ以テ主張シタル請求カ理由ナシト見エ又ハ被告ノ抗辯ニ因リ理由ナシト見エルトキハ原告ノ請求ヲ却下ス可シ

證書訴訟ヲ許ス可カラサルトキ殊ニ適法ノ證據方法ヲ以テ原告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ擧ケサル場合ニ於テハ被告カ口頭辯論ノ期日ニ出頭セス又ハ法律上ノ理由ナキ異議若クハ證書訴訟ニ於テ許ササル異議ノミヲ以テ訴ニ對シ抗辯シタルトキト雖モ此訴訟ニ於テハ其訴ヲ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第四百九十條　證書訴訟ニ於テ適法ノ證據方法ヲ以テ被告ノ義務タル證據ヲ申出テス又ハ完全ニ之ヲ擧ケサルトキハ被告ノ異議ハ證書訴訟ニ於テ許ササルモノトシテ之ヲ却下ス可シ

第四百九十一條　主張シタル請求ヲ爭ヒタル被告ニハ敗訴ノ言渡ヲ受ケタル總テノ場合ニ於テ其權利ノ行使ヲ留保スヘシ

判決ニ此留保ヲ揭ケサルトキハ第二百四十二條ノ規定ニ依リ判決ノ補充ヲ申立ツルコトヲ得

留保ヲ揭ケタル判決ハ上級及ヒ强制執行ニ付テハ之ヲ終局判決ト看做ス

第四百九十二條　被告ニ權利ノ行使ヲ留保シタルトキハ訴訟ハ通常ノ訴訟手續ニ於テ繫屬ス

此手續ニ於テ證書訴訟ヲ以テ主張シタル請求ノ理由ナカリシコトノ顯ハルルトキハ前判決ヲ廢棄シ原告ノ請求ヲ却下シ且生セシメタル費用ノ全部又ハ一分ノ辨濟ヲ原告ニ言渡シ又前判決ニ基キ被告ヨリ支拂ヒ又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ申立ニ因リ原告ニ言渡ス可シ

右手續ニ於テ原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ闕席判決ニ關スル規定ヲ準用ス

第四百九十三條　第四百二十六條及ヒ第四百二十七條ノ規定ハ證書訴訟ニ之ヲ適用セス

第四百九十四條　商法ニ規定シタル手形ニ因ル請求ヲ證書訴訟ヲ以テ主張スルトキハ爲替訴訟トシテ以下二條ニ揭ケル特則ノ規定ヲ適用ス

第四百九十五條　爲替ノ訴ハ支拂地ノ裁判所又ハ被告カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所ニ之ヲ起スコトヲ得

數人ノ爲替義務者カ共同ニテ訴ヲ受ケ可キトキハ支拂地ノ裁判所又ハ被告ノ各人カ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所ニ各之ヲ管轄ス

第四百九十六條　訴狀ニハ爲替訴訟トシテ訴フル旨ヲ揭ケルコトヲ要ス

訴ノ許ス可キモノナルトキハ直チニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム」

口頭辯論ト訴狀送達トノ間ニハ少クトモ二十四時ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

第六篇　强制執行

第一章　總則

第四百九十七條　强制執行ハ確定ノ終局判決又ハ假執行ノ宣言ヲ付シタル終局判決ニ因リテ之ヲ爲ス

第四百九十八條　判決ハ適法ナル故障ノ申立又ハ適法ナル上訴ノ提起ニ付キ定メタル期間ノ滿了前ニハ確定セサルモノトス

判決ノ確定ハ故障若クハ上訴ヲ其期間內ニ申立若クハ提起スルニ因リ之ヲ遮斷ス

第四百九十九條　原告若クハ被告カ判決ノ確定ニ付キ證明書ヲ求ムルトキハ第一審裁判所ノ書記ハ記錄ニ基キ之ヲ付與ス

訴訟カ猶ホ上級審ニ於テ繫屬中ナルトキハ上級裁判所ノ書記ハ判決ノ確定ト爲リタル部分ノミニ付キ證明書ヲ付與ス」

判決ニ對シ上訴ノ提起ナキ場合ニ非サレハ證明書ヲ付與スルコトヲ得サルトキニ限リ上訴ヲ管轄スル裁判所ノ書記カ不變期間內ニ上訴ノ提起ナキコトヲ認メタル證明書ヲ以テ足ル

第五百條　原狀回復又ハ再審ヲ求ムル申立アルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ保證ヲ立テシメ又ハ保證ヲ立テシメスシテ强制執行ヲ一時停止ス可キコトヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ强制執行ヲ爲ス可キコトヲ命シ及ヒ保證ヲ立テシメテ其爲シタル强制處分ヲ取消ス可キヲ命スルコトヲ得

保證ヲ立テシメスシテ爲ス强制執行ノ停止ハ其執行ニ因リ償フコト能ハサル損害ヲ生ス可キコトヲ疏明スルトキニ限リ之ヲ許ス

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得其裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第五百一條　左ノ判決ニ付テハ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一　認諾ニ基キ敗訴ヲ言渡ス判決

第二　證書訴訟又ハ爲替訴訟ニ於テ言渡ス判決

第三　同一審ニ於テ同一ノ原告若クハ被告ニ對シ本案ニ付キ言渡シタル第二又ハ其後ノ闕席判決

第四　假差押又ハ假處分ヲ取消ス判決

第五　裝料ヲ支拂フ義務ヲ言渡ス判決但訴ノ提起後ノ時間及ヒ其提起前最後ノ三箇月間ノ爲ニ支拂フ可キモノナルトキニ限ル

第五百二條　左ノ場合ニ於テハ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一　總テノ住家其他ノ建物又ハ其或ル部分ノ受取、明渡、使用、占據若クハ修繕ニ關シ又ハ賃借人ノ家具若クハ所持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關シ賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

第二　占有ノミニ係ル訴訟

第三　屆主ト屆人トノ間ニ屆期限一ケ年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

第四　左ニ揭ケタル事項ニ付キ旅人ト旅店若クハ飮食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタ

ル訴訟

イ　賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

ロ　旅店若クハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲メ預ケタル手荷物、金錢又ハ有價物

第五　此他財産權上ノ賭求ニ關シ金額又ハ價額ニ於テ弐拾圓ヲ超過セサル訴訟但其物ノ價額ニ付テハ第三條乃至第六條ノ規定ヲ適用ス

第五百三條　前二條ニ揭ケタル外左ノ場合ニ於テハ財産權上ノ賭求ニ關スル判決ニ限リ債權者ノ申立ニ因リ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一　債權者ヵ執行ノ前ニ保證ヲ申立テシト申出ツルトキ

第二　債權者カ判決ノ確定ト爲ル前ニ判決ヲ執行セハ回復スルコトヲ得サル損害ヲ受ク可キコトヲ疏明シタルトキハ其申立ニ因リ左ノ宣言ヲ爲ス可シ

第一　第五百一條ノ場合ニ於テハ判決ヲ假ニ執行ス可カラサルコト

第二　第五百二條及ヒ第五百三條ノ場合ニ於テハ債權者ノ假執行ノ申立ヲ却下スルコト

第五百五條　總テノ場合ニ於テ裁判所ハ債務ノ申立ニ因リ債權者擔メ保證ヲ立ツルトキハ假執行ヲ爲シ得ヘキ旨ヲ宣言スルコトヲ得

債權者カ執行ノ前ニ保證ヲ立ツルコトヲ申立テサルトキハ債務者ノ申立ニ因リ債務者ニ保證ヲ立テシメ又ハ供託ヲ爲サシメ執行ヲ免カルヽコトヲ許ス可シ

第五百六條　假執行ニ關スル申立ハ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結前ニ之ヲ爲ス可シ

第五百七條　假執行ニ付テノ裁判ハ判決主文ニ之ヲ揭ク可シ

第五百八條　職權ヲ以テ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ場合ニ於テモ假執行ニ付テノ裁判ヲ爲ササルトキ又ハ判決ノ假執行ヲ宣言ス可キ債權者ノ申立ヲ看過シタルトキハ第二百四十二條及ヒ第二百四十三條ノ規定ニ從ヒ判決ノ補充ヲ爲スコトヲ得

第五百九條　第一審又ハ第二審ノ判決ニシテ假執行ノ宣言ヲカリシモノ又ハ條件付ノ假執行宣言ヲ爲シタルモノハ上訴ヲ以テ不服ヲ申立テサル部分ニ限リ口頭辯論ノ進行中ニ爲シタル原告若クハ被告ノ申立ニ因リ上級審ニ於テ其判決ニ假執行ノ宣言ヲ付ス可シ

第五百十條　本案ノ裁判又ハ假執行ノ宣言ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更スル判決ノ言渡アルトキハ假執行ハ其廢棄若クハ破毀又ハ變更ヲ爲ス限度ニ於テ効力ヲ失フ

假執行ノ宣言アリタル本案ノ判決ヲ廢棄若クハ破毀又ハ變更スルトキハ判決ニ基キ被告ノ支拂又ハ給付シタルモノノ辨濟ヲ被告ノ申立ニ因リ判決ヲ以テ原告ニ言渡ス可シ

第五百十一條　第二審ニ於テハ申立ニ因リ先ツ假執行ニ付キ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス可シ

口頭辯論ノ延期ニ付テノ第四百十條ノ規定ハ此場合ニ於テハ之ヲ適用セス

第二審ニ於テ假執行ニ付キ爲シタル裁判ニ對シテハ不服ヲ申出ツルコトヲ得ス

第五百十二條　假執行ノ宣言ヲ付シタル判決ニ對シ故障ヲ申立又ハ上訴ヲ起シタルトキハ第五百條ノ規定ヲ準用ス

第五百十三條　本編ノ規定ニ從ヒ原告若クハ被告ニ保證ヲ立ツル義務ヲ負ハシメ若クハ保證ヲ立又ハ依託ヲ爲スコトヲ許シタル場合ニ於テハ原告若クハ被告ハ其普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ執行裁判所ニ保證ヲ立又ハ依託ヲ爲スコトヲ得

保證ヲ立又ハ依託ヲ爲シタルコトニ付テハ求ニ因リ證明書ヲ付與ス可シ

第五百十四條　外國裁判所ノ判決ニ因レル强制執行ハ本邦ノ裁判所ニ於テ執行判決ヲ以テ其適法ナルコトヲ言渡シタルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

執行判決ヲ求ムル訴ニ付テハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所又ハ地方裁判所之ヲ管轄シ又普通裁判籍ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル裁判所之ヲ管轄ス

第五百十五條　執行判決ハ裁判ノ當否ヲ調査セスシテ之ヲ爲ス可シ

執行判決ヲ求ムル訴ハ左ノ場合ニ於テハ之ヲ却下ス可シ

第一　外國裁判所ノ判決ノ確定ト爲リタルコトヲ證明セサルトキ

第二　本邦ノ法律ニ依リ强ヲ爲サシムルコトヲ得サル行爲ヲ執行セシムル可キトキ

第三　本邦ノ法律ニ從ヘハ外國裁判所カ管轄權ヲ有セサルトキ

第四　敗訴ノ債務者本邦人ニシテ應訴セサリシトキ但訴訟ヲ開始スル呼出又ハ命令ヲ受訴裁判所所屬ノ國ニ於テ又ハ法律上ノ共助ニ依リ本邦ニ於テ本人ニ送達セサリシトキニ限ル

第五　國際條約ニ於テ相互ヲ保セサルトキ

第五百十六條　强制執行ハ執行文ヲ付シタル判決ノ正本ニ基キ之ヲ爲ス

執行力アル正本ハ第一審裁判所ノ書記又訴訟カ上級裁判所ニ繫屬スルトキハ其裁判所ノ書記之ヲ付與ス

執行力アル正本ヲ求ムル申立ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五百十七條　執行文ハ判決ノ正本ノ末尾ニ之ヲ附記ス

其文式左ノ如シ

前記ノ正本ハ被告某若クハ原告某ニ對シ强制執行ノ爲メ原告某若クハ被告某ニ之ヲ付與ス

執行文ニハ裁判所書記署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ押ス可シ

第五百十八條　執行力アル正本ハ判決ノ確定シタルトキ又ハ假執行ノ宣言アリタルトキニ限リ之ヲ付與ス

判決ノ執行カ其官廳ニ從ヒ保證ヲ立ツルコトニ繫ル場合ノ外他ノ條件ニ繫ル場合ニ於テハ債權者カ證明書ヲ以テ其條件ヲ履行シタルコトヲ證スルトキニ限リ執行力アル正本ヲ付與スルコトヲ得

第五百十九條　執行力アル正本ハ判決ニ表示シタル債權者ノ承繼人ノ爲ニ之ヲ付與シ又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ一般ノ承繼人ニ對シ之ヲ付與スルコトヲ得但其承繼カ裁判所

ニ於テ明白ナルトキ又ハ證明書ヲ以テ之ヲ證スルトキニ限ル

此承繼ノ裁判所ニ於テ明白ナルトキハ之ヲ執行文ニ記載ス可シ

第五百二十條　第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ノ場合ニ於テハ執行力アル正本ハ裁判長ノ命令アルトキニ限リ之ヲ付與スルコトヲ得

裁判長ハ其命令前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者ヲ審訊スルコトヲ得

右命令ハ執行文ニ之ヲ記載ス可シ

第五百二十一條　第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ニ依リ必要ナル證明ヲ爲スヲ能ハサルトキハ債權者ハ判決ニ基キ執行文ノ付與ニ付キ第一審ノ受訴裁判所ニ訴ヲ起スコトヲ得

第五百二十二條　執行文ノ付與ニ對シ債務者ヨリ異議ヲ申立テタルトキハ其執行文ヲ付與シタル裁判所書記ノ屬スル裁判所之ヲ裁判ス

裁判長ハ其裁判前ニ假處分ヲ爲スコトヲ得殊ニ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ一時停止シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス可キヲ命スルコトヲ得

第五百二十三條　債權者カ執行力アル正本ノ數通ヲ求メ又ハ前ニ付與シタル正本ヲ返還セスシテ更ニ同一判決ノ正本ヲ求ムルトキハ裁判長ノ命令アルトキニ限リ之ヲ付與スルコトヲ得

裁判長ハ其命令ノ前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ債務者ヲ審訊スルコトヲ得

相手方ヲ審訊セスシテ執行力アル正本ノ數通ヲ付與シ又ハ更ニ正本ヲ付與シタルトキハ其旨ヲ明記ス可シ

第五百二十四條　執行力アル正本ノ付與前ニ判決ノ原本ニ原告ノ爲メ若クハ被告ノ爲ニ之ヲ付與スル旨且之ヲ付與スル日時ヲ記載ス可シ

第五百二十五條　執行力アル正本ノ効力ハ之ヲ付與シタル裁判所ノ管轄內ニ止マラス總テ本邦ノ裁判區域內ニ及フモノトス

第五百二十六條　債權者ハ一箇ノ地又ハ一箇ノ方法ニテ強制執行ヲ爲スモ完全ナル辨濟ヲ得ル能ハサルトキハ數通ノ執行力アル正本ニ基キ數箇ノ地又ハ數箇ノ方法ニテ同時ニ強制執行ヲ爲スヲ得

第五百二十七條　債權者ハ執行ヲ爲ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサルトキハ其所在地ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ屆出ツ可シ

第五百二十八條　強制執行ハ之ヲ求ムル者及ヒ之ヲ受クル者ノ氏名ヲ判決又ハ之ニ附記スル執行文ニ表示シ且判決ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限リ之ヲ始ムルコトヲ得

判決ノ執行カ其旨趣ニ從ヒ債權者ノ證明ス可キ事實ノ到來ニ繫ルトキ又ハ判決ノ執行カ判決ニ表示シタル債務者ノ承繼人ノ爲ニ爲シ又ハ判決ニ表示シタル債務者ノ承繼人ニ對シ爲ス可キトキハ執行ス可キ判決ノ外尙ホ之ニ附記スル執行文ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達スルコトヲ要ス

若シ證明書ニ依リ執行文ヲ付與シタルトキハ亦其證書ノ謄本ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達シ又ハ同時ニ送達スルコトヲ要ス

第五百二十九條　請求ノ主張カ或ル日時ノ到來ニ繫ルトキハ其日時ノ滿了後ニ限リ強制執行ヲ始ムルコトヲ得

若シ執行カ債權者ヨリ保證ヲ立ツルコトニ繫ルトキハ債權者カ保證ヲ立テタルコトニ付テノ公正ノ證明書ヲ提出シ且其謄本ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限リ其執行ヲ始ムルコトヲ得

第五百三十條　豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對シテ爲ス強制執行ハ其上班司令官廳ニ通知ヲ爲シタル後ニ限リ之ヲ始ムルコトヲ得

此官廳ハ債權者ノ求ニ因リ通知ノ受取證ヲ付與ス可シ

第五百三十一條　強制執行ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ナキトキニ限リ執達吏之ヲ實施ス

債權者ハ強制執行ヲ委任スル爲ニ區裁判所書記ノ補助ヲ求ムルコトヲ得

裁判所書記ノ委任シタル執達吏ハ債權者ノ委任シタルモノト看做ス

第五百三十二條　執達吏ハ債權者ノ委任ニ因リテ爲ス行爲及ヒ職務上ノ義務ノ違背ヨリシテ債權者其他ノ關係人ニ對シ損害ヲ生セシメタルトキハ第一ニ其責ニ任ス

第五百三十三條　債權者執行力アル正本ヲ交付シテ強制執行ヲ委任シタルトキハ執達吏ハ特別ノ委任ヲ受ケサルトキト雖モ支拂其他ノ給付ヲ受取リ其受取リタルモノニ付キ有効ニ受取ノ證書ヲ作リ之ヲ交付シ且債務者ニ於テ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本ヲ債務者ニ於テ其義務ヲ完トヲ得

第五百三十四條　執達吏ハ執行力アル正本ヲ所持スルヲ以テ債務者及ヒ第三者ニ對シ強制執行及ヒ前條ニ揭ケタル行爲ヲ實施スル權利ヲ有ス債權者ハ此等ノ者ニ對シ委任ノ欠缺又ハ制限ヲ主張スルコトヲ得ス

執達吏ハ其正本ヲ携帶シ關係人ノ求アルトキハ其資格ヲ證スル爲ニ之ヲ示ス可シ

第五百三十五條　執達吏ハ債務者カ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本及ヒ受取ノ證ヲ之ニ交付シ又其義務ノ一分ヲ盡シタルトキハ執行力アル正本ニ其旨ヲ附記シ且受取ノ證ヲ債務者ニ交付ス可シ

債務者カ後ニ債權者ニ對シ受取ノ證ヲ求ムル權利ハ前項ノ規定ニ因リテ妨ケラルルコト無シ

第五百三十六條　執達吏ハ執行ノ爲メ必要ナル場合ニ於テハ債務者ノ住居、倉庫及ヒ筐匣ヲ捜索シ又ハ閉鎖シタル戶扉及ヒ筐匣ヲ開カシムル權利ヲ有ス

抵抗ヲ受クル場合ニ於テハ執達吏ハ威力ヲ用ヰ且警察上ノ援助ヲ求ムルコトヲ得若シ兵力ヲ要スルトキハ之ヲ執行裁判所ニ申立ツ可シ

第五百三十七條　執達吏ハ執行々爲ヲ爲スニ際シ抵抗ヲ受クルトキ又ハ債務者ノ住居ニ於テ執行々爲ヲ爲スニ際シ債務者又ハ成長シタル其家族若シクハ雇人ニ出會ハサルトキハ成丁者二人又ハ市町村若クハ警察ノ吏員一人ヲ證人トシテ立會ハシムル可シ

第五百三十八條　強制執行ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル各人ニハ其求ニ因リ執達吏ノ記錄ノ閱覽ヲ許シ及ヒ記錄中ニ存ス

本ヲ強制執行ヲ始ムル前ニ送達シ又ハ同時ニ送達スルコトヲ要ス

第五百二十九條　請求ノ主張カ或ル日時ノ到來ニ繫ルトキハ其日時ノ滿了後ニ限リ強制執行ヲ始ムルコトヲ得

若シ執行カ債權者ヨリ保證ヲ立ツルコトニ繫ルトキハ債權者カ保證ヲ立テタルコトニ付テノ公正ノ證明書ヲ提出シ且其謄本ヲ既ニ送達シ又ハ同時ニ送達シタルトキニ限リ其執行ヲ始ムルコトヲ得

第五百三十條　豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對シテ爲ス強制執行ハ其上班司令官廳ニ通知ヲ爲シタル後ニ限リ之ヲ始ムルコトヲ得

此官廳ハ債權者ノ求ニ因リ通知ノ受取證ヲ付與ス可シ

第五百三十一條　強制執行ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ナキトキニ限リ執達吏之ヲ實施ス

債權者ハ強制執行ヲ委任スル爲ニ區裁判所書記ノ補助ヲ求ムルコトヲ得

裁判所書記ノ委任シタル執達吏ハ債權者ノ委任シタルモノト看做ス

第五百三十二條　執達吏ハ債權者ノ委任ニ因リテ爲ス行爲及ヒ職務上ノ義務ノ違背ヨリシテ債權者其他ノ關係人ニ對シ損害ヲ生セシメタルトキハ第一ニ其責ニ任ス

第五百三十三條　債權者執行力アル正本ヲ交付シテ強制執行ヲ委任シタルトキハ執達吏ハ特別ノ委任ヲ受ケサルトキト雖モ支拂其他ノ給付ヲ受取リ其受取リタルモノニ付キ有効ニ受取ノ證書ヲ作リ之ヲ交付シ且債務者ニ於テ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本ヲ債務者ニ於テ其義務ヲ完トヲ得

第五百三十四條　執達吏ハ執行力アル正本ヲ所持スルヲ以テ債務者及ヒ第三者ニ對シ強制執行及ヒ前條ニ揭ケタル行爲ヲ實施スル權利ヲ有ス債權者ハ此等ノ者ニ對シ委任ノ欠缺又ハ制限ヲ主張スルコトヲ得ス

執達吏ハ其正本ヲ携帶シ關係人ノ求アルトキハ其資格ヲ證スル爲ニ之ヲ示ス可シ

第五百三十五條　執達吏ハ債務者カ其義務ヲ完全ニ盡シタルトキハ執行力アル正本及ヒ受取ノ證ヲ之ニ交付シ又其義務ノ一分ヲ盡シタルトキハ執行力アル正本ニ其旨ヲ附記シ且受取ノ證ヲ債務者ニ交付ス可シ

債務者カ後ニ債權者ニ對シ受取ノ證ヲ求ムル權利ハ前項ノ規定ニ因リテ妨ケラルルコト無シ

第五百三十六條　執達吏ハ執行ノ爲メ必要ナル場合ニ於テハ債務者ノ住居、倉庫及ヒ筐匣ヲ捜索シ又ハ閉鎖シタル戶扉及ヒ筐匣ヲ開カシムル權利ヲ有ス

抵抗ヲ受クル場合ニ於テハ執達吏ハ威力ヲ用ヰ且警察上ノ援助ヲ求ムルコトヲ得若シ兵力ヲ要スルトキハ之ヲ執行裁判所ニ申立ツ可シ

第五百三十七條　執達吏ハ執行々爲ヲ爲スニ際シ抵抗ヲ受クルトキ又ハ債務者ノ住居ニ於テ執行々爲ヲ爲スニ際シ債務者又ハ成長シタル其家族若シクハ雇人ニ出會ハサルトキハ成丁者二人又ハ市町村若クハ警察ノ吏員一人ヲ證人トシテ立會ハシムル可シ

第五百三十八條　強制執行ニ付キ利害ノ關係ヲ有スル各人ニハ其求ニ因リ執達吏ノ記錄ノ閱覽ヲ許シ及ヒ記錄中ニ存ス

ル書類ノ謄本ヲ付與スルコトヲ要ス

第五百三十九條　夜間及ヒ日曜日幷ニ一般ノ祝祭日ニハ執行裁判所ノ許可アルトキニ限リ執行々爲ヲ爲スコトヲ得

右許可ノ命令ハ強制執行ノ際之ヲ示ス可シ

第五百四十條　執達吏ハ各執行々爲ニ付キ調書ヲ作ル可シ此調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一　調書ヲ作リタル場所、年月日

第二　執行々爲ノ目的物及ヒ其重要ナル事情ノ畧記

第三　執行ニ與カリタル各人ノ表示

第四　右各人ノ署名捺印

第五　調書ヲ其各人ニ讀聞セ又ハ閲覽セシメ其承諾ノ後署名捺印ヲ爲シタルコトノ開示

第六　執達吏ノ署名捺印

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ具備スルコト能ハサルトキハ其理由ヲ記載ス可シ

第五百四十一條　執行々爲ニ屬スル催告其他ノ通知ハ執達吏口頭ヲ以テ之ヲ爲シ且調書ニ之ヲ記載ス可シ

若シ口頭ヲ以テ催告又ハ通知ヲ爲ス能ハサルトキハ第百三十九條第百四十條及ヒ第百四十五條乃至第百四十九條ノ規定ヲ準用シテ其調書ノ謄本ヲ送達シ又則ニ送達證ヲ作ラサルトキハ調書ニ其送達ヲ爲シタルコトヲ記載ス可シ

若シ強制執行ノ地ニ於テモ執行裁判所ノ管轄内ニ於テモ送達ヲ爲ス能ハサルトキハ催告又ハ通知ヲ受ク可キ者ニ郵便ヲ以テ調書ノ謄本ヲ送達シ且之ヲ郵便ニ付シタルコトヲ調書ニ記載ス可シ

第五百四十二條　執行々爲ノ際債務者ニ爲ス可キ送達及ヒ通知ハ債務者ノ所在明カナラサルトキ又ハ外國ニ在ルトキハ之ヲ必要トセス

第五百四十三條　此法律ニ於テ裁判所ニ任カセタル執行々爲ノ處分又ハ其行爲ノ共力ハ執行裁判所トシテ區裁判所ノ管轄ニ屬ス

法律ニ於テ別段ニ裁判所ヲ指定セサル各箇ノ場合ニ於テハ執行手續ヲ爲ス可キ地又ハ之ヲ爲シタル地ヲ管轄スル區裁判所ヲ以テ執行裁判所ト看做ス

執行裁判所ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百四十四條　強制執行ノ方法又ハ執行ニ際シ執達吏ノ遵守ス可キ手續ニ關スル申立及ヒ異議ニ付テハ執行裁判所之ヲ裁判ス又執行裁判所ハ第五百二十二條第二項ニ定メタル命ヲ發スル權ヲ有ス

執達吏カ執行委任ヲ受クルヲ拒ミ若クハ委任ニ從ヒ執行々爲ヲ實施スルコトヲ拒ミタルトキ又ハ執達吏ノ計算セシ手數料ニ付キ異議アルトキハ執行裁判所ハ之ヲ裁判スル權ヲ有ス

第五百四十五條　判決ニ因リテ確定シタル請求ニ關スル債務者ノ異議ハ訴ヲ以テ第一審ノ受訴裁判所ニ之ヲ主張ス可シ

右ノ異議ハ此法律ノ規定ニ從ヒ遲クトモ異議ヲ主張スルコトヲ要スル口頭辯論ノ終結後ニ其原因ヲ生シ且故障ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得サルトキニ限リ之ヲ許ス

債務者カ數個ノ異議ヲ有スルトキハ同時ニ之ヲ主張スルコトヲ要ス

第五百四十六條　前條ノ規定ハ第五百十八條第二項及ヒ第五百十九條ノ場合ニ於テ債務者カ執行文付與ノ際證明シタリト

認メラレタル事實ノ到來ニシテ此ニ因リ判決ノ執行ヲ爲シ得ヘキモノヲ爭ヒ又ハ認メラレタル承繼ヲ爭フトキハ亦之ヲ準用ス但此場合ニ於テ第五百二十二條ノ規定ニ從ヒ執行文ノ付與ニ對シ異議ヲ申立ツル債務者ノ權ハ此カ爲ニ妨ケラルルコトナシ

第五百四十七條　強制執行ノ續行ハ前二條ノ場合ニ於ケル異議ノ訴ノ提起ニ因リ妨ケラルルコト無シ

然レトモ異議ノ爲メ主張シタル事情カ法律上理由アリト見エ且事實上ノ點ニ付キ疎明アリタルトキハ受訴裁判所ハ申立ニ因リ判決ヲ爲スニ至ルマテ保證ヲ立テシメ若クハ之ヲ立テシメスシテ強制執行ヲ停止ス可キコトヲ命シ又ハ保證ヲ立テシメテ強制執行ヲ續行ス可キコトヲ命シ又ハ其爲シタル執行處分ヲ保證ヲ立テシメテ取消ス可キヲ命スルコトヲ得

右裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲シ又急迫ナル場合ニ於テハ裁判長之ヲ爲スコトヲ得

急迫ナル場合ニ於テハ執行裁判所モ亦此權利ヲ行使スルコトヲ得此場合ニ於テハ執行裁判所ハ受訴裁判所ノ裁判ヲ提出セシムル爲ニ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ヲ徒過シタルトキハ債權者ノ申立ニ因リ強制執行ヲ續行ス

第五百四十八條　受訴判所ハ異議ノ訴ニ付キ裁判スル判決ニ於テ前條ニ揭ケタル命ヲ發シ又ハ既ニ發シタル命ヲ取消シ之ヲ變更シ若クハ之ヲ認可スルコトヲ得

判決中前項ニ揭ケル事項ニ限リ職權ヲ以テ假執行ノ宣言ヲ爲ス可シ

右裁判ニ對スル不服ニ付テハ第五百十一條ノ規定ヲ準用ス

第五百四十九條　第三者カ強制執行ノ目的物ニ付キ所有權ヲ主張シ其他目的物ノ讓渡若クハ引渡ヲ妨クル權利ヲ主張スルトキハ訴ヲ以テ債權者ニ對シ其強制執行ニ對スル異議ヲ主張シ又債務者ニ於テ其異議ヲ正當ナリトセサルトキハ債權者及ヒ債務者ニ對シテ之ヲ主張ス可シ

右訴ヲ債權者及ヒ債務者ニ對シテ起ストキハ之ヲ共同被告ト爲ス右訴ハ執行裁判所ノ管轄ニ屬ス然レトモ訴訟物カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ執行裁判所ノ所在地ヲ管轄スル地方裁判所之ヲ管轄ス

強制執行ノ停止及ヒ既ニ爲シタル執行處分ノ取消ニ付テハ第五百四十七條及ヒ第五百四十八條ノ規定ヲ準用ス但執行處分ノ取消ハ保證ヲ立テシメスシテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百五十條　強制執行ハ左ノ書類ヲ提出シタル場合ニ於テ之ヲ停止シ又ハ之ヲ制限ス可シ

第一　執行ス可キ判決若クハ其假執行ヲ取消ス旨又ハ強制執行ヲ許サストシテ宣言シ若クハ其停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル執行力アル裁判ノ正本

第二　執行又ハ執行處分ノ一時ノ停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル裁判ノ正本

第三　執行ヲ免カルル爲メ保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタル旨ヲ記載シタル公正ノ證明書

第四　執行ス可キ判決ノ後ニ債權者カ辨濟ヲ受ケ又ハ義務履行ノ猶豫ヲ承諾シタル旨ヲ記載シタル證書

第五百五十一條　前條第一號及ヒ第三號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲモ取消ス可ク第四號ノ場合ニ於テハ既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシムル可ク第二號ノ場合ニ

於テハ其裁判ヲ以テ從前ノ執行行爲ノ取消ヲ命セサルトキニ限リ既ニ爲シタル執行處分ヲ一時保持セシムルコトヲ得

第五百五十二條　強制執行ノ開始後ニ債務者カ死亡スルトキハ強制執行ハ遺産ニ對シ之ヲ續行スルコトヲ得

債務者ノ知ルコトヲ要スル執行行爲ヲ實施スル場合ニ於テ相續人アラサルトキ又ハ相續人ノ所在明カナラサルトキハ執行裁判所ハ債權者ノ申立ニ因リ遺産又ハ相續人ノ爲メ特別代理人ヲ任スルコトヲ得

第五百五十三條　強制執行ノ開始後ニ日主タリシ債務者カ其地位ヲ辭シ又ハ之ヲ失ヒタルトキハ此變更ノ生セシ當時債務者ノ所持シタル財產ニ付キ前條ノ規定ヲ準用ス

第五百五十四條　強制執行ノ費用ハ必要ナリシ部分ニ限リ債務者ノ負擔ニ歸ス此費用ハ強制執行ヲ受クル請求ト同時ニ之ヲ取立ツルコトヲ得

強制執行ノ基本タル判決ヲ廢棄若クハ破毀シタルトキハ其費用ハ之ヲ債務者ニ辨濟スルコトヲ得

第五百五十五條　執行ノ爲メ官廳ノ援助ヲ必要トスルトキハ裁判所ハ其援助ヲ官廳ニ求ムルコトヲ得

第五百五十六條　豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對シ兵營及ヒ軍事用廳舍又ハ軍艦ニ於テ強制執行ヲ爲スコトヲ得サルトキハ債權者ノ申立ニ因リ執行裁判所ハ管轄ノ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲サシムルコトヲ得

囑託ニ因リ差押ヘタル物ハ債權者ノ委任シタル執達吏ニ之ヲ交付スルコトヲ得

第五百五十七條　外國ニ於テ強制執行ヲ爲スヲ得キ場合ニ於テ其外國官廳カ本邦裁判所ニ法律上ノ共助ヲ爲スヲ得キトキハ債權者ノ申立ニ依リ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ外國官廳ニ囑託スルコトヲ得

外國駐在ノ本邦領事ニ依リ強制執行ヲ爲シ得ヘキトキハ第一審ノ受訴裁判所ハ之ヲ其領事ニ囑託スルコトヲ得

第五百五十八條　強制執行ノ手續ニ於テ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得ル裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第五百五十九條　強制執行ハ左ノ諸件ニ付テモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第一　抗告ヲ以テノミ不服ヲ申立ツルコトヲ得ル裁判

第二　執行命令

第三　訴ノ提起後受訴裁判所ニ於テ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ爲シタル和解

第四　第三百八十一條ノ規定ニ從ヒ區裁判所ニ於テ爲シタル和解

第五　公證人カ其權限內ニ於テ成規ノ方式ニ依リ作リタル證書

但一定ノ金額ノ支拂又ハ他ノ代替物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ以テ目的トスル請求ニ付キ作リタル證書ニシテ直チニ強制執行ヲ受ク可キ旨ヲ記載シタルモノニ限ル

第五百六十條　前條ニ揭ケタル債務名義ニ因レル強制執行ニハ第五百十六條乃至第五百五十八條ノ規定ヲ準用ス但第五百六十一條、第五百六十二條ノ規定ニ依リ差異ノ生スルトキハ此限ニ在ラス

第五百六十一條　執行命令ニハ其命令ヲ發シタル後債權者又ハ債務者ニ於テ承繼アル場合ニ限リ執行文ヲ附記スルコトヲ要ス

請求ニ關スル異議ハ執行命令ノ送達後ニ生シタル原因ニ基クトキニ限リ之ヲ許ス

執行文付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關シ異議ヲ主張スル訴又ハ執行文付與ノ際到來シタリト認メタル承繼ヲ爭フ訴ハ執行命令ヲ發シタル區裁判所之ヲ管轄ス但其請求カ區裁判所ノ管轄ニ屬セサルモノナルトキハ管轄地方裁判所ニ其訴ヲ起ス可シ

第五百六十二條　公證人ノ作リタル證書ノ執行力アル正本ハ其證書ヲ保存スル公證人之ヲ付與ス

執行文付與ニ關スル異議ニ付テノ裁判及ヒ更ニ執行文付與ニ付テノ裁判ハ公證人職務上ノ住所ヲ有スル地ヲ管轄スル區裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

請求ニ關スル異議ノ主張ニ付テハ第五百四十五條第二項ニ規定シタル制限ニ從ハス

執行文付與ニ付テノ訴又ハ請求ニ關シ異議ヲ主張スル訴又ハ執行文付與ノ際證明シタリト認メタル事實ノ到來ニ係リ此ニ因リテ證書ノ執行ヲ爲シ得ヘキモノヲ爭フ訴ハ債務者カ本邦ニ於テ普通裁判籍ヲ有スル地ノ裁判所又ハ此裁判所ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ對シ訴ヲ起シ得ヘキ裁判所之ヲ管轄ス

第五百六十三條　本編ニ定メタル裁判籍ハ專屬ナリトス

第二章　金錢ノ債權ニ付テノ強制執行

第一節　動產ニ對スル強制執行

第一款　通則

第五百六十四條　動產ニ對スル強制執行ハ差押ヲ以テ之ヲ爲ス

差押ハ執行力アル正本ニ揭ケタル請求ヲ債務者ニ辨濟スル爲メ及ヒ強制執行ノ費用ヲ償フ爲ニ必要ナルモノ、外ニ及ホスコトヲ得ス

差押フ可キ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用ヲ償フヲ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ強制執行ヲ爲スコトヲ得ス

第五百六十五條　第三者カ差押ヲ受ク可キ物ニ付キ物上ノ擔保權ヲ有スルモ差押ヲ妨クルコトヲ得ス然レトモ第五百四十九條ノ規定ニ從ヒ訴ヲ以テ賣得金ニ付キ優先ノ辨濟ヲ請求スル權利ハ此カ爲ニ妨ケラルヽコト無シ

此場合ニ於テ請求ノ爲メ主張シタル事情カ法律上理由アリト見ニ且事實上ノ點ニ付キ疏明アリタルトキハ裁判所ハ賣得金ノ供託ヲ命スル可シ但此事項ニ付テハ第五百四十七條及ヒ第五百四十八條ノ規定ヲ準用ス

第二款　有體動產ニ對スル強制執行

第五百六十六條　債務者ノ占有中ニ在ル有體動產ノ差押ハ執達吏其物ヲ占有シテ之ヲ爲ス

其物ハ債權者ノ承諾アルトキ又ハ其運搬ヲ爲スニ付キ重大ナル困難アルトキハ之ヲ債務者ノ保管ニ任スル可シ此場合ニ於テハ封印其他ノ方法ヲ以テ差押ヲ明白ニスルトキニ限リ其効力ヲ生ス

執達吏ハ債務者ニ其差押ヲ爲シタルコトヲ通知スル可シ

第五百六十七條　前條ノ規定ハ債權者又ハ物ノ提出ヲ拒マサル第三者ノ占有中ニ在ル物ノ差押ニ付テモ亦之ヲ準用ス

第五百六十八條　果實ハ未タ土地ヨリ離レサル前ト雖モ之ヲ差押フルコトヲ得然レトモ其差押ハ通常ノ成熟時期ノ前一

箇月内ニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第五百六十九條　差押ノ効力ハ差押物ヨリ生スル天然ノ産出物ニモ當然及フモノトス

第五百七十條　左ニ掲クル物ハ之ヲ差押フルコトヲ得ス

第一　衣服、寢具、家具及ヒ厨具但此物カ債務者及ヒ其家族ノ爲メ缺ク可カラサルトキニ限ル

第二　債務者及ヒ其家族ニ必要ナル一个月間ノ食料及ヒ薪炭

第三　技術者、職工、勞役者及ヒ穡婆ニ在テハ其營業上缺ク可カラサル物

第四　農業者ニ在テハ其農業上缺ク可カラサル農具、家畜、肥料及ヒ次ノ收穫マテ農業ヲ續行スル爲メ缺ク可カラサル農産物

第五　文武ノ官吏、神職、僧侶、公立私立ノ敎育場敎師、辯護士、公證人及ヒ醫師ニ在テハ其職業ヲ執行スル爲メ缺ク可カラサル物幷ニ身分相當ノ衣服

第六　文武ノ官吏、神職、僧侶及ヒ公立私立ノ敎育場敎師ニ在テハ第六百十八條ニ規定スル職務上ノ收入又ハ恩給ノ差押ヲ受クサル金額但差押ヨリ次期ノ俸給又ハ恩給ノ支拂マテノ日數ニ應シテ之ヲ計算ス

第七　藥舖ニ在テハ調藥ヲ爲ス爲メ缺ク可カラサル器具及ヒ藥品

第八　勳章及ヒ名譽ノ徽標

第九　實印其他職業ニ必要ナル印

第十　神體、佛像其他禮拜ノ用ニ供スル物

第十一　系譜

第十二　債務者又ハ其家族ノ未タ公ニセサル發明ニ關スル物及ヒ債務者又ハ其家族ノ未タ公ニセサル著述ノ稿本

第十三　債務者及ヒ其家族カ學校ニ於テ使用ニ供スル書籍

然レトモ債務者ノ承諾アルトキハ第三號乃至第八號ニ揭ケル物ヲ除ク外之ヲ差押フルコトヲ得

第五百七十一條　差押物保存ノ爲メ特別ノ處分ヲ必要トスルトキハ執達吏ハ適當ノ方法ヲ以テ之ヲ爲スヲ可シ若シ此カ爲メ費用ヲ要スルトキハ債權者ヲシテ之ヲ豫納セシメ又債權者數名關係スルトキハ其要求額ノ割合ニ從ヒテ其各債權者ヨリ之ヲ豫納セシムヲ可シ

第五百七十二條　執達吏ハ差押ヲ實施シタル後債權者又ハ裁判所ノ特別委任ヲ要セスシテ以下數條ノ規定ニ從ヒテ公ノ競賣方法ヲ以テ其差押物ヲ賣却スヲ可シ

第五百七十三條　競賣スヘキ物ノ中ニ高價ノモノ有ルトキハ執達吏ハ適當ナル鑑定人ヲシテ其評價ヲ爲サシムヲ可シ

第五百七十四條　差押金錢ハ之ヲ債權者ニ引渡スヲ可シ

執達吏カ金錢ヲ取立テタルトキハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノト看做ス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免カルヽコトヲ債務者ニ許シタルトキハ此限ニ在ラス

第五百七十五條　差押ノ日ト競賣ノ日トノ間ニハ少ナクトモ七日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス但差押債權者執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者及ヒ債務者カ競賣ヲ更ラニ

早ク爲サンコトヲ合意シタルトキ又ハ差押物ヲ永ク貯藏スルニ付キ不相應ノ職用若クハ其物ノ價格ノ著シク減少スル危害ヲ避ケン爲メ競賣ヲ早ク爲スコトノ必要ナルトキハ此限ニ在ラス

第五百七十六條　競賣ハ差押ヲ爲シタル市町村ニ於テ之ヲ爲ス但差押債權者及ヒ債務者カ他ノ地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ合意シタルトキハ此限ニ在ラス

競賣ノ日時及ヒ場所ハ之ヲ公告ス但其公告ニハ競賣ス可キ物ヲ表示ス可シ

第五百七十七條　最高價競買ノ爲メノ競落ハ其價額ヲ三回呼上クタル後之ヲ爲ス

競落物ノ引渡ハ代金ト引換ヘ之ヲ爲ス

最高價競買人競賣物件ニ定メタル支拂期日又ハ其定ナキトキハ競賣期日ノ終ル前ニ代金ノ支拂ヲ爲シテ物ノ引渡ヲ求メサルトキハ更ニ其物ヲ競賣ス可シ此場合ニ於テハ前ノ最高價競買人ハ競買ニ加ハルコトヲ得ス且再度ノ競落代價カ最初ノ競落代價ヨリ低キトキハ不足ヲ擔任ス可シ其高キトキハ剩餘ヲ請求スルコトヲ得ス

第五百七十八條　競賣ハ賣得金ヲ以テ債權者ニ辨濟ヲ爲シ及ヒ强制執行ノ費用ヲ償フニ足ルニ至ルトキハ直チニ之ヲ止ム可シ

第五百七十九條　執達吏賣得金ヲ領收シタルトキハ債務者ヨリ支拂ヲ爲シタルモノト看做ス但保證ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シテ執行ヲ免カルルコトヲ債務者ニ許シタルトキハ此限ニ在ラス

第五百八十條　金銀物ハ其金銀ノ實價ヨリ以下ニ競落スルコトヲ許サス其實價マテニ競買ヲ爲ス者ナキトキハ執達吏ハ金銀ノ實價ニ達スル價額ヲ以テ適宜ニ之ヲ賣却スルコトヲ得

第五百八十一條　執達吏有價證券ヲ差押ヘタルトキハ相場アルモノハ賣却日ノ相場ヲ以テ適宜ニ之ヲ賣却シ其相場ナキモノハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ競賣ス可シ

第五百八十二條　有價證券ノ記名ナルトキハ執行裁判所ハ買主ノ氏名ニ書換ヲ爲サシメ及ヒ此カ爲メ必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リ爲ス權ヲ執達吏ニ與フルコトヲ得

第五百八十三條　無記名ノ證券ニシテ記名ニ換ヘ又ハ他ノ方法ニ依リ流通ヲ止メタルモノナルトキハ執行裁判所ハ其流通回復ヲ爲サシメ及ヒ此カ爲メ必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リテ爲ス權ヲ執達吏ニ與フルコトヲ得

第五百八十四條　土地ヨリ離レサル前ニ差押ヘタル果實ノ競賣ハ其成熟ノ後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス執達吏ハ競賣ノ爲メ其收穫ヲ爲サシムル權利アリ

差押ヘタル蠶ノ競賣ハ全ク繭ト爲リタル後始メテ之ヲ爲スコトヲ許ス

第五百八十五條　差押債權者、執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者又ハ債務者ノ申立ニ因リ執行裁判所ハ前數條ノ規定ニ依ラス他ノ方法又ハ他ノ場所ニ於テ差押物ノ賣却ヲ爲ス可キ旨又ハ執達吏ニ依ラス他ノ者ヲシテ競賣ヲ爲サシム可キ旨ヲ命スルコトヲ得

第五百八十六條　執達吏ハ既ニ差押ヘタル物ニ付キ他ノ債權者ノ爲メ更ニ差押ノ手續ヲ爲スコトヲ得ス

執達吏ハ既ニ差押ヘタル執達吏ニ差押調書ノ閱覽ヲ求

メタ物ノ照査ヲ爲シ未タ差押ニ係ラサル者アルトキハ之ヲ差押ヘ既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ差押調書ヲ交付シ且總テノ差押物ヲ競賣ニ付スヘキコトヲ求ムヘシ若シ差押ノ可キ物アラサルトキハ照査調書ヲ作リ既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ之ヲ交付スヘシ

前項ノ求ニ因リ執行ニ關スル債權者ノ委任ハ既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ法律上移轉ス

假差押ニ係ル物ニ付テハ本條ノ規定ヲ適用セス

第五百八十七條　前條ニ揭ケタル物ノ照査手續ハ配當要求ノ効力ヲ生シ又既ニ爲シタル差押カ取消ト爲リタルトキハ差押ノ効力ヲ生ス

第五百八十八條　適當ナル期間經過スルモ執達吏競賣ヲ爲ササルトキハ差押債權者及ヒ執行力アル正本ニ因リ配當ヲ要求スル債權者ハ一定ノ期間內ニ競賣ヲ爲ス可キコトヲ催告シ其催告ノ効アラサルトキハ相當ノ命令アランコトヲ執行裁判所ニ申請スルコトヲ得

第五百八十九條　民法ニ從ヒ配當ヲ要求シ得ヘキ債權者ハ執行力アル正本ニ因スシテ賣得金ノ配當ヲ要求スルコトヲ得

第五百九十條　前條ノ配當要求ハ其原因ヲ開示シ且裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル者ハ假住所ヲ擇定シ執達吏ニ之ヲ爲ス可シ

第五百九十一條　第五百八十六條第二項及ヒ第五百九十條ノ場合ニ於テ執達吏ハ配當要求ノ有リタルコトヲ配當ニ與カル各債權者及ヒ債務者ニ通知ス可シ

執行力アル正本ニ因スシテ配當ヲ要求スル債權者アルトキハ債務者ハ執達吏ノ通知アリタルヨリ三日ノ期間內ニ其債權ヲ認諾スルヤ否ヤヲ執達吏ニ申立ツ可シ

債務者カ認諾セサルコトヲ執達吏ヨリ通知アリタルトキハ債權者ハ其通知アリタルヨリ三日ノ期間內ニ債務者ニ對シ訴ヲ起シ其債權ヲ確定ス可シ

第五百九十二條　配當ノ要求ハ競賣期日ノ終ニ至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百九十三條　賣得金ヲ以テ配當ニ與カル各債權者ヲ滿足セシムルニ足ラサル場合ニ於テ債權者間ニ配當ノ協議調ハサルトキハ其賣得金ヲ供託ス可シ

數多ノ債權者ノ爲メ同時ニ金錢ヲ差押ヘタルトキ之ヲ以テ各債權者ヲ滿足セシムルニ足ラサル場合ニ於テモ亦同シ

右ノ場合ニ於テ執達吏ハ其事情ヲ執行裁判所ニ届出ツ可シ其届書ニハ執行手續ニ關スル書類ヲ添附ス可シ

第三款　債權及ヒ他ノ財產權ニ對スル強制執行

第五百九十四條　第三者（第三債務者）ニ對スル債務者ノ債權ニシテ金錢ノ支拂又ハ他ノ有體物若クハ有價證券ノ引渡若クハ給付ヲ目的トスルモノノ強制執行ハ執行裁判所ノ差押命令ヲ以テ之ヲ爲ス

第五百九十五條　執行裁判所トシテハ債務者ノ普通裁判籍ヲ有スル地ノ區裁判所若シ此區裁判所ナキトキハ第十七條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ對スル訴ヲ管轄スル區裁判所管轉權ヲ有ス

第五百九十六條　債權者ハ差押命令ノ申請ニ差押フ可キ債權ノ種類及ヒ數額ヲ開示ス可シ

右申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第五百九十七條　差押命令ハ豫シメ第三債務者及ヒ債務者ノ審訊ヲ經スシテ之ヲ發ス

第五百九十八條　金錢ノ債權ヲ差押フ可キトキハ裁判所ハ第三債務者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ爲スコトヲ禁シ又債務者ニ對シ債權ノ處分殊ニ其取立ヲ爲ス可カラサルコトヲ命ス可シ

差押命令ハ職權ヲ以テ第三債務者及ヒ債務者ニ之ヲ送達シ又債權者ニハ其送達シタル旨ヲ通知ス可シ

差押ハ第三債務者ニ對スル送達ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第五百九十九條　抵當アル債權ノ差押ノ場合ニ於テハ債權者ハ債務者ノ承諾ヲ要セスシテ其債權ノ差押ヲ登記簿ニ記入スル權利アリ此記入ノ申請ト之ヲ併合スルコトヲ得

裁判所ハ義務ヲ負フタル不動產ノ所有者（第三債務者）ニ差押命令ヲ送達シタル後記入ノ手續ヲ爲ス可シ

第六百條　差押ヘタル金錢ノ債權ニ付テハ差押債權者ノ選擇ニ從ヒ代位ノ手續ヲ要セスシテ之ヲ取立ツル爲メ又ハ支拂ニ換ヘ分而額ニテ差押債權者ニ之ヲ轉付スル爲メ命令アランコトヲ申請スルコトヲ得

右命令ノ送達ニ付テハ第五百九十八條第二項ノ規定ヲ準用ス

第六百一條　支拂ニ換ヘ分而額ニテ債權ヲ轉付スル命令アル場合ニ於テハ其債權ノ存スル限リハ第五百九十八條第二項ノ手續ヲ爲スニ因リ債務者ハ債權ノ辯濟ヲ爲シタルモノト看做ス

第六百二條　取立ノ爲メノ命令ハ其債權ノ全額ニ及フモノト雖訊ヲ經スシテ之ヲ發ス

第五百九十八條　金錢ノ債權ヲ差押フ可キトキハ裁判所ハ第三債務者ニ對シ債務者ニ支拂ヲ爲スコトヲ禁シ又債務者ニ對シ債權ノ處分殊ニ其取立ヲ爲ス可カラサルコトヲ命ス可シ

差押命令ハ職權ヲ以テ第三債務者及ヒ債務者ニ之ヲ送達シ又債權者ニハ其送達シタル旨ヲ通知ス可シ

差押ハ第三債務者ニ對スル送達ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

第五百九十九條　抵當アル債權ノ差押ノ場合ニ於テハ債權者ハ債務者ノ承諾ヲ要セスシテ其債權ノ差押ヲ登記簿ニ記入スル權利アリ此記入ノ申請ト之ヲ併合スルコトヲ得

裁判所ハ義務ヲ負フタル不動產ノ所有者（第三債務者）ニ差押命令ヲ送達シタル後記入ノ手續ヲ爲ス可シ

第六百條　差押ヘタル金錢ノ債權ニ付テハ差押債權者ノ選擇ニ從ヒ代位ノ手續ヲ要セスシテ之ヲ取立ツル爲メ又ハ支拂ニ換ヘ分而額ニテ差押債權者ニ之ヲ轉付スル爲メ命令アランコトヲ申請スルコトヲ得

右命令ノ送達ニ付テハ第五百九十八條第二項ノ規定ヲ準用ス

第六百一條　支拂ニ換ヘ分而額ニテ債權ヲ轉付スル命令アル場合ニ於テハ其債權ノ存スル限リハ第五百九十八條第二項ノ手續ヲ爲スニ因リ債務者ハ債權ノ辯濟ヲ爲シタルモノト看做ス

第六百二條　取立ノ爲メノ命令ハ其債權ノ全額ニ及フモノト